第4版
改訂増補版

女性たちよ、私たちを赦してください！



私たち男性が
償わなければならないこと
女性と男性の役割について

HANS-JÖRG RONSDORF

女性たちよ、
私たちを赦してください！

私たち男性が償わなければならないこと

女性と男性の役割について

Hans-Jörg Ronsdorf

ドイツ語版のペーパーバックは www.hans-joerg-ronsdorf.de から13.80ユーロ（送料別）でご注文いただけます。

第4版（増補版）、2023年7月（ドイツ語版）

ドイツ語からの翻訳、2026年――www.hans-joerg-ronsdorf.de から無料でダウンロードできます

© Hans-Jörg Ronsdorf――無断転載を禁じます。

Albis 6½

87477 Sulzberg

組版：Hans-Jörg Ronsdorf（Papyrus Autor使用）

連絡先メール：hj-ronsdorf@t-online.de

ドイツ語版ISBN 978-3-9820715-5-8

表紙デザイン：トビアス・シュトリッカー（Tobias Stricker）

図版：ラウラ＝クリスティン・ロンスドルフ（Laura-Kristin Ronsdorf）

印刷：www.wir-machen-druck.de

ドイツ語版で使用している聖書翻訳（特に断りのないかぎり）：

エルバーフェルト訳〔Elberfelder Übersetzung、ドイツ語聖書翻訳〕、Edition CSV Hückeswagen

愛する妻に、

すばらしい娘たちに、

敬愛する母に、

祖母たちに、

姉妹に、

キリストにある姉妹たちと

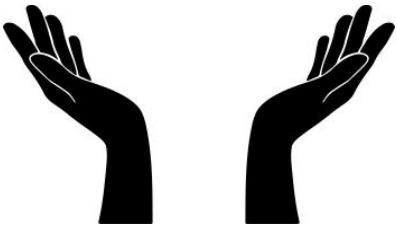
女性の友人たちに、

エバのすべての娘たちに――

私がともに

神の王国のために働いてきた、

そしてこれからもともに仕えていく人たちに。



目次

1 序文 **10**
1.1 第2版（増補版）への序文 **13**
1.2 第4版への序文 **14**
1.3 この本を書いている者 **14**

2 創造と堕落 **21**
2.1 すべてはどのように始まったか **21**
2.1.1 第六日の御業 23
2.1.2 人間――神のかたち（Imago Dei） 24
2.1.3 男と女としての人間 25
2.1.4 人間と神の委託 25
2.1.5 アダムとエバの創造 27
2.1.6 ヘブル語の鍵となる語についての短い補説 28
2.1.7 アダムは助けを必要としている 29
2.1.8 エバが造られる 31
2.1.9 あばら骨から 32
2.1.10 「男から取られた女」（Männin） 34
2.1.11 互いのために与えられた者 35
2.2 男と女の堕落 **37**
2.2.1 エバの答え 41
2.2.2 エバの苦労、妊娠、そして服させられること 41
2.2.3 あなたは彼を恋い慕うが、彼はあなたを支配する 46
2.3 平等に対する異論 **49**
2.4 男性と女性の違い **53**
2.5 創造の秩序 **55**
2.5.1 エデンの園から新しいエルサレムへ 58
2.6 彼はあなたを支配する――その歴史 **59**
2.6.1 古代 59
2.6.2 アリストテレス 60
2.6.3 所有物としての女性 62
2.6.4 家父長制 63
2.6.5 ユダヤ思想におけるギリシアの影響 64
2.6.6 教父たち 65
2.6.7 宗教改革 67
2.6.8 世俗の女性の権利運動 69

3 メシアであるイエスと女性たち **72**

3.1 仕える女性の弟子たち 73
3.2 女性は学ぶべきである 74
3.3 みな等しい 75
3.4 月経はもはや汚れではない 76
3.5 追い出され、見いだされて 77
3.6 姦淫には二人が必要 78
3.7 まっすぐに、背丈いっぱいに立つ 79
3.8 二重基準なし 80
3.9 あつかましいほどの恵み 81
3.10 十字架——男たちはどこにいるのか 82
3.11 女性使徒マリア 83

4 女性の友パウロ 87
4.1 ルディア 88
4.2 フィベ 89
4.3 プリスカ 91
4.4 ユニア 92
4.5 マリア、ツルパイナとツルポサ、ペルシス 93
4.6 ユウオディアとシンティケ 94
4.7 クロエ 95
4.8 ニンファ 96
4.9 乳を飲ませる母、パウロ 98

5 結婚における男と女 101
5.1 古代の家とその規則 101
5.1.1 新約聖書の家庭訓 102
5.1.2 キリスト教の家庭訓の影響 104
5.1.3 エペソ人への手紙5章の家庭訓 105
5.1.4 互いに服し合うことの根拠 107
5.1.5 キリスト者の生活のための指示——今日 109
5.1.6 古代の家における女性 110
5.2 かしらと服従——エペソ人への手紙5章 111
5.2.1 かしら 112
5.2.2 古代の家族 113
5.2.3 文字どおりに受け取るべきか 113
5.2.4 文脈化 116
5.2.5 もう一度、かしらについて 117
5.2.6 結論 119
5.3 服従的であること 121
5.3.1 まとめ 127

6 教会における男と女 **131**
6.1 コリント第一11章――かしら、髪、ベール **133**
6.1.1 テキスト解釈の指針と注意点 134
6.1.2 テキストの適用範囲 136
6.1.3 一つのかしらを持つ三つの組 137
6.1.4 かしらとは何を意味するのか 139
6.1.5 コリントにおける頭のかぶり物 143
6.1.6 頭に権威のしるしを持つ？ 146
6.1.7 今日における意義 147
6.1.8 説明的な言い換え 149
6.1.9 結びと要約 151
6.1.10 コリント第一11章の別の読み方 153
引用の例 **153**
6.1.11 コリント第一11:2-16の別訳 155
6.1.12 まとめ 157
6.2 語らずに、黙っていなさい **159**
6.2.1 問い 161
6.2.2 章の終わりでの戸惑い 163
6.2.3 引用としての読み方 164
6.2.4 ローマの法律？ 167
6.2.5 決してそうではない！ 168
6.2.6 ほかの説明 169
6.2.7 おそらくパウロに由来しない 171
6.2.8 最終的な評価 177
6.3 女性は教えてもよいのか **181**
6.3.1 テキスト――テモテ第一2:8-15 182
6.3.2 エペソの歴史的状況 183
6.3.3 場面設定 185
6.3.4 どこででも祈ること、怒り、装身具 186
6.3.5 静けさと服従のうちに学ぶこと 187
6.3.6 教えたり、男を支配したりしないこと 188
6.3.7 教えることは支配することなのか 189
6.3.8 「支配する」とは何を意味するのか 190
6.3.9 エペソにおけるアダムとエバ 193
6.3.10 私は今は許していない 195
6.3.11 子を産むことによる救い？ 195
6.3.12 今日のテモテ第一 197
6.3.13 結論 198
6.3.14 テモテへの手紙のテキストの説明的な言い換え 198

6.4 普遍的な命令と時代に縛られた命令 **200**
6.4.1 聖書主義と「聖書のみ」 201
6.4.2 文字どおりに受け取ることと字義的意味 203

7 女性の祭司、女性長老、女性執事 **205**
7.1 全信徒祭司性 **205**
7.2 長老と女性長老 **206**
7.3 彼女は立派な働きを求めている **207**
7.4 女性執事 **209**
7.5 女性の説教者 **211**
7.6 総括 **213**

8 「キリストにあって一人」――ガラテヤ人への手紙3章28節 **215**
8.1 テキストは何を語っているか **216**
8.2 テキストが直接には語っていないこと **217**
8.3 それでもテキストが間接的に語っていること **218**
8.3.1 ユダヤ人とギリシア人 219
8.3.2 奴隷と自由人 219
8.3.3 奴隷制についての情報 220
8.3.4 男と女 221
8.3.5 地上的なことと霊的なこと？ 222
8.3.6 男も女もない 223
8.4 要約とまとめ **224**

9 父なる神、子なる神、聖霊なる神 **226**
9.1 神は男性なのか **227**
9.2 あなたは自分のために像を造ってはならない **229**
9.3 女性的な神のイメージ **230**
9.4 父と子 **231**
9.5 永遠の御子の服従？ **232**
9.6 イエスと12人の弟子 **235**
9.7 まとめ **236**

10 私の罪の告白 **238**

11 まとめと展望 **242**
11.1 注意点と助言 **245**

12 違い **247**
12.1 賜物志向のモデル **248**
12.2 階層的モデル **250**

13 さまざまな読者からのあとがき **252**

13.1 自由な視界がふさがれてしまった！ 252
13.2 何が可能だったことか！ 254
「女性問題」と「兄弟姉妹の愛」 256
13.3 変化 258

14 最終弁論——女性の問題はそれほど重要なのか 260
14.1 問題はいくつかの（禁じられた）奉仕ではない 260
14.2 男性が感じること、感じないこと 261
14.3 女性の問題において私たちは聖書をどう読むのか 262
14.4 感じ取る力 263
14.5 私が目指していないこと 264
14.6 分裂の理由？ 264
14.7 女性たちは立ち上がらなければならない 265
14.8 やがて来る時と今 266

15 参考文献 267

16 著者の本 271

17 推薦図書 272
ハンナ＝マリア・シュマーレンバッハ（Hanna-Maria Schmalenbach） 273
Frausein zur Ehre Gottes 274

1 序文

このいつまでも尽きない話題について、また一冊の本を？　それについてはもう言い尽くされ、書き尽くされているのではないか。また論争するのか、それとも論争を続けるのか。信仰を弁護するためには、護教的なテーマのほうが大切なのではないか。けれども私には、このテーマもまた護教（アポロジェティクス）に属するのだということが分かってきました。それは、ポストモダンの世俗社会において、しかしまた保守的で聖書主義的なキリスト教の内部においても、普遍的な倫理規範を弁護することなのです。後者についてもそうであるのはなぜか、はっきりと示していくつもりです。

この問題をめぐる小競り合いや争い、そして無理を重ねる努力は、この本がなくても続いていきます。それは今なお教会を分裂させています。ある人々は、礼拝で女性の声をそもそも聞いてよいのかという問いですでに分裂します。ほかの人々は、女性執事や女性長老[1]を置いてよいのかという問いで分裂します。あるいは、女性が指導的な役割を担い、説教してよいのかという問いで分裂するのです。

私たちの頭の中には、要塞のように攻め落とすことのできない立場があります。神のことばは、あらゆる時代精神に逆らって、文字どおりに受け取られなければならない、という立場です。そして、それが今日の私たちにとって文字どおり守るべきものなのかどうか、疑問や疑いを抱いている人々がいます。

この本の中で、私はこのテーマについての自分の研究をまとめています。このテーマについての文献をよく知っている方は、新しい発見はほとんど期待できないでしょう。また、きわめて保守的なものからきわめて進歩的なものまで存在するあらゆる立場を検討するものでもありません。この本は、結論を開いたままにした研究ではありません。それは一つの明確な立場です。それを見いだし、根拠づけるのに、私は何十年もかかりました。それは、私がかつて学び、主張していたこととは異なっています。

それを説明するのに一冊の本が必要なのでしょうか。それほど複雑なことなのでしょうか。答えは「はい」でもあり「いいえ」でもあります。アメリカで死刑囚に見

1. 私はほとんどの箇所で、はっきりさせるために、この語の女性形（Ältestinnen＝女性長老たち）を用いています。今日一般的であり、聖書の原語においてもそうであるのは、女性形をも含む総称的な男性形（ドイツ語ではÄlteste）です（第6.4.1章を参照）。

られるような冤罪の歴史を追ってみると、無実を証明するためには、多くの場合、証拠固めと状況証拠の収集に膨大な労力が必要です。しかし、ときには遺伝子検査一つで十分なこともあります。どれほど労力がかかるとしても、30年、40年、50年を経て釈放されるそうした死刑囚たちの顔を見てください！　そのように、この本の中には単純な考えもあれば、ときにはもう少し複雑な考えもあります。聖書はいつも簡単に理解できるわけではありません。そう考えるのは思い違いでしょう。漁師であり使徒であったペテロでさえ、そのことに気づいています。パウロの手紙について語り、それは理解しにくいと述べているのです（ペテロ第二3:15-16）。

この本が読まれれば、反論や論駁や憤慨がほどなく寄せられることでしょう。私はこうした仕組みをよく知っていますし、私自身もその一部でした。たとえ考えを改める人が出なくても、少なくともこのテーマが話題に上ることにはなります。

ちょうど私がこれらの行を書いている今も、アメリカの福音派の世界では、このことがまたしても激しく議論されています。私はこの本を感情を交えずに書いたとは言えません。それでも、事実に即した態度を保とうと努めました。それは読者の判断にお任せします。

そして、もちろん、別の意見を持つことが十分にありうる点もあります。そのような点では、私の理解において聖書全体の大きな像に合うように、私なりの判断を下しています。

私の心にかかっているのは、イエスに従っている多くの女性たちと、関わりのある男性たちです。彼らは、この性別役割のテーマと、語ること・教えること・指導することの禁止を、疑わしく重荷であると感じています。一方では聖書を真剣に受け止めたいと願いながら、他方ではそれを実行することができないからです。さらに、少なからず重要なのは、この問題において私たちが世からどのように見られているかということです。私たちが福音を届けようとしている、その世から。

神は私たちにとって、これほど難しくされたのでしょうか。何百万時間もの研究と祈りと議論がこれらの問いに費やされることが、神の意図なのでしょうか。分裂を受け入れ、一致を犠牲にすることが？

私は確信しています。そしてこの本は、これらの問いがきわめて今日的なものであるということのための私の弁論です。なぜなら、もし女性が階層的に男性の下に立っており、それゆえ教会での彼女たちの奉仕が制限されているのだとしたら（ほかにも公でない奉仕は数えきれないほどある、といくら断言されても）、そして私た

ちが間違っているのだとしたら、神よ、私たちをあわれんでください、ということになるからです。

これは従順の問題です。両方の性にとっての問題です。律法主義的で、奴隷的で、恐れに満ちた従順のことではありません。

この本は、およそこの40年間の私の研究と、数えきれない会話と、インターネットのフォーラムでの議論をまとめたものです。私はほかの人々から多くを学ぶことができました。

私は聖書的な道を示そうとしています。できるかぎり分かりやすく説明します。ときには、ある方々にとっては複雑すぎることもあるかもしれません。そのときは、そこを脇に置いて次の章を読むことをお勧めします。私は神学者として書いているのではありませんし、神学者のために、あるいは自分は神学者だと思っている人々のために書いているのでもありません。私が思い浮かべているのは、長い間ともに歩んできた人々、そして新しく信仰に入り、私が教えをもって仕えるべき人々です。この本が男性にとっても女性にとっても助けとなることを、私は願い、祈っています。

聖書のことばの中には、新たに考え直さなければならないものがあります。このようなことが起こるのは、これが初めてではありません。ある人々にとっては、聖書テキストの新しい解釈は思い上がった、疑わしいものです。境界線が動かされてしまう、というのです。しかし、「宗教改革の伝統に立つと自認する神学にとって、習慣を問い直し、聖書テキストを新たに読むことは、その本質に属している」のです。[2]

この本の中には、たくさんの引用があります。これらの貴重な考えの多くを私は英語圏で見いだしました。それをドイツ語圏の読者にも届けたいと思っています。

最後に。私たちの神学は誤りのないものではありません。決して。私たちがどれほどそう願ったとしてもです。この本も、すべての本と同じように、誤りと弱さと長所を持っています。この本についても、ほかの人ならもっとうまく書けただろうということが当てはまります。考えや訂正や助言やあとがきを寄せてくださった、関わってくださったすべての姉妹兄弟に感謝します。特に、校閲を担当してくださったコニー・エンドレス（Conny Endrös、アルゴイ地方ケンプテン近郊のラウベン）とベルント・ヒュスケン（Bernd Hüsken、シュヴェルム）に感謝します。そのこ

2. Wunderli, 53, 「Ihm gegenüber」: Geschlechter-Gleichberechtigung in der Kirche und was die Bibel dazu (nicht) sagt, 2020

とは私を喜ばせ、また、私が育ち、良い霊的な影響を受けたシュヴェルムでの青年時代を思い出させてくれます。

Hans-Jörg Ronsdorf

アルゴイ地方ズルツベルク、2020年11月

あなたのおきてを私は喜び、あなたのことばを忘れません。

あなたのさとしは私の喜び、私の助言者です。

私はあなたの命令の道を走ります。あなたが私の心を広くしてくださるからです。

詩篇119篇16節、24節、32節（チューリッヒ聖書〔Zürcher Bibel、ドイツ語聖書翻訳〕）

1.1 第2版（増補版）への序文

第2版にあたって、私は軽い改訂と補足を行うことにしました。いくつかの訂正、しかしそれ以上に補足と文体上の改善が必要だと感じていたのです。

主に、このテーマについての三つの中心的なテキストを扱う章に手を入れ、補足し、しかしできるところでは短くもしました。特に、かしら、髪、ベールについての章がそうです。

初版の発行後、私はさらに多くの資料に目を通し、自分でも資料を作成しました。その一部は、私のホームページ www.hans-joerg-ronsdorf.de でご覧いただけます。

アメリカでは、このテーマについての新しい本がほとんど毎月のように出版されています。それらはたいてい神学的に質が高く、新約聖書のテキストに取り組んでいます。それらは、私がこの本で述べようとしていることを裏づける仕方で、このテーマを照らし出しています。人生のあらゆる領域において男性と女性が完全に同等の地位にあることは神のみこころである、と私はこれまで以上に確信しています。

この聖書の真理が、結婚に、家族に、そして教会に癒やしをもたらすことを、私は願い、祈っています。ひょっとすると、この本は今になってようやく、あるべき姿になったのかもしれません。しかし、それは今なお誤りうるものであり、真理そのものではなく、私の解釈です。

Hans-Jörg Ronsdorf

ズルツベルク、2021年7月

第3版は、需要の高まりによって必要となりました。同時に私はこの機会を用いて、さらに小さな訂正と補足を行いました。この本の主張は何も変わっていません。このテーマがますます話題に上るようになり、主にある姉妹たちが自分の召命が何であるかをますます理解するようになっていることを、私はうれしく思います。

Hans-Jörg Ronsdorf

アウクスブルク、2021年11月

1.2 第4版への序文

ほぼ2年の月日が流れました。この本のテーマは、今も尽きることのない話題です。ちょうど今、アメリカでは、女性を指導的な役割に就かせたり、女性牧師を置いたりする教会が、南部バプテスト連盟（SBC）から除名されています。しかもそれは、多くのキリスト者が奴隷制を聖書によって正当化してきた南部の州でのことなのです。

この第4版には、コリント人への手紙第一14章の沈黙の命令というテーマについて、重要な補足があります。

私のホームページ www.hans-joerg-ronsdorf.de をご覧ください。このテーマについての新しい論考が、そこに繰り返し掲載されています。

Hans-Jörg Ronsdorf

アウクスブルク、2023年7月

1.3 この本を書いている者

たいていの場合、本の内容はその著者よりも大切です。しかしこの場合、保守的なキリスト者の間でこれほど繊細なテーマを扱うにあたって、私はこの本を書いてい

るのがだれなのかを読者にお知らせしたいと思います。そして、彼がここで述べられている立場にどのようにして至ったのかを。

私は36歳になるまで、妻と5人の子どもとともに、（閉鎖的で排他的な）ブレザレンの集会（Brüderversammlung）に属していました。それは「古い集会」（Alte Versammlung）としても知られています。彼ら自身はそのようには名乗っていません。あらゆる「名称」を拒んでいるからです。これらの集会、すなわち礼拝において、女性は黙っています。女性は参加しません。ほとんどいつも男性と女性は分かれて座ります。女性は礼拝でズボンをはきません。女性は頭をおおいます。

その後私たちは、1980年代の神の働きにさかのぼる、アルゴイ地方の教会（運動）の一員となりました。そこでは、いくつかの教会で、女性が声に出して祈ったり、証しをしたり、賛美の歌を提案したりすることが許されていました。私の過去のゆえに、私はそれに抵抗を感じていました。コリント人への手紙第一14章が女性に黙っているよう命じているからです。

何年かして、私はこの問いにもう一度向き合い、聖書を徹底的に調べました。そして実際に、女性が声に出して祈り、証しをし、歌を提案できるというこの実践は、十分に聖書的であることが分かったのです。私の根拠は、この後の章に記されています。

私は彼女たちの参加を、ますます肯定的なものと感じるようになりました。すでにここで、私の聖書研究はこの肯定的な態度によってその方向へと影響を受けていたのだ、という異論が出るかもしれません。無意識のうちにそうであった可能性はあります。意識的にはそうではありませんでした。なぜ私の確信が変わったのか、その理由をはっきり示していきます。

さて、この教会では、女性は説教をせず、女性執事にも女性長老にもなることを許されていませんでした。親しい関係にあるほかの教会でもそうでしたし、今もそうです。いくつかの教会では、姉妹たちは黙ってさえいます。それは、ドイツの自由ブレザレンの集会や、ザルツブルク地方のある教会の流れの影響、あるいはそれらとの近さによって説明できます。

何年か前に、私はこの教会を離れました。ここでのテーマには何の関係もない理由からです。それは、ほかの人々も経験してきたある体験へとつながりました。空間的にも時間的にも距離を置くことで、長年自分が属していたものに対して、新しい、分析的な視点が開かれたのです。私はそこで7年間長老を務め、この女性の役

割についての見方を自ら持ち、擁護し、実践していました。しかし距離を置いたことで、この問いについて新たに考えることができるようになりました。共同体からのこうした外的な圧力がなくなって、私は時とともに別の認識に至りました。おそらく、距離がなければそれは不可能だったでしょう。

私が読者に隠さないこの考えの変化の過程を、衰退、背教、世俗化として意図的に否定的に解釈することもできるでしょう。私は、こうした思考パターンや、ほとんど「預言者的」と言えるほどの動機の決めつけを、若い頃からよく知っています。それらは強く、深く根を下ろしています。そこから抜け出すのは容易ではありません。私自身、その積極的な一部でした。

これが、私の教会としての状況と過去です。聖書は、教会生活において大きな自由を与えています。集まりの形は定められていません。唯一の正しい道というものはありません。そう信じているキリスト者がいるとしてもです。礼拝の形――そして実にさまざまな形があります――は自由なのです！　その中での女性の役割が、この本のテーマです。

私という人間について、もっとも大切なことがまだ欠けています。いや、むしろ、私の人生においてもっとも大切な人と言うべきでしょう。私の妻クリスティーネ（Christine）です。彼女のために、私は父と母を離れ、彼女と人生をともにしてきました。私たちには5人の成人した子どもがいます。私の妻は強い人格の持ち主です。戦うことのできる、雌ライオンのような母です。賢い女性です。主にある私の兄弟たちの多くが自分の妻に感謝しているように、私も何にもまして彼女に感謝しています。彼女は、性別をめぐる問いについての私の個人的な認識の旅の一部です。彼女がいなければ、私は今日立っている場所にはいなかったでしょう。私は今も、そしてこれからも学ぶ者であり、また誤る者でもあります。

私たちは二人とも、自由で民主的な国で育ちました。男女同権の法律のある国です。もっとも、今日に至るまで女性は不利な立場に置かれていますが。私はドイツと西洋の文化圏について話しています。私たちはまだ戦争を経験したことがありません。飢饉も経験したことがありません。今年、私たちは自分たちの世代で初めてのパンデミックを経験しています。永遠に揺るがない安全と成長という感覚が、初めて揺さぶられているのです。

これまでのこうした非常に恵まれた人生経験が、私たちの考え方と、ほかの文化圏に対する私たちの見方を形づくっています。私は、同権を現代の民主主義が勝ち取

った祝福に満ちた成果だと考えています。それは奴隷制の廃止に比べることができます。奴隷制は決して神のみこころにかなうものではありません。

このことに触れるのは、私たちの社会化が（排他的な）ブレザレン運動の考え方によって決定づけられていたからです。そこでは男性と女性は同じ価値を持つと見なされてきましたし、今もそう見なされていますが、女性は教会の礼拝への参加から締め出されています。女性は従属的な立場にあります。女性は男性の助け手です。男性はかしらであり、結婚において指導権を持っています。そうすることで、神のことばに従順であると信じているのです。聖書に忠実である、と。

そのような確信を持つことはできます。しかし、それが今日の生活の現実にどの程度合っているのか、そもそも合いうるのか、と問うことは許されるでしょう。私の結婚生活はどのようなものだったでしょうか。そして、確信をもって両性の異なる地位や権威を生きようとしている両親や祖父母、そして今日では友人や知人の結婚生活を、私はどのように見てきたでしょうか。

結婚生活の初めの頃、私は多くのことを自分一人で、妻と相談せずに決めていましたが、今ではそういうことはほとんどしません。私たちは、チームとして決め、行動したときに、いつもいちばんうまくいきました。尊敬と愛は一方通行ではありません。互いに分かち合い、ともに生き、対等な立場で語り、聞くこと、それが理想的な状態です。だれにでも強い時期と弱い時期があります。必要なときにはいつでも――そしてそもそもそれが普通のことですが――互いに補い合うのです。いつも男性が先に立つわけではありません。女性であることもあります。交互に。補い合いながら。話し合いながら。開かれた心で。正されることを受け入れて。耳を傾けながら。ともに祈りながら。それが、私が経験している生活の現実です。それ以外のものは後退でしょう。私は、古代オリエントの、アブラハムやダビデの時代のような結婚生活を送るつもりはありませんし、送ることもないでしょう。イエスの時代のようにでもなく、宗教改革の時代のようにでもありません。私の祖父母のようにでもありません。その点について、21世紀に生きていることを私は感謝しています。

さて私は、男女の問題において聖書に忠実に生きていると考えている人々も、実際には私たちとほとんど違わない生き方をしていることに気づきます。彼らの結婚生活もまた、一方的なものではなく、同権によって、一つであることの中にある二人であることによって特徴づけられているのです。つまり私が言いたいのは、例外を別にすれば、パウロとペテロが描いているような（これらのテキストについては詳

しく取り上げます）キリスト者の結婚生活を、私はどこにも見ていないということです。むしろ反対に、これらの妻たちは夫たちと対等な立場で歩んでいます。彼らはたいていチームなのです。女性は夫を操ったり支配したりしようとしているのだという一律の決めつけは、不公平です。たとえそういうことがあるとしてもです。罪は、どの結婚生活においても、小さな、あるいは大きな火種であり続けます。けれども、互いに良い関係にあれば、その火はたいてい消し止められるのです。

この本の中で私が、今述べたような結婚についての立場と、教会における女性の別の役割を主張し、その根拠を示すなら、それはある人々の間に無理解、拒絶、驚き、そして憤激を引き起こすでしょう。自分の確信を主張することには、いつも代価が伴います。とりわけ、自分の教会や友人たちの立場に反対して論じる場合にはそうです。私は、古い保守的な立場への敬意をもってそうします。私はそれらを誤りだと考えていますが。それらは神の御霊を弱め、御霊に逆らっています。すべての読者が、この本の最後まで読み通してくださることを願っています。私の本の内容についての対話は、本全体を読んでいただいたうえでなら、喜んでいたします。

議論が事実に即しており、決めつけのないものであるかぎり、どうぞ遠慮なく私に手紙をお寄せください。特にこうした問いにおいては、議論がしばしば熱を帯びて事実から離れ、ときには個人攻撃になって人を傷つけるものになることを、私はよく知っています。

だれもが神の前で自らを吟味し、私たちの認識は部分的に、また一歩ずつ進むものであって、周囲の環境とその時代によって強く形づくられているということを認めるべきです。

若い頃から、私は聖書を読むように勧められてきました。毎日。そしてそれを学ぶようにと。私はそうしてきました。「集会」で受けた良い聖書的な土台に、私は感謝しています。この本は、もしそのように解釈しようとする人がいるとしても、私の過去に対する告発でも、その清算でもありません。いずれにせよ、聖書を学ぶことは、ごく若い頃から私の趣味となり、それ以上のものとなりました。そして今日までそうあり続けています。当時の私は、尊敬される聖書の教師になりたいと思っていました。私の手本とした人々のように。そのうちの何人かは今も存命です。その動機はもうずっと前になくなりました。さて、それほど多く、また熱心に聖書を学ぶとき、そこからどのような認識が生まれてくると私たちは考えるでしょうか。いつもいつも同じことでしょうか。

聖書を学ぶとき、ときにはイスラエルのように、目におおいが掛かっていることがあります（コリント第二3:15）。私たちはしばしば、聖霊がおられるにもかかわらず、いつも同じものしか見ていません。けれども、繰り返し繰り返し聖書を学ぶ人は、この御霊が突然何か新しいものを示してくださったとしても、驚くべきではありません（マタイ13:52）。たとえ2000年近くたった後であってもです。神のことばは汲み尽くせないものではないでしょうか。神学者や聖書学の助けによっても、また聖書を学んでいる聖書学校や神学校の助けによってもです。教会における、結婚における、そして神の王国における男性と女性というこの一連のテーマにおいて、何世紀にもわたって唯一正しいと信じられてきた認識とは異なる、新しい、あるいは別の認識が現れたとしても、それだけの理由ですぐに退けるべきではありません。このテーマは救いを左右するものではありませんし、私たちはあたかもそうであるかのように振る舞うべきではありません！　それはまさに、聖書への忠実さの試金石ではないのです。

何十年にもわたって大切にしてきた真理を問い直さなければならないことが何を意味するか、私は経験から知っています。聖書の証言が、ずっと考えてきたほど、あるいは教えられてきたほど、明白でも明快でもないからです。考えを改める過程は痛みを伴います。それは私たちに何かをもたらします。それは、私たちがどれほど誤りやすく、無力で、ただ神に頼るほかない存在であるかを示します。私たちは神に向かって嘆くことができ、自分の無知や問い、そして疑いをも神のもとに持っていくことができます。そして、自分の教会の環境の中だけで暮らし、自分の世界を唯一正当な、あるいは聖書に忠実な世界だと思い込んでいるところで、気づかないうちに生じた「職業的な盲目」（Betriebsblindheit）をも。

数年間、私は聖書ギリシア語のフォーラムに参加していました。多くのことが話し合われ、建設的に議論されました。この本のテーマも議論されました。当時私は多くのものを集め、今それを読み直しました。数年の距離を置いてみると、議論が結論を開いたままにしていたことは、まれか、まったくなかったことに気づきます。言語能力がどれほど高くても、ある立場に対する事前の決定と刷り込みが、賛成か反対かの議論を決定づけていたのです。この場合で言えば、女性が礼拝でそもそも何かを話してよいのか、今日でも頭をおおうべきなのか、ということについてであり、教えることや指導することについては言うまでもありません。聖書を使えば、本当に何でも証明したり反証したりできるのでしょうか。

私は、このテーマについて書くつもりはまったくありませんでした。それは論争の的であり、争いの絶えない領域です。地雷の埋まった土地です。ここでは栄誉を得ることはできません。私の時間は、神の国のほかの事柄のために十分に用いることもできたでしょう。けれども私は、個人的にそれをするように召されていると知っていました。時代精神に迎合していると決めつけられることでしょう。それに対して私にできることはありません。私は、世が闘い取ろうとしている解放主義的な立場を擁護しているのではありません。私の道は、聖書が私に教えていることでありたいのです。

あなたのみことばは、私の行くところを照らします。それは私の道の光です。

あなたがみことばの中で証ししておられることは、驚くべきことに満ちています。それゆえ私は心を尽くしてそれを守ります。

詩篇119篇105節、129節（ノイエ・ゲンファー訳〔Neue Genfer Übersetzung NGÜ、ドイツ語聖書翻訳〕）

2 創造と堕落

ある事柄をよく理解するには、その起源を調べるべきです。このテーマを扱うキリスト教の本は、ほとんどどれも原初史から始まります。パリサイ人たちが離婚の問題でイエスを罠にかけようとしたとき、イエスはこの問題を創造の物語の光の中に置かれました（マタイ19:3-9）。イエスにとって決定的だったのは、初めにどうであったかということです。神の良いご計画が人類のために何を定めていたか、ということです。ちなみに、イエスが離婚について語られたことは、女性たちを守るためのものでした。女性たちは、離縁について、夫の思いのままに多かれ少なかれ委ねられていたからです。

この本で私は、このイエスの視点に一貫して従おうとしています。私は楽園の園で時を過ごし、何が起こったのかをじっくりと見つめます。何が、どのように造られたのか。何が語られたのか。女性と男性の関係が問題になるとき、聖書の最初の三つの章が決定的だからです。初め――堕落の前――が理想の姿を描いているのなら、細部の一つひとつが重要です。とはいえ、正直に言えば、それは見通しのきく短いテキストです。創造の物語は比類なく、深いものです。しかし短いのです。今日ではもう話されていない言語で書かれています。そして、古代オリエントの人々が起源について抱いた問いは、私たちが抱く問いとは異なります。多くのことが未解決のまま残ります。

ですから、一般的な推論や拘束力のある結論は、慎重に扱わなければなりません。いずれにせよ、最初の人間の夫婦の創造についての比較的短い記述に、結論を詰め込みすぎてはなりません。

2.1 すべてはどのように始まったか

このテーマについての多くの本で、ほとんどいつも見て取れることがあります。この原初史をどう解釈するかに応じて、新約聖書の関連するすべてのテキストも解釈される、ということです。原初史をどう見るかが、このテーマについてどの立場をとるかの分かれ道となります。解釈の型に応じて、対立し、互いに矛盾する立場が生まれます。大きく分ければ、それは二つです。

階層の違いのない、男性と女性の地位の同等性（英語圏では平等主義〔Egalitarismus〕と呼ばれます）。

階層的な違いに基づく、男性の指導的役割と女性の服従（補完主義〔Komplementarismus〕）。

どちらの立場も、価値の同等性と違いとを確信をもって主張しています。しかし、両性の役割と階層についての理解が異なっているのです。第12章（「違い」）に、両方の立場の図式的な概観があります。

英語圏で使われているこれらの用語は、ドイツ語圏ではうまくないと私は考えています。補完的（komplementär）とは、相手を補うという意味です。それは地位の序列が異なる場合にも当てはまります。ところが、互いに補い合うことは、どちらの立場も主張しているのです。ただし、一方は階層の違いを伴って、もう一方は階層の違いなしに。

私はまず、何千年も前に過ぎ去った出来事に好奇心をもって目を向けることから始めます。記録と出来事がそれほど昔のものだというだけでも、これらの物語を見る目は、時を超えたものでも、解釈から自由な空間にあるものでもありません。創造の記事は、ある歴史的な状況の中で、すなわち古代オリエントという環境の中で書かれています。このテキストは、21世紀の私たちにあてて書かれたものではありません。まるで21世紀の私たちが最初の受け取り手であるかのように、ではないのです。しかし、これらのテキストは私たちのために書かれています。忘れてはならない違いです。

使徒パウロは、その手紙の中で何度か男性と女性の創造に言及しています。私はそれらを理解の助けとしては用いません。パウロはそれらのテキストの中で、男性と女性の創造を解き明かしたり説明したりしているのではなく、特定の状況に当てはめているからです。これは大きな違いです。創造の物語には、まず自分自身で語らせることにします。後で私は、パウロのテキストとその解釈について詳しく取り上げます。まず私は、創世記の最初の二つの章の物語から一つの像を描きます。堕落の前です。性別役割に対して、否定的で、ゆがめるような文化の影響が及ぶ前です。つまり、イエスが初めについて語られるときとまったく同じように。

2.1.1 第六日の御業

人間が造られるのは、創造の物語の最後の日になってからです。陸の動物たちとともに、地が人間の住まいとなります。陸の動物たちが造られた後の、第六日の記述は次のとおりです。

> [創世記 1:26-31、ドイツ語エルバーフェルト訳聖書から翻訳] そして神は言われた。われわれのかたちに、われわれの似姿に、人を造ろう。そして彼らが支配するように。海の魚と、空の鳥と、家畜と、全地と、地の上を動くすべての這うものを！
>
> そして神は人をご自分のかたちに創造された。神のかたちに彼を創造し、男と女に彼らを創造された。
>
> そして神は彼らを祝福し、神は彼らに言われた。生み、増えよ。地を満たし、地を従えよ。そして、海の魚と、空の鳥と、地の上を動くすべての生き物を支配せよ！
>
> そして神は言われた。見よ、わたしは、全地の面にある種を生じるすべての草と、種のある実を結ぶすべての木とを、あなたがたに与えた。それはあなたがたの食物となる。また、地のすべての獣、空のすべての鳥、地の上を動くもので、生きた魂のあるすべてのものに、わたしはすべての青草を食物として与えた。するとそのようになった。神は、造ったすべてのものをご覧になった。見よ、それは非常に良かった。夕があり、朝があった。第六日である。

このテキストと、これから扱うすべてのテキストを調べるにあたって、問題は一般的な解釈や釈義ではありません。焦点は、女性と男性という二人一組のあり方、すなわち互いの関係と、彼らの創造者との関係にあります。これらのテキストは、この本のテーマにどのような光を投げかけることができるでしょうか。人々はそれらをどのように解釈し、適用してきたでしょうか。

書くこと、挙げること、引用することは多くあるでしょう。この本の枠の中では、私は簡潔にとどめ、大きな像を描くように努めます。

2.1.2 人間――神のかたち（Imago Dei）

人間――ヘブル語では adam（土の者） ――は、ほかのすべての被造物の上に高く上げられます。「創造の冠」という日常の言い方が、ちょうど当てはまるかもしれません。人間がほかのすべてのものとの関係において並外れた存在であることは明らかです。神のかたちとして、神に似た者として、人間はいわば、造られた目に見える世界における神の代理人となります。地上で、神に代わって支配することが人間に委ねられています。[3] 人間は、自分の創造者を代表する者となるのです。神のかたちとして、神に似た者（同じ者ではありません）として、このように「装備」された人間は、動物とは違って、神と語り合うことのできる者でもあります。創造者が語りかけ、交わりを持つ、向かい合う相手なのです。

そのように神に似た者であるために、人間は「王のように」装備され、神も持っておられる能力と可能性を授けられています。神は物質ではなく霊であられるので、地上では人間のうちに、神の多くのことが目に見えるようになるのです。

古代オリエントでは、王や支配者たちが、征服した地域に自分の像を立てて、支配権を示しました。自分の身がそこにいなくても、その姿を映すものです。

ですから、創造の物語は、それが生まれた文化的環境の中で比類のないものです。すべての人間を、女性も男性も、奴隷でさえも、王とし、統治者とするからです。一人ひとりの人間が神のかたちです。そして、それによって尊厳と価値と保護を受けるのです。これが聖書の人間観です。人間であることと共に生きることを成り立たせる、あるいは成り立たせるべき、ほかのすべてのものが築かれる土台なのです。

すべての男性とすべての女性が、神のかたちであるという、ほかと取り違えようのない尊厳を担っています。男性として、また女性として人間であることは、神のかたちであることを意味します。

3. 神は、人間に支配を委ねることを真剣に考えておられます。この全権委任と自由から人間に生じうる、ありとあらゆる結果を含めてです。良い結果も悪い結果も。神はこの委任を尊重され、絶えず訂正のために介入されることはありません。

2.1.3 男と女としての人間

神のかたちを担う者としての役割は、男性であれ女性であれ、人間に与えられています。ですから、それは意図されたことであり、ほかにはありえないことなのです。神を代表し、創造の使命を果たすためには、両方の性が必要です。どちらも、結局のところ、一人だけでは包括的に神のかたちであることはできません。

神ご自身は、性の違いについて何も注釈を加えておられません。能力、価値、重要性、役割、立場の点で何の違いもなく、両者は一息に挙げられています。一つの語で、すなわち「人」と。当時としては、これも比類のないことでした。女性はここで、男性と同等の地位で並んで立っています。古代オリエントの文化では普通のことではありませんでした。

ここで問われているのは、両性がその体質や機能や役割において異なっているかどうかではありません。すべての土台が据えられる聖書の最初のページで、まず問題になっているのは平等です。これが、女性と男性というテーマへの聖書の入り口です。これが聖書自身の最も重要な分かれ道であり、前提であり、基本的な想定です。聖書が語るほかのすべてのことは、これによって説明され、これに方向づけられています。そして私たちは、もしかすると自分を正さなければならないのかもしれません。この光の中で、パウロも解釈されなければなりません。その逆ではありません。これについては後でさらに述べます。

2.1.4 人間と神の委託

神は人間を祝福し、それによって、神の代理人としての使命を果たす力を与えられます。それは一つには、地と動物に対する支配です。もう一つは、生み、増えて、地を、地球全体を満たして治めよ、という命令です。そして、地を思いやりをもって治め、いたわりながら役立てるようにということです。言い換えれば、楽園を全地に広げることです。この使命が与えられたとき、自然がどのような状態にあったのか、正確なことは分かりません。

それは文明の使命です。文化命令とも呼ばれます。それは、神が造られたとおりの地の、神から与えられたすべての資源を用いて、神から与えられたすべての能力を存分に生かすことです。このテキストは、農業、耕作、牧畜を生活の環境としてい

ます。しかし、今日に至る何千年もの発展は、一方では地とその資源が、他方では人間の能力と賜物が、どれほど多層的であるかを示しています。神ご自身が備えられた潜在力です。

問題は、この使命がどのように果たされたかではありません。それは堕落の前の使命です。[4] この使命は、堕落の後も変わっていません。ここに描かれているとおり、それは今日まで、男性にも女性にも有効です。

動物の世界でも起こるような増殖は、男性と女性がともにでなければ果たすことができません。両方の性が、この事実と性とに、ともに向き合っていかなければなりません。

この広範で、きわめて責任の重い使命において、男性と女性は等しく、対等であり、互いに頼り合っています。神の祝福に頼っているのと同じように。いかなる階層もなく、この人生の課題においてだれが決定権を持つのかという権威の問いかけも、取り決めもありません。

人間、すなわち男性と女性は、楽園の園という環境とその使命において、正当にも王である祭司と呼ばれます。[5] 一方で、彼らは神の代表者として地を支配します。しかしまた彼らは、神の御前に、楽園の園に生きる者でもあります。この役割は、両者に、男性にも女性にも、等しく当てはまります。

ここではこれ以上掘り下げませんが、この重要な側面は、エデンの楽園と神殿の象徴とのさまざまな並行関係から生まれてきます。[6]

4. （status integritatis——堕落前の無傷の状態。これに対して status corruptionis——堕落後の腐敗の状態）
5. Beale, Gregory K., 65頁以下, Der Tempel aller Zeiten, 2011
6. 創世記2章の楽園と神殿との間には、直接の関係があります。東の入口：楽園の園の入口は、本来の神殿の建物やシェキナの宿営とまったく同じように、東に向けられていました（創世記3:24。miqedem＝東の方へ）。川：エデンから湧き出る川は、エゼキエルの設計図による聖所の神殿の川に、すばらしい対応物を持っています（エゼキエル47章）。神の臨在：神の臨在と神が歩き回られることは、神殿においてと同じように、エデンの園で特別な仕方で体験することができました（創世記3:8-9、レビ記26:11-12）。ケルビム：神殿との関連でたいへん重要なケルビム（たとえば出エジプト記25:18、26:1、31、列王記第一6:23、29）は、エデンの園できわめて重要な見張りの役目を持っていました（創世記3:24）。神への奉仕：園でのアダムの働きは、「耕す」（’avad）と「守る」（shamar）という語で、神への奉仕として言い表されています（創世記2:5、15）。これらの動詞は、聖所と結びついて、祭司とレビ人の神への奉仕を描く典型的な語です（’avad：民数記4:24、26、30、37、41、47、8:11、15、19、22、25、26。shamar：民数記3:7、8、10、28、32、38、18:3、4、5、7）。Roger Liebi, Genesis 2: Die Schöpfung des Menschen を参照。

教会と礼拝の集まりにおける男性と女性という点から見ると、ここに最初の、間接的ではあっても一つの示唆があります。そこでも彼らが同等の地位で活動するということです。ここではすでに、全信徒祭司性がほのめかされているのです。

2.1.5 アダムとエバの創造

創世記2章で、物語は人間の創造に具体的に踏み込みます。1章で、六日間の御業の枠の中で、神エロヒムについて一般的に報告されていたことが、今や表情豊かな物語へと移っていきます。いわば、1章の最も大切なことが取り出され、掘り下げられるのです。1章には創造の記事があり、2章には楽園の記事があります。エデンの園が出来事の舞台です。神の名は、今やヤハウェ・エロヒム（Jahwe Elohim）です。創造者として人間を形づくり、人間に近づき、人間のためにそこにいてくださる神です。

> [創世記 2:4-9、ドイツ語エルバーフェルト訳聖書から翻訳] これは天と地が創造されたときの、その経緯である。神である主が地と天を造られた日に。野のすべての灌木がまだ地になく、野のすべての草がまだ芽を出していなかったときのことである。神である主が地に雨を降らせておられず、土地を耕す人もいなかったからである。
>
> しかし霧が地から立ち上り、土地の全面を潤していた。そして神である主は、土地のちりで人を形づくり、その鼻にいのちの息を吹き込まれた。すると人は生きた魂となった。

この物語は、アダムが土地のちりから造られたことを伝えています。神のかたちである者が、土から造られるのです。地は彼の住まいであり、いつまでもそうあり続けます。新しい創造においてもです。この不思議な創造の過程の中に、彼が地に近い者であることも、はかない者であることも表れています。粘土で人が造るのは、本来は家であって、人間ではありません。しかし神は、この不思議な、神秘的な仕方でそれをなさいます。神の息によって、神の霊によって生かされて、アダムは生きた魂となるのです。

2.1.6 ヘブル語の鍵となる語についての短い補説

ヘブル語の聖書テキストでは、鍵となる語（Leitworte）が重要な意味を持っています。しかし、それが分かるのはヘブル語のテキストを耳で聞くときだけです！

そのような鍵となる語のつながりの一つが、アダム（人）、アダマ（耕地）、ダム（血）という語です。三つすべてに共通する言語上の語根は「赤いもの」です。これらの語の中に、人間が地と幾重にも結ばれていることが表れています。

「アダマ」は地です。「アダム」は、そこから生まれた土の者です。「ダム」、すなわち血は、いのちを担うものです（カインがアベルを殺したときに流された人の血は、地に帰っていきます――創世記4:10以下）。

それだけではありません。三重のへその緒が、私たちを母なる大地に結びつけています。私たちはそこから取られ、そこへ帰っていき、そこから私たちはみな養われています。……アダムとアダマは運命共同体として結ばれており、私たちのだれもそれを解くことはできません。聖書の中で「アダム」は、最初の人間の固有名として私たちの前に現れます。しかし「アダム」は、いつも（同時に）「人間」という類の名でもあります。それは、アダムのすべての子孫をまとめて指すこともできれば、一人ひとりの人の子を個として指すこともできます。どちらの場合にも、地に縛られていることの典型としての「土の者」は、私たちの人間存在のもろさと死すべきことを指し示しています。聖書の預言書のヘブル語では、二本足で歩くすべてのものの総称は「人の子」（本来は「アダムの子」）です。イエスご自身もそう名乗っておられるとおりです。[7]

> そして神である主は、東の方エデンに園を設け、そこに、ご自分が形づくった人を置かれた。そして神である主は、見るからに好ましく、食べるのに良いあらゆる木を土地から生えさせられた。また園の中央にいのちの木を、そして善悪の知識の木を。
>
> [創世記 2:15] そして神である主は人を取り、エデンの園に置かれた。そこを耕させ、そこを守らせるためである。

1章ですでに描かれていた使命が、ここではより具体的になります。ここで念頭に置かれているのは、とりわけ土地を耕すこと、食用の植物や穀物を育てることで

7. P. Lapide, War Eva an allem schuld? 1998, 71頁以下による。

す。つまり農耕です。そしてそれとまったく同じように、また同じくらい重要なこととして、神が人間のために備えられた場所を守ることです。守ることは、創造の使命に属しています。したがって、描かれている状況の中にすでに、食い止め、退けなければならない否定的な傾向や力があるのです。蛇はその一例です。

ここで焦点が当てられているのはアダムです。エバが造られる前のことです。

2.1.7 アダムは助けを必要としている

> [創世記 2:18-20、ドイツ語エルバーフェルト訳聖書から翻訳] そして神である主は言われた。人がひとりでいるのは良くない。わたしは彼のために、彼にふさわしい助けを造ろう。そして神である主は、土地から野のすべての獣と空のすべての鳥を形づくり、人がそれらを何と名づけるかを見るために、人のところに連れて来られた。人が生き物を何と名づけても、それがその名となるはずであった。そして人は、すべての家畜と空の鳥と野のすべての獣に名をつけた。しかし、アダムには、彼にふさわしい助けが見つからなかった。

1章では、それが当然のこととして述べられています。男性と女性は、それぞれ一人でも、またともにでも、神のかたちです。ここでは、どのようにして二人一組になったのか、その特別な過程が述べられています。このすべてが第六日に起こったとは、ほとんど想像できません。24時間という第六日の短い時間の枠から、考えのうえで離れることもできるでしょう。

この物語は、本質的なことを明らかにしようとしています。神がここでなさっていることは、ご自分のための実験ではなく、アダムのための教えです。そして私たちのための。多くの動物に名をつけることは、すべての生き物が人間と動物の間で近い関係にあることを示しますが、同時に、動物に対する人間の際立った立場をも示しています。ここでは確かに、一つの階層がはっきりと表れています。

創造の第六日にはすべてが非常に良かったのに、今は何かが良くありません。アダムは社会的な存在であり、そのような存在として一人でした。人を知り尽くしておられる神は、アダムが感じる前にそれを知っておられました。それは、もしかするとすでにいろいろなことから見て取れたのかもしれません。彼はすでに動物たちの間に雄と雌があり、自分には女性の相手が欠けていることに気づいていたのでしょうか。

アダムが、とりわけティラノサウルス・レックスやサーベルタイガー、アリやミツバチに名をつけた後も、伴侶を探すことは実を結びませんでした。どの動物も、この向かい合う相手、この欠けたパズルの一片となることはできませんでした。神は、アダムがその創造の使命を果たすための助けを探されました。彼は一人では完全ではありませんでした。そして一人では、神が考えておられたものになることができませんでした。この「求人広告」が探しているのは、アダムのためになる者です。魂の通い合う者。同盟者。向かい合う相手、補う者。彼の存在のあらゆる面に対応する対の者です。身体的に、心理的に、霊的に、精神的に、外面的にも内面的にも。まとめて言えば、それが「彼にふさわしい助け」という言葉の意味なのです。

アダムは、からだが欠けているかしらとして描かれているのではありません。助けを必要とする土の者として描かれているのです。彼に必要なのは、家臣でも助手でもなく、自分のそばにいる同じだけの強さを持つ人格です。ともに行動することを可能にする助けです。

男性はしばしば、何でも一人でやり遂げる者のようにふるまいます。助けを求めない者のように。神はさらに先を見ておられます。神は、男性が人生を乗り切るために何を必要としているかを知っておられるのです。

「彼にふさわしい助け」という言葉について、私は、アッシリア学者でありセム語学の教授であるR・デイヴィッド・フリードマン（R. David Freedman）[8]の言葉を引用します。「この二つの語［すなわち ezer kenegdo、あるいは『助け手』］の通常の翻訳は、ほとんど普遍的に受け入れられているにもかかわらず、間違っていると私は考えます。それは、これらの語が伝えようとしていることではありません。これらの語はむしろ、おおよそ『人と等しい力、あるいは強さ』を意味するように訳されるべきです。つまり、人が一人でいることのないように、別の被造物を造ろうと神が結論を下されたとき、神は『人と等しい力、あるいは強さ』を造ろうと決められたのです。その強さが人の強さに対応する者です。女性は、単に男性の助け手となるように定められたのではありません。むしろ、彼のパートナーとなるはずだったのです。」

「フリードマンはそれから、続く語 kenegdo に注意を向けます。この語はしばしば『ふさわしい』とか『適した』と訳されます。この語は聖書に一度しか出てこな

8. R. David Freedman, “Woman, a Power Equal to a Man: Translation of Woman as a ‘Fit Helpmate’ for Man Is Questioned,” Biblical Archaeology Review 9, 1 (1983): 56.

いので、翻訳の助けとなる聖書のほかの比較例がありません。しかし、後のミシュナのヘブル語では、この語の語根は『等しい』を意味します。」

フリードマンはこう結論づけます（そして私たちは次の節を先取りします）。「神がアダムのわきからエバを造られるとき、神の意図は、彼女が――動物たちとは対照的に――『彼と等しい力（あるいは強さ）となる』ことです。『ezer kenegdo』という表現を、文献学的に弁護できる仕方で理解する可能性は、これ以外にないと私は考えます。伝統的な翻訳は、ezer（助け）の後代のニュアンスに基づいており、それは文脈によって正当化されません」。

この言語学的な知見がなくても、どの女性も、どの男性も、女性が同等の地位にある向かい合う相手であることを推論できます。その特徴は、本質が同じであること、違い、そして補い合うことです。階層、権威、従うこと、あるいは服従ではありません。

ですから、女性はアダムに仕えるために造られたのではなく、アダムとともに仕えるために造られたのです。

だれかの助けとなることは、階層の違いを根拠づけるものではありません。神も私たちの助け主なのです！　助けが階層の違いを根拠づけると結論づけるのは、致命的な誤りです。それによって、女性についてなんと否定的な、まさに悲劇的な像が描かれ、なんと広範な結果がそれに結びつくことでしょう。問題は、アダムが自分の創造の使命を果たすことではなく、二人がその共通の使命を果たすことなのです（1:28）。

夫が妻を助けるとき――そういうこともあるはずです――階層が逆転するわけではありません。助けは、聖書においても日常においても、階層とは何の関係もありません。

「創世記2章18節と20節の考えは、女性が男性の強さ、あるいは力の源であり、彼女は友として、また同盟者として彼に仕えるというものです。服従はこのテキストの意図するところではありません。」[9]

2.1.8 エバが造られる

[創世記 2:21-22] そして神である主は、人に深い眠りを下された。それで彼は眠った。そして主は彼のあばら骨の一つを取り、そのところを肉でふさがれた。

9. WKG-Studienpapier, 2003年9月

> そして神である主は、人から取ったあばら骨から一人の女を築き上げ、彼女を人のところに連れて来られた。

この物語は、神秘的で、私たちにはほとんど想像できない出来事を報告しています。ここでわずかな言葉で描かれていることを、正確に見ることができたのは天使たちだけでした。この聖なる観察者たちは驚嘆しました。私たちが驚嘆したであろうように。彼のわきから、エバが生まれます。まるで彼女がアダムから生まれたかのように。彼女は土から造られるのではありません。必要なのは第二のアダムではなく、アダムに完全に対応する一人の人間です。もしエバが先に造られていたなら、彼女もまた助け手を必要としたでしょう。男性も女性も、創造において一人でいるようには考えられていないのです。

このテキストにも、あまり多くを読み込むことはできません。遺伝子や骨髄や染色体について考えても、あまり意味はありません。それは深い、身体的かつ霊的な出来事であり、神の目から見れば、アダムに対応する者、アダムの助けとなる者を生み出すための唯一の道だったのです。

古代のテキストを理解するには、語を理解し翻訳するだけでは必ずしも十分ではありません。そのことを、次の説明が例として示しています。

「アダムが深い眠りに落とされ、エバが『造られる』と読むと、私たちは自動的に、アダムが手術のために手術室に運ばれるのだと考えます。しかし、古代のオリエントの人ならそうは考えなかったでしょう。『深い眠り』を表すヘブル語は、旧約聖書全体で、幻の体験を表すために使われています。イスラエル人の読者ならそのように受け取ったでしょう。ですから私は、アダムにとってのこの深い眠りは幻のようなものであって、外科手術ではなかったと考えます。言い換えれば、彼は何かを見て、それからエバをますます多く見ていくのです。」[10]

2.1.9 あばら骨から

正直に言うと、この描写は私には異質に思えます。まさに神話的です。前に述べたように、当時の思考の世界にとっては、私たちにとってよりも分かりやすいものでした。この出来事を、自然科学、医学、生物学、解剖学の眼鏡で見ても、あまり意味はありません。しかしそれはきわめて奥深く、根本的なので、そこからさらに多くのことが明らかにされるはずです。

10. John Walton, Interview by Kevin P. Emmert/ March 19, 2015

ですから、二人は同じ実体からできています。本質において近い者です。それぞれが別々の個別の創造物なのではなく、同じ一つの創造の別々の表現なのです。

翻訳者たちがなぜここに「あばら骨」という語を当てたのかは、不思議です。旧約聖書のどこにも、この語がそのように訳されている箇所はありません。ここでもそうする理由はありません。[11] この語はたいてい、建築の部材として訳されます。板、側面の構造、羽目板、扉の片方、そしてわきです。いつも建築のことが問題になっています。これらの語に共通しているのは「わき（側面）」です。

エバはわき（zela）から築き上げられます。アダムはいわば粘土からこねて造られ、今エバはわき（あるいは側面の部材）から築き上げられます。そこで問題になっているのは、比喩的な問いであって、解剖学的な問いではありません。

男性には24本のあばら骨があり、一本くらいなくても困りません。しかし、わきは二つしかありません（ソロモンの神殿の扉の二枚の扉板を参照してください。同じ語です。列王記第一6:34）。からだの左半分と右半分です。ここでは、1章27節の「男性と女性」という対の語が続いています。女性は一本の骨からできているのではなく、男性の半分からできているのです。「彼女が男のわきから取られたのは、二人の人間が並んで人生を歩み、それぞれが相手の中に自分の『よりよい半身』を見いだすためです。」[12]

ピンハス・ラピデ（Pinchas Lapide）はこれについてこう書いています。「ここで使われているヘブル語は、まれにしかあばら骨を意味せず、普通は脇腹、あるいはわきと訳されます。……ですから、この『あばら骨』という誤訳が、キリスト教世界における女性の軽視へと必然的に至らざるをえなかったのも、不思議ではありません。」[13]

語を変えると、この節は次のようになります。

> そして神である主は、アダムのわきに手を伸ばし（あるいは、アダムのからだの半分を取り）、そのところを再び満たされた。それから、その側面の部材を取り、そこから一人の女を組み立てられた。

彼らは、互いを理解し、互いに引き寄せられる二人の人間となります。一つの肉となるのです。まるで切り離されたことが元に戻されるかのように。これが結婚の奥

11. Bielefeldt, 43, Die Sache mit der Rippe, Die himmlische Idee von den Geschlechtern, Asslar, 2007
12. Bielefeldt, 45
13. Lapide, 161, Lapide, Pinchas, Ist die Bibel richtig übersetzt? Gütersloh, 2004

義、すなわち男性と女性の、誠実と愛の契約の奥義です。

女性が男性の半分から築き上げられることは、もしかすると、生殖の実りの中で現実となることを暗示しているのかもしれません。生殖細胞の分裂です。細胞は半分に分かれ、そのそれぞれが完全な細胞となります。女性は男性なしにはなく、男性は女性なしにはありません。

この語をどう訳すかは重要でしょうか。確かに重要です。あばら骨は、女性たちの心に、自分を付属物のように感じさせる何かを引き起こします。もし私たち男性が「あばら骨」から築き上げられたのだとしたら、私たちはどう感じるでしょうか。

2.1.10 「男から取られた女」（Männin）

> そして人は言った。これこそ今や、私の骨からの骨、私の肉からの肉。これを「男から取られた女」（Männin、ischah）と呼ぼう。男（Mann、isch）からこれは取られたのだから。

アダムは歓声を上げ、心を躍らせます。私たちは詩的な言葉を耳にします。なんと聖なる瞬間でしょう。彼の前に、世界で最も美しい女性が立っています。裸で、恥じることもなく。贈り物のように。彼はすぐに、彼女が動物の世界から来たのではないことを見て取ります。動物たちのことは、彼は徹底的に調べてきたのです。これはまったく別のものです。彼女こそ、彼に欠けていた者です。彼と等しい者。同じ種類の者。彼のようでありながら、一人の「彼女」。「男から取られた女」（Männin）です。アダムは言います。ついに私のような者が！

アダムは神の働きかけに気づいていたのでしょうか。彼女が自分から出てきたことまで知っているのですから。彼女は彼にとって見知らぬ者ではありません。二人はすぐに近しくなります。園にはこの二人しかいません。そして動物たちと。

> それゆえ、男はその父と母を離れ、その妻に結びつく。そして二人は一つの肉となる。
>
> そして二人とも、人とその妻は裸であったが、恥ずかしいと思わなかった。

「男から取られた女」であるエバは、これから先、男性にとってあまりにも魅力的になるので、男性は彼女のそばにいるために、すべてを離れることになるでしょう。これによって、もう一度、女性の尊厳が特別に語られています。求められるのは彼女のほうなのです。逆の方向では描かれていません。

一つの肉となることは、これ以上の一致と平等はありえないことを示しています。

これらの言葉は、歴史的にも見なければなりません。男性は、新しい家族を築くために、両親なしで生きることができる自立性を持たなければなりません。

ここでは女性が歴史的に、夫とは違って、自分の実家と十分に結びついたままであり、それによってある種の保護を受けるものとして見られています。彼女は男性のようには実家を離れません。実家の安全の中で、あるいはその近くで、大家族という場の中で、彼女は、暴力をふるうかもしれない夫や、人を欺く夫から守られるのです。女性は、両親の近くに、あるいは両親の家に住むことによって助けを受けます。

それでもなお、二人は新しい、大部分において独立した自立的な一体を形づくります。一つの肉であることは、生み増えよという使命の成就を表しています。つまり、一つであることの表現であり頂点でもある性の行為、そして子をもうけること、すなわち増え広がることです。この一体性は、結婚の生涯全体をも描いています。ここでは直接には語られていない結婚の契約は、一人の女性と一人の男性が生涯にわたって結び合っていることを描いています。イエスが言われるとおり、初めからそうだったのであり、そうあり続けるべきなのです。

複数の妻がいれば、初めのうちは子が増えるのも、したがって人口が増えるのも、もっと速く進んだことでしょう。人間と社会は一夫多妻を導入しました。しかしそれは決して神の考えではありませんでした。たとえ神が、ご自分の民のもとで（たとえば族長たちやダビデなど）それを忍ばなければならなかったとしてもです。

2.1.11 互いのために与えられた者

二人の人間が向かい合って立っています。アダムはエバを神の賜物として受け取ります。二つの異なる種類の人間が、初めて出会います。互いに、また互いのために、二人の異なり、しかも互いに合うからだが贈られます。異なる性と、それに伴う性のあり方の中に、神はご自分の愛のご計画を示しておられます。こうして性は、互いのための神の賜物となります。それは互いを豊かにし、満たすことに役立ち、性の違いへの感謝へと導くはずのものです。

アダムが一人だったとき、彼はこの感謝を互いの関係の中で表すことができませんでした。一人であることの中では、彼は自分自身を人格として完全に意識することさえできません。ほかの「私」がまだいなかったからです。人格であるためには、

関係と向かい合う相手が必要です。男性にとって、女性は、自分自身の人間性と、互いを豊かにすることの意識に気づくための助けです。エバが賜物であるだけでなく、彼女は、アダムが自分自身を彼女のための賜物として認めることを可能にするのです。ともに生きるだけでなく、互いのために生きること、それが神が計画された交わりのあり方です。こうして二人は、その男性らしさと女性らしさを通して、互いのための賜物として、神の愛を映し出すのです。

アダムの喜び、そして、エバの中に単なる従属的な助け手ではなく神の賜物を見る彼の感謝は、彼女の人格の尊厳を表しています――エバのほうでも、アダムの中にその尊厳を認めていました。エバは自由で、同じ権利を持つ人格です。今日でもそれを悟ることは、彼女を神の賜物、神の贈り物として受け入れることを意味します。女性らしさは神の賜物です。男性が（自分のいのちと存在のほかに）受け取った最初の賜物です。

服従を要求する権威は、賜物を否定します。賜物を受け取るとき、人はある意味でその賜物に対する権威を得ます。エバを受け取ったとき、アダムは何をする権限を与えられたのでしょうか。愛をもって自分のからだを彼女のために用いることです――性を超えて。彼は、彼女を受け取る権限を与えられています――姉妹のように。それは、指示を与えたり、彼女を支配したりするための権威ではありません。それは堕落の悪しき結果になってはじめて生じることです。

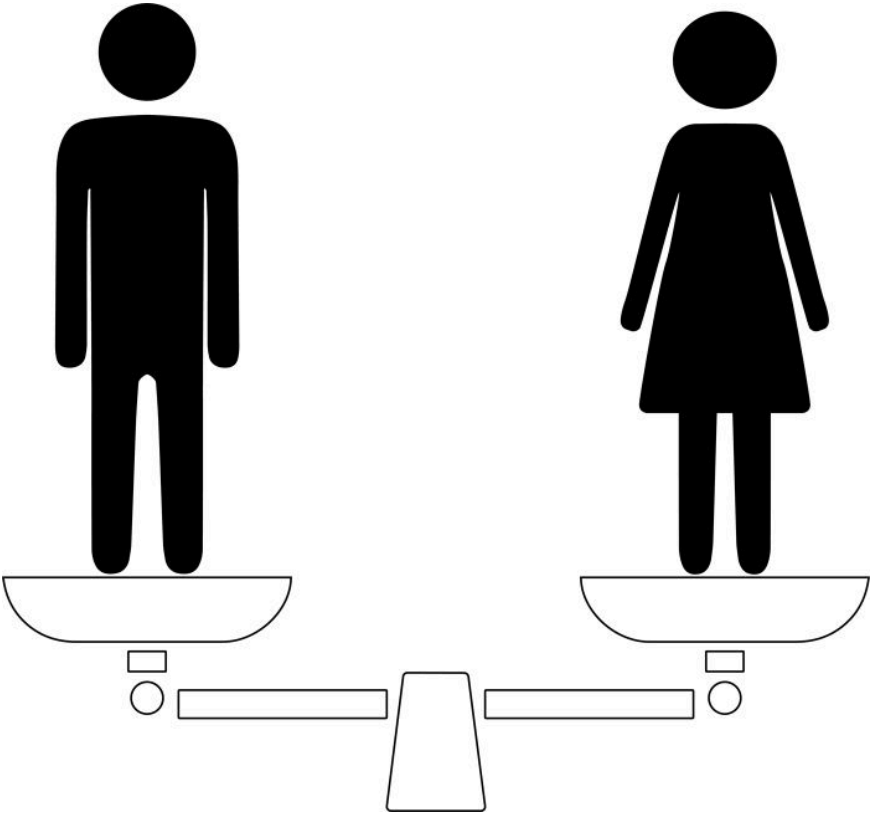
エバを見たときのアダムの最初の言葉は、雅歌4章9節の花婿の言葉にこだましています。「あなたは私の心を奪った、私の妹、私の花嫁よ。あなたはそのまなざしの一つで、私の心を奪った。」

最初に造られた男性は、最初に愛するように、最初に自分をささげるように、最初に仕えるように、最初に彼女に力を与えるように権限を与えられているのであって、彼女の上に力をふるうようにではありません。

互いに対するこの感謝の姿勢は、キリストがご自分の集会（教会）に対して持っておられる愛の中に、その完全な表現を見いだします。それこそ、私たちの教会、教会共同体、集会において、すべての人に――信仰を持たない訪問者にも、私たちの周りの人々にも――目に見え、肌で感じられるべきものなのです。

「聖書の幕開けは、人類の原初の夢を約束している。両性の平等と、こだわりのない性である。」

アルノルト・アンゲネント（Arnold Angenendt）



あなたの義はとこしえに義であり、あなたの教えは真実です。

詩篇119篇142節（チューリッヒ聖書〔Zürcher Bibel、ドイツ語聖書翻訳〕）

2.2 男と女の堕落

最初の三つの章の原初史をたどるにあたって、私は予型論的な解釈や模範としての役割を掘り下げることを、意図的に控えます。問題は、男性と女性の関係の中で、その文字どおりの存在において現れる人間であることです。この箇所では、解釈のためにパウロのテキストを持ち出すことは、まだ意味がありません。私が「この箇所では」と言うのは、後では必ずそうしなければならなくなるからです。聖書を読むときの大切な規則があります。文脈、文脈、文脈です。まず何よりも、テキスト

をその直接のつながりと周囲の状況と歴史的な事情の中で、できるかぎり解き明かすことです。そのためには、今日、多くの手段や資料があります。そうしてはじめて、さらなる解釈の段階が良い道を進むことになります。

創世記3章は、エバの、そしてアダムの悲劇的な欺きと不従順を描いています。それは幾層もの破れへと至りました。恥、罪責、敵意、痛みに満ちた労苦、死、そしてエデンの園からの追放です。神は関わったすべての者、すなわち蛇、男、そして女に語りかけ、彼らの行為の結果について警告されます。そして、彼らに降りかかるすべてのことに、ある程度まで備えさせられます。議論の中心に置かれるようになった一つの節があります。創世記3章16節です。「あなたは夫を慕い求め、彼はあなたを支配する」。しかし、これまでと同じように、まず聖書の記事を手短にたどってみましょう[創世記 3:1-7、ドイツ語エルバーフェルト訳聖書から翻訳]。

> さて蛇は、神である主が造られた野のすべての獣のうちで、最も狡猾であった。蛇は女に言った。神は本当に言われたのか。あなたがたは園のすべての木から食べてはならない、と。
>
> 女は蛇に言った。園の木々の実を、私たちは食べています。でも、園の中央にある木の実については、神は言われました。それを食べてはならない、それに触れてもならない、あなたがたが死ぬといけないから、と。
>
> すると蛇は女に言った。あなたがたは決して死なない。神は、あなたがたがそれを食べるその日に、あなたがたの目が開かれ、あなたがたが神のようになって善と悪を知るようになることを知っているのだ。そこで女は、その木が食べるのに良く、目に慕わしく、賢くしてくれるというその木が望ましいのを見た。そして彼女はその実を取って食べ、一緒にいた夫にも与えたので、彼も食べた。
>
> すると二人の目が開かれ、彼らは自分たちが裸であることを知った。そして彼らはいちじくの葉をつづり合わせて、自分たちのために腰の覆いを作った。

神は、エバがいる前に、アダムにこう言っておられました[創世記 2:16-17]。

> そして神である主は人に命じて言われた。園のどの木からでも、あなたは思いのままに食べてよい。しかし、善悪の知識の木からは、食べてはならない。それを食べるその日に、あなたは必ず死ぬのだから。

ものを言う蛇は、その欺きの策略において、意図的にエバに向かいます。彼女のほうが弱かったのでしょうか。それとも、二人のうちで最も惑わしやすかったのでしょうか。この状況をそう解釈することもできるでしょう。彼女が女性だったからではありません。そうではなく、彼女がその命令をもしかすると又聞きでしか知らなかったからです。彼女が知っていたことは、アダムから聞くしかなかったのです。一つの小さな細部が、アダムが神から言われた以上のことを彼女に言っていたことを示しているのかもしれません。あるいは、アダムから言われたことに、彼女が何かを付け加えたのかもしれません。もしかすると用心のために。触れてはならない、とエバは言いました。そして、中央に立っていたのは、はるかに重要ないのちの木であって、善悪の知識の木ではなかったはずです（2:9）。

ある人々は、エバの言葉の中に、すでに弱さや不従順の最初のしるしを見て取ります。しかし、モーセが書き記したエバの言葉は、私たちが罪を汚れとして比喩的に理解できることを伝えているのかもしれません。モーセの律法によれば、汚れたものに触れた者は汚れた者となり、きよめを必要としました。モーセの第三の書（レビ記）は、このことを160回以上も描いています。この観点から見ると、エバの言葉は、罪に陥り、汚れた者となることが何を意味するかを明らかにしています。

惑わす者、すなわち蛇の欺きは成功します。蛇は、神の善良さと真実さへの疑いをまき散らします。エバはそれを信じ、禁じられた実が慕わしい実となります。エバが手を伸ばしたのは空腹からではなく、神が彼らに与えずにおこうとしているように見えた洞察と知識を得るためでした。致命的な決断です。大きな影響をもたらす小さな一歩です。

エバとアダムは一緒にその場にいました。アダムは彼女のそばにいたのです。アダムも蛇が話すのを聞いていたのでしょうか。彼は自分の指導的役割を放棄したのでしょうか。それはすべて推測です。エバは、自分がすでに味わった実を彼に与えます。アダムは禁じられた実を取ります。アダムは、神から直接受けていた神の命令に、意識的に背くのです。

この出来事からは何の良いことも引き出せませんが、この状況もまた、二人がどれほど等しく強く、同時にどれほど等しく誤った行動をとっているかを示しています。エバは惑わされます。彼女はその木が禁じられていることを知っていました。アダムは、その木が禁じられていることを知っていたにもかかわらず、言葉もなく惑わされるにまかせます。

たちまち、二人は自分たちが裸であることに気づきます。新しい知識です。蛇が約束したとおりに。

> [創世記 3:8-19、ドイツ語エルバーフェルト訳聖書から翻訳] そして彼らは、日の涼しい頃に園を歩まれる神である主の声を聞いた。そして人とその妻は、神である主の御顔を避けて、園の木々の間に身を隠した。そして神である主は人を呼び、彼に言われた。あなたはどこにいるのか。

楽園の園で、毎日、日の涼しい頃、夕方早くに、目に見える姿をとられた神ご自身にお会いするとは、なんと想像を超えた特権でしょう。聖所の中でのように。しかし今は、すべてが違っています。恐れと目覚めた良心が、彼らを神から逃げるように駆り立てます。良い関係が乱されたことを、彼らは知っています。神にとってとても大切だったことを、彼らは軽んじたのです。

> そして彼（アダム）は言った。私は園であなたの声を聞きました。それで私は恐れました。私は裸だからです。それで私は身を隠しました。すると主は言われた。あなたが裸であることを、だれがあなたに告げたのか。食べてはならないとわたしが命じておいたあの木から、あなたは食べたのか。すると人は言った。あなたが私のそばに与えてくださったあの女が、あの木から私にくれたので、私は食べたのです。

裸であるという意識は、違反と手を携えてやって来ます。一方が他方に続きます。裸であることが、恥ずべき姿、恥辱となります。罪責のしるしとなるのです。無垢は過去のものとなりました。

神は違反を具体的に指摘されます。アダムは自分の罪責を自覚しています。しかし彼は、自分の罪責を転嫁できる別の罪人、身代わりのいけにえを探します。なんとも情けないことに、彼は自分の妻に責任を負わせるのです。なんと臆病なことでしょう！　自分の罪責を認める代わりに、彼は妻を訴えます。そしていわば神にも（共に）責任を負わせます。神が彼にその女を与えられたのだからと。

実際、この物語の中で神は、事柄をアダムだけとの間ですっかり片づけてしまうのではなく、女にも向き合われます。一人ひとりが個別に、また同等の地位で語りかけられ、顧みられます。神がすべての人間を義をもって裁き、どんな細部も見落とされないのと同じように。

2.2.1 エバの答え

エバは惑わされていました。偽り者であり人殺しである者にだまされたのです。神が彼女に語りかけられたとき、彼女は最も大きな罪のある者、すなわち蛇を指し示しました。

> そして神である主は女に言われた。あなたはなんということをしたのか。すると女は言った。蛇が私を欺いたのです。それで私は食べました。

エバは蛇から距離を置き、蛇を訴えます。エバが雪崩を引き起こすことになったその大きな違反は、惑わしによって起こりました。そして彼女は、自分が食べたことを認めます。彼女の態度はアダムの態度よりもすぐれています。彼女の違反の程度は、彼の違反とは比べものになりません。

「創世記3章13節にあるとおり、神は女に尋ねられました。『あなたは何をしたのか。』彼女は言い逃れをせずに神に答えました。彼女は非難をせずに神に答えました。彼女は男とはまったく違う仕方で語りました。彼女はもはや欺かれてはいませんでした。もしかすると、神が男に問いただされるのを聞いたとき、彼女にはすべてがはっきりしたのかもしれません。いずれにせよ、彼女は今や何が起こったのかを見て取りました。その新たな知恵によって、彼女は悪を見抜き、こう言いました。『蛇が私を惑わしたのです。それで私は食べました。』この答えによって、彼女は悪い蛇こそが自分を欺いた源であることを暴きました。そして、自分が欺かれている間に行った悪を告白しました。『それで私は食べました。』彼女は、男がちょうど今したよりも多くの悪を行ったでしょうか。いいえ。彼女は自分と一緒にいた男を責めたでしょうか。いいえ。彼女は神を責めたでしょうか。いいえ。それなのに、聖書が彼女について私たちに語っていることは、彼女がしばしば描かれてきた姿とは違います。そして彼女についてのこの誤った描き方は、もう長い間存在してきたのです。」[14]

2.2.2 エバの苦労、妊娠、そして服させられること

エバに対する神の罰のことばは、エルバーフェルト訳〔Elberfelder、ドイツ語聖書翻訳〕では次のようになっています。

14. Fleming, Bruce; Fleming, Joy; Hagemeyer, Joanne. The Book of Eden, Genesis 2-3: God Didn't Curse Eve (or Adam) or Limit Woman in Any Way. Kindle版、56頁

> 女に向かって彼は言われた。わたしはあなたの妊娠の苦労を大いに増す。あなたは苦しみのうちに子を産まなければならない。そして、あなたの欲求はあなたの夫に向かい、しかし彼はあなたを支配する。

チューリッヒ聖書〔Zürcher Bibel、ドイツ語聖書翻訳〕（および統一訳〔Einheitsübersetzung、ドイツ語聖書翻訳〕）は、苦労と妊娠とを分けています。そしてそれが正しいのです。二つのことが問題になっているからです。

> 女に向かって彼は言われた。わたしはあなたに多くの苦しみを与え、そしてあなたの妊娠を数多くする。あなたは痛みのうちに子を産む。あなたは夫を慕い求め、そして彼はあなたを支配するであろう。

先に引用したブルース・フレミング（Bruce Fleming）は、これらのことばを次のように訳しています。

> わたしは必ず増し加える。（1）畑でのあなたの骨の折れる労働と、（2）あなたの受胎とを。

それから神は、女に、彼女に、また彼らに何が起こったのかを、死ぬべき者となり堕落した今になって、教えられます。

> あなたは骨折りのうちに子を産むであろう
>
> あなたの〔愛する〕欲求はあなたの夫に〔向かう〕
>
> しかし彼は〔自分自身に対して反逆的に支配し、そして〕あなたを支配するであろう。

16節の前半におけるこの区別は重要でしょうか。それによって、エバへのことばはまったく違う響きを帯び、さらに重要なことに、違う内容を帯びるのです。まず第一に、神のこの語りかけの中で、エバにはいかなるのろいも下っていないことを確認するのが重要です。まったく逆なのです！まず彼女に予告されるのは、農業に関して多くの苦労と骨折りがあるだろうということです。そこには家畜の世話や、そのほかのいのちを支える手仕事も含まれます。苦労という語は、このような形では三回しか出てこず、いつも畑での骨の折れる労働を意味しています。アダムもそのように聞きます。大地はあなたのゆえにのろわれる。「あなたは一生の間、苦労してそこから食べることになる。」そして後に、レメクも息子ノアに向けてそう言い

ます（創世記5章29節）。「この子は、主がのろわれた大地のゆえに、私たちの働きと私たちの手の骨折りについて、私たちを慰めてくれるだろう。」

アダムは、禁令を十分に知りながら、ただエバから実を受け取って食べました。しかし神ののろいはアダムには当たりません。それは彼を通り過ぎて、大地に当たります。これがエデンにおける恵みです。その結果は、食物を得ることにおける苦労です。生きることは、エデンとは違って、生き延びるための闘いとなります。そしてエバも同じ大地に生き、二人は夫婦としてともに人生に立ち向かっていくのですから、彼女にもアダムと同じ苦労が及びます。その理由はエバではなく、アダムにあります。彼の行為のゆえに大地がのろわれたのですから。

ところが今、最初の文の後半で、良い知らせ、福音がやって来ます。妊娠（複数形）が増し加えられるのです！

違反にもかかわらず、エバは創造の使命を果たすことを許されています。生めよ、増えよ、地を満たせ！　違反にもかかわらず、物事は先へと続いていきます。多くの子孫が生まれるでしょう。さらに重要なことに、その子孫の一人が蛇の頭を踏み砕くことになるのです。蛇は先に、神が自分に向けて語られた次のことばを聞きました。

> わたしは敵意を、おまえと女の間に、おまえの子孫と女の子孫の間に置く。彼はおまえの頭を打ち砕き、おまえは彼のかかとを打ち砕く。

このことばは、原福音、あるいはプロトエヴァンゲリウムと呼ばれています。しかしそれは悪魔に向けられたものであり、悪魔にとっては決して良い知らせではありません。けれどもそれから蛇は、神が、子孫が、女の子孫（種）が生まれることを確かにし、保証されるのを聞かなければなりません。それはエバにとって良い知らせです。アダムにとっても、そして園の中で一緒に耳を傾けることを許されている私たちにとっても、そうなのです。こうして、エバへのことばは、肯定的な、希望に満ちた意味を帯びるのです。

子を産むことはエバにとって骨の折れることになるでしょう。アダムにとって農耕がそうであるように。堕落の後、生きることは別のものとなりました。エバがこのことばを聞いたとき、彼女はまだ一人の子も産んでいませんでした。蛇とアダムは、のろいと罰のことばを聞きます。良い以前があり、否定的なその後があるのです。エバは違います！神はエデンで女に語られたとき、女のからだを変えられたの

ではありません。ところが、ある翻訳は、まるで神が女を何らかの形で変え、出産をひどいものに変えてしまったかのように響きます。

子を産むことは、今日の世界の多くの地域にあるような医療の手段が手に入らなければ、危険を伴う出来事です。しかし神は、女性たちの側に立っておられます。神は彼女たちの助け主であり、救い主です（テモテ第一2:15）。

イエスはたとえを用いて、弟子たちにこう言われました。この方こそ、園でエバと語られたのと同じ方だと考えてよいでしょう。

> [ヨハネの福音書 16:21] 女は子を産むとき、つらい思いをします（あるいは「苦しみ」）。自分の時が来たからです。しかし子を産んでしまうと、一人の人が世に生まれた喜びのために、その苦しみ（あるいは「痛み」）をもう思い出しません。

「16-19節の書き手は、人間の生の厳しさ、とりわけ生の創造的な側面、すなわち子孫を残すことと食物を生み出すことについて、決着をつけています。かつての屈託のなさに、今や苦労が混じります。良いもの（子孫、食物）が、悪いもの（苦労）とともにやって来るのです。」

> そして神である主は蛇に言われた。おまえはこのことをしたので、すべての家畜の前で、また野のすべての獣の前で、のろわれる！　おまえは腹で這い、一生の間ちりを食べることになる。わたしは敵意を、おまえと女の間に、おまえの子孫と女の子孫の間に置く。彼はおまえの頭を打ち砕き、おまえは彼のかかとを打ち砕く。

蛇に向かって、神はこの違反が関わった三者にとってどのような結果をもたらすかを告げられます。蛇は地に、ちりの中へと低くされます。蛇にとって、女への攻撃は壊滅的な結果をもたらします。蛇は、自分のいのちを失うことになる過ちを犯したのです。

まず、女と蛇の間には、いつまでも続く敵意があることになります。興味深いことに、アダムと蛇の間ではありません。さらに注目すべきことに、蛇の子孫と女の子孫の間なのです。ここでは、女が子孫、すなわち種を持つことになります。その子孫の一人が、蛇の頭を踏み砕いて蛇を殺すことになります。しかし、かかとを痛く噛まれるという代価を払って。

このわずかなことばは、大きな重みと広がりを持っています。蛇は単なる爬虫類以上のものです。それは人間の敵であり、神の敵である、サタン、悪魔です。

驚くべきことだと私が思うのは、エバが、そして彼女とともに女性たちが、この宇宙的な争いの中でどのような役割を担うことになるかということです。世界の歴史と救いの歴史を振り返るとき、この争いはまさにそのようなものであることが明らかになります。悪魔は、「救いをもたらす」役割を担う女性を攻撃するでしょう。悪魔は、女性を辱め、その働きを弱め、その言葉を聞かれないものにするために、あらゆることをするでしょう。この宇宙的な争いの中で、女性はなんと重要な役割を果たすことでしょう！　女性がいなければ、一人の子孫による神の勝利はありえないのです。

彼女は惑わされて罪を犯したばかりであるにもかかわらず、創造者によって救いのために立てられます。アダムではありません。彼女は、大きな約束という恵みを受けるのです。

この堕落の章においてさえ、女性は従属的な役割として描かれてはいません。ほとんど逆です。まるで、将来、堕落が覆されるために、彼女のほうが重要であるかのようです。

さて、違反の第二の結果として、彼女と男との関係が描かれます。どの読者も、これが二人の関係の深刻な乱れを描いていることを感じ取ります。これは良いことではありません。祝福ではなく、のろいのようなものです。それは世界の歴史の中で、そのとおり現実となってきました。

この罪の責任を問われるアダムもまた、自分の行為の苦い結果を聞かなければなりません。

> そしてアダムに言われた。あなたは妻の声に聞き従い、食べてはならないとわたしが命じて語ったあの木から食べたので――大地はあなたのゆえにのろわれる。あなたは一生の間、苦労してそこから食べることになる。大地はあなたのために、いばらとあざみを生えさせ、あなたは野の草を食べることになる。あなたは顔に汗を流してパンを食べ、ついには土に帰る。あなたはそこから取られたのだから。あなたはちりだから、ちりに帰るのだ！

神はアダムを責任から解放されません。神は彼に命令を与え、彼はそれに背いたのです。それが妻を通して間接的に起こったかどうかは、重要ではありません。彼は命令を受け、そしてそれに背いたのです。

その結果は暗いものです。苦労と骨折り、一言で言えば、生き延びるための、存在をかけた闘いが、アダムとすべてのアダムの息子たちの人生の運命を形づくることになります。エバが「原福音」、すなわちプロトエヴァンゲリウムを聞き、それに決定的に関わるのに対して、アダムに最後に残されているのは、自分が取られたものに再び戻ることだけです。悲劇的な判決です。希望のない見通しです。しかし、女の勝利、すなわち女の子孫の勝利は、いつの日か男をもちりの中からいのちへと引き上げるでしょう。

2.2.3 あなたは彼を恋い慕うが、彼はあなたを支配する

この罰のことばは、聖書の中で最も悲劇的なものの一つであり、（残念ながら）今日に至るまでさまざまに解釈されています。それは私たちの考察の核心に属しています。グーテ・ナッハリヒト訳〔Gute Nachricht、ドイツ語聖書翻訳〕はここをこう訳しています。あなたは夫に引き寄せられるが、彼はあなたを支配する。エルバーフェルト訳で欲求（verlangen）と訳されている語は、自分の夫への断固とした、揺るぎない献身を意味しています。

支配するという語は、それ自体としては中立的です。それが良い支配なのか悪い支配なのかは、まだはっきりしないように見えます。しかし、二人の関係とつながりについてのこの描写が、創世記1章と2章が示しているものではないことは感じ取れます。ここには破れがあり、不均衡があります。不平等と不均衡が優勢になっていく、緊張に満ちた場です。一方で、男性に向かって造られた女性は、失望を味わいます。彼女は、自分の弱さともろさの中で男性に身を委ねます。弱さというのは、彼女が身体的に弱い者だからです。しかしまた、彼女の社会的、文化的な条件が、より弱く、不利なものとなったからでもあります（ペテロ第一3:7）。

しかし男性のもとで、彼女は自分の欲求にふさわしい応答を見いだしません。彼女に向けられるのは、共感でも、互いに引き寄せられることでもありません（2章24節を参照）。「一つの肉」であることでもありません。性と生殖の行為においてはそうであっても、共同生活のあらゆる領域においてではありません。心の一致が危うくなっています。支配が男性の答えです。対等な立場でともにではなく、服させられること、抑圧、差別が、両性の関係につきまとうことになります。それは祝福ではありません。それは罪の結果です。罪の継続、ここでは男性の罪の継続です。妻、あるいは女性一般を支配することは、二人の関係の一部ではありませんでした

し、決してその一部であるべきではありませんでした。聖書はどこにおいても、男性に女性を支配せよという指示を与えていません！

それは、神が計画されたことでも、神が二人を造られたあり方でもありません。エバの創造と二人の最初の出会いは、あれほど希望に満ちていたのです。しかし「エデンの東」では別の風が吹いています。そこでは男性の性は、騎士のようにふるまうことはまれで、むしろ専制君主やマッチョとして現れることのほうが多いのです。[15] そのような男性にさえ、なお引き寄せられる女性は少なくありません。

別の解釈では、このことばを、女性が男性を支配しようと努めるかのように理解します。[16] しかし男性は、もちろん例外は別として、それに抵抗して自分を押し通し、自分の力と優位を守るのだというのです。私はこの読み方を何度も聞いてきました。まるで女性が生まれつき王冠に手を伸ばすかのようです。小指を差し出せば、手全体を取られる、というわけです。そのような女性もいるでしょう。夫を操り、支配しようとする女性です。疑いの余地はありません。しかし、女性という性全体にこのような一般的な疑いをかけたり、連帯責任を負わせたりすることは、むしろ男性という性の堕落した考え方と姿勢から出てきたものです。この男性の性のほうは、疑いをかけられるだけでなく、神のことばによれば、権威を意識しているという判決の下にあるのです。ここでも付け加えておかなければなりません。例外は別として、と。どちらのふるまいも、強いものから弱いものまで、ありとあらゆる形で存在します。そしてそれは、肯定的で愛に満ちたパートナー関係があることを、決して排除しません！　もちろん、キリスト者の結婚の外でもです。

女性の欲求は、支配しようとする努力ではありません。子どもを得るための性的な欲求でもありません。それがそこに含まれていることはありえます。より深いところでは、それは男性へと引き寄せられること、保護を求めること、ともにあることを求めることです。創造において備えられているとおりに。そしてそれが、より弱く、たいていは何も持たない者という彼女の役割の中で、彼女の運命となります。「根本にある考えは、女性を依存的にするその欲求が、母性本能を満たしたいという彼女の必要に帰せられるということです。……社会学者たちが『より小さな、あるいは最小の関心の原理』と呼んできたものを思い起こしましょう。二人のパートナーが関わる関係においては、相手にいっそう依存している者のほうがより傷つきやすく、関係への結びつきの関心がより小さい者のほうが支配的な立場にあるので

15. この神の罰のことばが、動物の世界の一部にも及んでいるのかどうか、と問いたくなります。
16. 4章7節と同じ文の構造を参照。また雅歌7章10節も参照。この語は、ほかにはこの二箇所にしか出てきません。

す。」[17]

フリードマン（Freedman）の相互依存的な[18]創世記1-2章の見方をとるなら、創世記3章16節の読み方はまったく違ったものになるでしょう。「まったく別の次元の悲劇です。互いに支え合い、力となり合い、平等で分かち合い、等しい者として認め合い、相手を最も近い伴侶として認めるという本来の関係が、恐ろしく秩序を失い、感情の面で不平等な、力に基づいた、愛のない関係になってしまったのです。女は夫を慕い求めますが、彼は彼女を支配するでしょう。それは恐るべき崩壊であり、激変です。」

アンドリュー・マッキントッシュ（Andrew Macintosh）は、エバの罪の結果が「創造における両性の根本的な補完性（平等と補い合うこと）を背景として定義されている」ことを指摘しています。「まさに女性の人生における喜びに満ちた充足が見いだされるところに、今や痛みと、服させられることの重荷が入り込むのです。」

マシュー・リンチ（Matthew Lynch）はこの節について、こう注解しています。「彼女が子を産むことが、今や痛みによって汚された『善』であるように（3:16a）、彼女の『献身』もまた、今や支配によって汚された善なのです（3:16b）。」[19]

この節は、女性の、そしてまた男性の混乱、乱れ、悲劇のしるしです。女性はその破れともろさの中で、自分の必要を満たすために、神よりもむしろ男性に向かいます。そして親切と思いやりの代わりに、彼女を支配しようとする男性の壊れた、秩序を失った欲求に出会うのです。歴史の中で、恐ろしいほどの規則正しさで繰り返されてきた悲劇です。

堕落の責任は、アダムが負わなければなりません。エバは被害者でした（もちろん、それでも責任はあります）。アダムは加害者でした。彼は「手を上げて」、つまり故意に罪を犯しました。目を開いたまま、神の命令を十分に知りながら、彼は実を食べたのです。エバがすべての生きている者の母であるにもかかわらず、エバではなく彼が、堕落した人類のかしらとなります（ローマ5章、コリント第一15章）。

17. Walton, 228, Genesis, The NIV Application Commentary, Zondervan, Grand Rapids, 2001
18. 相互依存的（mutualistisch）とは、平等と一致のうちに、互いに頼り合い、互いに依存し合っていることを意味します。
19. Lynch, Contrary Women Genesis 3:16b on the ESV

のろわれた大地がアダムの人生を決定し、彼を支配し、彼の人生を苦しいものにするでしょう。そのように、彼のほうでも、自分の妻と女性という性全体に対してふるまうことになるのです。

女性は人類の歴史全体を通じて、多くの場合、完全に依存し、服させられた状態に陥ります。社会全体がそのように形づくられます。そこで問題なのは例外ではなく、通例です。大多数の文化において、それは普通のことであり、今日でも多くの場合そうなのです。

二人とも、男性も女性も、今や罪人です。堕落した者です。罪人として、男性は自分の妻を支配し、彼女は罪人として、この関係の中で損をしないように、身を守り、自分の道を見いだすために、自分にできるあらゆる手段を尽くすでしょう。そして夫を操り、たいていは自分に許されていない影響力を、それでも間接的に及ぼそうとするのです。

「この両性の闘いは、その後、あらゆる民族のあらゆる文化のあらゆる次元に現れることになります。それは、引き金となった悪が根本からつかまれるときにのみ、いやされることができるのです。」[20]

2.3 平等に対する異論

私が創造の物語の中に見いだす立場に対しては、同じわずかなテキストの正反対の読み方があります。男性のかしらと優位を信じる人々は、創造の物語を、アダムがエバのかしらであり[21]、彼女が階層において男性の指導の下に立っていることの証拠として読みます。

アダムは名前であると同時に、人類を表す呼び名でもある。

この場合、エバもまた「アダム」、すなわち人間です。神は人類を「女」とは呼ばれませんでした。それは男性の指導の「においがする」というのです。[22] 私はそこに、男性と女性が地に結びついていることの強調を見ます。アダムはアダマ（土）から取られ、その後エバはアダムから取られました。彼女もアダムと同じように、

20. Schmalenbach, 87, Frausein zur Ehre Gottes: ... im Kontext verschiedener Kulturen, 2007
21. ほかの著者たちとともに、私は特にアレクサンダー・ストラウク（Alexander Strauch）が挙げている論拠を取り上げます。Strauch, Alexander, 2001, Die Revolution der Geschlechter, Bielefeld
22. Ortlund, 119

いつの日か土に帰るのです。ここから指導的役割を見て取るのは、それを見つけようとしないかぎり、難しいことです。

神はアダムを中心とされる。

アダムとともに「人類」という計画が始まります。まず、彼が問題になっています。何かが欠けていることが明らかになるまでは。もう一方の人生の半身です。この欠如をはっきりさせる過程（動物の命名）は、同時に、この欠如を満たす女性の価値を示しています。人間は――男性と女性として――ともに創造の中心です。創世記1章26-27節がそれを示しています。

エバではなくアダムが先に造られる。したがって彼は階層の秩序においてエバの上にある。

アダムの創造とエバの創造の間には、いったいどれほどの、あるいはどれほどわずかな時間が経過したのでしょうか。古代においては、今日とは違って、古いもの、年上のものがいつもより重く、より優先されるものであったとしても、この推論はそのような確定には適していません。聖書はどこにも、この順序が男性の指導的役割の根拠であるとは言っていません。それはどこまでも恣意的な推論です。この順序を序列と解釈すべきではありません。パウロが――これについては後で詳しく取り上げますが――テモテへの手紙第一2章で、アダムが先に造られたことを強調するとき、そこで問題になっているのは聖書の補習授業ではなく、階層秩序とは何の関係もない別の問いなのです。

ご存じのように、長子の権利は、時間的な順序というこの原理に従って機能します。しかしそれは、どこにおいても男性と女性の関係に適用されてはいません。

私たちが聖書をどのように読むかによって、それは私たちの誤った見方をも、正しい見方をも強めることがあります。私たちの聖書理解は、神のみこころではなく、私たち自身の考え方や心の姿勢を映し出していることが少なくありません。

この順序を別様に解釈することもできます。最初のものが優先されるのではなく、二番目のものがクライマックス、すなわち人間の創造の文学的な物語における頂点なのだ、と。最初の記事では、人間（男性と女性）が創造の頂点です。第二の記事では、それは男性ではなく女性です。私がこれを例として挙げるのは、その上に自分の主張を築くためではありません。視点がどれほど異なりうるか、そして、ただ一つの視点、あるいは自分の視点しかないと考えるとき、誤った推論がどこまで進んでしまうかを示すためです。

善悪の知識の木についての命令を神から与えられたのは、エバではなくアダムである。これは、彼が生まれながらのかしら／指導者であることを示している。

創造の物語によれば、神がこの命令を与えられたとき、エバはまだそこにいませんでした。もし彼女がすでにそこにいて、神がそれをアダムにだけ言われたのだとしたら、そのときにはじめて、それは正当な考えになるでしょう。

女は男から造られた。したがって彼に依存している。

家父長制的な生活形態においては、この依存が存在します。しかしそれは、聖書によって理想として是認されたことは一度もありません。たとえ旧約聖書のすべての人物がその中で生きており、聖書がそれを描いているとしてもです。今日、女性は男性に依存していません。二人とも、それぞれ自分で、あるいは一人で生き、存在することができます。それは、中立的に見れば、進歩と見ることができます。そうであるのは良いことです。

アダムは女にエバという名を与える。これは彼が彼女に対して権威を持っていることのしるしである。

名づけは権威とは何の関係もありません。むしろ、知ること、見極めること、認識することに関係しています。聖書では、名前がしばしばその人の本質を言い表すからです。ですからアダムは、エバを「すべて生きている者の母」と呼ぶのです。名づけを権威と結びつける人は、これが堕落の前ではなく、堕落の直後に起こったことに気づくべきです。

女は、男の「助け手」となるために、男から造られた。

書き手が「助け」という概念を用いているその仕方から見ると、念頭にあるのは従属する者ではなく、同じだけの強さを持ち、同等の地位にある人格です。

男性たちは、自分たちだけで定めた目標を達成するために、女性の助け手としての役割を喜んで歓迎します。しかし、それはこのテキストの考えではありません。助けは、決して権威や序列の違いを根拠づけるものではありません。私たちの助け主である神に、それをどう当てはめるのでしょうか。それに、男性もまた、自分の愛する妻にとって助けとなりたいと願うのではないでしょうか。それによって階層が生じることもなく。

エバは男のために造られた。その逆ではない。

そのように報告されています。それでも、エバはアダムの所有物にも財産にもなりません。彼女は、アダムのわきから、同じだけの強さを持つ向かい合う相手として造られています。結婚の契約が問題になるとき、男性の女性への欲求は一つの方向、あるいは動きであって、そこから――そうしたいのであれば――女性のほうが強い者だと結論づけることもできるでしょう。彼のほうが彼女に引き寄せられるのです。

エバが先に罪を犯す。これは、女が誘惑と欺きに陥りやすい弱い性であることのしるしである。

たとえこの推論が正しいとしても――私はそうは思いませんが――、女性に惑わされて罪に陥った数えきれない男性たちのことを考えれば、それはいかなる階層も根拠づけません。

誘惑する者は、どうやって彼女が弱い性であることを知ったというのでしょうか。アダムは、罪を犯すために、誘惑される必要さえなかったのです！

アダムは指導を担い、かしらであるという義務を果たさなかった。それゆえに悲劇が起こったのである。

この出来事とこの原罪を防ぐために、階層は必要ありません。このような状況は、毎日何千回となく起こっています。罪は、はっきりとした「いいえ」によって防がれます。確かに、神の命令を受けていたアダムは、エバに反論すべきでした。この出来事は、階層については何も根拠づけません。二人にとって、それは責任があり、決定する権利を持つ人間の自由な決断だったのです。

もしアダムがかしらで、指導的役割を持ち、それに失敗したのだとしたら、なぜエバがそもそも責任を問われるのでしょうか。それなら、アダム一人が責任を負わされなければならなかったはずです。しかし、まさに二人が等しく責任を負っているからこそ、二人ともが等しく弁明しなければならないのです。アダムの罪責は、エバの罪責よりはるかに大きいのです。彼女は悪巧みによって惑わされ、すぐにそれを悟り、当然のこととして主な罪責を蛇に帰しました。アダムはためらうことなく、「手を上げて」罪を犯し、そのうえエバに責任を負わせ、ついには、彼に女を与えられた神にさえ責任を負わせたのです。

逆の論じ方もできるのではないでしょうか。もしエバがここで、たとえそれが罪へと導くものであったとしても、指導的役割を担っているのなら、それはまさに、結婚において女性も男性と同じように導くことができることを示しているのではない

でしょうか。「夫婦というチーム」の中では、だれもがあるときは弱く、あるときは強いものです。ですから、だれもが状況に応じて、互いの助けのために、また互いに従い合う中で、指導を担うのです。

もっと多くの論拠があるかもしれません。しかし、どれ一つとして、神が望まれた男性と女性の均衡を覆すことはできません。聖書の起源のテキストは、同等の地位にあるパートナー関係のための最も強力な論拠であり続けます。神が望まれた、あるいは際立ったアダムの指導権を示すものは、何一つありません。私たちが手にしているすべては、パートナー同士がともにあることを指し示しています。それでもなお、創造のテキストの読み方は、はっきりと異なる立場へと至ります。ここで、初めのところで、両性の問題にどう答え、それをどう実践するか、そして新約聖書がこのテーマについて語っていることをどう解釈するかの決定が下されるのです。

2.4 男性と女性の違い

私が女性と男性の平等と地位の同等性を強調するので、私が違いを見落としていると反論されるでしょう。しかし、私はどこにおいてもそうしてはいません。それどころか、私はあらゆる「画一化」や役割の同一視に、はっきりと反対しています。異なる役割があるとしても、それによって男性が統治し、指導するかしらになるわけではありません。この区別は重要です。それがなされないと、考え出された創造の秩序（男性は女性のかしらである）と、「彼は支配する」と言われている堕落の結果とが、偏った仕方で混ぜ合わされてしまいます。

明らかに、違いがなければなりません。そうでなければ、エバは対となる者、ふさわしい向かい合う相手ではなくなってしまうからです。アダムから一つのわき、まるごと半分が「取り去られる」なら、彼には何かが欠けることになり、それを女性の中に再び見いだし、取り戻すのです。二人がともに一つの全体を形づくります。

それでも、聖書は男性と女性の違いについての教科書ではありません。絶えずそのことが指摘されるとしてもです。そこで見落とされているのは、それがしばしば、歴史や文化と社会の発展から生じてきた違いであって、神の創造のみこころの純粋で完全な表現ではないということです。

「創造の記事は、一方が他方を支配することについても、性別による任務の分担についても、何の示唆も与えていません。後に人間の文化の中で見られるようにな

る、活動領域と任務領域の鋭い分離、すなわち文化を生み出す公的な領域は男性に、生殖という私的な領域は女性に、という分離は、創造から根拠づけることはできません。それは生物学的な条件からすれば自然に思えますが、聖書の言葉から神の創造のみこころとして導き出し、要求することはできません。むしろ神はここで、生物学的な条件の枠の中で、責任の分担について、男性と女性に大きな自由の余地を残しておられるのです。」[23]

ここでは要点だけを挙げますが、まったく明白なもののほかに、多かれ少なかれ研究によっても認められてきた、性に特有のいくつかの違いを挙げておきます。このテーマは複雑で、わずかな例外を除けば、私はほかの人々がそれについて見いだしたことを伝えることしかできないでしょう。聖書そのものは、この点に関しては専門書ではありません。

体格と身長は、男性のほうが強く大きく発達しています。そのため、スポーツの競技では男女を分けています。

男性は、多かれ少なかれ、空間的・抽象的な思考に秀でています。女性は、より大きなコミュニケーション能力を持っています。

会話への欲求は、平均して女性のほうが大きいものです。女性はより人に向かい、男性はより事柄に向かいます。

性の体験は、根本的に異なっています。

女性が生まれつき子どもを産み、男性はそうではないということは、言うまでもありません。しかし、そこには大きな生物学的な違いがあります。

私は、過去の文化的、社会的な既定に方向づけられるのではない、賜物に基づく役割分担を主張します。同権が憲法の一部となっているところでは、最もすぐれた能力が、性別にかかわりなく、すべての人の益のために発揮され、評価されるべきです。神の王国とその教会においては、男性たちが、こうした可能性が女性たちに制限なく開かれているように心を配るべきです。そこで、いくらかのことを償うことができるのです。

私たちの（ポストモダンの）時代には、社会の変化とともに、女性と男性の役割も多くの点で変わってきました。その中で、思い込まれた創造の秩序を維持することは、難しいどころか不可能です。社会の状況に適応することは世俗性ではなく、生きていくことの一部です。聖書が役割理解を規定していないことを受け入れるな

23. Schmalenbach, 72

ら、それは問題ではありません。男性であること、女性であることは、善意からの人生相談として、多くの本のテーマとなっています。聖書そのものは、ほとんどすべての指示を男性と女性に等しく与えているのです。

今日、夫が家事をし、子どもの世話をし、妻のほうが必要な収入を得ているとすれば、この役割分担はますます生活の現実となっています。それが最善のものかどうかは、聖書の観点から判断することはできません。



2.5 創造の秩序

この言葉はよく使われます。いかにもドイツ的な言葉です。私たちは秩序が大好きです。何が有効で、何が有効でないのかを知りたいのです。それには利点があり、

役に立つこともあります。この言葉は、女性が男性に従うことを扱う新約聖書のテキストを根拠づけようとするときに、よく用いられます。

良い創造は、創世記の最初の二つの章に描かれています。それは神が望んでおられることのひな型であり、その表現です。堕落の前のことです！

聖書は「創造の秩序」という言葉を知りません。それ自体は問題ではありません。ほかの神学上の「補助概念」と同じです。ただ、私たちはこれらの章から、どんな秩序を導き出そうとするのでしょうか。あるいは、すべての時代にとって拘束力のあるものとして、土台に据えようとするのでしょうか。たとえば菜食主義でしょうか。楽園では肉が食べられていないのですから。子どもを授からず、子を産むことのできない夫婦はどうなるのでしょうか。大きく、しかも増え続けている単身世帯はどうでしょうか。二つの性をもって生まれてくる人たちはどうでしょうか。裸で歩き回るべきでしょうか。もちろん、そうではありません。けれども、それは堕落の前には普通のことでした。創造の秩序という重みのある言葉は、そもそも役に立つとしても、区別して用いなければなりません。

確かに、創世記1章と2章で男性と女性について描かれていることは、すべての時代にわたってそのとおりに有効であるべきです。そこにあるものと違うもの、そこにあるものより悪いものは、罪によってもたらされたのであり、神のご計画とみこころに沿うものではありません。

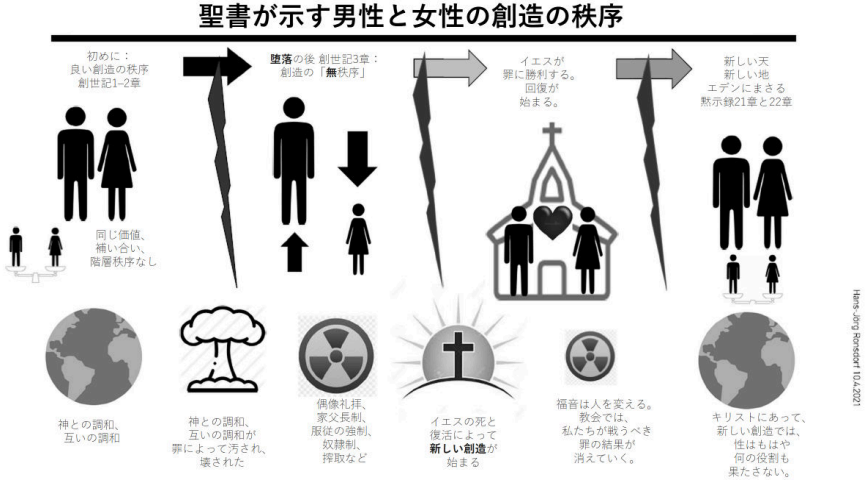
男性と女性は同じ価値を持ち、同じ尊厳を持ち、同じ委託を受け、同等の地位にあり、平等な立場にあります。1章と2章には階層秩序はありません。それは多様性の中の一致です。同じ水準での補い合いです。一方的ではなく、相互的な補完です。創世記2章に描かれている助けは、従属する側ではありません。助け手は、アダムにとって完全な価値を持つ向き合う相手です。共に、対等な目線で、二人は強いチームです。異なる能力と賜物を与えられて、二人は互いに助け合います。その際、性の違いは、全体の本質的で欠くことのできない一部です。違いは必要なものです。しかし、服従や権威とは何の関係もありません。性の違いは神のかたちを完成させます。そうして、広大な創造の委託にふさわしく応えることができるようにするのです。

堕落の前のこの男性と女性の姿こそ、神の規範です。すなわち、神の創造の秩序です。 それは永遠に有効です。普遍的で、時代を超えています。すべてはこれによって測られなければなりません。それは、すべての時代にわたって存続する永遠の規範です。

私たちは、この規範が――あるいは、そう呼びたければ、この秩序が――罪によって均衡を失い、攻撃され、わずかな例外を除いて破壊されるのを見ます。何千年も後になって初めて、この規範はキリストにあって回復されます（ガラテヤ3:28）。それはすべての時代にわたってとどまり、二度と攻撃されることはありません。

創造の秩序という言葉は、女性の服従や、公の場で（男性の前で）語ること、教えること、男性を指導することの禁止を指摘するときに、よく持ち出されます。秩序を盾に取るときの、身に染みついた反射です。けれども堕落の後では、創造の秩序について語ることはほとんどできません。むしろ、今や男性が女性を支配し、それによって性の役割が決められるのであれば、それは創造の「無秩序」（Schöpfungs-UN-ordnung）です。男性は、より強い身体的な体格のゆえに、権威を奪い取ったのです。

普遍的な創造の秩序は、キリスト教倫理の土台です。そこには、男性と女性の間の階層の違いは含まれていません。そこには、神のかたちを担う者として人間が持つ尊厳に加えて、神に根ざしている本質も含まれます。すなわち、義と愛と真理です。それらは、人々が互いに良い関係のうちに共に生きることを可能にするためのものです。



2.5.1 エデンの園から新しいエルサレムへ

キリスト者は、新しい創造に向かって旅をしています（ペテロ第二3:13）。新しく、よりすぐれたエデンが彼らを待っています。それは新しい創造です。何らかの仕方で今の創造を引き継ぎながら、同時に新しいものです。その新しいものは、今や都として描かれており、そこにはエデンの要素が再び見いだされます。ですから、堕落の前の状態に戻るのではありません。前へと進むのです。新しく永遠の都へと。

新しい創造においては、男性と女性はきょうだいのように、兄弟と姉妹のように、気兼ねなく互いに接するでしょう。愛と敬意のうちに。階層秩序なしに。生めよ、増えよという委託は、そのときには終わっています。もはや性交渉はありません。それに関わるものはすべて、そのときには過去のものです。今は大きな役割を果たしているものも、そこでは恋しく思われないでしょう。私たちは、神が私たちをそのようにならせてくださった一人ひとりの人格であり続けます。それでも性は、つまり男性であることと女性であることは、キリストにあって意味を持たなくなっています（ガラテヤ3:28）。そのとき「性」がどれほど残っているのか、私たちは知りません。

私たちの堕落した世界では、少数の人々が、程度の差はあれ発達した両方の性をもって生まれてきます。彼らにとっては難しい状況です。彼らにとって、新しい世界は救いです（私たちすべてにとってと同じように）。

新しい創造は、すでに今、教会において始まっています。ですから互いの接し方は、すでに今、それによって形づくられてよいのです。キリストのからだにおいては、性はもはや何の役割も果たしません。 しかし教会は、まだ最初の創造の中を歩んでいます。そのため、きわめてさまざまな文化的課題に直面します。福音のために、性がなお考慮される場面での調整もありえます。これについては後で詳しく述べます。

新しい創造においては、階層秩序や服従は存在しません。キリストにあって、私たちはみな一人だからです。新しい創造のいのちを生きようではありませんか！

2.6 彼はあなたを支配する――その歴史

この章で私は、創世記3章16節の刑罰の言葉がどのように成就したのか、という悲劇的な問いを追いかけます。それは限られた範囲でしかできません。この成就には、抑圧、搾取、差別、不利益の一つの宇宙が含まれています。苦しみと涙の海です。 21世紀に至るまで。世界は、力を持たないすべての人にとって危険な場所でしたし、今もそうです。女性であれ、男性であれ、子どもであれ。

今日、女性の状況がどのようなものであったかについて多くの証拠を手にしているのは、多くの歴史家、考古学者、神学者の研究のおかげです。インターネットによって、多くの情報に簡単に、すばやくアクセスできます。以下に、さまざまな時代からの引用を集めました。影響力のある有名な男性たちが、女性についてどう考えていたかを表すものです。短い紙面で、このテーマを正しく扱うことは決してできません。けれども、世の中にあるだけでなく、そこから教会に持ち込まれ、キリスト教化され、育てられてきた重荷が何であるかを認識するには、これで十分なはずです。

女性を蔑視する基本姿勢が、偉大なギリシアの思想家たちを通してユダヤ教の中に根を下ろした様子は、見過ごすことができません。そしてそれが今度は、教会に痕跡を残しました。それどころか教父たちは、この問題において、聖書の見方よりもギリシアの遺産を重んじたのです。その影響の歴史は、現在に至るまで手に取るように分かります。ですから、それは今日も、明るみに出し、異を唱える動機となるはずです。

この問題においては、ただ一つの標語だけが当てはまります。聖書に帰れ！ イエスに帰れ！

2.6.1 古代

古代[24]の女性たちは美を体現していました。男性に従属し、また体力においても劣っていました。裕福であれば、長い絹の衣を身にまとい、手の込んだ髪型をしていました。男性が美しい女性をそばに連れていると、それは商売や政治の上で十分に有利に働くことがありました。社会において、女性には限られた権利しかないか、

24. 古代とは、おおよそ紀元前600年から紀元400年までのギリシアとローマの文化を指します。

まったく権利がありませんでした。姦淫の場合、女性は訴えられ、財産を没収され、追放されることもありえました。公職は男性だけが占めていました。女性の役割ははっきりと決められていました。人々は女性に、できれば男子の子孫を期待しました。裕福な人々は奴隷も持っており、彼らが家事を担いました。女性の奴隷には権利がなく、多くの奉仕をしなければなりませんでした。けれども、例外もありました。裕福な女性の中には、より高い地位を占め、決定に強い影響を及ぼすことのできた人もいたのです。女性の魅力は、男性に支配された世界にあって、しばしば有効な手段でした。

「古代において、『自由人の男』あるいは『市民』（男性）は、人間の完全な模範とみなされていました。『自由人の女』あるいは『女性市民』（女性）からも、はっきりと区別されていたのです。女性は、女性に帰せられた身体的な体質と劣等性のゆえに、男性よりも価値の低いものとみなされていました。この劣等性は生まれつきで、変えられないものとみなされました。それによって、女性の法的無能力と、男性の後見人が永続的に必要であることとが根拠づけられていたのです。 社会における役割に応じて、女性は受動的なものとみなされ、それは（異性間の挿入的な）性交にも及んでいました。女性が能動的な役割を担うこと、たとえば家の中で主導権を握ること、公の場で目立ちすぎること、あるいは性交において支配的な立場をとることは、恥ずべきことと考えられ、家族全体の名誉ある地位を脅かしました。一方、男性は、家と家に属する者たち（女性、子ども、女性の奴隷）を支配できなかったり、自分の欲求（食べること、飲むこと、情欲、性、睡眠）を制御できなかったり、公の場で過ごす時間が少なすぎたり、性交で受動的な役割をとったりすると、市民権を剥奪されるおそれがありました。」[25]

アテネの女性たちは、ローマ共和政の時代と同じように男性の下に置かれ、男性に従わなければなりませんでした。女性は常に未成年者の扱いでした。つまり、彼女たちを導き、指図する人物が必要だったのです。少女であっても女性であっても、後見人とその気まぐれにさらされていました。

2.6.2 アリストテレス

アリストテレス（Aristoteles、紀元前384〜322年）は、ギリシアの最も偉大な哲学者・万学の人の一人ですが、女性の劣等性を普遍的に妥当する事実にしてしまいました。女性の価値の問題については、彼のあらゆる学識も役に立たず、この点で

25. Voß, Heinz-Jürgen, Das differenzierte Geschlechterverständnis der Antike, Gender, 2/2009

彼は自分の時代の子のままでした。「雌は不具の雄である」というのが、彼の世界観の、重大な結果をもたらした言明の一つです。精神が子をもうけるとされて以来、女性は「精神のない」下働きにすぎなくなります。「精神的な」男性の種のための孵化室として、自分のからだ／子宮を提供するだけの存在です。アリストテレスは、女性の生物学的な備えが劣っていることを前提とし、それによって社会における女性の男性への服従を正当化しました。そのうえで、さらに女性に、うまくいかなかった場合の責任まで負わせます。生殖において女性の部分がまさると、それが「……怪物のような姿の誕生の原因となる」というのです。

この社会形態においては、女性の法的・社会的な重要性はありませんでした。 女性は政治から締め出され、経済的にもほかのあらゆる面でも、夫、すなわち家の主人に依存していました。つまり、生涯にわたって男性の後見の下にある未成年者だったのです。男性は一般に、ずっと年下の女性と結婚しました。それが男性の支配をいっそう強めました。「妻たちの本質的な務めは、男子の跡継ぎを確保し、夫の家を切り盛りすることでした。」

娘たちは生まれた後、父親の決定によってしばしば捨てられました。生き残った少女たちには、結婚前の、そして後には結婚生活における貞潔が求められました。立派な女性たちは、人生の大部分を家の中で過ごしました。

階層秩序は、アリストテレス的な世界観においては「自然によって与えられた」ものです。同様に、一方が支配してすべての権利を持ち、他方が支配されて何の権利も持たないことも、物事の本性にかなっているとされます。 彼の世界観によれば、ある人々は支配するために生まれ、ほかの人々は支配されるために生まれます。彼にとって、男性的なものは女性的なものよりも価値が高いのです。それゆえ女性的なものは、男性的なものによって治められるために存在するのです。

「さて、人類がすべての動物の中で最も完全であるのとちょうど同じように、人類の中では男が女よりも完全である。そして、その完全さの理由は熱がより多いことにある。熱こそ自然の最も重要な道具だからである。」

アリストテレスはこのようにして、女性は男性に劣るという考えに、永続的な哲学的土台を据えました。 彼は性差別の慣行を形式化し、両性の不平等を信じる学問的な支配者意識を提供しました。何世紀も後に、自らギリシアの文化と教養の産物であった教会指導者たちは、パウロの文書をアリストテレス哲学の視点から解釈しました。

アテネの哲学者たちは、女性であることに対する二重の告発を世界に残しました。古典期から、特にアリストテレスの教えから、女性は男性より劣っているという確信が生まれました。それゆえ女性は男性によって命じられるべきであり、男性の楽しみのために用いられるべきだ、というのです。次に、ストア派の哲学者たちから、女性は男性にとって気を散らすものであり、誘惑であるという確信が生まれました。それゆえ女性は男性から避けられるべきだ、というのです。そうすれば男性は、男性を優れた者にする特性を自由に身につけることができる、というわけです。この二つの見方は、女性と結婚に関するパウロの文書の伝統的な解釈の根底にあります。すなわち、女性の服従と独身です。独身は宗教改革の時代まで、多くの場合、理想とみなされていました。

アテネ人の女性蔑視を不滅のものにしたのは、ソクラテス（Sokrates、紀元前470～399年）でした。彼はしばしば女性を弱い性と呼び、女性であることは神の罰であると論じます。女性は男性と動物の中間のものだからだ、というのです。

ギリシアの悲劇詩人エウリピデス（Euripides、紀元前480～407年）によれば、ただ一人の男性の命は、千人の女性に匹敵します。

さらに多くの、それどころかもっと人をおとしめる引用もあります。しかしそれらは、女性について一般にどう考えられていたかを裏づけるだけでしょう。

2.6.3 所有物としての女性

女性からは自己決定権がほとんど奪われ、ときにはまさに一種の所有物のように扱われました。息子は父の財産の相続人として、また家長として、娘よりも高く評価されました。娘は貴重な資源として、花嫁料と引き換えにほかの男性に売られることもあったのです。

古代の文献が証言しているように、女性はいつもどこでも権利がなかったわけではありません。しかし、男性に明らかに従属していました。結局のところ、夫たちは自分の優位を利用して、女性を性的に意のままにできる状態を、できるかぎり確保したのです。

女性は公的・政治的な領域には代表を持たず、たいていは家の営みと再生産の労働に限られていました。女性は原則として、男性（夫、父、兄弟）の後見と、完全な経済的依存の下にありました。

結婚生活において決定的な力を持っていたのは夫でした。彼は妻と子どもの後見人であり、財産と家族に関するあらゆる問題において、最終的な、そしてたいていは唯一の決定権を持っていました。妻の役割は、ほぼ完全に家事と子どもの世話に尽きていました。

妻の出産の働きには特別な注意が払われ、婚外での貞潔は社会的に特に評価されました。それに対して、結婚していない女性（側女、女性の奴隷）は、自分が働いている土地の持ち主である自由人の男性の、性的欲求を満たすために仕えることが期待されていました。

2.6.4 家父長制

大宗教とヒンドゥー教は、その規則や定めによって、世界中で家父長制の成立に関わっています。

言語的には、この用語はギリシア語の patér「父」と、arché「起源」および「支配」に由来します。家父長制は男性支配（Androkratie）[26]とも呼ばれます。従来の意味では、歴史的にギリシア法とローマ法に由来する制度を指します。その制度においては、家族と家の男性の長が、自分に依存する女性と男性の家族成員に対して、法的および経済的な力を行使しました。

同じ社会階層の中では、男性は、娘、姉妹、妻として自分に属する女性たちの上に立ちます。それでも、聖書の家父長制を単なる男性支配と誤解してはなりません。上層の女性たちは、自分の下にある女性と男性の両方に対して力を持っていたからです。

家父長制は、家の在り方を決める社会的な生活形態であり、すでに族長たちのもとに見て取ることができます。それはそのように発展し、普通のことでした。それは神が求めた理想ではなく、エデンの外の文化史の一部です。あらゆる長所と短所を伴って。

家父長制は神の父性を映し出しており、したがって神のモデルに合致している、と考える人たちもいます。けれども、家族構造についてのそのような考えは、そのような形では支持されません。たとえそれが、神の「一般恩恵」のもとでうまく機能しうるとしてもです。この家族構造は堕落した世界の一部であり、その歴史の中で

26. Androkratie（男性支配）とは、ギリシア語から訳すと「男の支配」という意味です。この語が、より一般的な支配形態である家父長制の同義語として用いられることは、むしろまれです。

の発展です。それは神のモデルや指示から生まれたのではありません。それは生き残りを確保するモデルとして定着しましたし、地球上の多くの場所では今もそれを確保しています。そのような社会的な形成物として、それは聖書の光に照らして評価されるべきです。

2.6.5 ユダヤ思想におけるギリシアの影響

私が上でアリストテレスを引用したのは、この思考がユダヤ教にも影響を与えたことと関係しています。

「新約聖書に来ると、ほとんどのユダヤ人男性が、旧約聖書に反映されているような高い敬意をもって女性を見ていなかったことが分かります。三つの要因によって、ユダヤ人は神の定めた男女の関係をゆがめるようになりました。

1. 罪深い振る舞い。罪は理解と関係をゆがめます。

2. 聖書テキストの誤った解釈。

3. ヘレニズム（ギリシア）思想の影響。

紀元前3世紀に、ヘレニズムの思想がユダヤ思想に浸透し始めました。この浸透は、紀元前175年に統治を始めたアンティオコス・エピファネス（Antiochus Epiphanes）の支配の間に加速しました。アンティオコスはその後ユダヤに侵入し、力ずくでヘレニズム化しようとしました。その結果、ユダヤ思想はギリシア哲学の影響を受けました。これがユダヤ人の女性観を色づけたのです。」[27]

「全体として見ると、宗教的な律法における女性の立場は、絶えず繰り返されるこの定式によって最もよく表すことができます。『女、（異邦人の）奴隷、子ども（未成年者）』。異邦人の奴隷や未成年の子どもと同じように、女性には自分の上に立つ男性、すなわち主人がいます。このことは、礼拝への参加をも同じように制限します。宗教的な見地からすると、女性は男性より劣っているからです。

これらすべてに加えて、女性について非常に軽蔑的な意見が数多く表明されていたことを付け加えることができます。決して欠けていたわけではない高い評価の意見を、そのような見方が上回っているのを見ると、心が痛みます。 男の子の誕生には喜びがあふれたのに対し、娘の誕生はしばしば無関心をもって、それどころか悲しみをもって迎えられたのが典型的でした。ですから私たちは、イエスの時代のユダ

27. WKG-Studienpapier（WKGの研究資料）、2003年9月

ヤ教もまた、女性について非常に低い見方をしていたという印象を持ちます。それは東方で普通のことでした。そこでは女性は何よりもその多産のゆえに評価されますが、できるかぎり外の世界から隔てられています。そして父や夫の力に服させられており、宗教的な見地からは、男性と比べて劣った（従属的な）者なのです。」[28]

2.6.6 教父たち

ここでも、ごくわずかな引用しか挙げることができません。初期のキリスト教界にも、ギリシア哲学の痕跡が見て取れることを示す引用です。

「女においては、自らの本性を意識することが、すでに恥を引き起こすはずである。」アレクサンドリアのクレメンス（Clemens Alexandrinus、紀元150～215年）、『訓導者』（Der Erzieher）

「その決定的な一例が、教父アウグスティヌス（Augustinus、紀元354～430年）です。彼は『キリスト教的な』女性像の形成に、特別な仕方で寄与しました。アリストテレスの哲学に刻印された彼は、女性が完全に神のかたちであることを認めるのに苦労しました。『女は夫と共に神のかたちである。すなわち、二人が一緒になって一つの完全なかたちなのである。しかし、女だけに与えられた務めである助け手としての働きにおいては、女は神のかたちではない。しかし男についていえば、彼は単独で取り上げても、女と結ばれて一つとなっている場合と同じく、完全かつ全面的に神のかたちなのである。』」[29]

5世紀には、アリストテレスが展開したような不平等と階層的な分離の像を裏づけるために、パウロが用いられました。福音の当初の自由は、再び退かなければなりませんでした。教会の構造が固まっていくにつれて、キリストの肢体が同等の地位にあることは、ますます置き去りにされていきました。その証拠が、教会の職務からの後退と締め出しです。

「585年、フランスのマコン（Mâcon）で、出席していた63人の司教とその代理者の会議が開かれました。『女性は人間か』という問いについて、32人が賛成、31人が反対の票を投じました。こうして女性は、一票差の多数で人間であると宣言されたのです！」[30]

28. Jeremias, Joachim, 359-375頁, Jerusalem zur Zeit Jesu, 1963
29. Schmalenbach, 196
30. Smith/Kern, Frauen und Männer im Dienst für Gott, Gießen, 2000, 114頁

中世の決定的な神学者トマス・アクィナス（Thomas von Aquin）は、アリストテレスの見方を追認しています（『神学大全』第1部第92問〔Prima Pars, Quaestio 92〕）。[31]

「a）女の産出は、創造の最初の業の中で言及されるべきではなかったように思われる。なぜなら、

I. アリストテレスは女を、男よりも不完全な人間の形成物と呼んでいる。しかし、それ自体として不完全で欠陥のあるものは、事物の最初の設立の記述の中で言及されてはならなかった。

II. 服させられることと劣化は罪から来る。なぜなら、女に対して『あなたは夫の権力の下にあるであろう』と言われたからであり、また大グレゴリウス（Gregor der Große）は『われわれが罪を犯さなかった点においては、われわれはみな等しい』と書いているからである。しかし女は本性上、尊厳においても力においても、男より弱い。

III. 罪の機会は避けられなければならない。しかし神は、女が後に男にとって罪の機会となることを知っておられた。それゆえ神は女を産み出すべきではなかった。他方で、聖書の権威がある（創世記2:18）。

b）私は答える。女が『男の助け』となることは必要であった。しかもそれは、何かほかの業のための助けではない。そのような業であれば、いずれにせよ別の男のほうが、男をよりよく助けたであろう。そうではなく、産み出す業のためである。このことは、産み出すことのさまざまな段階を考察するとき、最もよく分かる。……個々の特殊な人間本性との関係においてのみ、女は何か欠陥のある、より弱いものなのである。」

彼は別の箇所で、女性は性的欲望に導かれるが、男性は理性に導かれる、と書きました。あるいは、女性は自然の失敗作であり、身体的にも精神的にも劣っており、一種の不具の、出来損ないの、失敗した男性である、と。

その赤い線は、アリストテレスから、パウロを経て（と人々は考えました）、アウグスティヌスとトマスを経て、宗教改革者たちの神学にまで入り込みました。この見方は今日、多くの人々（特に宗教改革の伝統に立つキリスト者）によって、神の普遍的な創造の秩序として理解されています。 これはまさに、哲学によって毒され

31. さらに詳しく調べるには、www.unifr.ch/bkv/ で自由に利用できる教父文庫（Bibliothek der Kirchenväter）をお勧めします。

た人間観です。最も偉大な思想家や神学者たちでさえ、それにだまされてきました。まことに嘆かわしいことです。

2.6.7 宗教改革

宗教改革は、中世のカトリック教会との決裂をもたらしました。それは女性に、新しい自由と新しい評価をもたらしました。女性に対する、社会的に影響力のある平均的な態度は、多かれ少なかれ厳しい蔑視でした。そのことを考えれば、結婚と家庭における女性をルターが高く評価したことは、いくら評価してもしすぎることはありません。

ルターにとって、女性の服従は、自然によって与えられた自明のことでした。彼は妻カタリーナ・フォン・ボラ（Katharina von Bora）を敬愛していました。彼女はルターにとって強い向き合う相手であり、いつ自分のマルティンにブレーキをかけ、あるいは止めなければならないかもわきまえていました。けれども、女性一般についての彼の言葉は、16世紀の粗野で、卑猥で、下品な言葉づかいを反映しているのでしょう。「……女の支配は、世の初めから何一つ良いことを成し遂げたためしがない。よく言われるとおり、女の支配はめったに良い結末を迎えない！ 神がアダムをすべての被造物の主とされたとき、すべてはまだ良く正しく、すべてが最善に治められていた。しかし女がやって来て、自分も鍋に手を突っ込み、賢くなろうとしたとき、すべては崩れ落ち、ひどい無秩序となった。……女が雄弁であるのは、ほめられたことではない。口ごもって、上手に話せないほうが女にはふさわしい。そのほうがずっと女を飾る。」あるいは、「男たちが話すときには女たちが黙っていること、それを秩序は規律と名誉として求める。」あるいは、「雑草は早く育つ。だから女の子は男の子より早く育つ。」彼自身、説教の中で出エジプト記22章18節「呪術を行う女（魔女）を生かしておいてはならない」を引用したとき、それを文字どおりに、大まじめに言っていたのです。この関連で、初期のルターと後期のルターがどの程度役割を果たしているのか、現時点で私には言えません。問題は評価や断罪ではなく、原因の探究です。明らかに、この問いは繰り返し明らかにされなければなりません。まさに私たちの時代にもです。

私の願いは、神の偉大な人々でさえ、この大きな誤りに陥ったことを示唆することです。そして神がそれを耐え忍び、許容されたことをです。今日も神がしばしばそうしておられるようにです。神は祝福し、働かれます。しかしその際、ご自分の子

どもたちの見解や慣行や振る舞いを、耐え忍ばなければならないのです。ご自分が決して望まれなかったものをです。

修道院が解体された後、女性の奉仕と居場所は、家庭の領域に限られました。教会の職務は女性に開かれませんでした。人間として、また妻としての女性の尊厳は高められましたが、イエスの教会における女性の立場は高められませんでした。

歴史家アルノルト・アンゲネント（Arnold Angenendt）は、まとめて次のように書いています。「女性という性は、あらゆる時代と文化の無数の文書において、軽視の、それどころか嘲笑の対象となってきました」。 これはキリスト教にも等しく当てはまります。今日に至るまで、そうであることも少なくありません。

「私たちキリスト者は、より良い人間でありたいと思っています。しかし、そうではありません。せいぜいのところ、より恵まれているだけです。」[32] キリスト者は今日も、すべての人にとってより公正な世界のための、目覚ましい先駆者ではありません。ある女性はこう言います。「教会の歴史にはあまりにも多くの女性蔑視があって、女性として息が詰まる思いがします。」私はこれに反論することができません。

それでも、アンゲネントによれば、キリスト教は最初の数世紀に、神の本来の創造の秩序に立ち返りました。「ですから、まさに女性たちがキリスト教に引きつけられたのは、驚くにあたりません。最初の三世紀には、女性が教会の大多数を占めていました。その理由は容易に見て取れます。ほかのどこで、女性がこれほど男性と平等に扱われたでしょうか。」 この福音の光は、残念ながら再び暗くなっていくことになります。

18世紀と19世紀には、大きな信仰覚醒運動が起こりました。そこではしばしば女性たちが指導し、みことばを宣べ伝えました。[33] そのような覚醒の時代は、厳しく組織化されておらず、構造が欠けていて、神の御霊が嵐のように吹いていました。そこでは御霊は自由に、賜物を妨げなく働かせることができました。性の違いをまったく考慮に入れなくてよかったからです。この違いが何の役割も果たさないなら、それは良い前提条件です。

32. Schmidt, 118, Endlich gleich, Holzgerlingen, 2019
33. Krüger, Hartmut, Frauen im Pietismus, Marburg, 2005

2.6.8 世俗の女性の権利運動

フェミニズムという言葉は、保守的なキリスト者によってしばしば軽蔑されます。けれども、まさに彼らこそ知っておくべきです。勇敢な女性たちが、そして男性たちも、まさに彼らが本来擁護すべきであったものを勝ち取ったのだということを。今日、彼ら自身が、そして何よりも彼らの妻たちが、これらの運動が達成したものから恩恵を受けています。これは、フェミニズムを聖人の列に加えることではありません。事実を認め、またそれを正当に評価することです。同じことは労働組合の成果にも当てはまります。（保守的な）キリスト者も、（それに値しないのに）その恩恵を受けているのです。私たちがすでに何らかの形でそれらから良い恩恵を受けており、それらの成果を手放したくないのであれば、現代文化のそのような運動がそれ自体として悪いとか、聖書への攻撃であるなどとは、決して言えません。

「フェミニズムは、世俗の女性運動に根ざしています。その第一の波は19世紀末から20世紀初めにかけてのもので、政治参加の平等な権利を求める闘いにおける、女性の権利運動でした。とりわけ選挙権と政治的職務への道を求め、教育を受ける権利、特に少女の教育を求め、職業選択の自由と職業に就く道を求める闘いでした。1896年、初めて女性が聴講生として大学に受け入れられました。正規に大学で学ぶことが初めて許されたのは1900年以降のバーデンで、ほかの州ではかなり後のことでした。1918年に女性参政権が導入され、1949年には基本法に男女同権が明記され、1954年には既婚女性の公務への就業禁止が廃止されました。1957年には夫による最終決定権が、そして1958年にはついに、いわゆる『女性教師の独身義務』（Lehrerinnenzölibat）が廃止されました。これは女性教師に独身を義務づけ、結婚した場合には職を辞することを義務づけるものでした。

1970年代の女性運動の第二の波は、自らを女性解放運動と理解していました。というのも、法的には少なくとも書類の上ではおおむね平等になっていたにもかかわらず、女性たちは相変わらず差別され、自由でないと感じていたからです。不平等な教育の機会によって――当時はまだ、ギムナジウムに通う男子は女子より多く、大学で学ぶ男性は女性よりはるかに多かったのです。労働市場での不利な機会によって――失業率の高い時期には『二重稼ぎ』と非難され、あるいは妊娠による欠勤の可能性のゆえに、そもそも採用されませんでした。同じ労働に対する、より低い賃金によって。そして何よりも、家庭、仕事、家族の介護という二重、三重の負担

によって。女性にふさわしい言葉づかいが注目の的となり、女性問題担当官が選ばれ、女性支援計画が書かれました。」[34]

これらすべては、ここで挙げることができたもののほんの一部にすぎません。このわずかな行が、エデンの外での女性たちの厳しい道のりを明らかにしてくれることを願います。世の思考が教会の思考にどれほど強く影響を及ぼしてきたかは、今日なお「アリストテレス・ライト」がパウロの言葉によって根拠づけられていることに見て取れます。古い蛇をかしらとする闇の力だけが、女性たちのこの石だらけの道を喜ぶことができます。イエスによって、エバの娘たちに対する神の姿勢もまた、決定的に明らかにされます。

もしかすると、あなたは、これはみな歴史だと思っておられるかもしれません。ずっと昔のことで、今日ではどこでもまったく違うのだ、と。とんでもありません。ワールド・ビジョン（World Vision）は（10年前に）、キリスト教の遺産を持たない国々について報告しています。4億5千万人の女性が、子ども時代の栄養不良のために身体的な障害に苦しんでいます。多くの社会では、少女たちとその母親たちは、男性と少年たちが満腹になってから初めて食事をします。女性は世界人口の半分を占めていますが、財産の1パーセントしか所有していません。貧困の中で暮らす13億人のうち、70%が女性です。少女が学校教育を受けられない可能性は、少年の2倍です。

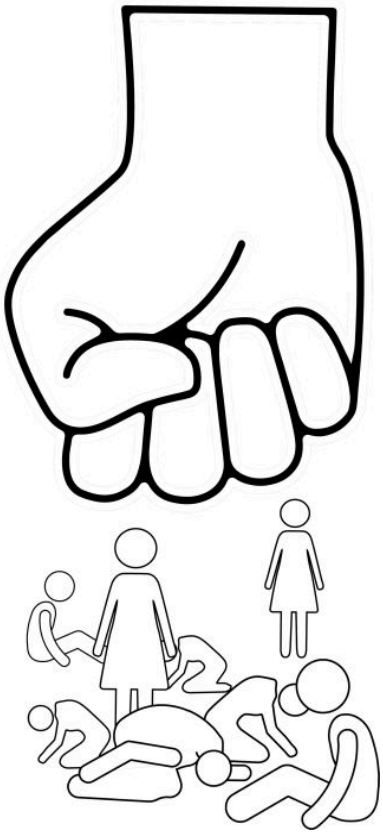
200万人の少女が、主にアフリカと中東で、性的な快楽を殺すために、割礼によって体を傷つけられています。この処置を生き延びても、彼女たちは成長して、痛みを伴う性交、不妊の可能性、出産時に死亡する高い危険に直面します。最近の統計によれば、現在の世代では実に1億人の少女が欠けています。彼女たちは性別のゆえに、家族によって殺されたのです。こうした少女たちのうち何百万人もが、インドと中国で欠けています。そこでは母親たちが、女の子を身ごもっていると知ると、決まって中絶するのです。あるいは古代のように、死ぬに任せて捨てられます。医療も与えられません。

どれほど多くの涙が、ひそかに流されてきたことでしょう。ヤハウェ・エロヒム（Jahwe Elohim）がエバの娘たちに起こっていることをご覧になるとき、天もまた泣いています。だれが彼女たちを助けに来るのでしょうか。だれが彼女たちのために立ち上がるのでしょうか。この現実を前にして、だれの心が動かされずにいられるでしょうか。

34. Wikipedia（さまざまな記事）

階層秩序は家父長制の起源であり、家父長制は性と権力の濫用の起源です。

ベス・アリソン・バー（Beth Allison Barr）



3 メシアであるイエスと女性たち

私たちの暦は、比類のない奇跡から始まります。神が人となられたのです。永遠なる方、創造主ご自身が来られます。だれもがそうであるように、ゼロから始められます。幼年期と青年期を過ごし、ナザレとその周辺で建築職人として働かれます。後に公の活動が始まると、ガリラヤのカペナウムに住まいを持たれます。これはすべて、一世紀のユダヤ教の中で起こります。

女性たちにとっても、この方とともに新しい時代が始まります。それは、かつて日の涼しい時に、園でアダムとエバに会われたのと同じ方です。アダムの子として、人の子として来られたヤハウェ・エロヒム（Jahwe Elohim）、この方こそ女の子孫です。そして女性の解放者です。女性の気持ちが分かる方です。独身でしたが、母や姉妹たちを身近に見てこられました。男たちが自分の妻に対して、また女性一般に対してどう振る舞うかを、毎日感じ、見ておられます。ご自身はおそらく長子として、家族に責任を負っておられたでしょう。父ヨセフがもう生きておらず、その役割を引き継がなければならなかったとすればです。姉妹たちは、この方をどのように体験したのでしょうか。

この方は舞台裏を見通しておられます。遅くとも公の奉仕においては、壁を打ち壊し、当時のユダヤ世界をひっくり返されます。もしだれかが私たちの模範であるとすれば、それは神を啓示された方です。この方こそ、あらゆる反論の終わりです。

この章で扱うのは、教理や教義学や立場ではありません。生活の現実です。物語です。出会いです。態度です。発見です。

ここで取り上げるイエスと女性たちの出会いは、どれも何度も考察されてきました。[35] そして、それらは決定的に重要です。まさに中心的です。というのも、これらのテキストの中に私たちは見いだすからです。神の贖い、回復させる力が、女性たちの生活の中で現実となる様子を。女性たちが、エデンで女が持っていた立場へと連れ戻される様子を。それが神の目的です。悪魔のわざを打ち壊すことです。男性が女性を否定的に、度を越して、押さえつけるように支配することも、そのあらゆる形において、悪魔のわざに含まれます。

35. 紙面と時間の都合上、指導的な役割を担ったり預言したりした旧約聖書の勇敢な女性たちについての考察は省きます。エリサベツやマリアについても同様です。イエスの母は、比類のない、勇気ある、自立した、霊的な、大胆な女性ですが、ここではこれ以上取り上げません。

女性たちはイエスをどのように体験したのでしょうか。イエスが生まれたとき、十字架で苦しめられたとき、そしてよみがえられたとき、女性たちはそこにいました。ドロシー・L・セイヤーズ（Dorothy L. Sayers）の、この力強く、世界的に有名な引用を読んでください。

「女性たちが飼い葉おけのそばの最初の者であり、十字架のそばの最後の者であったのは、おそらく不思議ではありません。彼女たちは、このような男性をそれまで一度も見たことがありませんでした――このような男性は、その後二度と現れませんでした。小言を言わずに叱り、見下すことなくほめた預言者であり教師。彼女たちの質問や議論を真剣に受け止めた方。女らしくあれと決してせき立てず、女であることを決してあざけらなかった方。ありのままの彼女たちを受け入れ、まったく自然体で彼女たちと接した方です。」

イエスは、二重基準なしに、排除なしに、見下すことなしに、ただ大目に見るのでもなく、女性たちに接します。心を向け、理解をもって、それどころか親切と愛をもって接するのです。

報告されている出来事は、それほど多くはないかもしれません。けれども、それらには中身があります。私たちに報告されていない出来事も、ほかにたくさんあったことでしょう。しかし、神の永遠の御国が始まるとき、私たちはいつか振り返ってそれらを見ることが許されるかもしれません。

あなたはこれらの物語を、すでに百回も読んだり聞いたりしてこられたでしょう。それでも私はそれらに目を向け、特徴的な点、文化的な点にも、短く触れたいと思います。テキストは全文を載せますので、聖書を手元に用意する必要はありません。そして、それについていくつかの考えを分かち合うだけにします。どうぞご自身で、これらの聖なる瞬間に浸ってください！

3.1 仕える女性の弟子たち

[ルカの福音書 8:1-3] その後、イエスは町や村を次々に巡り、神の国を宣べ伝え、福音を告げ知らせておられた。十二人もイエスと一緒にいた。また、悪霊や病気を治していただいた何人かの女たちも一緒であった。すなわち、七つの悪霊が出て行ったマグダラの女と呼ばれるマリア、ヘロデの執事クザの妻ヨハ

ンナ、スザンナ、そのほか多くの女たちであった。彼女たちは、自分の財産をもってイエスに仕えていた。

イエスだけでなく、この時代のほかのラビたちも、弟子たちに囲まれていました。しかし、ラビたちには女性の弟子はいませんでしたし、女性を弟子にしたいとも思いませんでした。ラビから学ぶことは、男性だけの特権でした。イエスの弟子と言うとき、私たちはいつも十二人を思い浮かべます。ルカは、名前を挙げることのできる女性たちと、名もない多くの女性たちについて語っています。十二人の男性よりも多くの弟子がいたことを、私たちは知っています。ルカは七十人について語りました（ルカ10:1、17）。しかし、もしかするとそこには、すでに女性たちも含まれていたのかもしれません。いずれにせよ、ルカが描く弟子の群れは、男性と女性の入り混じった集団として私たちの目に映ります。女性たちの何人かは、このラビによる救いを体験し、それ以来この方に従っていました。そして自分の財産を差し出していました。彼女たちは自分の師であるこの方に、そしておそらくイエスと共に旅をしていたすべての人に仕えていました。それは、食事作りや洗濯という意味ではありません――おそらくそれもあったでしょうが、彼女たちは自分の財産をもって仕えたのです。彼女たちは、あるいは少なくともその何人かは、イエスとその従う者たちの宣教を資金面で支えたのです。

それは比類のないタブー破りです。イエスは女性たちを、弟子の輪に受け入れます。イエスは彼女たちが学ぶことを望んでおられます。というのも、イエスは知っておられたからです。男性たちよりも頼りにすることのできたこの女性たちが、将来、神の王国とその教会のためにどれほど大きな役割を担うことになるかを。ルカは彼女たちを肯定的に取り上げています。男性の弟子たちとの関係で、何か特別なことには触れていません。

3.2 女性は学ぶべきである

[ルカの福音書 10:38-42、ドイツ語エルバーフェルト訳聖書から翻訳] さて、彼らが旅を続けて行くうちに、イエスはある村に入られた。するとマルタという名の一人の女が、イエスを自分の家に迎え入れた。彼女にはマリアと呼ばれる姉妹がいた。マリアもイエスの足もとに座って、そのみことばに聞き入っていた。しかしマルタは、多くのもてなしのために忙しくしていた。彼女は近づいて来て言った。「主よ、私の姉妹が私だけにもてなしをさせているのを、何と

もお思いにならないのですか。私を手伝うように、彼女におっしゃってください。」しかしイエスは答えて、彼女に言われた。「マルタ、マルタ。あなたはいろいろなことを思い煩って、心を乱しています。しかし、必要なことは一つだけです。マリアはその良いほうを選びました。それが彼女から取り去られることはありません。」

イエスはこの三人のきょうだいを愛しておられました。この家にいるのがお好きでした。歓迎されていました。イエスが教えておられた時間は、まるで天に引き上げられたかのようでした。いのちのことば、力のあることばが、その口から出てきました。そしてマリアには、大勢の弟子たちの世話をするよりも、そのほうが興味深かったのです。姉妹の間にもめごとが起きたのも無理はありません。けれどもイエスは――マルタは非難するようにこの方に訴えたようですが――マリアに、そしてそれによってすべての女性に、弟子となり、学ぶ者となる特権をお与えになります。男の弟子と女の弟子の区別なしにです。イエスの足もとでは、あらゆる違いが平らにされます。そこではみな等しいのです！ 今日もです。女性にとっても、真理のうちに教えられ、信仰のうちにしっかりと根ざすことは、同じように大切です。女性も男性とまったく同じように、語り合いと問いかけに加わっています。

3.3 みな等しい

[マルコの福音書 3:33-35] すると、イエスは彼らに答えて言われた。「わたしの母、わたしの兄弟たちとは、だれのことですか。」そして、自分の周りに輪になって座っている人たちを見回して言われた。「見なさい。ここにわたしの母、わたしの兄弟たちがいます。だれでも神のみこころを行う人、その人こそわたしの兄弟、姉妹、母なのです。」

イエスの家族は、イエスがもうすっかり正気を失ったと思っていました。イエスはここで、家族思いの人としては登場しません。この方にとっては、神の国と新しい創造の、新しい家族のほうが大切なのです。前の項で見たように、イエスとの関係において、弟子であることにおいて、性は消し去られてはいません。しかし、もはや何の意味も持ちません。ましてや、女性が男性に従属しているかのような、階層的な意味は持ちません。男性と女性の役割を理解するうえで決定的なのは、イエスが一度も階層秩序について語ったことがなく、それを教えたこともない、ということです。言葉なしに、イエスはすでに行動によって、当時の文化的な、そして「敬

虔な」慣習を打ち破っておられました。この方は、ご自分に聞き従う人たちを、兄弟、姉妹と呼ばれるのです！

3.4 月経はもはや汚れではない

> [マルコの福音書 5:32-34] しかし、イエスはこれを行った人を見ようとして、周りを見回しておられた。女は自分の身に起こったことを知っていたので、恐れおののきながら進み出て、イエスの前にひれ伏し、真実をすべて話した。イエスは彼女に言われた。「娘よ、あなたの信仰があなたを治したのです。安心して行きなさい。病苦から解かれて、健やかでいなさい。」

月経そのものは、女性にとって祝福ではなく重荷です。私たち男性には、それを実感することはできません。イスラエルでは、女性は月経の間、祭儀的に汚れているとされました。自分ではどうしようもないことのために汚れているのです。運命でしょうか。それよりもひどいのは、出血が止まらない場合でした。今日もこの病気はあります。そうなると、女性は絶えず汚れた状態でした。ツァラアトに冒された人と同じように、社会生活にはほとんど参加できず、宗教生活にはまったく参加できませんでした。イエスのもとで癒やしをつかみ取ろうとした彼女の勇気は、福音書の中で最も心を動かす物語の一つです。イエスはこの病気を「病苦」（Plage）と呼ばれます。それを終わらせるのは、この方です。この方は女性を、いのちへと連れ戻されます。そのすぐ後でヤイロの娘をよみがえらせるのと同じようにです。イエスはそこへ向かう途中でした。この方は心を打つ仕方で、彼女を「娘」と呼ばれます。 父親として、この方は彼女の中に、受け入れられ、心をかけられ、大切にされているという感覚を呼び覚まされます。彼女が12年間味わえなかったものです。娘が、父親の思いやりに満ちた愛情を経験するときのように。人々が皆見ている前で――通りは人でごった返していました――この方はこの「汚れた女」にこのように語りかけます。そして、ただこの方だけがなさったことをなさいます。公の場で女性と話し、すべての人の前で、彼女にいのちと尊厳を返されるのです。男たちは何を思ったことでしょう。まして女たちは！

3.5 追い出され、見いだされて

[ヨハネの福音書 4:6-9] そこにはヤコブの井戸があった。イエスは旅の疲れから、そのまま井戸のそばに座っておられた。時はおよそ第六の時であった。一人のサマリアの女が、水をくみに来た。イエスは彼女に「わたしに水を飲ませてください」と言われた。（弟子たちは食物を買いに、町へ出かけていた。）そのサマリアの女はイエスに言った。「あなたはユダヤ人なのに、どうしてサマリアの女の私に、飲み水をお求めになるのですか。」（ユダヤ人はサマリア人と付き合いをしなかったのである。）

[ヨハネの福音書 4:27-30] そこへ弟子たちが戻って来て、イエスが女の人と話しておられるのを見て驚いた。 しかし、「何をお求めですか」とか、「なぜ彼女と話しておられるのですか」と言う者は、だれもいなかった。女は自分の水がめを置いたまま町へ行き、人々に言った。「来て、見てください。私がしたことを、すべて私に話した人がいます。もしかすると、この方がキリストなのでしょうか。」人々は町を出て、イエスのもとにやって来た。

若いころ、私はヨハネの福音書4章の言葉を、どれほど聞いたことでしょう。たいていは、父は霊と真理によって礼拝する者だけを求めておられる、という言葉でした。私の若いころの「真理」には、女性はそれをしない、ということが含まれていました。女性は集会で黙っているのです。

なぜイエスは、こうした深く大切な真理を、一人の女性に語られたのでしょうか。しかもサマリアの女性に？ 何度も離縁された女性に？ たった今メシアを知ったばかりの女性に？

イエスは自由でした。この方は、男性と女性を対等な者として造られたヤハウェ・エロヒムでした。この方は、あるべき仕方で女性たちと出会うことができました。弟子たちは、イエスが女性と話しておられることに驚きました。当時の女性観は、なんと堕落していたことでしょう。イエスはこの骨の折れる道を歩まれました。何度も離縁されたこの女性の悲劇的な人生の物語を、救いの物語に変えるためです。いいえ、イエスがこのような言葉を語られた相手は、男性ではありませんでした。それは一人の女性でした。あらゆる自尊心を失い、生き延びるために、さらに別の男性に身を任せなければならなかった女性です。スカルの井戸のそばにいたこの男

性は違っていました。すべての男性がそうあるべきであるように。それはメシアでした。

彼女は最初の女性宣教者となります。彼女が自分の物語を語り、恐れを乗り越えたので、村全体が信仰に至ります。それは本当に息をのむような物語です。私の目には涙があふれてきます。イエスが、ご自分がメシアであることを直接明かされた相手は、多くありませんでした。けれどもこの女性に、イエスは天を開かれるのです。

問わなければなりません。イエスがここで一人の女性に、礼拝の本質について教えておられるのに、どうしてパウロの発言禁止をそのように解釈し、あらゆる時代の教会のすべての女性にまで広げることができるのでしょうか。礼拝は、教会の本質的な特徴だというのにです！？

3.6 姦淫には二人が必要

[ヨハネの福音書 8:1-11、ドイツ語エルバーフェルト訳聖書から翻訳] しかしイエスはオリーブ山へ行かれた。朝早く、イエスは再び宮に来られた。民はみなイエスのもとに来た。イエスは座って、彼らを教えておられた。すると律法学者たちとパリサイ人たちが、姦淫の現場で捕らえられた一人の女を連れて来て、真ん中に立たせ、イエスに言う。「先生、この女は姦淫の現場で、その行為そのものの最中に捕らえられました。モーセは律法の中で、こういう女を石で打つように私たちに命じています。それで、あなたは何と言われますか。」彼らがこう言ったのは、イエスを試して、訴える口実を得るためであった。しかしイエスは身をかがめて、指で地面に書いておられた。けれども彼らが問い続けるので、イエスは身を起こして彼らに言われた。「あなたがたの中で罪のない者が、最初に彼女に石を投げなさい。」そして再び身をかがめて、地面に書いておられた。彼らはこれを聞くと、年長の者たちから始めて最後の者まで、一人また一人と出て行った。 こうしてイエスは、真ん中にいた女と共に一人残された。イエスは身を起こし、女のほかにだれも見えなかったので、彼女に言われた。「女の人よ、あの人たちはどこにいますか。あなたを訴えた者たちは。だれもあなたを罪に定めなかったのですか。」彼女は言った。「だれも。主よ。」イエスは彼女に言われた。「わたしもあなたを罪に定めない。行きなさい。もう罪を犯してはなりません。」

さまざまな聖書が、見出しに「イエスと姦淫の女」と付けています。しかし、姦淫の男はどこにいたのでしょうか。教父たちは、そして今日もなお一部の人々は、女性こそ性的な罪への誘惑であると考えました。ユダヤ教の女性観は、女性に性的な誘惑の責任を負わせていました。それに対してイエスは、責任を男性に負わせます（マタイ5:28）。男性は女性を見るとき、自分の性的な欲望に注意を払い、それを抑えるべきなのです。言い換えれば、自分の欲望を抑えられないなら、長く見つめてはいけない、ということです。誘惑するのが女性のほうなのかどうか、私は疑問に思います。男性は女性より早く興奮し、女性をすばやくものにしようとして何でもします。ここでどうだったのかは分かりません。愛人の男は卑怯にも彼女を見捨てたか、あるいは仲間の男たちにかばわれたのです。

「イエスはわずかな言葉しか語られませんでしたが、それらは雄弁に物語っていました。罪は罪でした――男性が犯したものであれ、女性が犯したものであれ。私たちはだれもが、神のさばきの前に立ちます。だれも隠れることも、逃れることもできません。だれも、ほかの人を指さすことはできません。女性の罪は、男性の罪より悪くはありませんでした――しかし、より良くもありませんでした。対等であることが基準であるなら、石はほとんど投げられません。」[36]

3.7 まっすぐに、背丈いっぱいに立つ

[ルカの福音書 13:10-17、ドイツ語エルバーフェルト訳聖書から翻訳] イエスは安息日に、ある会堂で教えておられた。すると見よ、十八年間も弱さの霊につかれていた一人の女がいた。彼女は腰が曲がっていて、まったく身を起こすことができなかった。イエスは彼女を見ると、呼び寄せて言われた。「女の人よ、あなたは弱さから解き放たれました。」そして彼女に手を置かれた。すると彼女はただちに身を起こし、神をあがめた。……「この人はアブラハムの娘なのです。サタンが縛っていたのです。見なさい、十八年もの間です。安息日に、この束縛から解かれるべきではなかったのですか。」イエスがこう言われると、反対していた者たちはみな恥じ入った。そして群衆はみな、イエスによって行われたすべての輝かしいみわざを喜んだ。

会堂は男たちの場所でした。男たちが前に立っていました。男たちが話をしました。けれどもイエスはこの女性に目を留め、前へと呼び出されます。中心へと。一

36. Hamilton, David

人の女性を。しかも、見るも痛ましい姿の女性を。偉大な医者は、彼女をご自分の前に呼び寄せます。男たちは、この伝統破りを歓迎しなかったでしょう。安息日であったという事実だけが、彼らに、イエスを攻撃する見え透いた口実を与えました。「アブラハムの娘」という表現は、ここにしか出てきません。こうして、腰の曲がった女性はまっすぐに立ちます。あわれみをもって、この気の毒な女性に心を向けて、イエスは彼女に手を置かれます。すると彼女は、ふだんは男たちしかいない所に立っています。まっすぐに。ヤハウェ・エロヒムは彼女に健康を返すだけでなく、尊厳をも返されます。彼女を「アブラハムの娘」と呼ばれるのです。ふだんは男たちの声しか聞こえない所で、彼女は神をあがめるために声を上げます。そうです、彼女はいわば会堂で、神への賛美を先唱するのです。なんと聖なる瞬間でしょう！

ユダヤ教の会堂では、女性たちは後ろのほうで、いわば隠されていました。そして男たちだけが語っていました。それは決して、イエス・キリストの教会がどのように機能するかの模範ではありません。

3.8 二重基準なし

> [マタイの福音書 19:8-9（5:31-32）] イエスは彼らに言われた。「モーセは、あなたがたの心が頑なので、妻を離縁することを許したのです。しかし、はじめの時からそうだったのではありません。あなたがたに言います。だれでも、淫らな行い以外の理由で自分の妻を離縁し、別の女を妻とする者は、姦淫を犯すことになります。また、離縁された女と結婚する者も、姦淫を犯すのです。」

ユダヤ人の夫たちは、比較的簡単に妻を離縁することができました。理由はいつでも見つかりました。こうして離縁された、いやむしろ追い出された女性は、まさにのけ者にされ、生き延びることもほとんどできませんでした。パリサイ人と律法学者たちの正体をあらわにし、はじめの時へと連れ戻されるのは、イエスです。男性と女性は、神のかたちとして対等に造られ、結婚において結び合わされています。それが創造の秩序でした。

男性も女性も、同じルールを守るべきです。ありがたいことに、今日の私たちのところでは、もはや当時のユダヤ人のもとでのようではありません。けれども離婚は、最も深く傷つけるものであり、神の心をも打ち砕くものであることに変わりはありません。イエスは創造の物語に言及しつつ、女性を守ります。そして男性たち

に訴えます。姦淫の場合を除いて、正当でない理由で妻を安易に離縁してはならない、と。イエスは女性たちのために尽力されます。彼女たちのために声を上げ、心の頑なさを叱責されます。それこそが、こうした離縁の原因だと見ておられるのです。

3.9 あつかましいほどの恵み

[マルコの福音書 14:3-9、ドイツ語エルバーフェルト訳聖書から翻訳] さて、イエスがベタニアで、ツァラアトに冒された人シモンの家におられたときのことである。イエスが食卓に着いておられると、一人の女が、純粋で非常に高価なナルドの香油の入った石膏の小瓶を持って来た。彼女はその石膏の小瓶を割って、香油をイエスの頭に注いだ。すると何人かの者が心の中で憤慨して言った。「何のために、香油をこんなに無駄にしたのか。この香油なら三百デナリ以上で売って、貧しい人たちに施すことができたのに。」そして彼女を厳しく責めた。しかしイエスは言われた。「彼女をそのままにしておきなさい。なぜ彼女を困らせるのですか。彼女はわたしのために良いわざをしてくれたのです。 貧しい人たちは、いつもあなたがたと一緒にいます。あなたがたは望むときに、いつでも彼らに良いことをしてあげられます。しかし、わたしはいつもあなたがたと一緒にいるわけではありません。彼女は自分にできることをしたのです。埋葬に備えて、わたしのからだに前もって香油を塗ってくれました。まことに、あなたがたに言います。世界中どこでも福音が宣べ伝えられる所では、この人のしたことも語られて、この人の記念となるでしょう。」

それは途方もない、まさにばつの悪い場面です。この女性はすでにイエスに出会っており、イエスは彼女の人生を新しくしておられました。彼女は勇気を出して、この男たちの集まりに飛び込み、皆の視線を浴びることになります。そして、自分にできることをするのです。イエスはご存じでした。彼女にはそれ以上のことはできなかったのだと。こつこつ蓄えた一年分の給料、彼女の持っていたすべてを、イエスにささげる価値があると彼女は思ったのです。ナザレから来たこの人の頭に、これほど高価なものが注がれたことは、それまで一度もありませんでした。この方がこれほど香ったことは、一度もありませんでした。そしてイエスは、皆の前でこの女性を高く上げ、ほかのどの男性にも与えなかった歴史上の場所を、彼女に与えられます。イエスはそれをこの上なく高く評価されました――ご自分の使命が最後に

はゴルゴタで、その最も深い点と頂点を迎えることになるのを、だれも理解していませんでした。

「彼女は、赦された罪人以上の存在です。イエスに仕えるときに彼女が流す多くの喜びの涙は、奉仕を放棄してイエスを否んだ後に激しく泣くペテロの涙と、対照をなしています（ルカ22:62）。彼女の絶え間ない口づけは、ユダの裏切りの口づけと対照をなしています（ルカ22:47）。イエスの足もとにいる彼女の姿勢は、しもべの姿勢であり、イエスご自身がとられる姿勢です（ルカ22:26-27）。石膏の瓶を割って高価な中身を注ぎ出すという彼女の愛に満ちた行為は、キリストの象徴的な模倣です。キリストは、ご自分のからだが裂かれ、ご自分の尊い血が愛するすべての者のために流されることを、ご自身に許されたのです（ルカ22:20）。彼女はキリストのイコン（像）です！」[37]

女性に沈黙を命じ、説教することを禁じるすべての男性たちよ。あなたがたは、福音の宣教と説教の中で、この女性のことを何度取り上げてきたでしょうか。

3.10 十字架――男たちはどこにいるのか

[マタイの福音書 27:55-56] また、そこには大勢の女たちがいて、遠くから見ていた。彼女たちは、ガリラヤからイエスについて来て、イエスに仕えていた人たちであった。 その中には、マグダラのマリア、ヤコブとヨセの母マリア、ゼベダイの子たちの母がいた。

[マルコの福音書 15:40-41] また、女たちも遠くから見ていた。その中には、マグダラのマリアと、小ヤコブとヨセの母マリアと、サロメがいた。彼女たちは、イエスがガリラヤにおられたとき、イエスについて行って仕えていた女たちである。このほかにも、イエスと一緒にエルサレムに上って来た女たちが大勢いた。

[ルカの福音書 23:55-56] ガリラヤからイエスと一緒に来ていた女たちは、あとについて行き、墓と、イエスのからだが納められる様子を見届けた。それから戻って、香料と香油を用意した。 そして安息日には、戒めに従って休んだ。

[マタイの福音書 28:9-10] 彼女たちが弟子たちに知らせようと行くと、見よ、イエスが彼女たちに出会って言われた。「平安あれ。」彼女たちは近寄ってその

37. Reid, Barbara E., 76頁, Wisdom's Feast, 2016

足を抱き、イエスを拝した。 そこでイエスは言われた。「恐れることはありません。行って、わたしの兄弟たちに、ガリラヤに行くように告げなさい。そこでわたしに会えます。」

福音書を書いた男性たちが、ここでこの女性たちについて書いている様子は、注目に値するのではないでしょうか。彼らは彼女たちを見過ごしません。忘れません。彼らは、十二人と一緒にイエスに従った仲間の弟子として、女性たちを体験していたのです。これらの書き手たちも、ユダヤ教とタルムードの女性観の中で育ちました。けれどもイエスは、彼らの女性観をも新しくされたのです。何年かかかりましたが、この点において彼らはイエスの足跡をたどっています。

そのうえ、男性である彼らにとって、それを書くのは実にばつの悪いことでした。女性たちが十字架刑の場面を少なくとも遠くから見ていたのに、自分たちは――ヨハネを除いて――逃げてしまっていたのですから。

女性たちに対するイエスの振る舞いが、彼女たちを強く勇敢にしていました。イエスは彼女たちを育てられました。彼女たちの奉仕を高く評価されました。ここで私たちが読むものは、イエスが彼女たちに対して抱いていた敬意のこだまです。伝統と慣習に逆らって、イエスは彼女たちを、女性の弟子たちと男性の弟子たちの輪に受け入れておられました。私たちの知らないことはたくさんあります。しかし、挙げた事実は一つのことを明らかにしています。イエスは男性の弟子も女性の弟子も、等しく尊重されたのです。最も内側の輪には女性がいなかったとしてもです。

3.11 女性使徒マリア

[ヨハネの福音書 20:15-18] イエスは彼女に言われた。「女の人よ、なぜ泣いているのですか。だれを捜しているのですか。」彼女は、園の管理人だと思って言った。「ご主人、あなたがあの方を運び去ったのでしたら、どこに置いたのか教えてください。私が引き取ります。」イエスは彼女に言われた。「マリア。」彼女は振り向いて、ヘブル語でイエスに「ラボニ」、すなわち「先生」と言った。イエスは彼女に言われた。「わたしに触れてはいけません。わたしはまだ父のもとに上っていないのです。わたしの兄弟たちのところに行って、『わたしは、わたしの父であり、あなたがたの父である方、わたしの神であり、あなたがたの神である方のもとに上る』と伝えなさい。」マグダラのマリアは行って、弟子た

ちに、自分は主を見たこと、そして主が自分にこれらのことを話されたことを告げた。

裁判では、女性は証人になれませんでした。証人となる価値がないとされたのです。そこまで事態は進んでいました。イエスが女性たちに、あらゆる時代の中で最も大切なメッセージを託し、任じられたことは――弟子たち自身にとっても――いくら評価してもしすぎることはありません。十字架刑の直後に、これより大切で大きなメッセージが宣べ伝えられたことはありません。このメッセージを聞くことのできる場所にいたのは、マリアただ一人でした。彼女は、おびえて身を隠していた弟子たちにこの真理を宣べ伝えるよう、任じられます。この任命を前にすれば、女性が説教してよいかという問いは、あまり分別のあるものとは言えません。

この一度限りの派遣において、私はマリアを女性使徒と呼びます。復活の主から任じられた女性です。ある園で、エバは惑わされました。この園には、男性の姿は見えません。ただ一人の女性がいるだけです。自分の主であり解放者である方を失って、その方を捜している女性です。生きている方ではなく、死んだイエスを捜しています。彼女は自分の存在そのものを、この方に結びつけていました。この方は彼女のすべてでした。この忠実さと愛を、主イエスは高く評価し、ほめたたえられます。

マグダラのマリアは、復活の主に最初に出会い、その方から、ご自分の復活のメッセージを弟子たちに宣べ伝えるよう任じられた者として挙げられています（ヨハネ20:11-18）。そのため彼女は、すでに古代教会において「使徒に等しい者」として崇敬されました。3世紀には、ローマのヒッポリュトス（Hippolyt von Rom）がapostola apostolorum、すなわち「使徒たちの女性使徒」という尊称を基礎づけました。この呼び名は、神学者ラバヌス・マウルス（Hrabanus Maurus）や、さらにはトマス・アクィナス（Thomas von Aquin）にまで受け継がれました。トマスの女性観については、すでに示唆したとおりです。

「イエスは女性運動を創始したのではなく、人間のための運動を創始しました。しかし、女性たちが彼の考えに特に受け入れやすかったのは、驚くにあたりません。ときに敵意に満ちた家族の孤立の中に閉じ込められていた女性たちは、世界がどれほど不確かで、不公正で、孤独であるかを知っていたのです。」[38]

イエスのもとには、女性の階層的な服従を示すものが何一つ見当たりません。教会における公の奉仕や指導の奉仕から女性を締め出すことを示すものもです。女性に

38. Boulding, Elsie, 358, A View of Woman through Time, 1976

対するイエスの振る舞いの中に、ラビたちの女性観が、創造主の構想からどれほど遠く離れてしまっていたかが、はっきりと表れています。

メシアは、エバの娘たちを顧みてくださいました。神をその最も深い本質において、完全に啓示された方がです。

あなたはいつも良い方で、私にこんなにも多くの良いことをしてくださいます！主よ、あなたのみこころを知ることができるよう、私を助けてください！

詩
篇119篇68節（グーテ・ナッハリヒト訳〔Gute Nachricht、ドイツ語聖書翻訳〕）



主よ、あなたのことばは、とこしえに堅く立っています。それは天のように揺るぎません。

詩篇119篇89節（ノイエ・ゲンファー訳〔Neue Genfer Übersetzung NGÜ、ドイツ語聖書翻訳〕）

4 女性の友パウロ

私は何度も耳にしてきましたし、ときには自分でも考えてきました。イエスとパウロは同じことを意図し、同じことを語っているのではない、と。まるで二人が互いに矛盾していたかのようにです。そう見たいのであれば、理由をこしらえることはできるでしょう。私は、パウロはイエスの足跡をたどって歩んでいると考えています。女性に関することにおいてもです。女性の尊厳、献身、忠実さにおいてもです。実際、手紙によって教会における女性像をイエス以上に形づくっているのは、パウロなのです。しかし、パウロを誤解する人は、イエスとの対立を作り出すことになります。

パウロ自身、手紙のいくつかの箇所で、多くの人にとって女性の敵として歴史に名を残すきっかけを与えています。けれども、受け止め方は変わりつつあります。それは、問題の箇所を、私たちが別の仕方で理解できるし、またそうしなければならないかもしれないからです。これについては後で詳しく述べます。

パウロは、ギリシア思想の影響を受けて、あまり女性を尊重しない女性観を持っていたパリサイ派の伝統の出身でした。それにもかかわらず、彼はそこから完全に解放されました。[39] この本の別の箇所で、私はある推測を述べています。ダマスコへの途上でキリストに出会った直後のアラビアでの三年間は、パリサイ派的な刷り込みのあらゆる重荷を取り除くための、厳しい学校だったのではないか、という推測です。というのも、イエスがすでに打ち破られたタルムードの女性像は、神の王国には居場所がないからです。

疲れを知らないしもべパウロの働きは、多くの女性たちに囲まれ、彼女たちと結びついていました。彼女たちはパウロの宣教に組み込まれ、鎖の輪のように、欠くことのできない同労者でした。神がご自分の王国において、女性たちを通してどれほど大きなわざと実を生み出してこられたか、それに気づいていない男性たちもいるのではないかと、私は危惧しています。あらゆる世紀において、特に18世紀と19世紀においてです。そこでは神にとって、女性が公に教え、指導してよいかどうかは、まったくどうでもよいことのように見えました。どう言いくるめようとも、問題が生じたのは、「創造の主人」たる男性たち（Herren der Schöpfung）が男性中

39. 教師ガマリエルが同僚たちよりも肯定的な女性観を持ち、それを教えていて、パウロもそれを受け継いだのだ、という推測もあります。

心の聖書解釈に固執し、女性の奉仕についての神のご計画を、いわば無効にしてしまったときでした（ルカ7:30）。

この章では、独身のパウロが手紙の中で女性たちの名前を挙げている、いくつかの例を挙げます。まずは、男性であること、女性であることについての原則的なことや教義的なことではありません。それについては後で扱います。ここで扱うのは、パウロが関わった実在の女性たちです。「パウロと共に奉仕に結ばれていた女性たちの数から考えると、女性が福音の宣教や、若い教会にあったさまざまな奉仕に積極的に携わることは、普通のことだったように思われます。基本的に、パウロは女性の同労者と男性の同労者を描くのに、同じ言葉を用いています」。[40]

この点でよく知られているのは、ローマ人への手紙16章のあいさつのリストです。そこでは女性たちが、名前だけでなく、その奉仕を表す称号とともに挙げられています。公の指導的職務から女性を締め出す立場をとる人々は、これらのテキストを私とは違うふうに読みます。それがどういう意味でありうるのか、あなたご自身で判断してください。私の読み方は、創造の記事から出発しており、この本のほかの章で詳しく論じています。教会の公の奉仕においても両性が平等であるというその読み方は、単に可能であるだけでなく、いくつかの場合には明白です。

4.1 ルディア

ヨーロッパで最初のキリスト者は、一人の女性キリスト者です。ローマの植民都市ピリピの紫布の商人、ルディアです。彼女は自分の家を、パウロとその同行者たち、そしてヨーロッパで最初のキリスト教会のために提供します。彼女は、パウロの教えを受ける者であるだけでなく、パウロの対話の相手でもあります。彼女はただ一人の、家の女主人です。彼女は、パウロとその同行者シラスに、自分の家に泊まるよう強く勧めます。

> [使徒の働き 16:14-15] ティアティラ市の紫布の商人で、神を敬うルディアという女の人が耳を傾けていた。主は彼女の心を開いて、パウロの語ることに心を留めるようにされた。そして、彼女とその家の者たちがバプテスマを受けたとき、彼女は「私が主に忠実な者だと判断してくださるなら、私の家に来てお泊まりください」と頼み、無理にも私たちをそうさせた。

40. Tucker, Liefeld, 436（Kuen, Alfred, Die Frau in der Gemeinde, 1998 における引用）

> [使徒の働き 16:40、ドイツ語エルバーフェルト訳聖書から翻訳] 二人は牢獄から出て、ルディアのところに行った。そして兄弟たち（あるいは、ルディアのもとに集まっていたきょうだいたち）に会って彼らを励まし、それから出て行った。

「このことは、彼女の家がその後すぐに、家の教会の結晶点となったことを示しています。教会は家々に集まっていました。そしてルディアだけでなく、ほかの女性たちも、教会に自分の家を提供した人々として登場します。そしてそこには、こうした人々の自然な指導的役割もあります――女主人や主人として教会における指導的役割を担い、その後それぞれの教会を指導していたかもしれない、そして礼拝を司っていたかもしれない人々の役割です。」[41]

4.2 フィベ

> [ローマ人への手紙 16:1-2、ドイツ語エルバーフェルト訳聖書から翻訳] 私たちの姉妹フィベをあなたがたに推薦します。彼女はケンクレアの集会の奉仕者でもあります。どうか、聖徒にふさわしく主にあって彼女を迎え、彼女があなたがたを必要とすることは何であれ、助けてあげてください。彼女自身も多くの人の援助者（ギリシア語：prostatis）であり、私自身の援助者でもあったのです。

フィベで始まるあいさつの言葉は、彼女こそ、ローマ人への手紙をコリントから、ローマ帝国の首都へと届けた人物であることを示しています。そこで彼女はおそらく、教会（あるいはいくつかの家の教会）でこの手紙を朗読し、質問に応じてそれを説明したのでしょう。彼女は、コリントの港町ケンクレアの教会の女性執事です。彼女はパウロから、郵便配達の務めを超える、きわめて責任の重い任務を受けています。

「強調しておきたいのは、ローマ人への手紙のこの観察が、奉仕における女性についての議論の終わりではないし、終わりでありえない、ということです。私たちが取り組まなければならない、ほかのテキスト、文脈、解釈があります。しかし私は、パウロが、女性が教会で一種の語り手の役割を果たすことに、何の問題も感じていなかったように見えることを指摘しておきます。もし彼が実際に懸念を抱いて

41. Sabine Bieberstein（アイヒシュテットの新約聖書学者）、ドイツラジオ（Deutschlandfunk）のインタビュー、2013年

いたのなら、フィベをローマに送ったのは、本当に、本当に奇妙なことでした。私の結論はこうです。パウロによる女性執事フィベへの称賛、彼の後援者（教会のパトロン）としての彼女の立場、そして手紙の運び手であり、ローマの諸教会における彼の代理人としての彼女の役割は、女性が教会の教える営みの一部であったことを示しています。そしてパウロは、明確に彼女たちを励ましていたのです」。[42]

「フィベは単純に、ケンクレアの家の教会の中心的な女性であったと考えることができます。おそらく自分の家を提供し、主の晩餐の祝い、すなわち聖餐を後援していた女性です。フィベがこれらすべてに責任を持っていたこと、彼女がこの教会の弁護者あるいはパトロンとしても働いていたこと――これらすべては、ローマ人への手紙16章に基づいて言うことができます。」[43]

パウロは彼女を Prostatis と呼んでいます。エルバーフェルト訳〔Elberfelder、ドイツ語聖書翻訳〕では「援助者」（Beistand）と訳されている語です。しかし、新約聖書でこの箇所に一度だけ出てくるこの語は、「上に立つ」という意味も持っています。「ヘレニズムのユダヤ人であり、離散の地で育ったパウロが、町の第一人者、主人、擁護者、あるいは議長を務める役職者としての prostates というギリシア語の概念に精通していたと考えるのは、理にかなっています。これは、ローマのキリスト者の指導者たちがフィベを迎えたとき、彼女が出身地においてキリスト者の女性指導者であったことを、彼らが承知していたことを意味するでしょう。」

ローマ人への手紙12章8節によれば、上に立って導くことはキリストのからだにおける恵みの賜物であり、したがって決して男性だけのものではありません。 女性も男性とまったく同じように、この賜物を持っています。上に立って導くことは、長老の務めの一部です（テサロニケ第一5:12、テモテ第一5:17／3:4、5、12）。こうしたパウロの言葉を考えれば、女性が長老や指導者（Ältestinnen oder Vorsteherinnen）になるべきだということも、奇異なことではないはずです。集会の中で黙っていなければならなかったり、公に語ったり指導したりすることが許されなかったりするなら、教会の上に立って世話をする奉仕も、それに伴うみことばと教えの労苦も（テモテ第一5:17）、決して熱心に果たすことはできないでしょう。

「彼女は Prostatis、すなわち上に立つ女性であり、Diakonos とも呼ばれています。そしてここから問題が始まります。それは奉仕者なのか、教会のお手伝いなのか、どう訳すのか、と。」この点について、聖書解釈者たちは今日に至るまで議論

42. Bird, 37
43. Heininger, Bernhard, ヴュルツブルク, 同書

しています。新約聖書の統一訳〔Einheitsübersetzung、ドイツ語聖書翻訳〕は、あっさりと「ケンクレアの教会の奉仕者」と言っています。「……この語の解釈、あるいは影響の歴史は、次のような道筋をたどってきました。パウロのような男性が自分を diakonos と呼ぶと、彼はみことばの奉仕者、つまり使徒であり、ひたすらみことばに仕える、まっすぐで自由な男性だとされます。しかし女性がそう呼ばれると、彼女は『ただ手伝うだけ』という意味での教会のお手伝い（Gemeindehelferin）とされるのです。」[44] フィベは、パウロと共にキリストのメッセージを広めるために働いた人々の、大きな輪に属しています。パウロは彼女を姉妹と呼んでいます。それは、彼の個人的な敬意と、二人の間の関係を特徴づけています。手紙を届けた者として、フィベは、ローマの教会から問い合わせがあったときの最初の窓口でした。彼女はパウロの思考の筋道をよく知っていました。それゆえ、このテキストの最初の解釈者とみなすことができます。

パウロは一人の女性フィベに、おそらくキリスト教の最も重要な文書を託しました。これは単なる手がかりではありません。証拠です。神の王国における奉仕と役割に関して、パウロが性による区別をしなかったことの証拠です。

4.3 プリスカ

> [ローマ人への手紙 16:3-5] キリスト・イエスにある私の同労者、プリスカとアキラによろしく伝えてください。（二人は私のいのちを救うために、自分の首を差し出してくれました。彼らに感謝しているのは、私だけでなく、異邦人のすべての教会も同様です。）また、彼らの家にある教会によろしく伝えてください。

最もよく名前の挙がる夫婦プリスカとアキラは、おそらくパウロの宣教活動において、最も長く、最も親密な同労者でしょう。彼らはユダヤ人キリスト者でした。夫婦の場合はいつも夫が先に挙げられていたにもかかわらず、新約聖書は妻のプリスカを四回（六回のうち）先に挙げています。なぜでしょうか。彼女が奉仕において先に立ち、率いていたからです。もしかすると、彼女のほうが夫より賜物に恵まれていたからかもしれません。それでも二人は、チームのパートナーとして、同じ価値を持ち、同等の地位で、一つとなって働きました。それぞれが相手の長所と短所を知っていました。女性として、プリスカは戦略的にも重要でした。女性はたいて

44. Sutter Rehmann, Luzia, バーゼル

い、男性によってではなく、女性によって伝道されたからです。二人は、プリスカを先頭に、アポロを教えました。パウロ自身から教えを受け、天幕作りを共にする長い時間の中で問答によって訓練されて、二人はほかの人を教える力を十分に備えていました。ここではまさに、一人の女性であるプリスカに特に言及すべきです。夫は彼女の後ろ、二列目に立っていました。しかし、そのことによって階層秩序が生じたわけではありません。

4.4 ユニア

> [ローマ人への手紙 16:7] 私の親族で、私と一緒に投獄されたアンドロニコとユニアによろしく伝えてください。二人は使徒たちの間で際立っており、また、私より先にキリストにある者となりました。

もう一組の宣教者の夫婦が、パウロによって称賛されています。新約聖書の最初期の解釈者である教父たちは、ユニアについて深い敬意をもって語っています。ヨハネス・クリュソストモス（Johannes Chrysostomos、紀元344〜407年）は、ユニアについてこう書いています。「使徒であることは偉大なことです。しかし、使徒たちの間で名高いとは――それがどれほど大きな賛辞であるかを考えてみなさい。使徒という称号にふさわしいと認められたこの女性の知恵は、どれほど大きなものだったことでしょう。」

しかし、いくつかの翻訳では、今日に至るまで、女性の名ユニアの代わりに別の名前が読まれます。ユニアス（Junias）――男性です。ところが、ユニアスという名前が確認できる形で初めて現れるのは、13世紀のことです。ローマのアエギディウス（Ägidius von Rom）のもとでです。彼はアウグスチノ隠修士会の修道士で、教会博士トマス・アクィナス（Thomas von Aquin）の弟子でした。なぜユニアがユニアスになったのでしょうか。多くのキリスト者の世界観においては、女性使徒は存在しえない、あるいは存在してはならないからです。

研究においては今では、女性形のユニアこそがパウロの元の形に違いない、という見解が定着しています。「前世紀の半ばに、次のことが明らかになりました。古代には男性名のユニアスはほとんど存在しない、つまり確認されていないのに対し、女性名のユニアは頻繁に確認されるのです。ユニアをユニアスにしてしまったものは、おそらく誤った職務理解に基づいてしか説明できないでしょう。アンドロニコとユニアは、ローマ人への手紙16章7節で、使徒たちの間で際立っていると呼ばれ

ています。そして、ユニアを使徒の一人に数えることは、困難であったし、今も困難なのです。」[45]

女性使徒ユニアに賛成する議論と反対する議論、そしてその出版物は、数えきれません。もし彼女が使徒であったとしても、それは十二人やパウロのような意味ではなく、戦略的で効果的な女性宣教者としてでしょう。たとえ彼女が使徒ではなかったとしても、彼女に寄せられた評価は非常に大きかったに違いありません。古代の文化において、それは普通のことではありませんでした。それは、福音の癒やしの力が、性の問題にまで広がっていった様子を示しています。しかしまた、男性中心の教会の世界が、この事柄にどれほど苦労しているかも示しています。

「アンドロニコとユニアは、おそらく夫婦であり、教会から宣教者のように派遣される者という意味での使徒であった可能性があります。ピリピ人への手紙2章25節のエパフロディトや、コリント人への手紙第二8章23節のテトスのようにです。しかし、そのような人々は通常、出身の教会によって、『諸教会の使徒』とか『あなたがたの使徒』、あるいはフィベのように『ケンクレアの教会の奉仕者（女性執事）』とさえ呼ばれます。あるいは、アンドロニコとユニアは、イエスの復活の証人であり、当時、今パレスチナの外で果たしている職務へと任じられた、という意味で使徒であったのかもしれません（コリント第一15:6-7）。このことは、パウロが彼らについて『私より先にキリストにある者となった』と言っている事実によって支持されます。したがって彼らは、紀元30〜32年ごろのいずれかの時点で、パレスチナにおいて回心したことになります。ローマ人への手紙で『使徒』という語がほかに出てくるのは、異邦人のもとに行くというパウロの任務を描く箇所だけです（ローマ1:1、11:13）。エルドン・エップ（Eldon Epp）は最近、こう確認しました。『キリスト教の最初期の世代に、明確にそう呼ばれた女性使徒がいたことは、事実であり続けます。そして今日のキリスト者は――信徒も聖職者も――この事実に向き合わなければなりません（そして最終的には向き合うことになるでしょう）。』」[46]

4.5 マリア、ツルパイナとツルポサ、ペルシス

[ローマ人への手紙 16:6] マリアによろしく伝えてください。彼女はあなたがたのために非常に労苦しました。

45. Heininger, Bernhard, 同書
46. Bird, Michael, 同書

[ローマ人への手紙 16:12] ツルパイナとツルポサによろしく伝えてください。二人は主にあって労苦しています。愛するペルシスによろしく伝えてください。彼女は主にあって非常に労苦しました。

パウロが労苦や奉仕について語るとき、何を思い浮かべるでしょうか。パウロは自分の奉仕全体、自分がしたことのすべてを、労苦（Arbeit）としてまとめています（たとえばコリント第一15:10、16:10、ガラテヤ4:11、テサロニケ第一3:5、5:12）。宣教すること、教えること、勧めること。どれも、しばしば公の場で行われ、みことばに仕える奉仕でした。この女性たちの奉仕を、パウロの奉仕と違うふうに理解する理由が、私たちにあるでしょうか。 彼女たちは勇敢な女性たちでした。自分の周囲で、自分の置かれた個々の状況の中で、キリストに仕えていました。台所や家の中だけでなく、家の教会でもです。教会の建物は、まだありませんでした。集まりは個人の家で、あるいは野外で行われました。キリスト者たちは、公共の広場や、仕事場や、宿屋でも集まりました。あるいはルディアのときのように川辺で、またバプテスマの場でも、こうした女性たちは、主にある兄弟たちとまったく同じように、力強くそこに立っていました。パウロがほめているのは、神の国のための、公に目に見え、耳に聞こえる働きなのです。

全部で、パウロはローマ人への手紙16章で10人の女性に言及しています。ケンクレアのフィベも含めればです。パウロのほかの手紙に出てくる女性たちも含めると、彼が言及する女性の数は18人に増えます。パウロは女性の奉仕を高く評価し、その多くを奉仕のパートナーとみなしていました。彼は彼女たちを一度も女性牧師とか女性長老とは呼びませんでした。しかし、男性の奉仕のパートナーたちのことも、一度も牧師とか長老とは呼びませんでした。パウロは、権力や権威や威信を示唆する言葉で同労者たちに言及したことは、一度もありません。彼は、彼らが自分の兄弟姉妹であること、そして自分とまったく同じように、イエス・キリストから任務を受けた者であることを理解していました。それが、奉仕と協働についての彼の理解でした。

4.6 ユウオディアとシンティケ

[ピリピ人への手紙 4:2-3、ドイツ語エルバーフェルト訳聖書から翻訳] ユウオディアに勧めます。シンティケにも勧めます。主にあって同じ思いになってください。そうです、私の忠実な同労のしもべであるあなたにもお願いします。彼

> 女たちを助けてあげてください。彼女たちは福音において、私と共に戦ったのです。

福音において共に戦ったということは、福音を宣べ伝えもしたということ以外の意味ではありえません。しかも、公の場で反対にも遭うような仕方でです。

この二人の女性の間には、意見の食い違いがありました。それは共同体に直接の影響を及ぼしました。それは脇の戦場ではなく、教会の心臓部を打つものでした。そこから、彼女たちが一定の指導的、あるいは統率的な役割を担っていたと結論づけることができます。パウロは、クレメンスやほかの同労者たちと一緒に、一息に彼女たちの名を挙げています。まるで一つのチームの中で、二人の個人プレーヤーが、チームの精神を捨てないように諭されなければならなかったかのようです。

もしかすると、彼女たちは、パウロがピリピ人への手紙の冒頭であいさつし、呼びかけている監督（episkopos）たちと奉仕者（diakonos）たちに属していたのかもしれません。男性に対する女性の階層的な服従は存在せず、女性も男性も教会において同等の地位で協力して働く、と確信しているなら、この読み方は何の問題にもなりません。

4.7 クロエ

> [コリント人への手紙第一 1:11] 私の兄弟たち、実はクロエの家の者たちから、あなたがたの間に争いがあると知らされました。

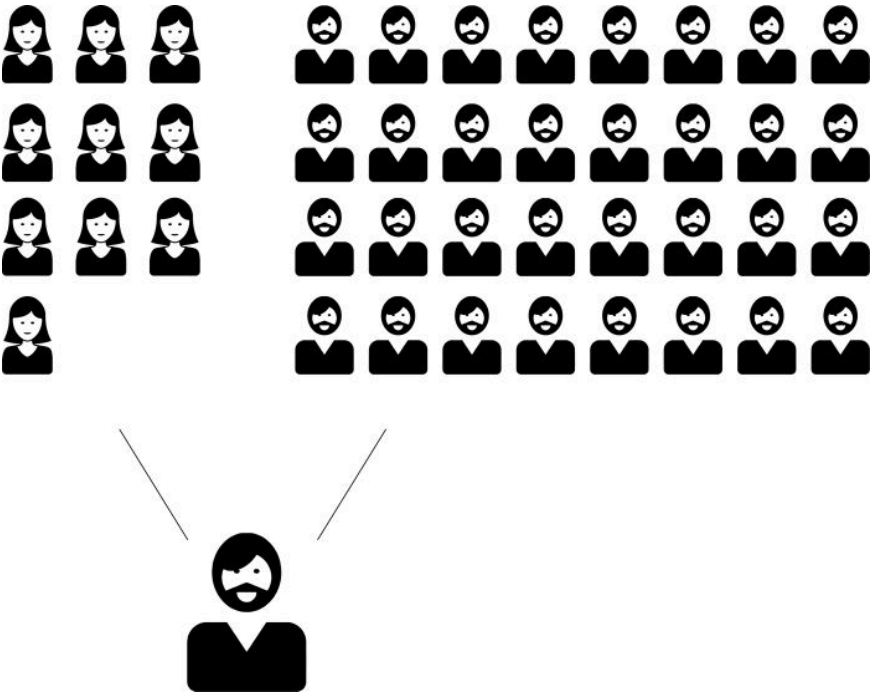
パウロがコリント人への手紙第一の冒頭でまさにはっきりと、クロエの家の人々からコリントの状況を聞いたと書いているのは、言うに値することかもしれません。というのも、それはこういう意味だからです。このクロエは、教会の中で重要な役割、公の役割を果たしていたのです。彼女が指導者であり、パウロのもとへ使節を送ったということも、十分にありえます。

いずれにせよ彼女は、パウロのよい知り合いであっただけではありません。コリント人の間で特別な重要性を持っていたからこそ、パウロが言及した女性でした。パウロのもとでは、そのような重要性は、富によっても、性によっても、よい人脈によっても得られません。信者たちへの奉仕によって得られるのです。

4.8 ニンファ

> [コロサイ人への手紙 4:15、ドイツ語エルバーフェルト訳聖書から翻訳] ラオディキアの兄弟たちに、またニンファと、彼女の家にある集会に、よろしく伝えてください。

家の教会を受け入れることのできる家の女主人たちが、指導的な務めも担っていたと考えるのは自然なことです。必然ではありませんが、十分にありうることです。そもそも、一人の女性が信仰の兄弟姉妹を招いていたことは、注目に値します。女主人として、彼女はやもめだったのかもしれません。もし結婚していて、夫も信者であったとすれば、夫ではなく彼女が女主人として挙げられていることは、いっそう目を引きます。プリスカとアキラの順序の場合と似ています。古代の家庭では、しばしば妻が家を切り盛りする者でした。夫の下にありながら、そこでは大きな自立性をもって行動していたのです。注目すべきことに、コロサイ人への手紙では、いわゆる家庭訓、いわば家父長制の家族の家の規則も挙げられています。[コロサイ人への手紙 3:18]「妻たちよ。主にある者にふさわしく、自分の夫に従いなさい。」それでも、招いているのはニンファなのです。



パウロは新約聖書の中で、39人を自分の同労者として名前を挙げています。そのうち10人が女性です。彼はすべての人について同じように語り、何の区別もしていません。ブレザレン運動（オープン・ブレザレン）出身で、世界的に尊敬されている著名な神学者F・F・ブルース（F. F. Bruce）は、こう述べています。「（パウロは）同労者の間で、男性と女性を何ら区別していないように見えます。男性も女性も、福音の奉仕における協力について称賛を受けています。身分や働きに関して、一方と他方の間に隠れた違いがあることをほのめかすものはありません。」もしかすると、さらに多くの女性の名を挙げ、その名前と称号をもっと詳しく調べることもできるでしょう。しかし今や、パウロがその時代にとって革命的な女性の友であり、階層の壁を取り壊した人であったことは明らかでしょう。イエスの学校で学んだ人です。地上のイエスを個人的に体験してはいなかったにもかかわらず、です。しかし彼は、イエスについてできるかぎり多くを知るために、多くの機会を用いました。ペテロや、自分の同労者ルカから、イエスについて多くを聞いたことでしょう。その中には、女性に対するイエスの振る舞いも含まれていました。私たちの知るかぎり、パウロの旅の一行には男性の同労者しかいませんでした。それでも、こ

れらのテキストが示すように、彼は女性を二列目に置くような区別はしませんでした。彼にとって決定的だったのは、彼女たちがどれほど忠実であるか、どれほど賜物に恵まれ、献身的であるかでした。性は、彼にとって問題ではなかったのです！

4.9 乳を飲ませる母、パウロ

パウロは流行の先駆者でした。その時代の流れに逆らう者でした。ギリシア・ローマの男らしさの理想は、社会の階層秩序を熱心に守り、擁護し、実践するものでした。その理想は、パウロのもとでは何一つ肯定的な反響を見いだしません。弱い者を弱いままにしておこうとし、自分の権力の座を固めるこの家父長的で権力志向の振る舞いは、教会にとって大きな危険です。この振る舞いは、コリントのほとんどすべての緊張と分裂の背後に隠れていました。権力の問題は、今日も男性の間でなお一定の役割を果たしており、しばしば中身よりも優先されます。ここでは、女性がその場にいるだけで、たとえば指導的な兄弟たちや長老たちの妻がいるだけで、健全な効果をもたらしうるでしょう。

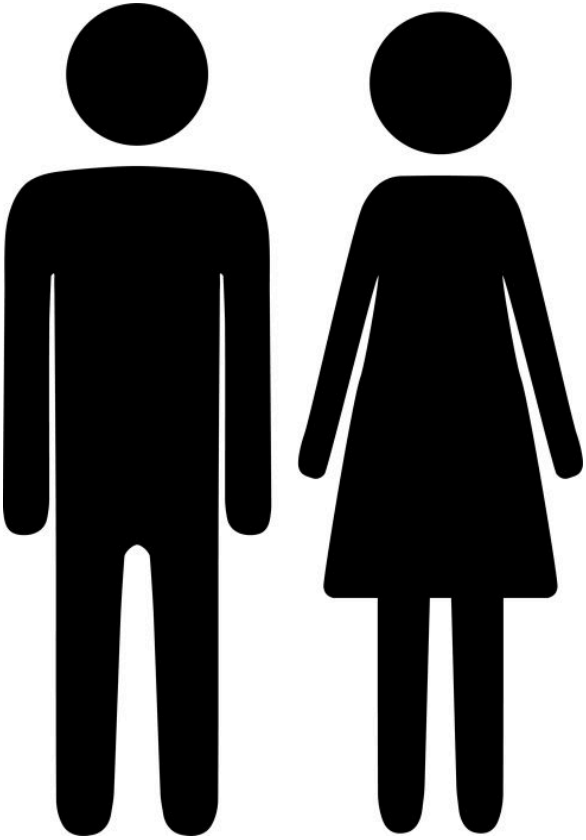
パウロは何度も、自分を見倣うべき者として示しています。彼自身がキリストに倣う者であるように、です（コリント第一4:16、11:1、ピリピ3:17、テサロニケ第一1:6）。彼は話し下手な男であり、キリストのために愚かな者であり、子に乳を飲ませる女であり、子どもたちに恥をもたらす父親であり、独身の男です（コリント第一1〜7章）。そのような男は、当時の社会では必然的に従属的な地位に置かれたでしょう。その結果、男性に留保されている制度や地位から締め出されることになったでしょう。

「パウロの見方からすれば、家父長制の諸制度は、現在の時代の抑圧的な構造を表すものであり、神の民の生き方を代表するものではありません。……男性は愚か者であるべきであり、支配的な弁論家であってはなりません。ローマの法廷での地位を利用するのではなく、争いを仲裁するために地位の低い男性を任命し、自分のからだを妻の権威のもとに置き、弱い者の食習慣に合わせるべきなのです。こうした実践の意味は、党派心を防ぐことにあります。党派心はコリント人を引き裂こうとしていました。それは、ローマ支配下のコリントで蔓延していた、競争と、権力と地位の追求を生み出す振る舞いを終わらせることによって防がれるのです。パウロは、キリストに似た特定の男性のアイデンティティーを作り出します。それが、都市のローマ的文脈で標準となっていた地位と権力のゲームを掘り崩すことを、彼は

知っています。パウロの目標は、信じる者たちの共同体の一致です。この一致に到達するために、パウロは、共同体のある成員をほかの成員の上に置く階層秩序に、直接疑問を投げかけます。そのような制度から利益を得る可能性のある共同体の成員たちに対して、より低い地位の共同体の成員と自分たちを同一視させるようなアイデンティティーを、意図的に体現するよう呼びかけることによってです。権力と男らしさが至るところで結びついていたため、パウロは、コリントの男性たちが追い求めていたこの種の男らしさを、取り上げる必要があったのです。」[47]

古代社会における男性の役割の問題について、イギリスの著名な作家トム・ホランド（Tom Holland）は、次のような観察をしています。「（古代世界の）性の経済は、自由なローマ人男性が、望む相手ならだれとでも、好きなように性交する絶対的な権利の上に成り立っています。」さらに、権力を持つ男性たちの一般的な振る舞いについて、彼はこう言います。「ほとんどあらゆる点で、これは私たちの考え方からすれば、言いようもなく残酷な世界です」。ホランドの見方によれば、この世界の中へ、パウロの手紙と思想が大きな影響力をもって入って来て、とりわけ支配的な男性の世界をかき乱すのです。

47. Being Subordinate Men: Paul’s Rhetoric of Gender and Power in 1 Corinthians, Brian J. Robinson, Lanham, 2019, 214



5 結婚における男と女

創造の物語から、私は、男性に対する女性の階層的な服従は存在しない、と導き出しました。旧約聖書では、それは求められていません。ところが使徒たちの手紙を読むと、妻は夫に従うべきだということが、一度ならず指摘されています。そこから――たとえ何千年も後のことであっても――今や結婚生活の中で生きられるべき階層秩序を読み取ることができるかもしれません。これらの指示は、どのように理解すべきでしょうか。そのためには、一世紀の結婚生活と家庭生活を振り返ることが必要です。歴史における男性と女性の関係について、私がすでに描き、引用してきた多くのことが、ここでもう一度生き生きと思い起こされます。

5.1 古代の家とその規則

オイコス（Oikos、ギリシア語：οἶκος）とは、古代ギリシアとローマにおいて生活の中心をなしていた、家と経済の共同体のことです。オイコスには家族のほか、使用人や奴隷、土地、建物、そして動かせるすべての財産が含まれていました。ローマのウィラ（villa）に似ています。家族の長は主人、すなわちキュリオス（Kyrios）でした。彼は家父長として妻と子どもたちを支配し、しばしばオイコスに住む成人した息子たちとその妻たちをも支配していました。

家は生活の場であり、私たちが「家族」と呼ぶものの古代の形でした。一人か二人の子どものいる核家族ではありません。両親あるいは義理の両親や、未婚の親族をも含む大家族です。家の大きさは、当然ながら経済力と結びついていました。大多数の人々は貧しく、生存ぎりぎりの線か、それ以下で暮らしていました。たとえ土の小屋に住んでいても、彼らの社会的な家族構造はやはり古代の家のそれでした。

古代の家は古代社会の背骨でした。家を治め、導くことは、家の主人、すなわちパテルファミリアス（paterfamilias）の務めでした。家（domus）は、古代の著述家たちによって社会の細胞、小さな都市と呼ばれましたが、同時に、初期のキリスト教会にとって最も重要な比喩の一つとなりました。たとえば、教会が家、あるいは家の共同体と呼ばれ、神がその家の主人として治めておられるという場合です（テモテへの手紙とテトスへの手紙を参照）。

このように家は古代の家族の典型であり、現実の家であると同時に、神の家である教会のたとえでもあります。これらの家で、キリスト者の集会が開かれていました。

使徒の働きもパウロも、しばしば家について語ります。家とは何かという私たちの理解を、パウロの時代の文化的環境の中で捉えなければなりません。私たちの時代の眼鏡を通してではありません。

自分の家を治める女性たちもいました。その中には少なからぬやもめがいました。彼女たちは家の教会の女主人となり、その立場で指導的な役割も担っていました。

古代の家は、家の祭壇のある神聖な場所でした。そこでは毎日、神々にいけにえがささげられました。家の中の人間の共同体の安寧は、神々との関係を手入れすること（cultus）にかかっていました。それによって神々との平和が保たれるとされていたのです。家は女性の領域であり、女性が祭司としてこの祭儀を執り行いました。妻がキリスト者になり、夫はならなかった場合、どれほど難しい状況が生じたか、想像してみてください。

なぜこうした歴史的事実がこのテーマにとって重要なのでしょうか。使徒たちは、その指示を、こうした古代の関係構造の中へ語りかけているからです。私たちはその構造を細部まで知っているわけではなく、今日その中で生きているわけでもありません。

家、すなわち（大）家族は、新約聖書の中で所与のものとして描かれています。良いとも悪いとも評価されていません。それは太古からの「文化の産物」です。何千年にもわたってそのように発展してきました。多くの長所と短所を伴って。そこへ福音が入ってくるのです。

5.1.1 新約聖書の家庭訓

「新約聖書における家庭訓（Haustafel）とは、古代のキリスト教的な家の構成員が互いの関係において守るべき、身分・職分・役割についての規定を指します。マルティン・ルター（Martin Luther）によって作られたこの用語（『小教理問答』第二付録、1529年）は、ルター訳聖書〔Lutherbibel、ドイツ語聖書翻訳〕において『キリスト者の家庭訓』という形で、エペソ5:21–6:9とコロサイ3:18–4:1の小見出しとして用いられています。この用語は、倫理的な性格を持つ新約聖書の本文のうち、家の中の人々の集団、ときには教会（『神の家』としての教会、テモテ第一

3:15）の中の人々の集団にかかわるものについて用いられますが、社会的・政治的な領域にかかわるものには用いられません。」[48]

結婚において夫と妻がどのように振る舞うべきか、あるいは互いの関係における自分の役割をどう理解すべきかについての箇所は、いわゆる家庭訓、あるいは家政規範に属します。結婚についての新約聖書の教えは、家全体が、その一部または全員がキリスト者になった今、互いの新しい立場をどう見るべきか、という問いと結びついています。 これについては、新約聖書と初期キリスト教の文書に数多くの例があります。

エペソ人への手紙5章21節–6章9節、コロサイ人への手紙3章18–19節、テモテへの手紙第一2章8–15節（男性と女性）

テモテへの手紙第一6章1–2節（奴隷と主人）

テトスへの手紙2章1–10節（年配の男性、年配の女性、若い男性、奴隷）

ペテロの手紙第一2章18節–3章7節（奴隷、妻、夫）

これらは、『ディダケー』を含む後代のキリスト教文書の中で、別の方向へと発展していきます。『ディダケー』4:9-11（父親、子ども、主人、奴隷）、『バルナバの手紙』19:5-7（父親、子ども、奴隷、主人）、『クレメンスの第一の手紙』1:3（指導者、若者、女性）、21:6-9（指導者、年長者／大人、若者、妻、子ども）、イグナティオス（Ignatius）の『ポリュカルポスへの手紙』4:1–6:2、およびポリュカルポス（Polykarp）の『フィリピの人々への手紙』4:2–6:1（妻、やもめ、執事、若い男性、処女、長老）。

社会集団に向けたこのような基本的な教えは、キリスト教以外の文書にも現れます。おそらく最もはっきりしているのはアリストテレス（Aristoteles）の『政治学』であり、さらにアリウス・ディデュモス（Arius Didymus）や、街頭の哲学者たち（偽カロンダス〔Ps.-Charondas〕、偽ザレウコス〔Ps.-Zaleukos〕）にも見られます。

「マクナイト（McKnight）は、これらの家庭の規則が、読む人によって違った語りかけ方をすると指摘しています。ある人々にとって、それらは紛れもなく家父長的な構造を支持するものです。それらは、父であり夫である者が家の長であるという階層的な見方を裏づけます。そしてそれによって、彼が自分の保護下にあるすべ

48. WiBiLex, Das wissenschaftliche Bibellexikon im Internet（インターネット上の学術聖書事典）

ての人に対して権威を持つということを、はっきり意味しているのです。別の人々には、それらは別のことを示します。『これらの箇所に家父長制の確立を見いだす人々がいる一方で、まさにこの構造が王座から引きずり降ろされている、あるいは少なくとも引きずり降ろされる可能性を持っている、と見る人々もいます。 つまり、聖書においてしばしばそうであるように、これらの家庭訓は、書き手たちの古い視点について何かを語ると同時に、それを読む私たち自身についても何かを語っているようです！……家庭訓の解釈には私たち自身の社会的な考えが持ち込まれるということに、私たちは皆同意すべきでしょう。』」[49]

当時のキリスト者の妻にとって、自分に服従が求められていると聞くのは、何も新しいことではありませんでした。しかし私が想像するに、夫たちへの指示が、皆に聞こえるように、つまり家の教会全体に向けて読み上げられたとき、それは家中に大きな波紋を広げたことでしょう。今や妻も周囲の人々も、この振る舞いが彼、すなわちパテルファミリアスにも求められていることを知ったのです。ここでキリスト教の革命が起こります。

5.1.2 キリスト教の家庭訓の影響

「スコット・マクナイト（Scot McKnight）は、キリスト教の家庭訓には具体的な目的があったと指摘しています。それらは『社会的に尊敬される振る舞いを、社会的な安全、弁証、伝道のための土台として促すように作られていた』のです（ペテロ第一2:13–3:7、特に2:12, 14、3:2）。

キリスト者は、『自由な者として生き、しかしその自由を悪を行うために用いない』べきです。『神の奴隷として生きなさい』（ペテロ第一2:16）。キリスト者は、秩序を揺るがすメッセージを宣べ伝えているのではないかと疑われていました。それで彼らは厳しく吟味されました。そして、ギリシア・ローマの道徳哲学では家庭が『文明の基本単位』と理解されていたので、疑わしい宗教が家族に及ぼす影響は綿密に監視されていたのです。

手紙は家庭訓の中に、当時の身分理解から離れ、それを転換させるという、内側から切り崩す要素を持っています。下位の者たちが、手紙の中で直接語りかけられているのです。これはまさしくキリスト教的な新しさであり、古代の環境の中ではどうやら比類のないものです。新約聖書の家庭訓は、女性、奴隷、子どもたちに、そ

49. Peppiatt, Lucy, 87-88頁, Rediscovering Scripture's Vision for Women: Fresh Perspectives on Disputed Texts, 2020, IVP Academic, Downers Grove, Illinois

の夫、主人、父親と並んで直接語りかけています。これは、筆者が彼らの行動する力と尊厳の両方を認めていることを示しています。

ハータド（Hurtado）はこう書いています。『このような、たとえささやかな尊厳の承認であっても、この古代の環境において、ほかに自分の状況を変えることのできなかった人々にとってそれが何を意味したかを、性急に見過ごしてはなりません。現代の読者には明らかでないことですが、キリスト教の家庭訓は、従属的な集団を、〈自分たちに向けられた勧告に応答する能力と責任のある〉道徳的な行為者と見なしているのです。家全体がともに礼拝をささげ、手紙は集まった教会に読み上げられたことを思い起こしてください。身分の低い人々は上の者たちへの指示を聞き、その逆もまた同じでした。これこそが、キリスト教の家庭訓が秩序を揺るがすものであった理由の鍵です。それらは、男性、女性、奴隷、子どもに認められていた通常の身分と、彼らに課されていた期待とをひっくり返す力を、内に秘めていたのです。』」[50]

5.1.3 エペソ人への手紙5章の家庭訓

古代の家の規則、すなわち家庭訓という見出しのもとで、私は二人の著名な聖書解釈者を引用します。彼らは、こうした古い構造に対する福音の、すべてをひっくり返す革命的な力を見事に言い表しています。

マイケル・バード（Michael Bird）は、有名なNICNTシリーズの新しいエペソ書注解についてリン・コーヒック（Lynn Cohick）にインタビューし、とりわけ次の質問をしました。[51] 今日、私たちは家庭訓をどう扱えばよいのでしょうか。文字どおりに従うよう努めるべきでしょうか。それとも、異教の社会倫理をキリスト教化しようとする試みとして、それを美化するのでしょうか。

「私たちは聖書に聞き従うべきです――もちろんです！問題は、パウロが何を求めているかです。ここで『文字どおり』という言葉が出てきます。奴隷制についての規定を含む聖書に、私たちは文字どおりに聞き従うことはできません。奴隷制は禁じられているからです（もっとも、たとえば女性の人身売買のように、奴隷制がいまだに存在することは承知しています）。私たちは暗黙のうちに認めています。パウロは、社会に奴隷制がなければならないと主張しているのではありません。むし

50. Peppiatt, Lucy, 87-88頁, Rediscovering Scripture's Vision for Women: Fresh Perspectives on Disputed Texts, 2020, IVP Academic, Downers Grove, Illinois
51. www.patheos.com/blogs/euangelion/2020/07/lynn-cohick-on-ephesians/#disqus_thread

ろ彼は、奴隷や奴隷所有者である自分の構成員を教会がどう扱うべきか、という必要に語りかけているのです。私たちは、人間関係と品性／徳について彼が何を望んでいるかを見いだし、それを私たちの文脈に適用しなければなりません。奴隷制についての箇所から私が読み取るのは、パウロの言葉――神はだれもえこひいきなさらない――が、支配と虐待の関係の核心を突いているということです。奴隷制は、支配と暴力の行使と威圧の上に築かれていました。そのすべては神にとって受け入れられないものです。神はすべての人を同じ価値ある者と見ておられるからです。

異教の社会倫理は階層的でした。社会的に上位の者、富める者、支配的な者には支配の取り決めがあり、貧しい者には社会的な地位／尊重が欠けていました。女性の奴隷所有者は、自分の男性奴隷に対して権威を持っていました。この場合、所有が性別にまさるのです。ローマ世界の幾重にも重なる複雑な社会的階層のために、だれもが他のだれかに従わなければなりませんでした。そして肝心なのは、それを正しく行うよう気を配ることでした。今日、私たちは『服すること』を否定的な言葉と見ますが、古代ではそうではありませんでした。 パウロが、すべての信者が『互いに従い合う』（エペソ5:21）よう求めるとき、彼は、彼らが互いを信仰の仲間として尊重することを望んでいるのです。しかも、社会がたまたまその信者に認めていた社会的価値に基づいてではありません。キリストが教会のためにしたように、自分を犠牲にして妻を愛する夫は、非ユダヤ人の世界にとって革命的でした。パウロは結婚に、相互性、共生、互恵性を導入します。夫は妻を、まるで自分自身のからだであるかのように見るからです。ここには、妻もまた夫を、自分自身のからだであるかのように見るということが含意されています。パウロはこれをコリント第一7:1-4で書いています。夫は自分のからだについて権威を持たず、妻が持つ、と述べているのです。結婚を特徴づけるべき相互的で自己犠牲的な愛がどのようなものかをいったん認識し、当時はだれもが他者を敬うために、当時の文化の一部としてだれかに服していたことを認識するなら、文字どおりには『妻たちは自分の夫に、主に対するように』（5:22）となっている、あの議論の多い箇所を新しい目で見ることができます。 注意深い読者は、私が動詞を忘れたことに気づくでしょう。しかし実は、動詞を省いているのはパウロ自身なのです。もっと正確に言えば、前の節から動詞を引き継いでいるのです。その節では、すべての信者がキリストへの畏敬／恐れから互いに従い合うことが求められています。」

5.1.4 互いに服し合うことの根拠

著名な神学者であり聖書釈義家であるクレイグ・キーナー（Craig Keener）は、エペソ人への手紙5章の家庭訓について、冒頭で少し皮肉を込めてこう書いています[52]。「ときどき、パウロは評判を落とします。奴隷たちの体験記には、イエスを愛しながらもパウロを憎んだ元奴隷たちの思いがあふれています。奴隷所有者たちが、エペソ6:5の『奴隷たちよ、主人に聞き従いなさい』を決まって引用したからです。奴隷所有者たちが引用しなかったのは、その箇所の続きでした。そこにはこうあります。『主人たちよ、あなたがたも彼らに対して同じようにしなさい』（6:9）。つまり、奴隷が主人に聞き従わなければならないなら、主人もまた奴隷に聞き従わなければならないのです！

一世紀に、だれかがこの点でパウロを文字どおりに受け取ったでしょうか。おそらくそうではないでしょう。しかしそれは、彼が実際に語ったことが、当時の奴隷制に反対する最もラディカルな見解の一つを表していたという事実を変えるものではありません。彼は、制度を力ずくで倒すことについて語ったのではありません。当時の失敗に終わった奴隷反乱でさえ、それを試みたことはありませんでした。しかし彼は、単なる理論を超えた倫理について語ったのです。

初期のストア派の哲学者の中には、人間の平等を擁護した人々もいました。しかしストア派はそこから後退し、それができる余裕のある人々は奴隷を所有していました。パウロは原則においてストア派に同意しました。彼は、奴隷も奴隷所有者も天に同じ主を持っていることを確認しました（エペソ6:9）。しかし、『彼らに同じようにしなさい』という彼の指示は、理論を超えて実践へと進みます。

これは偶然ではありません。パウロの言い間違いでも、彼の筆記者のペンの滑りでもありません。パウロは家庭訓の部分全体を、互いに服し合うことで枠づけています。家庭訓とは何か、とあなたは尋ねるでしょうか。

国家統治についての著作の中で、ギリシアの思想家アリストテレス（Aristoteles）は、家族の役割について大きな一節を設けていました。その中で彼は、男性の家長に、妻と子どもと奴隷を治めるよう指示しました。後の思想家たちも同じ図式を受

52. www.cbeinternational.org/resource/article/mutuality-blog-magazine/case-mutual-submission-ephesians-5。ホームページ www.cbeinternational.org は、教会における男性と女性の役割というテーマについて良い資料を提供しています。このホームページのモットーは「女性と男性がともに導き、対等な者として仕える」です。

け継ぎました。しばしば同じ順序でです。ローマは、宗教的少数派の集団がこうした伝統的価値観を損なうのではないかと疑っていました。それでそうした集団はしばしば、自分たちがローマの価値観を信じていることを強調しようと努めたのです。

パウロは、アリストテレスと同じ順序で一連の家庭訓を示しています。男性の家長と、妻、子ども、奴隷との関係です。パウロが宗教的少数派の一員のように考えているということはありえます。何しろ彼はローマの獄中から書いており、おそらくローマにいるのです（エペソ3:1、4:1、6:20）。

しかしパウロは標準的な定型を変えます。奴隷を所有する男性たちだけに語りかけるのではなく、教会の大きな部分を占めていた女性、子ども、奴隷にも語りかけるのです。（パウロの都市の教会では、奴隷は家内奴隷だったでしょう。彼らは他の奴隷よりも多くの自由を持ち、解放される機会も多くありました。それでも、彼らはやはり奴隷でした。）

さらに、彼は男性の家長に、治めよとは一度も指示していません。 そうではなく、彼は妻を愛し、彼女のために自分の命をささげることによって彼女に仕えるべきなのです（5:25）。子どもたちを怒らせてはならず（6:4）、奴隷を神に仕える仲間のしもべとして扱うべきです（6:9）。

最も重要なのは、パウロが指示の目録全体（5:21–6:9）を、互いに服し合うよう呼びかけることで枠づけていることです。互いに服し合うこと（5:21）、それも奴隷に対してさえです（6:9）。これは、服従を新しい文脈に置きます。すなわち、私たち皆を互いに仕え合うよう招かれた、私たちの主の模範と教えです（マルコ10:42-45、ヨハネ13:14-17, 34-35参照、ガラテヤ5:13-14）。

今日、ある男性たちは、奴隷所有者たちがエペソ6:5を引用したのと同じように、エペソ5:22（『妻たちよ、夫に服しなさい』）を文脈から切り離して好んで引用します。

しかしギリシア語では、5:22には動詞がありません。単に『妻たちよ、あなたがたの夫に』と言っているだけです。もちろん、『妻たちよ、夫に対して好きなようにしなさい』と言っているのではありません。ギリシア語の文法は、私たちが前の節から動詞を引き継ぐことを前提としています。そしてその動詞は『服する』です。しかし、動詞が5:21から引き継がれる以上、それは5:21と違う意味を持つことはで

きません。妻が服することは、互いに服し合うことの一つの例にすぎません。夫が妻のために自分の命をささげるのと同じように。

ある人々は反論します。『しかし、服することは明らかに妻だけに求められている！』ああ、しかし愛せよという命令は明らかに夫だけに向けられています（5:25）。それでも私たちは、すべてのキリスト者が互いに愛し合うべきであり（5:2）、すべてのキリスト者が互いに従い合うべきである（5:21）と理解しています。パウロはあらゆる状況を網羅しようとしているわけではありませんが、それでも私たちに、互いにどう生きるべきかについての一般的な原則を与えています。相手の利益に気を配り、互いに耳を傾け、自分自身よりも他の人を愛することです。」

5.1.5 キリスト者の生活のための指示——今日

ですから、いわゆる家庭訓は、あらゆる生活状況を捉えて、それに具体的な指示を与えることはできません。しかし、いつでもどこでも当てはまる指示があります。「私たちはこれらの家庭訓について、聖書が社会の中でキリスト者として生きるための枠組みをどのように与えているかを考えます。しかし、多くの人にとって、それらは単に無関係かもしれません。自分自身の生活状況と似たところがないからです。ある人がひとりで暮らしている場合、ひとり親である場合、あるいは西洋でよくあるように友人たちの共同体と一緒に暮らしている場合、家庭訓は彼らの共同生活に何ももたらさないでしょう。さらに私たちは、キリスト者が奴隷を所有することはないと考えます。ですから奴隷はいないでしょうし、おそらく夫も妻も子どももいないでしょう。何世紀にもわたって修道院の共同体でそうであったように、家の中には男性だけ、あるいは女性だけしかいないこともありえます。こうした文脈では、キリスト者の生活は家の規則によってではなく、豊かな『互いに』の振る舞いによって形づくられるでしょう。新約聖書にはこのような節が59あります。そこでは、すべてのキリスト者がまず第一に、『互いに愛し合う』こと、赦し合うこと、励まし合うこと、平和に暮らすこと、互いに忍び合うこと、互いに服し合うこと、互いのために祈ること、持っているものをすべて分かち合うこと、そして互いに憎まず、中傷せず、偽らず、かみ合わず、食い合わないことへと招かれています。結婚しているキリスト者も、キリスト者の親も、これらの『互いに』の節に拘束されており、何よりもまず『互いの愛』への勧めによって形づくられなければなりません。」[53]

53. Peppiatt, 88頁, 同書。

5.1.6 古代の家における女性

古代の家の生活の現実を具体的に理解するために、女性たち、特に女奴隷たちについての次の描写は、私たちを冷静にさせます。「また、家の教会における女性の生活を調べる中で、私たちが二つの証拠を見いだしたことを指摘しておくことが重要です。あらゆるレベルの共同体生活において女性が指導的役割を担い、参与し、参加していたことの証拠と、女性の無力さと苦しみの証拠です。初期キリスト教の女性たちは、この時代の女性たちが直面した恐ろしい運命や状況の多くから逃れることはできませんでした。私たちの注意は特に、制度の中で最も無力な女性たち――ユダヤ人であれ、キリスト者であれ、その他であれ――すなわち女奴隷たちの苦境に向けられました。社会は奴隷制の上に築かれており、それなしには存在できませんでした。大多数の家庭は、どれほど質素であっても、部分的には奴隷労働に基づいていました。奴隷が所有者に対して、また所有者が差し出したすべての人に対して性的に供されることは、当然のことでした。 子どもを産める年齢のキリスト者の女奴隷たちは、しばしばほとんど不可能な状況に置かれていたに違いありません。キリスト教の道徳規範に従って生きるよう教えられていながら、そうすることがしばしば不可能だったからです。たとえば、彼女たちの中には、貞潔であることや、自分の子どもとその子どもたちの父親に対して誠実であることが不可能だった人々がいたことを、私たちは排除できません。また、教会の集まりの一員であった絶望的な女奴隷たちの一部にとって、特に非キリスト者に所有されていた場合、乳児を捨てるという行為が生き延びるための必要のように思えたことも、排除できません。信仰を持つ家庭では生活は違っていたと望みたいところですが、そうであったという確かな証拠はありません。そして、家全体がしばしばそろって新しい信仰に改宗したわけではなかったという証拠は豊富にあります。おそらく、大部分が非キリスト者の家庭の中に多くのキリスト者の奴隷がいて、その信仰生活は実に過酷なものだったでしょう」。[54]

イエス・キリストに対して、また彼の弟子であるすべての人に対して、強制されずに自ら進んで従うこと、あるいは服することは、イエスがどのような方であるかを示します。奴隷所有者が奴隷に服し、夫が妻に服するとき――そしてその逆のとき――神ご自身の本質が明らかになります。しかしその場合、互いに従い合うことの理由が、階層の違いであることはありえません。 階層の違いは（当時の）世界で

54. Osiek, Carolyn, 2006, A Woman's Place: House Churches in Earliest Christianity, 127頁

は規範であり、態度として義務づけられたものでした。神の王国ではそうではありません。ですから、妻が夫に従うことは、階層関係とは何の関係もありません。服従の特徴は、平等であるにもかかわらず従う姿勢をとることにあります。どのみち階層がそれを要求するからではありません。

最後に私はこう述べておきます。この古代の時代は、歴史的に果てしなく遠く感じられるだけではありません。私たちは西洋で、ドイツで、まったく異なる、より自由で、より単純で、より安全な、いや多くの点で祝福された時代に生きているのです。私たちは家庭訓を自分たちのためにどう読むのでしょうか。それは今日、文字どおりに実行できるのでしょうか。私たちはそれをどう適用するのでしょうか。

5.2 かしらと服従——エペソ人への手紙5章

パウロが小アジア、ギリシア、イタリアへ行ったとき、彼は、今日の西洋で私たちになじみのあるものとはまったく異なる仕方で女性を見る文化と接触しました。ですから私たちは、結婚、家族、女性の役割についてのパウロの説明を、当時の女性たちの状況と扱われ方に照らして見るよう努めなければなりません。

男性がかしらであることについての古典的な本文は、エペソ人への手紙5章です。はっきりと、誤解の余地なく、パウロは、夫が妻のかしらであり、妻は夫に服すべきだと言っています。

> [エペソ人への手紙 5:22-33、ドイツ語エルバーフェルト訳聖書から翻訳] 妻たちよ、主に対するように、自分の夫に従いなさい。なぜなら、キリストが集会のかしらであるように、夫は妻のかしらだからです。キリストはからだの救い主です。しかし、集会がキリストに服しているように、妻たちもまた、すべてのことにおいて夫に服しているのです。
>
> 夫たちよ、妻を愛しなさい。キリストも集会を愛し、集会のためにご自身をささげられたのと同じように。それは、みことばにより、水の洗いによって集会をきよめて聖なるものとするためでした。また、しみやしわや、そのようなものが何一つない、聖なる、傷のないものとして、栄光ある集会をご自身の前に立たせるためでした。同じように、夫たちも自分の妻を、自分のからだのように愛する義務があります。自分の妻を愛する者は、自分自身を愛しているのです。だれも自分の肉を憎んだことはなく、むしろそれを養い、大切にします。

> キリストも集会に対して、そうなさるのと同じです。私たちはキリストのからだの部分であり、その肉と骨からなる者だからです。「それゆえ、人は父と母を離れ、その妻と結ばれ、二人は一体となる。」この奥義は偉大です。しかし私は、キリストと集会について言っているのです。いずれにしても、あなたがたもまた、一人ひとり自分の妻を自分自身のように愛しなさい。そして妻は、夫を恐れなさい。

コロサイ人への手紙で、パウロはこう書いています。

> [コロサイ人への手紙 3:18-19] 妻たちよ、主にあってふさわしく、夫に従いなさい。夫たちよ、妻を愛しなさい。妻に対して辛く当たってはいけません。

5.2.1 かしら

エペソ人への手紙5章では、人間の頭（ギリシア語：kephale）は、転義的・比喩的な意味で、導く器官です。この箇所でも、手紙の他の箇所でも、かしらは上位にあること、高く上げられていること、支配を表しています。

注目すべきことに、治め、導き、決定するというかしらのこの機能は、一言も触れられておらず、求められてもいません。 男性たちへの具体的な指示を取り出してみると、どの機能がかしらであることを定義し、どの機能が定義しないのかがわかります。

1. いずれにしても、あなたがたもまた、一人ひとり自分の妻を自分自身のように愛しなさい。
2. 彼はキリストのように、からだの救い主（救助者）です。
3. 夫たちよ、妻を愛しなさい。キリストも集会を愛し、集会のためにご自身をささげられたのと同じように。
4. 同じように、夫たちも自分の妻を、自分のからだのように愛する義務があります。

この箇所では、ほとんどの節が夫たちについて語っており、妻たちについては3節だけです。パウロがかしらの権威を描かず、要求もしていないのには、意図があるのでしょう。彼はそれを単に忘れたのではありません。これについては後でさらに述べます。

5.2.2 古代の家族

この5章と6章の初めでは、夫婦が扱われています。それから父親と子ども、そして奴隷と主人です。これらの人々——祖父母や義理の両親、未婚の兄弟姉妹、おばやおじを加えることもできるでしょう——が家、すなわち大家族を形づくっています（第5.1章を参照）。社会は今日のように核家族によって特徴づけられてはいませんでした。一つ屋根の下に家全体が住んでいました。家父長制として。父親は、いずれにせよ男性であり、家の中で優位な地位を持っていました。自分の妻に対してだけではありません。

この（大）家族の社会構造は、パウロの啓示ではなく、彼の時代の普通のことでした。彼は新しい、あるいはより良い家族モデルを描いているのではなく、新しい「振る舞いのモデル」を描いているのです。

ここで描かれている階層的な序列は、理想的なモデルではありません——たとえパウロがそれをキリストと教会にたとえているとしても——。それは堕落の結果です。家父長制は、夫が妻を支配するという、女性に対する刑罰の言葉の成就の一部なのです。

キリストと教会を夫と妻にたとえることは、教えのための絵、アナロジーです。男性がかしら、すなわちキリストとたとえられるとき、その男性に責任を負わせる絵です。そして、キリストと教会の関係、妻と夫の関係について語るとき、まさに階層を第一に置くことのない絵です。この絵が語っているのは、一致、分かち合い、養い、そして何よりも愛です。

もしかすると、このアナロジーには二重の底があり、それは今日よりも執筆当時のほうが重要で、ふさわしかったのかもしれません。一方で、この絵は当時の役割分担を受け継いでいます。しかし同時に、それを新たに定義し直すためにです。

5.2.3 文字どおりに受け取るべきか

階層的なかしらとからだの絵を、今日に文字どおり当てはめることができるでしょうか。パウロはここで、結婚生活と家庭生活の規範を描いているのでしょうか。私は、家の共同体という文脈で彼が子どもと奴隷をどう描いているかを比べてみます。彼はこう言っています。

> [エペソ人への手紙 6:1-4、ドイツ語エルバーフェルト訳聖書から翻訳] 子どもたちよ、主にあって両親に聞き従いなさい。それは正しいことだからです。「あなたの父と母を敬え。」これは約束を伴う第一の戒めです。「そうすれば、あなたは幸せになり、地上で長く生きる。」
>
> そして父たちよ、子どもたちを怒らせてはいけません。むしろ、主の訓練と戒めのうちに育てなさい。

これらの言葉は、今日の私たちにとっても大切なことを語っています。しかし、当時と今日とで、子どもが何歳まで親の権威のもとにあるのか、と問うことは許されるでしょう。当時、父親は今日よりもはるかに大きな権威を子どもに対して持っていました。今日、子どもたちは自立するように育てられます。注目すべきことに、この関係については愛が語られていません。親についても、子どもについても。

奴隷に関しても、状況はありがたいことにまったく変わりました。しかしそのことは、この本文には表れていません。

> [エペソ人への手紙 6:5-9、ドイツ語エルバーフェルト訳聖書から翻訳] しもべたちよ、肉による主人たちに、恐れおののきつつ、純真な心で、キリストに対するように聞き従いなさい。人のご機嫌を取る者のような、うわべだけの仕え方ではなく、キリストのしもべとして、心から神のみこころを行い、人にではなく主に仕えるように、善意をもって仕えなさい。奴隷であれ自由人であれ、だれでも良いことを行えば、それを主から受けることを、あなたがたは知っているからです。そして主人たちよ、あなたがたも彼らに対して同じようにしなさい。脅すことはやめなさい。彼らの主も、あなたがたの主も天におられ、その方には人をえこひいきすることがないことを、あなたがたは知っているからです。

だれがこれらの言葉を文字どおりに生きることができるでしょうか。これを時代を超えたものとして、今日の雇用主と被雇用者の関係に当てはめようとすれば、失敗するでしょう。それはできません！古代のような奴隷制は、もはや存在しないのです。 ここでもパウロは、奴隷制の不正に立ち向かうのではなく、福音によって新しい人とされた当事者たちの姿勢に目を向けています。キリスト者は、自分の雇用関係をこれらの指示だけに従って整えるわけではありません。今日のための基準として、イエスのほかの言葉や神のほかの言葉をも取り入れるでしょう。

政府に対する私たちの振る舞いについても、同様のことが言えます。パウロもペテロも、これらの権威に従うよう求めています。たとえそうした統治の形や統治者が、およそ理想的ではないとしてもです。家父長制や奴隷制、古代における子どもの扱い方が理想的でなかったのと同じように。

パウロが家族や仕事のような社会構造の中で当てはまる指示を与えるとき、彼は、自分が知っていたこと、自分の時代に普通だったことから出発するしかありません。彼は21世紀のキリスト者に宛てて書いたのではありません！それでも、それは私たちにとって神の規範である神のことばです。

これらの本文は、状況が理想的でないことについては沈黙しています。今日の視点から重要な事柄は取り上げられていません。私たちはそれを今日の状況に適用しなければなりません。聖書を読むすべての人、聖書に忠実なすべての人が、無意識のうちにそれを私たちの時代へと運んでいます。すべてを文字どおりに受け取っていると思っている人々もそうです。

夫たちへの指示と妻たちの振る舞いに話を戻しましょう。ここでも、主人と奴隷の場合と同じように、それを文字どおり今日に移すことはできません。

これらの指示を実行しようとする人は、古代の状況をよみがえらせなければならないでしょう。保守的で聖書に忠実なキリスト者のものも含め、私たちの今日の結婚理解は古代からあまりにも遠く離れているので、これがそのまま今日に当てはまると主張するのは、まさに危険なほどです。 いったい、どの妻が「すべてのことにおいて夫に服している」でしょうか。どの妻が夫を恐れているでしょうか。ここで意味されているのは、単なる敬意以上のものです。私たちは、特定の言葉を弱めたり、かわいらしく言い換えたりして、何とか21世紀に合うようにすることで言い逃れることはできません。文字どおりに実行しようとするなら、書かれているとおり、完全にそうしなければなりません。強く家父長制の刻印を帯びた文化では、もしかするとそれは可能であり、必要でもあるのかもしれません。たとえそれが決して神の理想にかなうものではないとしてもです。そこでは多くの女性が、受け継がれてきた家族の伝統に囚われています。彼女たちはしばしば自分の基本的な権利を行使することができず、その子どもたちは家父長制のなすがままにされています。

この本文を文字どおりに、あるいは聖書字義主義的に解釈するなら、そこから妻の夫への階層的な服従が導かれます。それは聖書全体の像にも、今日の生活状況への適用にもふさわしくありません。

5.2.4 文脈化

この言葉は、保守的なキリスト者たちから疑いの目で見られています。しかしそれは、今日、まったく異なる私たちの時代の中で神の考えをどう生きることができるかを考える、知的な作業を言い表しているにすぎません。これを聖書への忠実さと呼ぶこともできるでしょう。

妻があらゆることにおいて服することについて、パウロはそれが何を意味するのかを詳しく述べていません。個々の事例も、例も描かれていません。私たちはそれをどう理解すべきでしょうか。妻は家庭内暴力を受け入れなければならないのでしょうか。いつでも性交渉に応じなければならないのでしょうか。夫がすべてを決めるのでしょうか。限界があること、そして「すべてのことにおいて」が、当時も今日も、文字どおりすべてを意味することはありえないことに、私たちは同意するでしょう。事実として、古代において夫に従わない妻は（細部においてそれが何を意味しえたにせよ）、福音にとって悪い証しでした。

パウロは夫たちに明確な言葉を語っています。それまで決して聞かれたことのない言葉です。妻に対する無条件の愛の献身、自分自身のように養い、世話をすることです。これが守られたなら、家父長制から「愛の家父長制」が育つことができました。結婚生活の実際において、愛は服従の終わりです。 愛は何も強制せず、互いの合意のうちに生きるからです。愛情深い夫は、妻の意志を無視して事を進めることはしません。妻の階層的な服従を信じている男性たちも、結局はそのように振る舞うでしょう。互いの愛と尊敬は、服従や服することにまさるのです！ パウロはこの本文で、家父長制から抜け出す最初の大きな一歩を踏み出しています。奴隷制の廃止がまだ長い間起こらなかったのと同じように、結婚もまだ長い間、同権のうちに生きられることはありませんでした。

文脈化は常に必要です。聖書は、今日もはや存在しない状況のための指示を与えています。そして、私たちの（ポスト）モダンの時代になって初めて生じた状況のための指示は、与えていませんし、与えることもできません。当時は老人ホームも、今日のような民主主義も、インターネットも、高度に発達して命を延ばす医療もありませんでした。などなど。これらの分野で、私たちはどう振る舞うのでしょうか。私たちは聖書に、イエスに、隣人愛の戒めに方向づけられようと努めます。

5.2.5 もう一度、かしらについて

かしらは隠喩であり、パウロが結婚の共同体の関係に当てはめているたとえです。かしらという言葉は、源、起源、あるいは河口を意味することがあります。たいていは文字どおりの頭です。しかし、優位や上位にあることも意味します。

エペソ人への手紙の中で、パウロはかしらとは何かを描いています。1章22節では、よみがえらされ、王座に高く上げられたキリストが、宇宙のすべての力と存在の上に立つかしらです。

[エペソ人への手紙 1:22-23、ドイツ語エルバーフェルト訳聖書から翻訳] 神はすべてのものを彼の足の下に服させ、彼を、すべてのものの上に立つかしらとして集会に与えられました。集会は彼のからだであり、すべてのものをすべてのもので満たす方の満ちておられるところです。

すべてのものの上に立つかしらとしてのキリストは、ありうる限り最高の栄誉の座を占めています。このかしらに、教会がからだとして贈られました。彼がかしらとして教会を支配するというのではありません。そうではなく、教会が、すべてのものの上にある彼の座を彼とともに分かち合うのです。かしらとからだの一致において、それは「(全き）キリスト」なのです。 ちょうど、エバがアダムから取られ、アダムが彼女とともに、一体として初めて完全になり、それから二人で創造の委託を果たしたように。

4章15–16節では、からだはかしらに向かって成長し、かしらから霊的な養いと建て上げを受けます（彼、すなわちかしらから。コロサイ2:19も参照)。

[エペソ人への手紙 4:15-16、ドイツ語エルバーフェルト訳聖書から翻訳] あらゆる点において、かしらである方、キリストに向かって成長しようではありませんか。キリストから、からだ全体は、供給を与えるあらゆる節々によってしっかりと組み合わされ、結び合わされて、……愛のうちに自らを建て上げるよう、からだの成長をもたらすのです。

この隠喩は、かしらによるからだの養いを強調しています。かしらの絵は、キリストと教会の関係において階層的な服従を強調していません。夫と妻の関係においてもそうです。それは、キリストが教会にとってそうであるものに男性がなるための模範です。すなわち、教会を支配する者ではなく、養う者です。

ちなみに、水で女性をきよめることは奴隷の仕事でした。パウロは役割の入れ替えにおいて、極端なまでに進みます。今やかしらは、水の洗いで洗いきよめを行うことによって、奴隷のようでさえあるのです（5:26）。

一世紀の生活の現実に戻りましょう。当時、女性は男性よりずっと若かったのです。ときには12歳で結婚させられました。年齢の点で、男性は当然ながら強い立場にありました。こうした文化的・社会的環境の中で服従が期待されたとしても、それは女性たちにとって一般に何も新しいことではありませんでした。そして年齢差が大きい場合、男性は自動的にかしらとなり、いわば彼女たちの主人となったのです。

今日の私たちのところでは、それは違います。夫婦が互いの愛と服従のうちにともに人生を切り開き、家庭を築くなら、妻の一方的な服従は必要ありません。私は何度も、この問いを夫婦たちに投げかけてきました。彼らは、パウロがエペソ人への手紙5章で描いているこの服従が、今日、あるいは自分たちの結婚において、正確に何を意味しうるのかという問いに答えることができませんでした。 これを、最終的に夫が下し、その責任も負う重大な決定に限定するのは、あまりにも安易でしょう。いいえ、私が尋ねた夫婦たちは、決定を、特に重大な決定を、主の前でともに下しています。あるときは一方が他方について行き、またあるときはその逆です。この姿勢とこのやり方は、かしらとからだの絵を損なうものではありません。

キリストが教会を愛されたような、無私で自己犠牲的な愛こそが、福音の新しい基準です。それが違いを生み出します。それは種のように、ゆっくりと、しかし止めようもなく、キリスト者の結婚における家父長制のコンクリートを打ち破るはずのものです。これは新しいことです。それは堕落した世界への天の突入です。その際パウロは、その指示の中で家父長制をそのままにしておき、それをはっきりとは批判していません。ですからこの時代には、権威としてのかしらの絵が、家族の家と結婚の状況に合っていたのです。たとえそれが、創世記1章と2章に描かれているような、創造にかなった理想ではないとしてもです。

かしらとして、夫として生きることは、導くこと、責任を引き受けること、妻のために立つこと、妻のためにそこにいることを意味します。すべてを妻と分かち合うことです。これは階層ではありません！それは二人一組の関係、一つのチームです。階層のないかしらであることは、単に可能であるだけでなく、それこそが構想であり、実際に実現する道なのです。

キリストを模範とする「かしらの役割」、かしらであること、「かしら性」とは、愛、養い、保護――先に立って歩むことです。それは人が安心して身を委ねることのできる強さであり、受け身にではなく能動性へと、そして同様に互いの自己犠牲へと導く共同の歩みです。

いずれにせよ、硬直した一方的なかしらとからだの絵を、どの結婚にも同じように当てはめることはできません。人はあまりにも異なっているからです。かしらとからだの隠喩は、まず一致について、共同について、そして少なからず愛について語っているのです。

5.2.6 結論

パウロは一方で、家父長的な結婚像と家族像を批判することなく写し出しています。他方で、彼はそれを革命的に変えます。家父長制における事実上の権威は愛の戒めへと変えられ、こうして古い道は捨てられます。 夫がパウロの言うように愛するなら、妻が一方的に服することは問題にならないでしょう。キリストの愛は夫にも、従うことと、妻に対して敬意をもって生きることを求めるからです。

彼はまさに、すべての人に向かって「（キリストのからだにおいて）互いに従い合いなさい！」と言うことによって、この部分を始めている、あるいは前の部分と結びつけているのです。こんなことは、それまで聞かれたことがありませんでした。これらの言葉は、いくら強調しても強調しすぎることはありません。

次にパウロは、かしらの役割を、支配者、指導、あるいは権威としては描いていません。すぐに上位にあることとしてしばしば説明されるこの絵に、彼は余地を与えません。かしらは支配しません。かしらは無条件に、自己を犠牲にして愛するのです。

パウロはここで、すべての時代のための理想的な結婚像・家族像を描いているのではありません。彼は既存の文化の中に、まったく新しいものを持ち込んでいるのです。福音は、新しいものを造り出す種です。堕落の結果からの解放です。 解放をもたらす変化はすぐには起こりません。長い間抑えつけられたり、再び壊されたりすることもあります。それは一歩ずつ進みます。一歩また一歩と、最もうまくいく場合には、何か新しく、より良いものが育っていきます。同権のうちに自由に生きることは、学ばれなければなりません。何千年も続いた社会構造は、十年で癒やされるものではありません。

ですから、パウロとペテロから、妻たちは従うべきだと聞くことに驚いてはなりません。それは彼らの時代には、どのみち普通のことでした。夫は主人でした。決定権者でした。一つの制度でした。信仰を持った女性たちが、普通であったこの姿勢を捨てていたなら、それはつまずきとなったでしょう。福音は悪評を受けたでしょう。それは防がなければなりませんでした。

今日、私たちは、自分たちの政府を民主的に選ぶことができることに感謝しています。奴隷制がもはや存在しないことにも。労働者の保護があることにも。男性と女性が同じ権利を持っていることにも。体罰が禁じられ、子どもたちが守られていることにも。これらは結局のところ福音の結果であり、イエスと十二弟子とパウロが2000年前に蒔いた種の実なのです。

百年前、キャサリン・ブッシュネル（Katharine Bushnell）――中国で医師であり宣教師であった女性で、聖書の古代語にも通じていました――はこう書きました。「私たちは勇気を持ってよいのです。ごく最近まで、奴隷階級の存在は必要なものとみなされ、奴隷制は正当なものとみなされていました。ある男たちは奴隷として生まれ、他の男たちはその主人として生まれた、と言われていました。そして世界は、この二つの階級なしには進んでいけない、と。この誤解ははじけ飛び、世界はまったく普通に進んでいます。奴隷制が存在していた間、人々は神のことばの中にその正当化を見いだしたと考えていました。しかし、そう考える人の数はますます少なくなっていきました。神のことばの中に、男性が女性を支配することの正当化を見いだすと信じる人の数も、ますます減っています。」

彼女の声は、やがて聞かれなくなりました。それだけに、彼女の本がこの本と同時にドイツ語で出版されたことは、いっそう喜ばしいことです（Reformatorischer Verlag H. C. Beese, Hamburg。本書の巻末を参照）。

要求され、女性によって満たされる服従は、女性たちに、担うことができ、担いたいと願っている責任を手放させます。女性たちは服従の教義のもとで、あきらめきった受け身の人間となり、その能力と召しが実を結ばないままになることがあります。しかし、彼女たちにも、強く「男らしく」あり、勇敢に、能動的に信仰に生きるようにという勧めが向けられています。家庭で、職場で、教会で、そして神の王国で（コリント第一16:13）。

服従の教えの痛ましい副作用として、残念ながら、家庭内暴力と性暴力に少なくとも触れておかなければなりません。 この教えは、妻にとってかしらとしての自分の

役割が何であるべきかを理解していない夫たちにとって、暴力をふるう口実や隠れみのとなりえます。

保守的なキリスト者の結婚においても、嘆かわしいことに、家庭内暴力や性的暴行があります。ここで、価値の同等性と地位の同等性という聖書の見方が、癒やしをもたらすことができるかもしれません。それは女性たちを、しばしば口に出されることのない苦しみから導き出すことができるかもしれません。

5.3 服従的であること

服従的であることが何度も繰り返し指摘されるので、これについてもう一度、独立した章を設けることにします。

女性への指示ははっきりしており、何度も繰り返されています。彼女たちは自分の夫に服すべきだ、と！ hypotasso ̄という語には、服する、従う、甘んじて従う、配下にある、聞き従う、という意味があります。[55] まさにこの指示が同じ言葉で何度も出てくるからこそ、私はもう一度これを取り上げます。たとえ結論において繰り返しになるとしてもです。女性の秩序は結婚のテーマであるだけでなく、礼拝の集会にも及んでいます。沈黙と服従は明らかに結びついています（コリント第一14:34）。教えることの禁止と、服従のうちに学ぶようにという指示も同様です（テモテ第一2:11）。これについては後でさらに述べます。

語の研究をすれば、この語がどのような文脈で出てくるかがわかるでしょう。姿勢を求める呼びかけとして、結果として、そして強いられた状況としてです。キリストには、すべての力が服させられました。私たちはかつて、死の恐怖に服していました。キリスト者は、他の人々と自分自身のために神の国で働く人々に服すべきです。キリスト者は上に立つ権威に従うべきです。キリスト者の女奴隷と奴隷は、自分の主人（あるいは女主人）に服すべきです。若い者も年長者に服すべきです。そして最終的には、だれもが姉妹と兄弟に対して。 幅広い適用範囲がありますが、人と人との共同生活においては、他の人をより高く尊び、その人の下に自分を置くという基本的な考えにとどまります。

このことは、服従がキリスト者の女性と男性にとって何か異質なものではなく、実践されながらも同時に試練にさらされている美徳であり、御霊の実と呼ぶこともで

55. Bergmeier, R.,「ὑποτάσσω」, in H. Balz – G. Schneider (edd.), Exegetisches Wörterbuch zum Neuen Testament, Verlag W. Kohlhammer, Stuttgart 2011, 976頁。

きるものだということを明らかにしています（直接そのようには挙げられていないとしても）。結局のところ、人と人との共同生活は服従によってしか機能しません。それは謙遜なしには、また聖霊の助けなしには不可能です。謙遜をもって、私たちは他の人を自分よりすぐれた者と思うべきです（ピリピ2:3）。究極の模範はイエスです。同時に、私は権威に逆らうわけではありません。権威なしには、同じように社会は機能しないでしょう。政府、雇用主、教師、親は、その職務や役割によって権威を持っています。それは男性と女性の関係にも、一般的にも結婚においても当てはまるのでしょうか。キリスト者の女性たちに関しては、次の言葉が突きつけられています。

> [コリント人への手紙第一 14:34] 女たちは集会において黙っていなさい。彼女たちは語ることを許されていないからです。むしろ、律法も言っているように、従いなさい。
>
> [エペソ人への手紙 5:22] 妻たちよ、主に対するように、自分の夫に従いなさい。
>
> [コロサイ人への手紙 3:18] 妻たちよ、主にあってふさわしく、夫に従いなさい。
>
> [テトスへの手紙 2:5] 慎み深く、貞潔で、家の仕事に励み、善良で、自分の夫に従うように。神のことばがそしられることのないためです。
>
> [ペテロの手紙第一 3:1] 同じように、妻たちよ、自分の夫に従いなさい。たとえ、みことばに聞き従わない夫がいても、妻の無言のふるまいによって獲得されるために、
>
> [ペテロの手紙第一 3:5] かつて神に望みを置いた聖なる女の人たちも、このように自分を飾り、自分の夫に従っていたのです。

目を引くのは、この種の勧告が旧約聖書にはこのような形で出てこないことです。イエスにも出てきません。原始キリスト教において、これは何か重要なことだったに違いありません。当時の女性たちは、それほど反抗的で、扇動的で、権力を求めていたのでしょうか。自分たちの好機を待っていたのでしょうか。いいえ、古代史の研究はそれを裏づけることができません。加えて、古代の女性たちは、どのみち服させられた役割の中にいました。どのみち普通のことであり、キリスト者の女性たちを驚かせることもなく、彼女たちにとって異質なことを強いるわけでもなかったことを、このように強調する意図は何なのでしょうか。

この服従が何から成り立っていたのかを問うべきでしょう。家事における夫の指示でしょうか。その点で女性たちは比較的自立して働いていました。家は彼女たちの領域であり、夫は公の場にいたのです。だからこそ、テトスへの手紙2章5節で家の仕事のことが言われているのです。テモテへの手紙第一5章14節でパウロは、若いやもめたちは家庭を切り盛りすべきだと書き、「oikodespoteo」という語を用いています。これは、家の主人であるということにほかなりません。それとも、それは性生活において服すること、いつでも応じられるようにしていることを意味するのでしょうか。今日、これらの指示を文字どおりに、つまりその本来の意味に従って守るよう求められるなら、私は同じ問いを投げかけます。今日の結婚において、この服従は何から成り立っているのでしょうか。この関係のあり方はどのように描写でき、21世紀の西洋世界でどのように生きることができるのでしょうか。繰り返します。求められているとおりの明確さで、弱めたり合わせたりせずに、です。

『Befreit durch Unterordnung』（『服従によって解放されて』）[56]という奇妙な題名の本の中で、バニー・ウィルソン（Bunny Wilson）は、題名から想像されるとおり、夫に対する妻の服従を熱心に擁護しています。彼女にとって、明らかに誤った決定の場合でさえ、夫への服従は神にかなった道であり、それは信仰と祈りによって正されうるのです。多くの事例を挙げて、彼女はそれが実際にどのようなものかを描いています。彼女自身、自分の結婚の経験を分かち合い、神が彼女にどのように語りかけ、この難しく争いの多い姿勢において何が正しく何が正しくないかを示されたかを語っています。聖書理解と経験は、しばしば互いに入り混じります。さて、私たちは皆、聖書を読むとき、自分の経験や体験を持ち込みます。私の本全体も、私の人生経験と私の「女性観」なしに成り立ったものではありません。ですから中立的なものではなく、純粋な聖書の教えでもありません。このテーマについて発言する人はだれでも、自分自身による色合いを持ち込みます。しかし私にとって決定的な問いは、服従が何によって根拠づけられているかです。ウィルソンを引用します。「ときどき、妻と私の意見が食い違うと、妻は私にこう言います。『前回は私があなたに従ったのだから、今度はあなたが私に従うべきだと思う。聖書はエペソ人への手紙5章21節で〈神を恐れて互いに従い合いなさい〉と言っている』。私はそれに何と言えばよいのでしょうか。

私は、エペソ人への手紙5章21節を使って自分の思いを通そうとしたのが自分だけではないと知って、ほっとしています。私が初めてこの聖書箇所を夫に対して使っ

56. Wilson, Bunny, 第3版 2020年（「Befreit durch Unterordnung」〔『服従によって解放されて』〕）, CLV, Bielefeld

たときのことを覚えています。夫はそれを受けて、聖書の中に答えを探しました。あなたの奥さんが言及している聖書箇所と、それに続く節を見てみましょう。『神を恐れて互いに従い合いなさい！妻たちよ、主に対するように、自分の夫に従いなさい』（エペソ5:21-22）。

結婚における服従は、キリストのからだにおける互いの服従とまったく同じようには機能しません。キリストのからだにおいて、私たちは聖書の原則を実践することによって互いに従い合います。結婚において、私たちは権威ある人としての夫に従うのです。

エペソ人への手紙5章21節では、神が唯一の権威です。エペソ人への手紙5章22節では、妻は夫に従属しています。神は夫に妻に対する権威を与え、また夫に責任を問われるのです。」（77頁）

しかし、「従う」についてのこのような区別された理解を、本文から読み取ることはできません。彼女は、創造に基づいて男性を女性の上に立つ権威と見なしています。加えて彼女にとっては、エバへの刑罰の言葉、あなたの欲求は彼に向かい、しかし彼はあなたを支配するが、神の望まれた役割分担なのです。女性は生来支配したがるが、夫の支配に屈すべきだ、というのです。男性は園で罪を食い止めるために支配することを怠った。そして生来支配しない傾向があるので、支配するという務めを受けるのだ、と。

この解釈に対する私の最初の問いは、それでは創造者の設計ミスがあって、それを修正しなければならないのか、ということです。あるいは同じく致命的なことに、堕落の前にすでに罪深い傾向があったのでしょうか。

創造物語のこの理解は、すでに述べたとおり、聖書全体における根本的な役割理解の方向を決定づけます。アダムをかしらであり指導者であると見る人は、刑罰の言葉さえ祝福の言葉と解釈し、あらゆるところにこの役割理解を読み込むでしょう。この道を一貫して進もうとする人は、さまざまなタイプの人々から成る結婚の生活の現実を直視しなければなりません。妻が強く夫が弱い場合、服従は大惨事につながりかねません。私は、互いに従い合うことを生き、結婚の中の異なる性格の罪深い傾向を率直に名指しし、神の御霊によってともにそれと闘うことを主張します。

エデンで私は、互いに補い合い、同じ価値と同等の地位を持ち、階層の差のない一組の人間を見いだしました。男性のより大きな権威もありません。

しかし、使徒たちのこれらの指示は、まさに階層を根拠づけているのではないでしょうか。

私は、階層の差は堕落の結果だと確信しています。それを美化することはできず、キリスト教化することもできません。 福音は、すべての信者を神の息子たちとしました。女性たちもです。そしてそれによって、堕落した創造の文化から解放したのです。このことを、まず何よりも信仰を持つ夫たちが認めるべきです。だからこそ、妻たちではなく彼らが、無私の愛へと召されているのです。そして、まさに支配へと召されているのではありません。 それとは別に、ここで支配することは否定的にではなく肯定的に理解されるべきです。創造の委託においてもそう理解されるべきであるように。実際、夫に支配し、導き、先に立つための肯定的な委任さえ存在しないのです。

古代の文化においては、メシアへの新しい信仰が、自分たちの自由と平等をいま認識した女性たちを、名誉と恥の文化を問題にするような振る舞いへと導かないことが重要でした。女性たちは、結婚、家、家族の秩序という通常の文化に対抗する文化を形づくるべきではありませんでした。それは社会の基礎として神聖であり、攻撃されてはならないものでした。福音がかかっていたのです！

私はこれを、福音のために、人々をキリストに獲得するために、ユダヤ人にはユダヤ人のように、ギリシア人にはギリシア人のようになったパウロと比べます。彼は、キリストにある自分の自由を制限することによって、人々を獲得し、確信させるために代価を払いました。女性の服従が問題となっているここでも、同じです。ちなみに、ペテロにおいてもまさにこのことが問題になっています。すなわち、服することによって、信仰を持たない夫を獲得することです。

名誉と恥の文化においては、周囲の人々の中で夫に不名誉をもたらしうる振る舞いは、絶対に避けなければなりませんでした。名誉と恥の文化では、人々はあらゆる階層を尊重しつつ、調和のとれた関係を非常に重んじます。夫に公然と反論したり、夫を正したりする妻は、この名誉の原則を傷つけた、ということもそこに含まれていたでしょう。

女性に服するよう求める指示は、男性と女性の間の階層的な違いによって根拠づけられてはいません。創造においてそのような違いは存在しないからです。問題となっているのは、自発的な服従です。 服するようにという命令は、古代のキリスト者の女性たちにとって、福音のための協力でした。愛する夫は、どのみち服従を不要にします。しかし外に向かっては、古代社会の中で、これらの指示とそれを守る

ことは、差別と迫害からの保護でした。それは、家族を破壊するのではないかというあらゆる疑いを、初めから終わらせるための姿勢だったのです。

名誉と恥の文化の中で生きていない21世紀の私たちにとって、この指示を文字どおりに実行することはできません。西洋世界では、人々は法と秩序の体系に方向づけられています。結婚には、愛の戒め、互いのためにあること、ともに歩むこと、主にあって互いに従い合うことが当てはまります。批判は、愛のうちに、適切な時に率直に語られます。そしてその際、だれも傷つけないよう、あらゆる努力が払われます。

同権を支持する私の議論に対して、私はよく次のような問いを聞きます。

「男性が女性に対して優位な地位を持つという議論は、新約聖書の中でとても単純明快に見えます。しかし、あなたの［反対の］立場は、ギリシア語やあらゆる注解書などへの言及を伴っていて、とても複雑に見えます。優位性の立場が単純であることは、それが正しい立場であることの強力な証拠ではないでしょうか。」

答え：まったくそうではありません。聖書の最も単純な解釈は、ときには正しいのですが、ときにはまったく間違っています。何しろ、新約聖書が私たちに、聖なる口づけをもって互いにあいさつするよう、たびたび、はっきりと、誤解の余地なく命じていることを指摘するのは、実にたやすいことなのです。

聖なる口づけをもって互いにあいさつしなさい。（ローマ16:16）聖なる口づけをもって互いにあいさつしなさい。（コリント第一16:20）聖なる口づけをもって互いにあいさつしなさい。（コリント第二13:12）すべての兄弟たちに、聖なる口づけをもってあいさつしなさい。（テサロニケ第一5:26）愛の口づけをもって互いにあいさつしなさい。（ペテロ第一5:14）

これらはすべて直接的な命令です。命令ははっきりしています。私たちはそれを説教せず、教えず、実践もしません。この慣習を受け入れるための議論が単純であってもです。そこに何かわからないことがあるでしょうか。

私たちが聖なる口づけに（ついでに言えば、編んだ髪や金の装身具の禁止、あるいはベールをかぶるという規定にも）取り組まない理由は、そうした命令が今日の私たちの文化に反しており、今日ではその本来の目的にかなわないだろうからです。私たちが女性の役割に苦闘しているのは、私たちの文化がつい最近まで、女性に男性と同じ機会と同じ承認を与えることを拒んできたからです。私たちの年長の兄弟姉妹はこの文化の中で育ち、多くの人が（女性たちも含めて）女性の不平等な権利

を是認し、受け入れてきました。だからこそ、彼らは伝統主義的な議論を心地よく感じるのです――そしてだからこそ、それは「単純」なのです。[57]

もう一つの例を挙げましょう。どれほど聖書に忠実な人でも、聖書がキリスト者に語っていることをすべて行っている人はごくわずかだ、ということの例です。その際、私が問題にしているのは、私たちがどれほど従順であるかという問いではありません。私たちは皆、しばしばつまずくからです。問題は、私たちが特定の命令や慣習をそもそも認識し、それを行うことを考慮に入れているかどうかです。パウロはコリント人への手紙第一7章5節で、祈りに専念するために性交渉を控えるという夫婦の合意について書いています。聖書を文字どおり守ることに固執する人に尋ねてみたいと思います。あなたは、いつ、どれくらいの頻度で、この取り決めを率直に配偶者と交わしたでしょうか。

最後に、イエスの直接の言葉を指摘しておきます。イエスは弟子たちの足を洗われたとき、こう言われました。「主であり師であるこのわたしが、あなたがたの足を洗ったのですから、あなたがたもまた、互いに足を洗い合う義務があります。わたしがあなたがたにしたとおりに、あなたがたもするように、わたしはあなたがたに模範を示したのです。」（ヨハネ13:14-15）

西洋の世界と文化において、これは、聖書を真剣に、文字どおりに受け取るキリスト者たちでさえ、自ら文脈化して実践していない慣習です。

5.3.1 まとめ

マーガレット・モウチコ（Margaret Mowczko）はこう書いています。何年にもわたって、動詞 hypotassō（「服する」）が初期キリスト教の文書と非キリスト教の文書の両方で何を意味するかを調べるのにいくらかの時間を費やした後、私は次のような定義にたどり着きました。

「キリスト教的な」服従（すなわち、信仰の仲間どうしの服従。信仰を持つ夫と妻の間の服従も含む）とは、「謙遜で、誠実で、愛に満ちた敬意、協力、支え」です。

謙遜や柔和と同じように、服従は普通のキリスト者の品性であるべきです。そして理想的には、それは相互的なものであるべきです。

57. Guin, Jay, 157頁, Buried Talents, In Search for a New Consensus, 2014, Alabama

キャサリン・ブッシュネル（Katharine Bushnell）は百年前、画期的な著書『God's Word to Women』（本書の巻末の推薦書を参照）の中でこう書いています。

「この語の真の意味は、原則が問題になっていない場合に、自分の権利を主張するのではなく、他の人に先を譲るという、キリスト教的な恵みの賜物、あるいは美徳を表しています。シュロイスナー（Schleusner）の七十人訳聖書のためのギリシア語・ラテン語辞典は、この動詞が必ずしも『奴隷的に服するという考えを伝える』わけではないと説明しています。イエスは少年のとき『両親に従っておられた』のですが、私たちは、彼が『わたしの父のことの中にいなければならない』とき、両親に尋ねさえしなかったことを知っています（ルカ2:49, 51）。

二人の人が共同で事業を長く営むことはできません。互いに『従い合う』用意がないかぎりは。彼らは好みを捨てなければなりません。『互いに相手を敬って先に立てる』必要があります。見解を互いにすり合わせなければなりません。そうでなければ、やがて別れざるをえなくなるでしょう。 問題が生じたとき、一方が他方に命令する権利を持つことによって、彼らの状況が良くなるわけではありません。そのような命令を実行することは『服従』ではなく、奴隷的な卑屈さです。そして人は奴隷的に卑屈になることを拒みます。それは人格をおとしめることになるからです。

エペソ人への手紙5章21節で、使徒は性別に関係なく、すべての信者に勧めています。『キリストを恐れて互いに従い合いなさい』。ペテロは性別に関係なく、すべての信者に言っています。『みな、互いに謙遜を身に着けなさい！』（ペテロ第一5:5）。これらの箇所は明らかに、男性に『服すること』を命じています。それでも、それが、男性がキリスト者になると互いの恣意的な支配の下に置かれてよいという意味ではありえないことを、だれもが直感的に感じています。

ところが、使徒が妻たちに自分の夫に従うよう勧めている三つの聖書箇所に来ると、『妻たち』へのこの勧めが絶対的な従順を意味するのかどうかを問うだけで、ほとんど異端者と見なされてしまいます。私が示したように、『服すること』という語は、男性と男性の関係にかかわるところでは従順と解釈されてきませんでした。コリント人への手紙第一16章16節のように、男性が女性に『服すること』を意味しうるところでもそうです。さらに、妻と夫、子どもと親、しもべと主人の関係が描かれるたびに、用語の使い方において注意深い区別がなされています。『従順』という語は、一般にしもべに、そして常に子どもに用いられています。しかし

『服すること』という語は、常に妻に用いられています。意味が同じなら、なぜ異なる語を選ぶこの注意深さがあるのでしょうか。妻の務めについては、エペソ5:22、コロサイ3:18、テトス2:5を参照してください。子どもの務めについてはエペソ6:1、コロサイ3:20。しもべについては、エペソ6:5、コロサイ3:22を参照してください。

旧約聖書の中で、『服している』という言葉がときにどのような意味で使われているかを調べることは、非常に示唆に富み、教えられるところがあります。詩篇62篇1節にはこうあります。『ただ神に向かって、私のたましいは静かに待つ。私の救いは神から来る』（シュラハター訳〔Schlachter、ドイツ語聖書翻訳〕）。同じ詩篇の5節には、こうあります。『ただ神に向かって、私のたましいは静かに待つ。』詩篇37篇7節には、次の言葉があります。『主の前に静まり、主を待ち望め。』最初の聖書箇所の『待つ』という言葉と、最後の箇所の『静まる』という言葉は、三つともギリシア語訳では hypotassō̄（『服している』）という一つの語で訳されています。他方、元のヘブル語の文字どおりの意味は『……に対して静かであれ』です。これを、妻たちが信仰を持たない夫を『服すること』によって獲得するよう求められているペテロ第一3:1-2と比べてみてください。確かにペテロはここで、妻たちに、信仰を持たない者に盲目的に聞き従うよう求めているのではありません。もしそうなら、異邦人の場合には夫はすぐに彼女たちを偶像礼拝に引き戻そうとし、ユダヤ人の場合にはユダヤ教に引き戻そうとしたでしょうから。むしろキリスト者の女性たちは、その『ふるまい』によって、『言葉によらず』、彼らを誤った信仰から引き離し、キリスト教信仰へと獲得すべきなのです――行いは言葉よりも雄弁に語るものです。『恐れのうちに』――すなわち、日常生活ではとても柔和で、物静かで、忍耐強いこれらの女性たちを、神への誠実さにおいて岩のように堅くさせるような、神への恐れのうちに、です。そして、彼女たちが静かに原則を守り抜きながら、同時に、原則が危うくならないかぎり夫に譲る用意があることに、信仰を持たない夫たちは圧倒され、妻に良心に反して行動するよう強いることなどあえてしないでしょう。こうして彼ら自身が、次第にキリスト教信仰へと導かれていくのです。」

「服従的であることは、性別による役割ではありません。それは役割でさえありません。それは、キリストにあるすべての兄弟姉妹のための態度であり振る舞いであって、互いに従い合うことがその理想です。互いに服し合うことは、一世紀と二世紀初めの教会において異質な概念ではありませんでした。そしてそれは、今日の教会において規範であるべきです。」

アルミン・ヴンダーリ（Armin Wunderli）

聖書に書かれていることを私たちが生きるなら、女性解放は必要ないでしょう。そうなれば、男性と女性は同じ権利を持っているからです。 ダニー・シルク（Danny Silk）

私たちがそれを望まないなら、それを手にすることはありません。無条件の同権を。

ヴェロニカ・シュミット（Veronika Schmidt）

6 教会における男と女

世界の教会は、最良の印象を与えてはいません。それには、献身や祈りや従順と並んで、広範な影響を及ぼす誤った確信もかかわっています。こうして多くの人は、性の問題についての誤った理解がどれほどの害をもたらすかを過小評価しています。影響を受けた多くの人々の人生において、教会一般において、そして教会の外への影響、つまりその宣教的な証しの力において。



男性と女性についての階層的な教義を受け入れるなら、それは結婚にだけ当てはまるのではありません。そうなると自動的に、教会における役割にも当てはまります。礼拝の集会においてだけでなく、教会生活全体においてです。教会である神の家の中に、私たちは常にいるのですから！

女性が声に出して参加することから指導的に参加することまでを扱う第6章では、結婚の領域と教会の領域が重なり合います。もしそこで創造の秩序が問題になるのだとしたら、これらの領域、あるいは分野は区別されません。どちらの領域も、目に見える被造世界の中にあるからです。

この章では、コリント人への手紙第一11章と14章、そしてテモテへの手紙第一2章の議論の多い本文を扱います。つまり、女性のかぶり物、沈黙、教えることです。

この本を書くきっかけとなったのは、具体的には教会における女性の役割でした。それは繰り返し創造の秩序と結びつけられるので、ようやくこの領域にたどり着くために、広範な準備作業が必要だったのです。

これらの本文とその解釈は、ほかのどの本文にもまして、教会における男性と女性の役割を決定しています。これらの本文を研究すると、一つのことに気づきます。それらは難しく、矛盾しているように見えるのです。ギリシア語本文に取り組み、当時と今日にとってのその意味を明らかにしようとする注解書を読むと、意味が一義的ではないことが確かめられます。あるいはもっと正確に言えば、さまざまな解釈の可能性があるのです。

これらの本文は、私たちが白黒はっきりと、それが何を意味し、何を意味しないかを知っていると考えることによって本文を支配することはできない、ということを明らかにします。それは聖書字義主義的で、一面的で、高慢でさえあるでしょう。私もまた、可能な説明を提示するにすぎません。それも一つではなく、いくつかを。

しかし一つのことは、私にとって重要です。創世記1章と2章に私が見いだした女性の姿、そしてイエスが女性たちと接する中に私が見た女性の姿と矛盾する解釈を、私は退けます。 そのような本文を女性に不利に、律法的な意味で、何かを間違えることを恐れながら解釈することは、聖書の精神にも福音にもかないません。パウロが、聖書、すなわちヘブル語聖書、旧約聖書が語っていることと違うことを言うことは、決してないでしょう。

私たちは、聖書がどこでも私たちにとって明らかなわけではないことを学ばなければなりません。一世紀の直接の受取人たちにとっては、確かに明らかでした。彼らの生活条件と文化的環境の中では。

今日の私たちは学ぶ者であり、聖霊の導きのもとに歩んでいます。そして生涯を通じて、自分の見方、洞察、意見、確信を変えることができます。私たちは一部分しか知りません。ときには的を外し、自分を正さなければなりません。

見方が変わることは、人生の一部です。これらの本文の意味を一度で永遠に理解したと思っている人、つまり、自分は立っていると思っている人は、倒れないように気をつけなさい。

これらの本文がまるで数学のように解釈され、その意味が、まるで唯一有効な真理を認識したかのような大きな確信をもって語られ、教会生活のための明確な規定として要求されるとき、私はいつも少し不安になります。

これからの章で、私はさまざまな説明を示していきます。それは何でもよいということとは関係ありません。また――とりわけ「聖書に忠実な」キリスト者たちから絶え間なく浴びせられる非難のように――神のことばを解釈し直し、自分自身の願いに合わせることとも関係ありません。

私にとって聖書に忠実であるとは、みことばの意味を明晰な理性をもって探究することです。本文に問いを投げかけることは許されていますし、それは理解を前進させます。その際、神の信頼できることばを前にしているという根本的な信頼のうちに、謙遜にこのみことばの下に身を置くことです。自分自身の解釈を真理として宣言しないこと、聖書の言葉を切り離してではなく、手紙の文脈、新約聖書の文脈、そして聖書全体の文脈の中で解釈することです。私は、矛盾は存在しないという前提に立っています。矛盾があるなら、あるいはそう見えるなら、それには説明があります（あるいは、ないこともあります）。

6.1 コリント第一11章――かしら、髪、ベール

この（半分の）章、コリント人への手紙第一11章1-16節は、男と女の創造の秩序を根拠づけるために持ち出される主要なテキストの一つです。ここではっきりと男性の指導的役割が語られており、それは女性が頭を覆うことにも見て取れる、というのです。

保守的で聖書に忠実な陣営からは、このテキストはなんと明白で明確なことか、と聞かされます。このテキストが難しいのは、みことばの明確な指示に逆らおうとする人々にとってだけだ、というのです。そういう人々は、このテキストを当時の時代に文化的に縛られたもの、今日にはもはや有効でないものと見なすのだ、と。

他方で、頭の覆いや髪を切ることについてのあれこれの規定を守らず、そのことで良心の苦しみを抱えている姉妹たちがいます。字義どおりにそれを守っている人々、あるいは守っていると信じている人々とは対照的にです。

どれほど聖書に忠実であっても、核心においては、よくあるように解釈の問題（解釈学）なのです。私は40年以上にわたって、この複雑なテキストを理解しようと努

めてきました。それについて多くのものを読みました。納得のいく説明から、身の毛もよだつような説明やふるまいの型にまで出会ってきました。

この箇所の詳しい釈義をここで行うことはできません。この章は本書で最も長い章ではありますが。これについては多くの解釈があり、それらは互いに補い合うこともあれば、矛盾し合うこともあります。私の考えも一つの可能性にすぎません。もしかするとそれは、読者がこの難しいテキストから、これまで以上に多くを汲み取る助けになるかもしれません。誰一人として、自分こそが真の解釈を持っていると確信し、そこからふるまいの規定や外面的なことを導き出すことはできませんし、そうしてはなりません。

次のステップで、私はどのように進めるのでしょうか。

(1) まず、テキストを読む際に役立ちうるいくつかの側面を挙げます。

(2) 次に、テキストの適用範囲を見定めようと試みます。

(3) その後、かしらという概念の意味について詳しく扱います。

(4) コリントにおける頭のかぶり物というテーマに、より多くの背景を持ち込まなければなりません。

(5) 頭の上の権威のしるしは鍵となる節ですが、多くの人が想定しているのとは別の意味を持っています。

(6) このテキストを私が手短に説明するとしたらこうなる、という説明的な言い換え。

(7) 21世紀にとっての今日的な意義を明らかにする必要があります。

6.1.1 テキスト解釈の指針と注意点

多くの人は、このパウロのテキストを初めて読むわけではありません。以下に、新しい接近の道を開きうるいくつかの側面を挙げます。それらは、このテキストに取り組み、多くの研究に取り組んできた結果です。それらは、女性（たち）の階層的な服従という眼鏡を通してテキストを理解する、なじみの読み方に陥らないための助けになるでしょう。[58]

58. この論考のより詳しい版は、ホームページに掲載されています：www.hans-joerg-ronsdorf.de

このテキストは何よりも、すべてがどのように神の栄光のためになされるべきかに重きを置いています。男性の栄光のためでも、女性の栄光のためでもありません。

問題になっているのは、男性と女性が、注意が自分たちに向けられないようにふるまい、装うことによって、礼拝において神の栄光を際立たせることです。

（一部の）男性たちが、女性たちに頭のかぶり物をやめるよう要求したことによって、パウロの教えのきっかけとなりました。

文化的・社会的な習慣や風習が取り上げられています。ですから、恥や不名誉は、神との関係において神学的に理解されるべきではなく、社会の感覚において理解されるべきです。

したがって、パウロが創造の物語を引き合いに出していても、問題になっているのは時代を超えた普遍的なパウロの戒めではありません。

キリストにある自由は、制限を甘んじて受け入れることによって周囲の人々につまずきを与えないこととの間で、緊張関係にあります。

問題になっているのは髪を覆うこと（単に頭を覆うことではない）であり、全身をベールで覆うことでもありません。

問題になっているのは、男性が女性の上に立つ階層的な創造の秩序ではありません。女性の男性への服従でもありません。両者とも祈り、預言的に語るのであり、同等の地位にあり、平等な立場にあります。両者とも、性別に応じた外面的なふるまいの規則に注意を払わなければなりません。

パウロは結局のところ、すべての女性と男性について語っています。既婚者についてだけではありません。かしらとからだの隠喩が当てはまるのは既婚者だけですが。祈ることと預言的に語ることは、すべての人が行います。既婚者も、女奴隷も、やもめもです。

衣服や髪型のような外面的なことは、福音によって定められることは決してありません。それらは旧い契約の祭儀においては定められていますが、コリントの人々が主の晩餐において祝っていた新しい契約においてはそうではありません。

異教的な環境の中でパウロは、それぞれの文化に生きる人々につまずきを与えることなく、福音を伝える生き方をすることがどのようにして可能か、その道を探っています。

21世紀の男性と女性のためのふるまいの規則が問題になっているのではありません。

先へ進む前に、ここで挙げた前提に注意しながら、今このテキストを読んでみてください。たとえこれまで別の見方をしてきたとしても、一度、考えうる可能性として受け入れてみてください。別の視点に立つためです。すぐに納得する必要はありません。

6.1.2 テキストの適用範囲

このテキストは、どの場所、どの環境に当てはまるのでしょうか。4節と5節でパウロは、祈り、預言する男性と女性について書いています。これは集まり、すなわち礼拝の集会に当てはまるのでしょうか。礼拝における「女性の沈黙」を支持する人々は、これを否定します。彼らの見方によれば、これを集まりに関係づけている翻訳者や解釈者の大部分は（すでにこの段落に付けられた見出しにおいて）誤っているのです。奇妙なのは、このテキストは集まりには当てはまらないはずなのに、まさに彼らこそが、集まりのために頭のかぶり物の指示を「勧めて」いることです。

このテキストを集まりに関係づけない理由として、二つの想定があります。

1. 続くテキスト、すなわち17節以降では、テーマが変わり、そこからははっきりと教会の集まりに関係しています。集まりを表す語は、17節以降に何度も出てきます。18節、20節、33節、34節です。しかし、11章1-16節の段落の前にも、その中にも出てきません。
2. さらにこの手紙の14章34-36節では、女性たちは集まりにおいて黙っているべきだとされています。この断定的な沈黙の命令（これについては第6.2章で詳しく扱います）が、11章5節のパウロの言明を、考えうるあらゆる機会、ただし集まりの外でのあらゆる機会へと振り向けている、というのです。

どちらの論拠も、見かけほど説得力はありません。

- それでは、頭を覆うことは（今日もそれが求められているとして）、集まりにとってはまったく無関係だということになるのでしょうか。
- 男は女のかしらであるという言明は、集まりには当てはまらないのでしょうか。沈黙の命令は、まさに服従によって根拠づけられているではありませんか

（14:34）。

- それでは、11章はそもそもどのような機会に有効なのでしょうか。集まりの外で姉妹たちに開かれている多くの可能性が指摘されます。もちろんそうした可能性はあります。ただ、この手紙のどこにもそのようなことは語られていないのです。パウロのコリント人への手紙第一（14章）において、祈ること（一つの例外を除いて）と預言することは、もっぱら集まりの中で行われます。
- 主の食卓の原則（10章）は、11章17節より前に集まりという出来事が挙げられていないという理由で、パンを裂くための集まりには当てはまらないのでしょうか。
- 週の初めの日の献金の集めは、明示的に述べられていなくても、集まりの中で行われました（コリント第一16:1-4）。

覆うこと、あるいは覆わないことは、その場にいるほかの人々への目に見えるしるしです。ですから、そのような指示は集会を前提としています。そうでなければ、目に見えるしるしは無意味です。人々、あるいは信者たちが集まっていることは、コリント人への手紙第一においては常に集まりなのです。

6.1.3 一つのかしらを持つ三つの組

パウロは、それぞれ一つのかしらを持つ三つの二者の組から始めます。まず、すべての男のかしらはキリストです。次に、女のかしらは男です。最後に、しかし、キリストのかしらは神です。私は長い間ここに、次のような順序の普遍的な階層の段階を見ていました。

神

キリスト

男性

女性

かしらという概念をそのまま上位の権威として理解するなら、このような階層の連なり、あるいは序列が生じます。問題は、パウロがそれを意図しているかどうかです。ここでかしらは権威を意味するのでしょうか。

この配列では、女性はいちばん下にいます。このモデルでは、女性はキリストとのつながりを持っていません。彼女の夫（あるいは一般に男性）が、一種の仲介者であるかのように見えます。しかし、どの読者も認めるでしょう。男性が女性とキリストの間に立つことはできません。この段階づけの順序は、テキストの順序と一致しません。ですから、それはそのように意図されたものではなく、役にも立たないのです。

女性が自分の上にある権威のしるしを持つべきだとするなら（10節）、同じく自分の上に権威を持つ男性の場合、それは何によって見分けられるのでしょうか。キリストが神に服していることは、どのような外面的なしるしによって見分けられるのでしょうか。キリストはもしかすると、ナジル人のように長い髪をしていたかもしれません。それはこのテキストでは恥とされています。

それぞれの組は独立しています。そこには、説明し、解き明かし、あるいは正すための比較を見るべきです。これらの組は説明のための例として並んで置かれています。命令系統としてではありません。この順序は、とりわけ、パウロがまず、女性たちに頭のかぶり物を外すよう要求していた男性たちに語りかけていることを示しているのかもしれません。



この図式は序列から解き放たれています。階層的な秩序は、この章を解く鍵ではありません。

6.1.4 かしらとは何を意味するのか

この問いは、ときに言われるほど単純ではありません。むしろ専門家の間で激しく議論されています。

かしら（Haupt）という語は、転義的な意味、つまり比喩的・隠喩的な意味においては、私たちの言語ではすぐに権威と結びつけられます。私たちの言葉づかいでは、Hauptmann（ハウプトマン、隊長）、Hauptzollamt（中央税関）、Hauptstraße（大通り）などがそうです。ドイツ語では、どれも「かしら」（Haupt）を含む語です。私たちはそこに、言語の影響を受けて直感的に、権威、主権、指導、上位にあること、責任を担う者を結びつけます。

当時、かしらの意味は何だったのでしょうか。それは一般的に権威を意味していたのではありません。ほかの文脈ではその意味を持っていたとしてもです。もしパウロが権威を表そうとしているのなら、それはむしろ啓発的な意味においてでしょう。というのも、男性たちには、女性に対する自分たちの権威について考える前に、まずキリストへの自分たちの服従に心を留めなければならないことが明らかにされるからです。そのことが、女性たちとの関係と、女性たちに対する態度を決めるべきなのです。最後には、完成した形として、神とキリストとの関係さえもが模範とならなければなりません。この関係は、権威の問題よりも、一致と平等によって特徴づけられているでしょう。

エックハルト・J・シュナーベル（Eckhard J. Schnabel）はこう書いています。「パウロにとって問題なのは、女性の秩序と男性の『権威』を根拠づけることではなく、すべての者――すべての男、すべての女、そしてキリストも――が『かしら』を持っていること、すなわち優先的な地位にある一人の人物に属しており、その人物に忠誠を負っていることを示すことである。」[59] 忠誠とは誠実さのことです。それは階層や従属にではなく、何よりも関係と結びつきに基づいています。

かしら（ギリシア語でkephale）は起源をも意味します。以下に、この語がコリント人への手紙第一11章で権威や指導者という意味内容を（だけを）持っているのではない四つの理由を挙げます。[60]

59. Schnabel, E. J., Der erste Brief des Paulus an die Korinther, Witten; Gießen 2018, 597.
60. シドニーのマーガレット・モウチコ（Margaret Mowczko）がまとめたもの：www.margmowczko.com

旧約聖書のギリシア語訳（七十人訳）では、かしらはkephaleと訳されています。ヘブライ語では、ドイツ語と同じように、（rosh）は「頭」「指導者」あるいは「支配者」を意味しえます。roshが指導的人物を意味していた場合、翻訳者たちはたいていkephaleを用いませんでした。その代わりに、通常はギリシア語のarchônを用いました。これは「指導者」あるいは「支配者」といった意味です。このヘブライ語の語は、始まりや起源を意味することもあります。

さらにもう一つの手がかりは、古代ギリシア語においてkephaleが通常「指導者」を意味しなかったことを示しています。Liddell-Scott-Jones Greek-English Lexiconには、「指導者」に近い定義も、意味の上で「権威」に当たる定義も、kephaleについて一つも載っていません。R・サーヴィン（R. Cervin）は、クセノフォン、ヘロドトス、プラトン、トゥキュディデス、ソフォクレス、アイスキュロス、ポリュビオス、シチリアのディオドロスなど、個々の異教の古代ギリシア語著述家の著作の辞典に、「指導者」に近い意味のkephaleの定義が含まれていないことを確認しています。「指導者」といった意味の「かしら」は、紀元4世紀までの異教ギリシア語文献には事実上確認されていません。それに対して、キリスト教の辞書はこの語を権威として訳しています。新約聖書の辞典はkephaleについて「指導者」という定義を挙げていますが、注意すべき大切な点があります。この語とともに言及されているのは、神（コリント第一11:3）、イエス・キリスト（コリント第一11:3、エペソ1:22-23; 4:15-16; 5:23、コロサイ1:18-19; 2:9-10; 2:18-19）、男たち（コリント第一11:3）、そして夫たち（エペソ5:23）だけなのです。しかもパウロによってだけです。もし彼がkephaleを指導者あるいは最高位の者という意味で用いているのなら、なぜ彼は手紙のほかの箇所で、指導的地位にある人々や統治に携わる人々についてこの語を用いないのでしょうか。

初代教会のギリシア語を話す教父たちの何人もが、コリント人への手紙第一11章3節のkephaleを、「起源」「始まり」あるいは「源泉」という意味に取りました。そのうちの何人かは、kephaleがときに「指導者」あるいは「権威ある人物」を意味しえた時代に書いていたにもかかわらずです。さらに、これらの教父たちはいずれにせよ、男性は女性よりも高い程度の権威を持っており、男性は女性よりすぐれていると信じていました。しかし彼らは、この立場を支えるためにコリント第一11:3を用いませんでした。これらの人々やほかの人々は、もしコリント第一11:3のkephaleが「支配者」や「権威」と理解されるなら、それがゆがんだキリスト論につながることを懸念していたのです。その代わりに、彼らはkephaleを「始まり」あるいは「源泉」の意味で理解しました。

ギリシア・ローマ社会は家父長制的でした。ギリシアの著述家たちが男性と夫の支配について書いた著作が、数多く残っています。しかし、パウロと彼に続いたキリスト教の著述家たちのほかには、夫と妻の関係について、あるいは男性と女性一般について書くときに、「かしら」という語を用いた著述家は一人もいませんでした。キリスト教文献の外では、古代ギリシア語においてkephaleが男女の文脈で用いられることは決してありません。

私は、コリント人への手紙第一11章3節のkephaleを、「起源」あるいは「始まり」、あるいは何人かの人が言うように「源泉」といった意味で読むことを提案します。詳しく説明すると、次のようになります。

「すべての人間の起源はキリストである」。すなわち、キリストは創造における神の代理者です。コリント人への手紙第一8章6節でパウロは、イエス・キリストこそ「この方によってすべてのものが存在する」方であることを強調しています。

「女の起源は男である」（すなわち創世記2:21-23）。女〔イシャー ishah〕は「男〔イシュ ish〕から取られた」のです。

「キリストの起源は神である」（すなわち、キリストは「メシア」であり、メシアの起源は神です）。後の世紀の言葉では、「子は父から出る」と言われます。キリストは神から来られるのです。

コリント人への手紙第一11章2-16節には、創世記2章の創造の記述と、男と女の起源へのいくつもの暗示が見られます（11:8-9; 11-12）。ですから文脈から見て、コリント第一11:3が創造と起源を暗示していると考えるのは妥当です。

かしらの意味内容の全体が何であるのかを、私たちは確定的に言うことはできません。それは多義的なのでしょうか。それとも、どの「組」にもまったく同じように当てはまるのでしょうか。女のかしらとしての男の役割は、どの程度まで、キリストのかしらとしての神の地位と同じなのでしょうか。その限りで、慎重さが求められます。そして、この3節が、続く段落全体にとって導きの思想、あるいは見出しとなりうるのかどうか、またどのようにそうなりうるのかを、よく考えなければなりません。

男性がかしらであることは、どうしてもこの概念をそのように理解したいのであれば、権威以上のものを意味しています。それは同時に、起源と源泉をも意味しているのです。私自身は、すでに第5.2章で示したように、そこから、それが一体性と

結びつきをも強調していると導き出したいと思います。また、からだに対するかしらの養いと保護の働き、支えること、助けることもです。

もしかすると、パウロが反論しているユダヤ教的な影響もあったのかもしれません。創世記の記述の光に照らして――その逆ではなく――パウロはここで、誤って解釈された、あるいはユダヤ教的に解釈された創造の物語を正しているように見えます。ユダヤ主義者たちは、一般的に、そしてコリントでは特に、そこから女性の服従を根拠づけ、それに頭の覆いや長い髪といった外面的なことを結びつけていたのです。

パウロは、創造の記述の意味でこれに反論します。女は男（夫）なしには何ものでもありません。そしてまったく同じように、男も女（妻）なしには何ものでもありません。彼らは互いに補い合います。そして、どうしてそうなったのでしょうか。女は男から出ました。そして、それからどうなったのでしょうか。すべての男は女から生まれます。創造の記述を、これ以上うまく要約して要点をつかむことができるでしょうか。そして彼らの価値の同等性と地位の同等性を、これほど説得力をもって言い表すことができるでしょうか。男も女も、両者とも神の御手によって形づくられて出てきました。完全な補い手として、向き合う相手として。一方では異なる役割を持ちながらも、実生活においてはしばしば入れ替えのきく役割です。それは性別によって決められるものではありません。

男と女のこの同等の地位を補うものとして、それに先立つ7章3-5節のパウロの教えもあります。

「夫は妻に対して夫婦の義務を果たしなさい。同じように妻も夫に対してそうしなさい。妻は自分のからだについて権威を持っておらず、それを持っているのは夫です。同じように夫も自分のからだについて権威を持っておらず、それを持っているのは妻です。互いに相手を拒んではいけません。ただし、祈りに専念するために、合意の上でしばらくの間そうするのは別です。そして再び一緒になりなさい。あなたがたの自制力の不足に乗じて、サタンがあなたがたを誘惑することのないためです。」

パウロはこの言明によって、性についての古代の考え方と思い込みをかき乱します。女性は、男性がいつでも望むときに性的な満足を求めるからといって、一方的に彼に仕えなければならないのではありません。女性は男性のものではありません。彼らは互いに相手のものなのです。性において彼らは互いを尊重します。性は一方通行ではありません。それは義務です。男も女も性的な欲求を持っており、神

ご自身がそれを満たされるべきものとして彼らの中に備えられたからです。セックスは合意による行為であり、双方のパートナーの満足のためにあります。ここでもパウロは、両性の対等さをはっきりと強調しています。そうでなければ、彼は妻が夫のからだについて権威を持っているとは言わないでしょう。性交はからだに関わることなので、からだが強調されていますが、そのからだは結局のところ人格全体を表しています。妻が夫に対して権威（権限、支配）を持っていることは、しばしば見過ごされます。妻は夫を支配すべきではなく、従うべきだという前提に立っているからです。これは、結婚における健全な性生活のための大切な教訓です。それは当時の時代にはそぐわないものでした。しかし、それこそが創造の秩序なのです。

6.1.5 コリントにおける頭のかぶり物

頭のかぶり物やベール着用の習慣について調べないなら、このパウロのテキストを今日にそのまま移し替えてしまう危険があります。しかも、一次元的な白黒の解釈学によってです。それは最終的に、狭められた律法主義の正当化になってしまいます。私自身が経験してきたとおりです。

M・オーアバック（M. Auerback）は、ベールについての論証を次のように要約しています。「象徴や表明は、それが何を意味するかを知っている文化の中でのみ意味を持つ。」「しかし伝統的な聖書学では、ほとんどの人が、コリント人への手紙第一11章3-16節におけるベールは『服すること』を意味すると想定してきた。古代東地中海文化において、ベールが女性たちにとって持っていた意味を理解しようとすることなしに、あるいは多くの現代文化でなお広く用いられていることに取り組むことなしに、である。」[61]

ブルース・ウィンター（Bruce Winter）は、ローマ帝国の時代には「ベールをかぶった頭は、既婚女性に期待されていた慎み深さと貞潔の象徴であったと確実に想定できる」と述べています。[62]

「しかし今や私たちは、女性のベール着用を実践している文化の女性たち自身の語りに触れることができ、それは別の物語を語っている。イスラームとユダヤ教には、敬虔な原理主義的女性たちの強い流れがあり、彼女たちは、コリント人への手

61. Westfall、26頁。Westfall, Cynthia Long. Paul and Gender: Reclaiming the Apostle's Vision for Men and Women in Christ. Baker Publishing Group, 2015
62. 27頁

紙第一11章3-16節におけるパウロの理由づけとよく似た理由からベールをかぶっている。とはいえ私たちは、時代錯誤に陥る危険のある後代の人類学的な類例に全面的に依存しているわけではない。ベールを脱ぐことを拒む女性たちの歴史と、ベールを着用する理由は、アッシリア文化にまでさかのぼることができる。」[63]

「パウロの関心は、預言し祈る教会のすべての女性――女奴隷、解放奴隷の女性、未婚の女性、やもめを含む――に及んでいるように思われる。ローマのマトローナ[64]の服装規定は、彼女の身分と、『ローマ社会における性的能力のある女性としての彼女の地位と役割』の両方を表していた。他方、ベールをかぶらない頭は性的に近づきうることを意味したため、女奴隷や解放奴隷の女性にはベールの着用が禁じられていた。」[65]

「ベール着用の規定は男性の特権であった。指針を定める必要性を最も当然のこととして認識するのは、男性たちであっただろう。ローマの慣行では、男性も女性も祈るときに頭を覆った。パウロは明らかに、諸教会の男性たちに、ローマの慣行に反して頭を覆わずに祈るよう教えていた（コリント第一11:4）。そのため男性たちは、雄ガチョウによいことは雌ガチョウにもよい、と考えたのかもしれない。しかし、男性の覆われていない頭は神の前での彼のへりくだりのしるしであったのに対し、女性の覆われていない頭は神の前での女性のへりくだりのしるしではなかった。むしろそれは、彼女の性的な近づきやすさについての合図を発するものであり、誘惑に等しいものとなりえた。しかし、何がふさわしいかについての文化的な理想は、神学的と思われた優先事項のために、誰かによって捨て去られることもありえた。」[66]

「パウロはコリントの女性たちを正していたのだと、通常は疑問の余地なく想定されている。しかしこの箇所は、コリントの女性たちが頭のかぶり物やベールを外すことを拒んでいたと想定するほうが、より筋が通る。彼女たちは、権威ある人々、すなわち家の教会の男性たち、あるいはおそらく自分の夫たちからさえ、ベールを外すよう圧力をかけられ、あるいは促されていたのである。これは、ベールを着用する文化において繰り返し起こる種類の筋書きである。」[67]

63. 29頁
64. マトローナ（Matrona）とは、ローマ帝国の社会において、ローマ市民と結婚した女性を指す呼び名です。彼女の居場所はたいてい家の中にあり、家族と家事の世話を担っていました。彼女は家長、すなわち父親または夫の保護と後見のもとにありました。（出典：Wikipedia）
65. 29頁
66. 31頁
67. 32頁

「これは、そうした女性たちが性的に近づきうる存在であることを示しただけでなく、社会秩序と階級間の区別をも維持していた。… すべての女性がベールを着用することをパウロが支持したことは、教会内の社会的関係を平等にした。このベール着用が彼の裁量のうちにあった限りにおいて、彼は、文化の中でその地位を拒まれていた教会の女性たちに、尊敬、名誉、性的な清さを保証したのである。」[68] ベールの着用は、上と下という社会的な違い、すなわち身分の違いを明らかにしていました。この身分の違いは、1800年にわたって近代に至るまで見ることができます。

「近東の文化では、上流階級の女性は献身と慎み深さを示すために頭を覆った。覆われた頭はまた、彼女自身の名誉と彼女の家族の名誉――とりわけ、彼女のアイデンティティの源であるパテルファミリアス（paterfamilias、古代の家の家長）の名誉――を直接示していた。パウロはこの象徴の複雑な意味を用いて、創造の記述に基づいてベール着用を支持する神学的論証を提示している。」[69]

E・シュナーベルはこう書いています。「女性が頭のかぶり物を着けることは（宗教的な文脈においてだけでなく）、ローマ・ヘレニズムの文化圏において自明の妥当性を持っていた。ローマの彫像、とりわけ皇族の女性たちの肖像や墓碑のレリーフは、既婚女性を、頭の上まで引き上げたストラ（palla）や、vittaすなわち毛織物の頭帯あるいは髪帯を着けた姿で描いている。これらは慎み深さと貞潔の象徴と見なされていた。女性は公の場でストラを着けなければならないわけではなかった。しかし、ストラを着けることは彼女の貞潔を象徴していた。アウグストゥスの婚姻立法は、売春婦が慎み深い妻、すなわちマトローナのストラを着用することを禁じると定めていた。」[70]

頭を覆うことは広く行われていました。ローマの女性たちは、わずかな手間で、上掛けあるいは外衣であるパッラを後ろから頭の上に引き上げることができました。それによって髪もほとんど覆われたのです。数えきれないほどの古代の図像に、そのことを見て取ることができます。

「このことは、ベールは女性が夫に服することを象徴していたという、聖書学で支配的な想定を論駁するものである。ベールの着用は私的な象徴ではなく、法と慣習によって規定された公の慣行であり、男性も女性もその慣習に従うことが期待され

68. 33頁
69. 37頁
70. Schnabel, E. J., 602–603.

ていた。要するに、ベールは女性の名誉、地位、保護を表していたのである。」[71]

「女性たちがベールを外すことを拒むのは、ベールが名誉と保護を象徴しているからであり、それは一般的なことであった（そして今もそうである）。むしろ、公の場でベールをかぶることを許されていなかった女性たちが、キリストによって義とされたことを象徴するために、集会でベールをかぶりたいと願った可能性のほうが高い。すべての女性にベールをかぶるよう命じたパウロの指示は、反文化的あるいは対抗文化的であり、女性たちに対して好意的なものであった。すべての女性がベールを着用するという慣行は、キリスト教共同体における社会的関係を平準化したのである。」[72]

ここまで詳しく述べてきたのは、こうした外面的なしるしが当時の文化と社会に深く根ざしていたことを示すためでした。キリストの証しと福音を危うくしないためには、キリストにある自由と、社会の規範への適応との間に道を見いだす必要がありました。それは一方では適応を意味しました（女性たちは頭を覆う）。しかし同時に、キリストにある平等を示すために、対抗文化的にすべての女性が頭を覆うことをも意味しました。同じように、男性が頭を覆うことの拒否も意味しました。それは偶像礼拝的な祭儀への適応を意味しかねなかったからです。この原則は、今日も守るべきものです。古代の社会規範を受け継ぐことは、21世紀の私たちの助けにはなりません。むしろそのような外面的なことは、戸惑いを引き起こすでしょう。残念ながら、実際にそうなっているとおりです。

6.1.6 頭に権威のしるしを持つ？

10節：それゆえ、女は御使いたちのために、頭の上に権威を持つべきです。

多くの翻訳が、ここに「力あるいは権威のしるし」を付け加えています！ しかしそこにあるのは、ただ力、全権、あるいは権威という語だけです。この付け加えは驚くに当たりません。冒頭で述べたように、このパウロのテキストは、女性に対する男性の階層を裏付けるものとして理解されてきたからです。それが（ほとんど例外なく男性の）翻訳者たちに影響を与えてきました。言い換えれば、この付け加えは一つの解釈なのです。

この節は、むしろ次のように訳されるべきです。

71. 42頁
72. 44頁

それゆえ、女は御使いたちのゆえに、自分の頭に対する権威を持つべきです。

（シュナーベル、ウェストフォール（Westfall）、ブッシュネル（Bushnell）、キーナー（Keener）、シルマッハー（Schirrmacher）など）

パウロは、キリスト教共同体においてはベールをかぶることは女性の権利であると指摘しており、それによって象徴が変容しています。したがって、それは明確に、服することのしるしでも、階層的な服従のしるしでもありません。これは、パウロがすでにコリント人への手紙第一6章2-3節で述べているように、女性は世界と御使いたちをさばくように定められているのだから、女性の服装に関する事柄において自分自身の判断を下すことができるべきだ、ということを意味するのかもしれません。「伝統的な頭のかぶり物を着けることによって、妻は夫への貞節と自分の個人的な社会的地位を受け入れることで、自分の頭に対する支配権を示す。女性たちが教会の集会という公の場で覆いを取ることによって発する性的な合図は避けられ、男と女の関係づけは保たれ、祈りと預言的な語りにおける女性による神の現実の表明は真正なものであり続ける」。[73]

「したがって、パウロの起源の神学において、男と女は明確に相互に依存し合っている。コリント人への手紙第一11章3-16節の文脈において、パウロは、ベールを着用したいという女性たちの願いを自分が支持したことから生じうる、女性たちの不適切な独立性を外交的に和らげているのである。」[74]

6.1.7 今日における意義

神のことばは時代を超えています。一言も過ぎ去ることはありません。しかし、特定の時代に属し、その時代に向けられた事柄もあるのです。

頭を覆うことによって、女性たちは、自分に注意を引きつけることや、自分の髪の栄光を見せること、そして男性たち（そしておそらく一部の女性たち）の気を散らすことを避けるべきでした。神の栄光がたたえられ、賛美されるべきだったのです。神の栄光、神の臨在こそが集まりの中心でした。今日でも、礼拝において人間を高めるものは何もあってはならず、誰も自分に注意や栄誉を引きつけるべきではありません。

73. Schnabel, E. J., 610–611
74. 73頁

女性は、その外見によって、すなわち際立たせた美しさや着飾った美しさによって、神の栄誉から何かを奪い取るべきではありません。これがこの箇所の倫理的な原則であり、それは今日も有効です。講演者も説教者も、証しや宣教報告をする人も、歌い手も、楽器の奏者も、誰一人として、当時とまったく同じように、服装によって自分に注意を引きつけるべきではありません。

「頭のかぶり物の慣行について言えば、西洋社会では、女性が貞節な妻としての自分の地位を頭のかぶり物によって示すことは、もうずっと以前から一般的ではなくなっている。イスラーム諸国、したがってイスラーム地域の教会では事情が異なる！ そのような状況でキリスト者の妻たちが頭のかぶり物なしに教会で活動するのは、まさに彼女たちが自分の住む町の公の場でも頭のかぶり物なしに行動しているからである。頭のかぶり物がないことは、何の合図も発していない。もし一部のキリスト者が、妻たちは『聖書への従順』から今日でもなお頭のかぶり物を着けるべきだと要求するなら、そのとき使徒パウロの指示はまさに『従順に』理解され実行されているのではない。パウロにとって問題なのは頭のかぶり物ではなく、社会全体にとって重要かつ基本的である伝統的な慣習を意図的に無視し、嘲ることなのである。

西ヨーロッパの教会で女性たちが頭のかぶり物を着けるなら、それはパウロが求めた、妻の貞潔と連帯を象徴する慣習への同調ではなく、むしろまさに同調していないふるまいである。西洋では、夫婦の連帯と慎み深さが特定の服装の仕方によって象徴されることは、もはやほとんどない。それはむしろ言葉によって、すなわち結婚と配偶者の価値についての具体的な発言によってなされる。」[75] そしてもちろん結婚指輪によってです。結婚指輪は、それを着けている人が確かな（結婚）関係の中に生きており、新しい関係に開かれているわけでも、性的な冒険を求めているわけでもないことを、見誤りようもなく示しています。結婚指輪がそれを防ぐのは限られた範囲でしかありませんが、大切なのはそのしるしなのです。

それにもかかわらず今日、女性に頭のかぶり物を命じる人（あるいは女性として自分自身にそれを課す人）は、私たちが召されている福音の自由を、まだつかんでいないのです。

75. Schnabel, E. J., 624

6.1.8 説明的な言い換え

以下に、このテキストを私の言葉で言い表したものを記します。この複雑なテキストを簡潔に説明するとしたら、私はこのように説明するでしょう。これはギリシア語本文の翻訳ではなく、私が理解し説明するとおりの、書き手パウロの視点からのパラフレーズ版です。

コリントの皆さん、あなたがたに自覚してほしいことがあります。それは、すべての男の起源、すなわちかしらは、キリスト、メシアだということです。キリストによって、あなたがた男たちは造られました。そして男として、あなたがたはキリストに属しています。そのことは集まりの中で目に見えるようになります。あなたがたのことを最初に挙げるのは、あなたがたが女性たちに、祈ったり預言したりするときに頭のかぶり物を着けないよう求めているからです。

女のかしらは男です。女は男と一つになるために、男のわき腹から造られました。男がかしら、女がからだです。男は女の起源であり、女もまた男に属しています。そしてそのことは集会の中で目に見えるようになります。

この関係を、私たちはキリストにおいても見ます。キリストのかしらは神です。神は永遠において、また人として、ご自分と等しい御子であるキリストを生まれさせました。

コリントで、ある男が集会の中でキリストや神に声を出して祈ったり、預言的に語ったりするときに頭を覆っているなら、それは恥です。彼はキリストにではなく、自分自身に栄誉を帰しているのです。なぜなら偶像礼拝者たちは、偶像に犠牲を献げるとき頭を覆うからです。覆わないことで、男はへりくだりを示し、いと高き方、目に見えないキリストに栄誉を帰すのです。

女性の場合は、まさにその逆です。集会で祈り、預言的に語りながら頭を覆わない女性は、自分のかしらに恥をもたらします。彼女たちは自分自身と自分の夫、つまり自分のかしらを辱めるのです。なぜなら彼女たちは、神とキリストにではなく、自分自身に注意を引きつけるからです。

もし誰かが、女性は男性と同じように頭を覆わなくてもよいと要求するなら、その人は最後まで考え抜いていません。あなたがたも知っているとおり、コリントでは頭を覆わない女性は髪を剃られた女性と見なされ、売春をしている女性や性的な出

会いを求めている女性と同じに見られるのです。彼女がベールをかぶらず、頭を覆わないのなら、論理的には髪も切ってしまうか、すっかり剃ってもらうべきだということになります。

わかっています。あなたがたはその要求によって、そんなことを意図しているのではありません！ しかし、あなたがたが生きている社会では、それが帰結となるのです！ ですから、あなたがたのところに来て、公の場で女性が頭を覆うという通常の慣習が拒まれているのを見る人々にとって、つまずきとなる危険を冒してはなりません。

男性は集会の中で、神の御前で、ベールをかぶるべきではありません。なぜなら男は神のかたちであり、神の栄光の照り返しだからです。

女もまた神のかたちですが、それに加えて、男の栄光の照り返しでもあります。彼女の美しさは、彼女が一つとなっている夫の美しさなのです。

彼女はどのようにして男の栄光となりえたのでしょうか。確かに、男が女から造られたからではなく、女が男から、男のわき腹から形づくられたからです。

そして、彼女が男の栄光であるのは、男が女のために造られたからではなく、その逆だからです。女は男のために造られました。男はひとりであり、助けを必要としていたからです。そして女として、彼女は男にとって慕わしいほど美しかったのです。

女はそれほど大きな価値を持ち、男にとってそれほど大きな益となる存在なのですから、自分の頭については自分で決めるべきです。頭を覆うか覆わないかをです。誰も彼女にそれを命じてはなりません。夫も教会の指導者たちも、頭のかぶり物を着けないよう（あるいは着けるよう）彼女に命じてはならないのです。

しかし女は、その自立と決定の自由の中にあっても、男から切り離されているのでも、独立しているのでもないことに心を留めなさい。教会において女は男なしには存在せず、男も女なしには存在しません。神のお考えは、いつも男と女が共にあり、共に生きることでした。かしらとからだの一体性の中で、彼らは共に、一致して、話し合って、平和のうちに、互いに従い合い、補い合いながら行動するのです。

一方が他方なしには存在しないとは、どういうことでしょうか。人間の夫婦の創造を、もう一度思い起こしてください。初めに女は男から出ました。男のわき腹から

です。男に属するものとして、再び男と一体となるためにです。しかし、さらに考えてください。それ以来、すべての男は女から生まれてきます。男がいなければ女は存在せず、女がいなければ男は存在しないでしょう。両者は尊厳において等しく、価値において等しく、立場において等しいのであり、その違いの中で完全に補い合うのです。そのすべては神のお考えでした。神こそ、そのすべてが出てきた源であるかしらなのです。

このことを踏まえて、あなたがたに尋ねます。女が公の場で、しかもベールをかぶらず、頭を覆わないで神に祈るのは、ふさわしいことでしょうか。いいえ、コリントとローマ帝国の習慣に照らせば、それはふさわしくないと、あなたがたも同意するでしょう。

人々にとって自然の法則のようになっている風習や習慣というものがあるのです。男が風習や習慣に反して長い髪をしているなら、それは恥と見なされます。この点でも、女性の場合はまさにその逆です。女性の長い髪は彼女の栄光であり、生まれながらの飾りであって、人々もそのように感じています。長い髪は、男の栄光となるために、飾りとなるベールや外套のように彼女に与えられているのです。

男性にとってそれほど慕わしく見えるこの飾りを、彼女は集会では覆うべきです。男が覆わない頭によって自分のへりくだりを示すべきであるのと同じように、ここはこの栄光をもって姿を現す場ではありません。なぜなら問題になっているのは、神とキリストの栄誉と栄光だからです。王の王である方の謁見に私たちを招いてくださるのは、この方なのです。

もしコリントで誰かがこれについて議論しようとし、頭のかぶり物というこの慣習に疑問を呈するなら、その人は、そのようなことはどこにもないということを自覚すべきです。あなたがたが女性たちに、頭のかぶり物を着けないよう命じようとしているようなことはです。そのようなことを実践している教会は一つもありません。ですから、頭のかぶり物について通常当てはまり、品位があり、誰にもつまずきを与えないことを守りなさい。

6.1.9 結びと要約

この箇所の言葉遣いとパウロの結論は、誰かがコリントの家の教会におけるベール着用を制限するか禁止しようとしていたが、すべての女性、一部の女性、あるいは一人の女性がベールをかぶりたいと望んでいたことを示唆しています。まずパウロ

は創造の記述を簡潔にまとめ、女が男から、また男のために造られたことが、女が男の栄光である理由だと説明しています。男は女のかしらです。女は男から造られたからです。そして女のかしら（頭）は、したがって何らかの仕方で男の栄光を映し出し、あるいは表現しています。創世記の記述において、女はまた男の栄光でもありました。すべての動物とは異なり、男を惹きつけるために特別に造られたからです（創世記2:18-23）。[76]

パウロの文書には性（ジェンダー）の神学が含まれています。それは、パウロがギリシア・ローマ文化の概念と象徴、そしてギリシア語の言い回しを用いて創造の記述を説明する仕方の中に実現されています。「かしら」という比喩をアダムに適用することによって、パウロは、エバが複数のアイデンティティを持っていることを示しています。女性は神のかたちであり、アダムのかたちであり、また「男の栄光」でもあります。女性を「男の栄光」と表現するパウロの言葉は、服従やより小さな栄光を示唆しているのではなく、付加的な栄光、すなわち男性に対する彼女の美しさの力を指し示しているのです。同様に、私たちは、アダムが先に造られた（13節）と述べているテモテへの手紙第一2章13-14節のパウロの短い叙述の中に、男性の優位を読み込むこともできません。むしろパウロは、創造の記述から相互性を教えています。パウロは男性を、女性の助けを必要とする、益の受け手として描いているからです。彼はそれを、その文化が理解するであろう概念で描いています。女は男から形づくられたので、創造の記述においては、ギリシア語の用法で言えば、男が女のかしら（彼女の命の起源）として機能しています。しかしその後は、すべての男が女から生まれるので、女もまた命の起源なのです。それが創世記3章20節の「エバ」という名の意味です。

それゆえ、神の設計によって、女と男は互いに独立してはいません。パウロが、創世記1章27-28節の創造の記述における女性の権威や、ギリシア語の慣用句「かしら」の彼の用法において、その権威に反論したり、それを再解釈したり、相対化したりしていると解釈しなければならない、やむをえない理由は何もありません。男も女も神のかたちに造られ、両者とも支配するために造られました。その支配は、パウロによれば、それぞれの文化的な枠組みの中で、共同性と相互性という意味において行使されるのです。[77]

76. 98頁
77. 105頁

6.1.10 コリント第一11章の別の読み方

およそ25年前、私は初めて、パウロがこのテキストで自分の考えではなく、コリントの男性たちの考えを挙げ、あるいは引用し、それに反論しているという話を聞きました。これは引用説、あるいは引用テーゼと呼ばれます。ドイツ語でこれを練り上げたのは、トーマス・シルマッハーです。私は長い間懐疑的でした。というのも、その結果として出てくるのは、彼の本の題名そのものだからです。Paulus im Kampf gegen den Schleier（『ベールと戦うパウロ』）。[78] つまり、頭を覆うことを擁護する弁論ではなく、こうした外面的なことの拒否なのです。意味が180度転換します。「ゲームチェンジャー」とも呼ばれるものです。この説は、このテキストに対するまったく別の視点です。

T・シルマッハーとは独立に同じ説を唱えている英語圏の神学者たちを通して、私は彼の解釈に立ち戻りました。私はこの説をまったく筋の通ったものだと考えています。これに対して出されてきたさまざまな批判を知ったうえでもです。シルマッハー自身も、自著の第5版で批判に答えています。この解釈は証明されてはいません。しかし、証明された解釈など、そもそもあるでしょうか。

この説は歴史批評的方法から生まれたものではありません。この方法が登場する前から、すでにあったからです。聖書批判が問題なのではなく、思考の流れを理解することが問題なのです。テキストの価値を下げるためではなく、それをイエスと使徒たちと聖書の教えの中に位置づけるためです。

引用の例

パウロがコリント人への手紙第一11章で、何人かのコリントの男性たちの戸惑わせるような要求を詳しく引用しているという可能性にそもそも思い至るために、コリント人への手紙第一から似た例を挙げます。パウロは何度も、コリントにおける考えや意見や出来事に言及しています。1-4章では党派の形成が問題になっています。ある党派が、彼のいないところで彼を自分たちの指導者だと宣言したため、パ

78. Paulus im Kampf gegen den Schleier, Thomas Schirrmacher, Eine alternative Auslegung von 1. Korinther 11,2-16, 第5増補版、VTR、ニュルンベルク、2002年（初版1993年）。ラインラント神学校（Theologisches Seminar Rheinland）の研究主任・旧約聖書講師であり、この引用としての読み方を支持するハンス＝ゲオルク・ヴュンシュ（Hans-Georg Wünch）による序文付き。

ウロは、自分が彼らのために十字架につけられたのか、と問うに至ります。5-6章では教会の戒規が、6-7章では夫婦の愛が、8-10章では偶像に供えた肉が、12-14章では御霊の賜物が、そして15章では復活が問題になっています。彼は数多くの論争的なテーマ、誤った見解、誤った結論を扱っています。その中には、あれこれの皮肉な発言も見られます。

ほかの手紙以上に、パウロは誤った考えを挙げて、それを正しています。そのほとんどを、彼はおそらく、私たちの手元にはもうない彼の最初の手紙（5:9）に対するコリントの人々の返信と、コリントからの使節団を通して知ったのでしょう。何かを引用したり、自由に言い換えたりして、それに論評を加えたり反論したりするのは、まったく普通のやり方です。

引用の一つの例は、コリント人への手紙第一7章1節です。男が女に触れないのは良いことです。多くの人がこれをパウロの見解だとしてきました。少なくとも三つの理由から、それは疑わしいものです。この文は、はっきりと、コリントの人々がパウロに書いてきたことから始まっています。次に、問題になっているのは触れることであり、それはギリシア語で表現されていたように、性的な交わりを意味しています。パウロは、コリントの人々、あるいはその中の何人かが信じていたように性交に反対しているのではありません。彼はそれを、男と女の結婚における相互の義務と見なしているのです。

10章23節にはこうあります。すべてのことが許されている。パウロはここで、キリスト者の自由を描いているのではなく、コリントの人々の見解を描いているのです。しかしそれは誤っています。すべてのことが許されているなどということは決してありません。この引用も、比べものにならないほど短いとはいえ、引用としては示されていません。文脈がそれを明らかにしているのです。

パウロがコリント人への手紙第一で、自由に、あるいは手紙から引用していることは、一般に認められています。6:12,13; 7:1; 8:1,4; 10:23; 15:12です。どの引用も常にそれとして示されているわけではなく、文脈からもっともらしく導き出されます。結局のところ、コリントの人々は何が問題なのかを正確に知っていたのです。今日の私たちにとっては、それをつきとめるのはより難しいことです。

引用説に対する二つの主な反論は、パウロがそれを疑いの余地なく引用として示していないこと、そして11章と14章では、ほかの引用と比べて長すぎることです。引用が長いかどうかは——8-10章の偶像への供え物についての長い思考の流れに注意

してください――、その複雑さによります。誤解の危険を冒さずに、それより短く述べることはできなかったのです。

長い引用は神のことばではありえない、という異論は誤った推論です。聖書には、真理ではないのに記されていることが数多くあります。疑いなく偽りである悪魔のことばさえ記されています。大切なのは常に、信頼できる伝達です。

これらの前置きの考察は、コリント人への手紙第一11章をこのように読むことが原則として可能であることを示すためのものでした。

6.1.11 コリント第一11:2-16の別訳

まず、あなたがいちばんよく使っている、よく知られた翻訳でテキストを読んでください。次に、シルマッハー（Schirrmacher）が提案しているこの別訳を読み、一文ずつ比べてみてください。

(2) さて、私はあなたがたをほめます。あなたがたは、あらゆる点で私を覚え、私があなたがたに伝えたとおりに、伝えられた教えを堅く守っているからです。

(3) しかし、あなたがたに知っておいてほしいのです。すべての男のかしらはキリストであり、女のかしらは男であり、キリストのかしらは神であることを。

さて、4節から9節まで、もしかすると10節までは、パウロが引用している、あるいは自由に言い換えているユダヤ主義者たちの誤った見方が続きます。

(4) 祈りまたは預言をするとき、頭から何かを垂らしている男はみな、自分のかしらを辱めます。

(5) しかし、頭に覆いをかぶらずに祈りまたは預言をする女はみな、自分のかしらを辱めます。それは髪を剃られた女とまったく同じことだからです。

(6) ですから、もし女が覆いをかぶらないのなら、髪も切ってしまいなさい。

しかし、髪を切られたり剃られたりすることは女にとって恥ずべきことなのだから、覆いをかぶりなさい。

(7) 男は、確かに頭に覆いをかぶるべきではありません。男は神のかたちであり、栄光だからです。しかし女は男の栄光です。

(8) 男が女から出たのではなく、女が男から出たのです。

(9) また、男が女のために造られたのでもなく、女が男のために造られたのです。

今やパウロはこれらの要求に反論し、はっきりと異を唱え、いわば不合理に帰着させます。

(10) それゆえ、女は御使いたちのゆえに、自分の頭に対する権威を持つべきです。

(11) 結局のところ、主にあっては、女は男なしにあるのではなく、男も女なしにあるのではありません。(12) 女が男から出たように、男もまた女によって存在するのです。しかし、すべては神から出ています。

(13) あなたがた自身の間で判断しなさい。女が覆いをかぶらずに神に祈るのは、ふさわしいことです！

(14) 自然はあなたがたに教えてなどいません。男が［長い］髪をしていれば、それは彼にとって恥であり、(15) 女が［長い］髪をしていれば、それは彼女にとって栄誉である、などとは！ 髪はベールの代わりに与えられているのですから。

(16) しかし、もし誰かが論争好きであろうと思うなら、［その人はよく考えてください。］私たちにはそのような慣習はありませんし、神の諸教会にも［また］ありません。

別の可能性として、10節をインデントされたテキストの側に含め、引用として訳すこともできます。

(10) それゆえ、女は御使いたちのために、頭の上に権威を持つべきです。

ルーシー・ペピアット（Lucy Peppiatt）は、6節もパウロのことばと見なしています。そこでパウロは、頭を覆うという要求を最後まで考え抜き、ユダヤ主義者たちのグロテスクな矛盾を指摘したうえで、さらに引用を続けている、というのです。

この読み方は、テキストのいくつかの難しさを解消します。この読み方が、2000年の教会史に比べれば、最大でも200年前に初めて生まれた、あるいは考えられたものにすぎないことは承知しています。だからといって、それは間違っているのでしょうか。

たとえば艱難の前の教会の携挙を信じている人々にも、まったく同じことが当てはまります。この説もそれより古くはないからです。私たちや数えきれないほど多くのキリスト者が毎日聖書を学んでいるのなら、私たちを助け、長年の謎を解くことのできる新しい認識があっても、驚くには当たらないはずです。

6.1.12 まとめ

コリント人への手紙第一11章1-16節をこのように読んだことのない人々にとって、この読み方は重荷を下ろすものです。そこから解放的な認識が生まれます。女性は今日、公の場で祈り、預言するときに、頭を覆ったりベールをかぶったりする必要はありません。彼女は自分で決めることができるので、好きなように髪を切ってかまいません。男性も、望むなら長い髪をしてかまいません。パウロ自身もおそらく、一時期長い髪をしていました（使徒21:24）。自然は、それが何を意味するにせよ、神に喜ばれる方法を私たちに示す教師では決してありません。

さらに深く言えば、このテキストからは、男性を女性の上に、あるいは女性を男性の下に置く順位も序列も出てきません。すべての女性とすべての男性一般についても、ここで権威の違いが描かれているのではありませんし、信仰を持つ夫婦についても同じです。

これによって、良心の問題や、教会の指導者や「指導的な兄弟たち」の要求にはっきりと答えることができ、責任の重荷や人間の作った律法の重荷を姉妹たちから取り除くことができます。

歴史的な説明もあり、それらは、今日では頭を覆うことはもはや何の役割も果たさないという明確な結論に達しています。上で示したように、引用説なしでもそこに達することができます。習慣や風習によっては（古代において、あるいは18世紀や、さらには19世紀に至るまで）、たとえば頭を覆わずに公の場で語る女性は、つまずきを引き起こしました。

実際、問題はつまずきを引き起こさないことです。それは福音の核心を成すことではありません。パウロが、異邦人を獲得するために異邦人に対しては異邦人のように、ユダヤ人を獲得するためにユダヤ人に対してはユダヤ人のようになる（9:19-23）、という意味での適応があります。彼は人々をイエスのために獲得するために、自由を放棄するという代価を払うのです。ですから、こうした理由から、関わる人々が生き、根を下ろしている習慣への自発的な（神学的ではない！）適応、あ

るいはそうした習慣の保持がありうるのです。誤った役割理解に基づいているかもしれないこうした風習や外面的なことは、いわば甘んじて受け入れられ、容認されます。そしてそれらは、福音の自由に基づいて、変わっていき、消えていってかまわないのです。ドイツやたいていの西洋の民主主義国家には、このような状況はありません。そこでは「敬虔な風習」、服装の規則、外面的なことは、世俗の文化の構成要素ではなく、キリスト教的な文化の構成要素です。それは長い過去から現在へと伝えられ、その独自の環境の中で宗教的な根拠をもって続けられているものです。世俗の影響や強制はありません。そのことは、そうしたキリスト者が非キリスト者と出会うときに、不必要な戸惑いを招くことがあります。

保守的な考え方に立つある兄弟は、たとえば伝道集会では、「彼らにとって理解できない外見とふるまいによって妨げとならない」ために、外面的なことは守らないほうがよいと強調しています。[79] 私の答えはこうです。福音にとって妨げとなるものはすべて、避けなければなりません。聖書が（とされるところでは）、同時に神の福音の妨げとなりうるような規定を設けているとしたら、何という矛盾したジレンマでしょうか。

妨げやつまずきの石となってよいものは、ただ一つしかありません。イエス・キリストの十字架です！ そこで人々の心は分かれます。外面的なことによってではありません。発言の規則、服装の規則、座席の規則によってではありません。

女性が礼拝で語り、参加することを禁じられるとしたら、それは大きな妨げです。それについては次の章で扱います。

「私たちがパウロのことばだと見なしてきたもの（しかし実際にはそうではないもの）を、教会で女性を黙らせるために誤って用いてきたという事実は、歴史上最大の悲劇の一つと見なされなければなりません。」

ダニー・シルク（Danny Silk）

そうです。実に二つの聖書テキストが、何世代にもわたって、女性の存在と非存在――生きるか死ぬか――を決めてきたのです。

ヴェロニカ・シュミット（Veronika Schmidt）

79. Herbert Briem, Die Kopfbedeckung der Frau, 2018



6.2 語らずに、黙っていなさい

自由教会のキリスト者の中で、女性が礼拝で黙っている教会はごく一部にすぎません。私はそのような教会の世界で育ったので、このことは今日に至るまで私の心を占めています。しばしば感情を揺さぶられながら。

女性が礼拝の集会で、賛美することと共同の「アーメン」を唱えることのほかは黙っているべきだということに、どのような神のお考えがありうるのか、私は一度も理解できませんでした。それでも、神のことばがそう言っているので、そのようにするのです。男性として、私は間接的に関わっているにすぎません。生涯ずっと礼

拝で何も言うことを許されないのがどのような気持ちなのか、私には口をはさむことさえできません。

今日の私の印象では、私は男性として、間接的に関わっているだけではありません。私は二重に、そして直接に関わっているのです。一方で私は、聖書を解釈し、教え、宣べ伝えるとき、どのような答えと根拠を持っているかについて、共同の責任を負っています。そして、教会の最も重要な出来事、すなわち世界中の教会の集まりにおいて、キリストのからだの半分を黙らせるには、非常に十分な理由がなければなりません。私が関わっているのは、賜物の半分が集まりの中で私の益となることができないからです。祝福が失われているのです。

もしこの理解が誤りであるなら、もし神が、そこで女性たちの声を男性たちの声と同じように聞きたいと願っておられるなら、それは本当の問題であって、些細なことではありません。キリストのさばきの座を見すえるなら、その責任を負うことは、よく考えられるべきです。

私自身、何十年もそのような集会で過ごしてきました。私はそれを内面化し、正しいと考え、擁護し、ほかの人々にも求めてきました。かつて私の青年時代に、この伝統を知らないある姉妹が、ある大会で声に出して祈ったことがありました。私もほかの人々も、深い衝撃を受けました。今にも天から雷が落ちてくるかのように驚いたのです。後になって、人々はこの姉妹を「啓蒙」しました。

私はすでに、黙っている女性たちは決して神のみこころではないことを明らかにしてきました。私にとって問題なのは、この不都合な言明を素直にへりくだって守る代わりに、しつこく巧妙にそれをすり抜けることではありません。残念ながら、これは沈黙を支持する人々の、絶えることのない単調な非難です。いいえ、事はそれほど単純ではありません。キリストにある姉妹たちが黙っているべきではないことには、十分な、よい理由があるのです。

問題になっているのは、このテキストです。

> [コリント人への手紙第一 14:34-36] 女たちは集会において黙っていなさい。彼女たちは語ることを許されていないからです。むしろ、律法も言っているように、従いなさい。しかし、もし何かを学びたいのなら、家で自分の夫に尋ねなさい。女が集会で語るのは恥ずべきことだからです。それとも、神のことばはあなたがたから出たのですか。それとも、あなたがたにだけ届いたのですか。

6.2.1 問い

私たちは、このテキストについてもう一度新たに考えるべきです。多くのことがかかっています。どうか、ただ考えの上で私についてきてください。たとえまったく違う見方をしていても、一度辛抱してみてください。もしコリント第一14章のこの最後の節々がなかったとしたら、あなたはいつか考えの上で、沈黙の命令に近づくことがあったでしょうか。聖書全体のどこかに、このような指示があるでしょうか。これは「フェミニスト的な誘導尋問」ではありません。これほど広範囲に及ぶ指示が、ほかのどこにも一度も言及されず、暗示さえされていないということは、考えさせられることのはずです。問題になっているのは、テモテへの手紙第一2章12節の教えることや教えることの禁止ではありません。これらの言明は、私の問いの文脈には属しません（このテキストはしばしばすぐに論拠として持ち出されますが）。問題になっているのは、女性たちの声に出しての参加です。祈り、体験の証し、歌、預言のことば、聖書朗読、あるいは説教です。

この手紙の直接の文脈には、まさに正反対の言明があります。最も目を引き、すでに前の章で取り上げた言明は、女性たちが「祈り、預言する」（11:5）というパウロのことばです。私はそれを指摘しましたが、繰り返します。「祈り、預言する」ことは、14章で詳しく描かれているように、集まりに特徴的なことです。11章で求められているベールや頭のかぶり物は、男性たちがいる集まりにおいてのみ意味を持ちます。このテキストで問題になっているのは、食前の祈りでも、婦人会や子ども会でもありません。子ども会は、おそらくまだまったく存在していませんでした。

パウロにとって、女性たちが参加することはまったく当然のことです。14章で彼は何度もそのように述べています。この問いを念頭に置いて、章全体を通して読んでみてください。

男性にも女性にも、兄弟にも姉妹にも、次のことが当てはまります。

> 5節：私は、あなたがたみなが異言で語ることを願いますが、それ以上に、預言することを願います！
>
> 12節：集会を建て上げるために、あなたがた（みな）があふれるほどになるよう求めなさい。

23節：ですから、もし集会全体が一つの場所に集まって、みなが異言で語るなら……

26節：では兄弟たち、どうなのでしょうか。あなたがたが集まるときには、それぞれが詩篇を持ち、教えを持ち、啓示を持ち、異言を持ち、解き明かしを持っています。すべてのことを、建て上げるために行いなさい。

31節：あなたがたは、一人ずつ順番に、みなが預言することができるからです。それは、すべての人が学び、すべての人が励まされるためです。

兄弟たちという呼びかけは、すべての人、つまり兄弟と姉妹を指しています。誤解の余地をなくすには、Geschwister（ゲシュヴィスター。兄弟と姉妹をまとめて指すドイツ語）、つまり「兄弟姉妹」と訳すほうがよいでしょう。コリント人への手紙第一は、多くの段落を兄弟たち（adelphoi）という語で始めています。この語は疑いなく、兄弟と姉妹に向けられたものです。男性たちだけにではありません。通常、男性複数形には女性たちが含まれていました。今日、「総称的男性形」がそのように用いられているのと同じです。たとえば口座名義人（ドイツ語ではKontoinhaber、男性形）には、男性も女性もいます。血のつながった姉妹たちを指すには、adelphaiという語がありました。ここで脱線することなく、私はイエスのことばを指摘しておきます。そこでは、すべての女の弟子と男の弟子が、まさにこの語によって一緒に呼びかけられ、一括されています。「しかし、あなたがたはみな兄弟です！」（マタイ23:8後半）。それに加えて、すべての女性は今や「神の息子たち」でもあります（ガラテヤ3:26）。文脈が疑いなく男性だけを指しているのでない限り、すべての姉妹たちが含まれているのです。兄弟愛も、きっと姉妹たちを含んでいることでしょう。

これらの明確な言明に加えて、賜物、すなわち御霊の賜物（12章を参照）、恵みの賜物が、すべての肢体に分け与えられているということがあります――性別によってではありません。これに関するどのテキストにも、男性であるか女性であるかという基準が、賜物の分配や賜物を与えられることに意味を持つことを示唆するような区別はありません。ペンテコステには、預言者ヨエルの約束に従って、御霊がすべての肉なる者に、息子たちにも娘たちにも等しく注がれました（使徒2:17）。

6.2.2 章の終わりでの戸惑い

パウロは11章5節で、公の場で祈り、預言する女性たちについて語りました。14章でもここまで、女性たちを特に取り上げたり除外したりせず、含めてきました。その後に、戸惑わせる言明が来ます。女たちは黙っていなさい、と。二つの節の中で、それが三度繰り返されます。したがって、それまでのことはすべて彼女たちには当てはまらない、ということになります。パウロは書いているときにそれを忘れていて、下に付け加えたのでしょうか。それとも、それは彼の教えの締めくくりのクライマックスなのでしょうか。いいえ、パウロは天才的で賜物豊かな書き手でした。どの言葉も正しい場所にあり、よく考え抜かれていました。

テキストによれば、彼女たち、すなわち女性たちは、律法も言っているように、黙って従うべきだとされます（14:34）。沈黙と服従という二つの指示を含み、根拠づけているとされる律法が挙げられていることに、人は注意を引かれるでしょう。これがパウロの語り方でしょうか。

そのような律法は、モーセのトーラーにはありません。服従についても、沈黙についてもです。そもそも、旧約聖書の律法が、新約聖書の集まりのためのこれほど具体的な指示となることなど、どうしてありうるでしょうか。この章の21節を見ると、パウロが律法をどのように引き合いに出しているかがわかります。誰でもイザヤ書28章11-12節で確かめることのできる引用によってです。なぜここではそうしないのでしょうか。それがモーセの律法ではないからです。

モーセの律法全体、あるいは旧約聖書全体が、具体的に、あるいは文字どおりにではないにしても、この方向で理解されるべきだ、と論じられます。それも根拠づけることができません。女性に対するこれほど広範囲に及ぶ制限のためには、それはあまりにも貧弱です。そのように論じる人で、これほど一般的な、あるいは薄弱な根拠しかない自分に不利な判決を受け入れる人は、誰もいないでしょう。

ここでパウロは創世記3章16節の刑罰のことば、すなわち夫が妻を支配すると言われている箇所を意味している、とまで考える人々もいます。それはまったく的外れですが、もし本当にそうだとしたら、沈黙の命令は堕落に対する直接の刑罰だということになります。つまりそれは、以前はそうではなかったことを含意する刑罰です。新しい契約の教会においては（！）、その刑罰はむしろ取り除かれていてよいはず、いや、取り除かれていなければならないはずです。

6.2.3 引用としての読み方

ここで問題になっているのは、もしかすると引用なのかもしれません。その場合、コリント人への手紙第一14章33-36節は次のように読めます。

> 「神は無秩序の［神］ではなく、平和の［神］だからです。聖徒たちのすべての教会において［そうである］ように。

次に、ユダヤ主義者たちが押し通し、導入しようとしていることが続きます。パウロはそれを引用するか、彼らの要求を自分の言葉でまとめています。

> あなたがたの女たちは、諸教会において黙っていなさい。彼女たちは［あなたがたによって］語ることを許されていないからです。むしろ、律法も言っているように、従いなさい。しかし、もし何かを学びたいのなら、家で自分の夫に尋ねなさい。女が教会で語るのは恥ずべきことだからです。

これに対して、今やパウロははっきりと、皮肉を込めて反論します。

> それとも、神のことばはあなたがた［男たち、あるいはコリントの人々］から出たのですか。それとも、あなたがたにだけ届いたのですか。」

女性が黙っていなければならないというのは、パウロの考えではありません。そうであれば、彼は自分自身と矛盾することになるでしょう。私たち男性は、このような矛盾を知りながら見過ごし、それを女性たちに不利になるように適用してよいのでしょうか。私たちは日常生活の中で、このようなことを容認するでしょうか。

コリントの教会の女性たちにベールの着用を、そしてここではさらに沈黙を義務づけようとしたのは、おそらくユダヤ人の男性たちでした。

これについてシルマッハー（Schirrmacher）はこう述べています。「ロバート・W・アリソン（Robert W. Allison）は、さらにコリント第一14:34における律法への言及の問題に取り組んだ。彼は、旧約聖書の律法には女性に沈黙を求める要求は含まれていない、という結論に達している。しかしコリント第一14:34の結論は、私たちが冒頭でタルムードに基づいてすでに知った、創世記3:16のラビ的釈義にまったく対応している。この釈義はコリント第一11:2-16にも反映されているが、イエスとパウロが旧約聖書から得た教えには矛盾している。

ジョイス・ハーパー（Joyce Harper）とジョン・A・アンダーソン（John A. Anderson）は、律法への言及はタルムードにおける女性の全面的な発言禁止に対応しており、ここで律法を引き合いに出しているのはパウロではなく、ユダヤ人の教師たちが不当に自分たちの律法解釈を引き合いに出しているのだ、と考えている。[80] 彼らはタルムードを次のことばで引用している。『女が男たちの間で自分の声を聞かせるのは恥である。』[81]

S・アーレン（S. Aalen）は、『許されていない』という言い回しはラビ的な定型句であり[82]、ラビたちはそれによって物事をそれぞれ許可したり禁止したりしたのだ、と指摘することによって、同じ見方を根拠づけようとした。」[83]

これらの言葉がユダヤ的な思考から来ていることを示す、さらなる手がかりがあります。たとえば、有名な歴史家ヨセフス（Josephus）はこう書いています。「律法は言う。女はあらゆる点で男に劣っている、と。それゆえ女は、それにふさわしく服従的であれ。それは女がおとしめられるためではなく、導かれるためである。権威は神によって男に与えられているからである。」（『アピオーンへの反論』2.201）

「全体として見れば、宗教的な律法における女性の立場は、絶えず繰り返されるこの定型句によって最もよく表すことができる。『女、（非ユダヤ人の）奴隷、子ども（未成年者）』。非ユダヤ人の奴隷や未成年の子どもと同じように、女は自分の上に、主人である一人の男を持っている。このことは、礼拝への彼女の参加をも同様に制限している。宗教的な観点から見て、彼女は男より劣っているからである。

それゆえ私たちは、イエスの時代のユダヤ教もまた、女性について非常に低い見方を持っていたという印象を受ける。それは東方では普通のことであり、そこでは女性はとりわけその多産性のゆえに重んじられるが、可能な限り外の世界から隔離され、父親あるいは夫の力に服させられ、宗教的な観点からは男性と比べて劣った（従属した）者とされている。」[84]

80. Joyce Harper. Women and the Gospel. C. B. R. F. Occasional Paper 5. Christian Brethren Research Fellowship: Pinner (GB), 1974. 14-15頁; John A. Anderson. Women's Warfare and Ministry: What Saith the Scriptures? David Waldie: Stonehaven (GB), 1933. 20-26頁。
81. Joyce Harper. Women and the Gospel. 前掲書、14頁（Megilla、タルムードの書）。
82. S. Aalen. 「A Rabbinic Formula in I Cor 14,34」. 513-525頁, 所収：F. L. Cross（編）. Studia Evangelica II. Texte und Untersuchungen zur Geschichte der altchristlichen Literatur 87. Akademie-Verlag:（東）ベルリン, 1964.
83. トーマス・シルマッハーからの引用、110頁
84. Jerusalem in the Time of Jesus（Jerusalem zur Zeit Jesu）, Joachim Jeremias, 375頁。

さらにいくつかの言明を挙げます。その精神は、パウロが引用している言葉の中に再び見いだされます。

女の声は禁じられている。それは性的に興奮させるからである。タルムード、ベラホート24a

女の声は汚れた裸である。タルムード、ベラホート

「女はトーラーを教えられる必要はない。女は証言をするのに不適格であり、その言葉はあまり信頼できず、出歩く傾向があり、客をねたむ。」（Strack-Billerbeck, Kommentar zum Neuen Testament aus Talmud und Midrasch. IV, 1226）

イエスと初代教会の時代のユダヤ教と東方において、女性がどのような状況に置かれていたかについては、さらに多くのことを挙げることができるでしょう。旧約聖書が女性に示していた敬意さえ、保たれていませんでした。それは、ほかの要因と並んで、ヘレニズム化の結果でもあります。ヘレニズム化が、女性の本性についてのギリシアの思想をユダヤ的な思考に持ち込んだのです。

パウロは、こうした女性敵視の考えに触れずにおくことができたでしょうか。もしかするとそれらは、彼にとってあまりにも的外れだったのかもしれません。あるいは、コリントではそれほど影響力をもって広まっていなかったので、彼はそれらに短く向き合うだけにしたのかもしれません。しかし念のために、やはりそれに触れずにはいられなかったのでしょう。パウロははっきりと、ほとんど皮肉を込めて、これらのユダヤ主義者たちに向き合います。神のことばは彼らから出るのか。彼らが礼拝のあり方を定めるのか。もちろん、そんなことは絶対にありえません。目を引くのは、この言明が男性形で男性たちに向けられており、本来呼びかけられているはずの女性たちに向けられていないことです。次のように訳すこともできます。

> それとも、あなたがた男たちにだけ届いたのですか。

今日、女性たちに沈黙を義務づける人々には、パウロの同じことばが当てはまります。あなたがたはこのことについて、神の啓示を受けたのですか。使徒の規定に、簡単に逆らうことができるのでしょうか。

初期のキリスト教において、女性たちが黙っていた集会は一つもありませんでした。集会は会堂の継続でも、会堂を新たに作り直したものでもありませんでした。会堂では女性たちは（わずかな例外を除いて）黙っており、席も分けられていました。会堂が集会のモデルであったのは、限られた範囲においてだけでした。会堂で

は、男性が支配する階層的な秩序がおおむね通用していたのです。そのようなものは、ガラテヤ人への手紙3章28節（キリストにあっては、すべての違いが意味を失った）に照らして、決して教会の中に入り込んではなりませんでした。そのためにパウロは戦っているのです。

6.2.4 ローマの法律？

歴史家ベス・アリソン・バー（Beth Allison Barr）は、これはローマの思想を再現したものだという推測を、執政官カトー（Cato）の引用から導き出しています。[85] 「もしコリント人への手紙第一14章34-35節を、コリントの慣行を表す引用として読むなら（1983年のD・W・オデル＝スコット（D. W. Odell-Scott)、1987年のチャールズ・タルバート（Charles Talbert)、1991年のトーマス・シルマッハー、すでに100年前のキャサリン・ブッシュネル（Katharine Bushnell)、そして最近では再びペピアット（Peppiatt）が、そのように論じてきた)、パウロの意図は明らかであるように思われる。すなわち、コリントの人々がしていたこと（『女たちは黙っていなさい』）を区別し、キリスト者はコリントの慣行に従うべきではない（『何だって！』）ことをはっきりさせることである。それがパウロのしたことだと保証することはできないが、それは（歴史的に）大いに筋が通る。コリント人への手紙第一にはすでに、パウロのものではない引用がいくつも含まれている。そして34-35節の文言は、ローマの資料に驚くほど近い。マーグ・モウチコ（Marg Mowczko）はこう述べている。『14章34-35節がパウロのものではない引用だという見解は、34-35節がテキストにもたらす口調の急激な変化と、それに続く36節でのテーマ、口調、性の急激な変化について、もっともらしい説明を与える数少ない

85. 「家では私たちの自由は女たちの狂乱に打ち負かされ、ここフォルムでは踏みにじられている。そして私たちが一人ひとりを抑えてこなかったために、私たちはその成り行きを恐れているのだ……。実際、私はつい先ごろ、女たちの群れのただ中を通り抜けたとき、顔を赤らめた……。私はこう言うべきだったのだ。『これはどういうふるまいか。公の場を走り回り、通りをふさぎ、ほかの女の夫たちと話をするとは！ 同じことを家で自分の夫に頼むことはできなかったのか。あなたがたは家で自分の夫に対するよりも、公の場でほかの女の夫たちに対してのほうが愛想がよいのか。とはいえ、ここでどの法律が可決され、あるいは廃止されるかに気をもむことは、家においてさえあなたがたにふさわしくない。』私たちの祖先は、女たちが後見人なしにいかなる――私的な事柄でさえ――事柄にも携わることを望まなかった。彼らは、女たちが親や兄弟や夫の権威のもとにあることを望んだ。ところが私たちは（神々よ、助けたまえ！）、今や女たちが統治をうかがい、フォルムと私たちの集会に口出しすることまで許している。彼女たちが護民官たちを説得して廃止に賛成票を投じさせようとしているのでなければ、今、通りや辻で何をしているというのか……。もし今彼女たちが勝利を収めたら、彼女たちはいったい何を企てないだろうか。彼女たちがあなたがたと対等になり始めたとたん、彼女たちはあなたがたの上に立つ者となっているだろう。」

見解の一つである』。もしパウロが本当に、ローマの世界観に対してキリスト教の世界観を対置するためにそれを引用しているのなら、彼の意味は、福音派の女性たちが教えられてきたこととは正反対である。パウロは、ローマの世界がそうしたように女性たちに黙っているよう命じる代わりに、実は男性たちに、イエスの世界では女性たちが語ることを許されているのだと言おうとしていたのではないだろうか。私たちはパウロの論点を（またしても）見落としてきたのではないだろうか。彼の叱責を心に留めて女性たちに語ることを許す代わりに、私たちはパウロが断罪したまさにその家父長制的な慣行を続けているのではないだろうか。」[86]

6.2.5 決してそうではない！

36節の一つの特徴を指摘しておきます。そこにはこうあります。「それとも、神のことばはあなたがた［男たち、あるいはコリントの人々］から出たのですか。それとも、あなたがたにだけ届いたのですか。」

沈黙と服従についての言明の後に続くこの二つの問いを、パウロは小辞ἤで始めています。小辞「ἤ は、否定の答えが期待される修辞疑問を導入するためにしばしば用いられる。マタイ7:9『それとも、あなたがたのうちに……ような人がいるだろうか』、12:5『それとも、あなたがたは……を読んだことがないのか』。マタイ20:15; 26:53、ルカ13:4、ローマ3:29; 6:5; 7:1; 9:21; 11:2、コリント第一6:9,16,19; 9:8; 10:22、コリント第二11:7; 13:5、ヤコブ4:5を参照。二重疑問はコリント第一14:36。」[87]

「同様に、否定的な性格の修辞疑問において……。いばらからぶどうを、あざみからいちじくを集めることはないではないか。マタイ7:16。マルコ4:21、コリント第一1:13、ヤコブ3:12を参照。……一般にἤは疑問文にしばしば見られる── α . 修辞疑問の導入と付加に（Just., D. 2,4 ほか、Ath. 8,3 ほか）……。それとも、あなたは……と思うのか。マタイ26:53。……それとも、神はユダヤ人だけの神なのか。ローマ3:29。……それとも、あなたがたは知らないのか。6:3; 7:1、コリント第一6:9,16,19。10:22、コリント第二11:7を参照。」[88]

86. Barr, Beth Allison. The Making of Biblical Womanhood (62頁). Baker Publishing Group.
87. PEPPERMÜLLER, R., 「ἤ」, in H. BALZ - G. SCHNEIDER (edd.), Exegetisches Wörterbuch zum Neuen Testament, Verlag W. Kohlhammer, Stuttgart 2011, 276.
88. BAUER, W., in K. ALAND - B. ALAND (edd.), Griechisch-Deutsches Wörterbuch zu den Schriften des Neuen Testaments und der frühchristlichen Literatur, Walter de Gruyter, 6. Aufl., Berlin; New York 1988, 693–694.

ŋに相当するドイツ語は、「何だって？」「ばかな！」あるいは「決してそうではない！」という意味になるでしょう。決して、女性たちは礼拝の集会で黙っているべきではないのです。これはパウロの強い反論です。

6.2.6 ほかの説明

引用としての読み方を退けるとしても、なぜ沈黙の命令が一般的に有効であるべきなのかは、やはり説明しなければなりません。それがパウロのことばだとするなら、すでに挙げた矛盾をもっともらしく解消しなければならないでしょう。

女性たちのどのような「語ること」が意味されているのかを、確実に明らかにする必要があるでしょう。それは妨げとなるおしゃべりなのでしょうか。預言の判断なのでしょうか。（絶え間ない）（割り込んでの）質問、無秩序で妨げとなる発言なのでしょうか。教えることなのでしょうか。公の場で（敬意を欠いて）夫を正すことなのでしょうか。どの注解書を調べても、コリント人への手紙第一11章についてと同じように、これについても解釈者の数とほとんど同じだけの説明があります。

そのために、さらに明確さを求めて祈り続けなければならない、と私は一度ならず言われ、また書き送られてきました。今日、この点に関して、私はこの（敬虔な）態度を退けます。というのも、この事柄については、すでに何百万もの祈りが天に昇っていきましたが、明らかに聞き届けられていないからです。問いは残ったままです。不明瞭さもそうです。

注目に値する説明は、アルミン・バウム（Armin Baum）のものです。彼は引用としての読み方を取っていません。彼の視点は「文化に配慮した」ものであり、歴史的なものです。古代の女性は、公の場で発言することを許されていませんでした。それは男性の務めでした。ユダヤ教の神学者たちは、女性は男性の場で語るべきではないと確信していました。ですから使徒の働きでも、公の場で語っているのは男性だけです。それに対して女性たちは、私的な領域でのみ活動することができました。この古代の習慣のゆえに、パウロは女性たちに、公の場で語ること、さらには質問することさえ禁じました。しかし、なぜでしょうか。「文化に配慮して」ふるまうためです。パウロの根拠づけは神学的なもの（たとえば創造の秩序）ではなく、当時の習慣に配慮したものなのです。女性が公の場で語ることは恥ずべきことでした。それによって女性は、福音とキリスト者たちに不必要に悪評をもたらしか

ねませんでした。およそ200年前まで（！）、女性に対するこの公の場での発言禁止は普通のことでした。周知のとおり、今日ではすべてが違っています。

アルミン・バウムは的確にこう説明しています。「しかし、こう問う人がいるかもしれない。難しい聖書箇所をこのように扱うと、すべてが崩れてしまうのではないか。こうして新約聖書のあらゆる指示を『文脈化によって片づける』ことができてしまうのではないか。そうではない。なぜなら文脈化という方法は、文化的に根拠づけられている指示のためだけのものだからである。神学的に根拠づけられている指示には、それはふさわしくない。」

マイケル・バード（Michael Bird）は、パウロのこの指示を次のように説明しています。「コリント第一14:33b-35についての最もありそうな説明は、パウロがここで、公の礼拝の間に妻たちが夫たちとどのように関わり、やりとりしていたかを扱っている、というものである。14:33aと14:40が、集会における秩序とふさわしさに焦点を当てていることに注意してほしい。パウロは、女性が教会でそもそも語ることを全面的に禁じているのではない。11:2-16やほかのテキストは、むしろ教会で語る女性たちについて述べているからである。パウロが禁じているのは、ある特定の語り方であって、妻たちが語る可能性ではない。最もありそうなのは、パウロが思い描いているのは、妻たちが、預言や異言の最中に夫たちに質問するために話し手をさえぎったり、あるいは自分の声を聞いてもらうために誰かの話にかぶせて話したりするようなことである。もしかすると女性たちは、教会の前で、預言や聖書の解釈の問題について夫たちを問いただしたり、夫たちに反論したりさえしたのかもしれない。女性たちが本当に学ぶことや議論することに関心を持っているのなら、それは大いに結構なことである。しかし、妨げとなったり論争的になったりする代わりに、家庭こそがそのためのふさわしい場所なのである。」[89]

この解釈によれば、パウロのことばは、次の言い換えに表されているように読めるでしょう。

> 聖徒たちのすべての教会においてそうであるように、妻たちは教会において、無礼あるいは不道徳と見なされるような仕方で語るべきではありません。彼女たちは［そのように］語ることを許されておらず、創世記2章が言っているように従わなければなりません［妻たちは夫たちにふさわしい補い手であって、夫たちの公の批判者ではない、ということについて］。もし何かを学びたいのなら、家で自分の夫に尋ねるべきです。女が集会で［無礼に、あるいは不道徳に］

89. Wunderli、同書。

> 語るのは恥だからです。神のことばは、あなたがたのもとに［ユダヤ人のもとではなく］起源を持っているのですか。それとも、それが届いた唯一の民は彼らなのですか［福音は、女性が男性を問いただすことを非常に不道徳だと考える多くの人々に届いている］。

神学の歴史から、このパウロの箇所がさまざまに解釈されてきたことを示すもう一つの例を挙げます。フィリップ・ヤーコプ・シュペーナー（Philipp Jacob Spener）は、これらの箇所をできるだけ正確に実践に移そうとしました。そのため、彼の集会では女性たちは別の部屋に座らなければなりませんでした。そこで彼女たちは聞くことはできましたが、話し合いに加わることはできませんでした。それよりいくらか新しい、ニコラウス・ルートヴィヒ・フォン・ツィンツェンドルフ伯爵（Graf Nikolaus Ludwig von Zinzendorf）のヘルンフート兄弟団（Herrnhuter Brüdergemeine）は、反対の道を進みました。女性たちには、教会で活動する非常に多くの機会がありました。このパウロの箇所は、その時代に即して解釈されたのです。

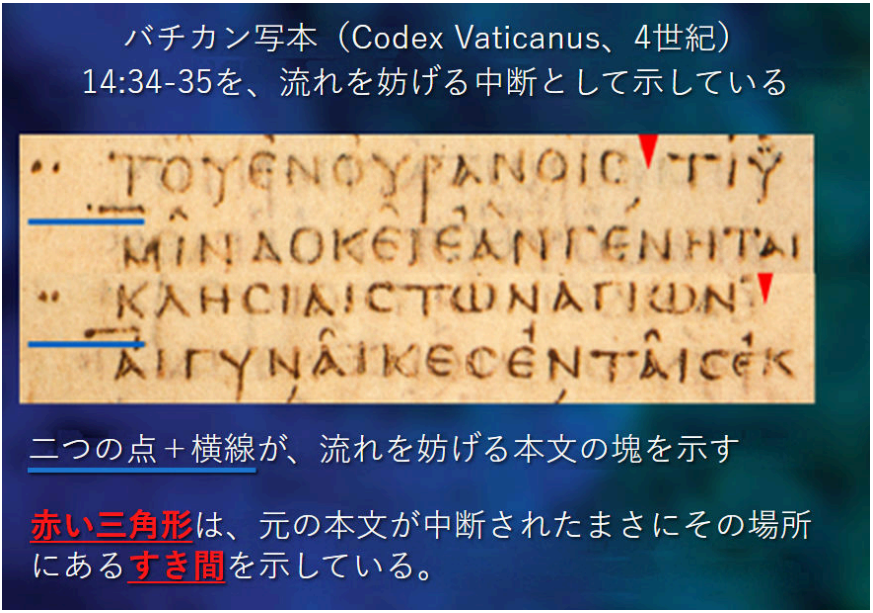
6.2.7 おそらくパウロに由来しない

序文で示唆したとおり、この6.2.7節は加筆されました。古い写本に関わる、（少なくとも私にとっては）新しい知見があるからです。フィリップ・バートン・ペイン（Philip Barton Payne）はこのテーマに集中的に取り組み、ほかの何人かの本文研究者たちと同じように、次のような目立った点があることを認識しました。

いくつかの写本では、34節と35節は私たちの聖書と同じ場所にありますが、ほかの写本では40節の後にあるのです。

比較的長いテキストが移動されたことになります。これは非常に異例なことであり、次のような推測を可能にします。これらの節は後から挿入されたのだ、と。それらは欄外に書かれており、通常、次の写字生が、それらが以前に書き落とされたのかもしれないと考えて、本文に挿入しました。どこに挿入するかは、その写字生が決めたのです。

この説は、4世紀の最も大部で最も重要な写本の一つであるバチカン写本（Codex Vaticanus）における発見によって裏づけられています。そこでは、これらの節が実際に挿入として印をつけられているのです。



画像出典：Bibliothèque nationale de France

これについて、この問題について画期的な研究をしたフィリップ・B・ペインのことばを引用します。「写本から導かれる七つの理由と、これらの節のことばから導かれる九つの理由が、私と多くの人々に、これらの節はパウロの元の手紙にはなく、後から付け加えられたのだと確信させています。ここでは三つだけをまとめておきます。

第一に、これらの節の明白な意味は、『すべての人』が教え、預言することができるというこの章の言明と、また女性たちが預言するという11章5節の確認と矛盾しています。

第二に、パウロ書簡の写本には、これに少しでも近い長さのテキストの段落で、（異なる写本において）これほど互いに離れた二つの異なる場所に、明白な理由もなく置かれているものはほかにありません。

第三に、最古の聖書が、これらの節を後の真正でない付加として印をつけています。[90]

90. バチカン写本B。新約聖書の最も信頼できるギリシア語写本として広く認められています。

第一に、これらの節はこの章のほかの多くの言明と矛盾しています。

矛盾を避けるために、多くの人は、パウロが黙らせているのは妨げとなるおしゃべりだけだとか、1962年に初めて提案されたように[91]、預言の判断だけだ、と言います。しかしこれらの解釈は、この段落で三度も強調して繰り返されている、無制限の沈黙の要求に合いません。もし34節が預言の判断だけを禁じているのなら、34節は35節で禁じられている発言をも許していることになります。結局のところ、何かを学びたいという願いから質問をすることは、預言を判断することとはまったく別のことであり、それが妨げとなることはまれです。これらの解釈は、パウロが自分がたった今書いたことに矛盾する、という結果になってしまいます。

第二に、これらの節は、すべての『西方』ギリシア語写本では40節の後に続いていますが、ほかのたいていの写本では33節の後に続いています。

ここにあるのは、6世紀の有名な『西方』写本Dです。この画像の最初の完全な段落は14章の終わりです。次の段落が34節と35節です。最後の部分で15章が始まります。

34節と35節が置かれている二つの異なる場所は、だれかがそれらを欄外に書き、後の写字生たちがそれらを33節の後か40節の後のどちらかに挿入したことを示唆しています。説明させてください。

聖書の原文を確定するための基本原則は、『ほかのすべてのテキストの成立を最もよく説明するテキストが、最も原文である可能性が高い』というものです。

パウロの手紙のどの写本も、明白な理由もなく、大きなテキストのまとまりをこれほど遠くまで移動させてはいませんし、初期の読者のだれ一人として、このテキストの位置を批判しませんでした。[92] しかし、写字生たちが欄外のテキストを本文に書き写すことはよくありました。

たとえば4世紀のバチカン写本には、マタイの福音書の本文の欄外に古いテキストが書かれている箇所が20あります。そのうち3つを除くすべてが、その後の事実上

91. W. Klein, 「The Church and the Prophets」, ATR 44 (1962) 8.
92. Ulrich Schmid, 「Conceptualizing 『Scribal』 Performances: Reader's Notes」, in The Textual History of the Greek New Testament: Changing Views in Contemporary Research, ed. Klaus Wachtel and Michael Holmes (Atlanta: SBL, 2011), 49-64, at 62, 50, 58：「Readers … react[ed] to what they read by adding comments in the margin. . . . これらの注記のいくつかは、そのように『飾られた』［写本］を書き写さなければならなかった写字生たちによって、本文の中に写し込まれたのかもしれない。. . . 少なくとも古代の人々の観点から見れば、写字生たちの傾向は、欄外の注記を本文に取り込むことにあったようである。」

すべての写本の本文に含まれています。

ギリシア人は、女性は公の集会で静かにしているべきだと固く信じていました。[93] ですから、紀元200年より前のいつか、ある読者が、これらの節が表している『よく知られた、あるいは一般的な知恵』を欄外に書き加えたとしても、ほとんど驚くには当たりません。

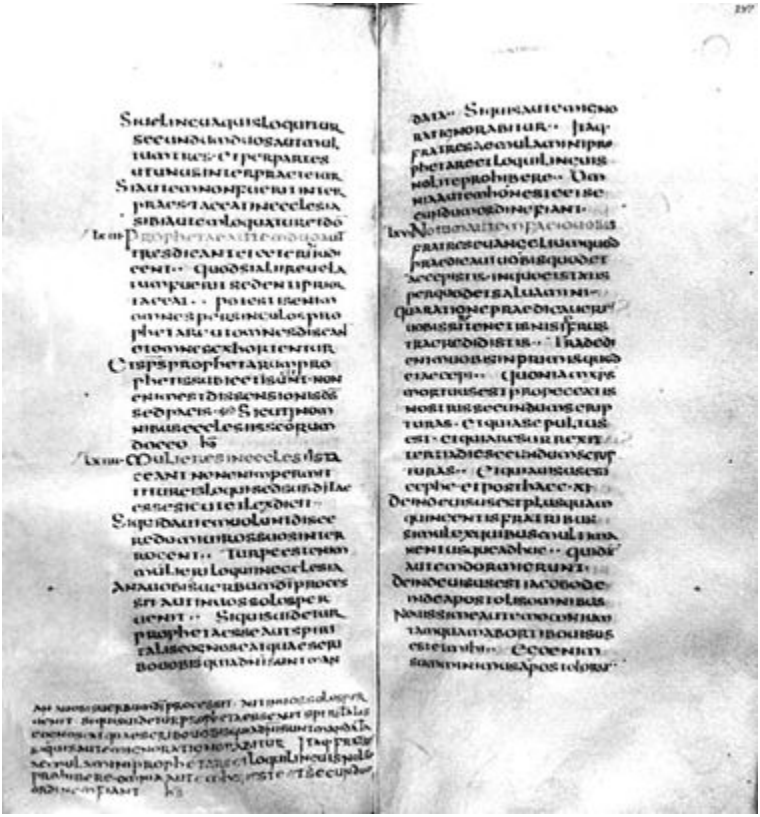
これらの節が置かれている二つの場所について、知られている写字生の慣行に合致する唯一の説明は、だれかがこの二つの節をまず写本の欄外に書き、後の写字生たちがそれらを33節の後か40節の後のどちらかに挿入した、というものです。

常識に従えば、ありふれたこと――欄外のテキストを本文に挿入すること――のほうが、ほかに一つも例が知られていないほど異例なこと――明白な理由もなく、これほど多くのテキストをこれほど遠くまで移動させること――よりも、起こりやすいのです。[94]

第三に、その正確さで広く称賛されている私たちの最古の聖書、バチカン写本は、教会で女性たちを黙らせるこれらの節を、真正でない、誤った中断として印をつけています。

確かに、34-35節は、現存するすべての写本のどこか（つまり33節の後か40節の後）に出てきます。これは極めて早い時期の挿入を必要とします。しかし、それらを真正でないと印をつけているのはバチカン写本だけではありません。ウィクトル司教（Bischof Victor）は、フルダ写本（Codex Fuldensis）の下の欄外に、これらの節を省いた訂正テキストを書かせました。また非西方本文の写本88は、これらの節を33節の後では省いていますが、40節の後に、それらが33節の後に続くべきことを示す記号をつけて挿入しています。これらの節はウィクトルのコリント人への手紙第一の本文証拠には出てこないのですから、『これらの節はコリント人への手紙第一のすべての本文証拠に出てくる』というダン・ウォレス（Dan Wallace）の主張は正しくありません（https://bible.org/article/textual-problem-1-corinthians-1434-35）。本文学者たちは、同じ一つの写本の中の異なるテキストに、異なる写本記号を割り当てます。14:34-35は、これらの別々の写本記号によって区別されるすべてのテキストに出てくるわけではありません。14:34-35のテキストがすべての写本によって『支持されている』というのは正しくありません。

93. たとえばプルタルコス、アリストファネス、アリストテレス、ソフォクレス、デモクリトス、アエリウス・アリスティデス、そして多くのラビたち。
94. これは「転写上の蓋然性」と呼ばれます。これは唯一無二の事例です。私たちがそれを欄外のテキストとして認める主な理由は、ほかのテキストの信頼性を損なうものではありません。



フルダ写本（原本はフルダにあります）では、下の欄外に、34節と35節を含まないテキストが訂正あるいは脚注として書かれています。6世紀半ばの写字生の手元には、明らかにこれらの節のないテキストがあったのです。

フルダ写本についての短い補説

フルダ写本（F）はウルガタ訳の写本で、新約聖書の正典23書のテキストと、ディアテッサロン、そしてラオディキア人への手紙を含んでいます。それは新約聖書の年代の確かな写本の中で最も古いものの一つであり、重要な学者であるカプアの司教ウィクトルによって編集されたことが知られている唯一の初期の新約聖書写本です。それはウルガタ訳のテキストの二番目に重要な証拠であり、ディアテッサロンの完全なテキストの最も重要で最も古い証拠です。この写本は、コリント人への手

紙第一14章34-35節のテキストの真正性をめぐる議論において、最も重要とは言わないまでも、重要な証拠です。

それは541-546年にカプアで、ウィクトル司教の命によって書かれました。また彼自身によって点検され、訂正されました。黙示録の終わりには、ウィクトル自身が書いた546年5月2日という日付があります。ウィクトルは写本のテキストを二度目に点検したので、二つ目の日付――547年4月12日――もあります。

Codex Fuldensis – Wikipedia, die freie Enzyklopädie（ドイツ語版ウィキペディア）

自らの誤った前提に基づいて、ウォレスは『これらの節は伝承の最も初期の段階で本文に入り込んだに違いない……元の文書の中に』と反論しています。そのようなことが可能であることは、エペソ人への手紙5章22節に『服する』という動詞が急速に取り入れられたことから理解できます。[95] それは、これらの34-35節の付加が、2世紀のかなり後に至るまでに、現存するすべての写本に入り込んだことを容易に説明しうるでしょう。」

「有名なローマ・カトリックの学者ジョセフ・A・フィッツマイヤー（Joseph A. Fitzmyer）[96]は、『今日の解釈者の大多数』が、このテキスト［14:34-35］は後の付加であるという結論に至っていると述べています。本文学者のキム・ヘインズ＝アイツェン（Kim Haines-Eitzen）は、これを『今日のほとんどすべての学者』に

95. ほとんどすべてのギリシア語版が示しているように、エペソ人への手紙5章22節の最も初期の写本には、「従う」という動詞がありません。ヒエロニムスの注解には、ギリシア語写本では22節において21節の「従う」という動詞が繰り返されることは決してない、とあります。UBS版の本文には、「従う」が後から付け加えられたことは「ほぼ確実」だとあります。22節のどこかに何らかの形で「従う」が出てくる最初の写本であるシナイ写本は、紀元360年ごろに書かれました。しかしそれ以降、現存するすべての写本に「従う」が含まれています。後の写本で「従う」を取り除いたものは一つもないのですから、最も初期のすべての写本から「従う」が取り除かれたというのは、もっともらしくありません。つまりパウロはこう書いたのです。「キリストを畏れて、互いに従い合いなさい。妻たちは自分の夫に……」。したがって、妻の服従は、その動詞を「互いに従い合う」に依存しています。相互代名詞は相互の服従を求めます。ですから、それは上位者への服従を指すことはありえません。むしろ、ここで「従う」とは「愛のうちに自発的に譲るという意味で服すること」を意味しています（BDAG 1042）。コロサイ人への手紙3章18節には、妻は「主にあってふさわしいすべてのことにおいて」従うべきだとあります。聖書が妻の服従について挙げている理由は、神によって定められた性の階層ではなく、「神のことばが冒瀆されないため」［テトス2:5］、つまり文化的な規範に反しないようにふるまうためです。次を参照。「たとえ夫たちの中にみことばに聞き従わない人がいても、妻たちのふるまいによって、ことばによらずに納得させられるためです……。夫たちも同じように［自分の妻たちに］従い、賢明な関係のうちに共に暮らし、彼女たちを、より弱い女性の［BDAG 208、gynaikeios「女性の」］尊い器として認め、いのちの恵みの賜物をともに受け継ぐ者としてふさわしい栄誉を彼女たちに与えなさい。それは、あなたがたの祈りが妨げられないためです」［ペテロ第一3:1,7］。
96. Joseph A. Fitzmyer, First Corinthians, AB (New Haven: Yale, 2008), 530

ついて確認しています。[97] おそらく最も評価の高い福音派の本文研究者であるゴードン・フィー（Gordon Fee）は、これらの節はパウロの手紙にはなく、写本の欄外に付け加えられ、後の写字生たちによって33節の後か40節の後のどちらかに挿入されたのだと論じています。[98] 私の本Man and Woman, One in Christ, 226-227は、コリント第一14:34-35はパウロの元の手紙にはなかったという結論に至っている55の研究を挙げています。227-53頁では七つの外的理由が、253-65頁では九つの内的理由が、このテキストがパウロに由来しないことを示すものとして挙げられており、265-67頁では注記説に対する異論に答えています。全体として、私の考えでは、本文批評上の証拠は、これが注記であり、おそらく紀元197年より前にある読者によって書かれたものであることを強く支持しています。」

6.2.8 最終的な評価

このテーマに非常に集中的に取り組んだもう一人の著者の本Men and Women in Christから引用します。

「読者の中には、34-35節を削除するのはあまりにも好都合すぎると感じる人もいるかもしれません。それは理解できることです。私たちは、聖書から難しいテキストを削除しようという提案に対しては極めて懐疑的であるよう、正しく教えられています。

ここで私たちが扱っているのが、内的証拠だけに基づいた非真正性の論拠ではないことを強調しておくことが大切です。もしこれらの節の問題が、文脈と一致しないこと、旧約聖書の内容に関して明らかな誤りを含んでいること、そして満足のいく意味を与える解釈上の解決策が見つかっていないこと、という事実に限られるのなら、私たちはそれらを本文に残し、自分たちの限界を認め、将来の新しい光を待ち望むでしょう。

しかしここでは、外的な徴候も説明されなければなりません。これらのことばが異なる写本で異なる場所に見られるのは、どうしてなのでしょうか。何かがうまくいかなかったのですが、それは何だったのでしょうか。これまで見てきたように、外的証拠のこの特徴に対する最もありそうな解決は、34-35節がパウロに由来するのではなく、本文に取り込まれた初期の欄外注に由来する、ということです。

97. Kim Haines-Eitzen, The Gendered Palimpsest: Women, Writing, and Representation in Early Christianity (Oxford: Oxford University Press, 2012), 62
98. Gordon D. Fee, The First Epistle to the Corinthians, NICNT (Grand Rapids: Eerdmans, 1987), 699-708

このことは、フルダ写本におけるウィクトル司教の注記によって、さらに裏づけられます。その注記は、この二つの節がまったく欠けているテキストが存在したことを示しています。そして、バチカン写本からの証拠についてのペインの見解が正しいなら、それはさらなる裏づけとなります。

外的証拠と内的証拠を合わせるなら、この二つの節を退ける論拠は明白です。それらを削除することは、イデオロギー的な策略ではありません。証拠に従うということなのです。原則として、これは、ほかの付加（たとえばマルコの福音書の結び、ヨハネ5:3-4、使徒24:6-7）を退けることと何ら変わりません。それらは本文に現れ、しばらくの間私たちの聖書に収められていましたが、入手できる証拠を吟味した結果、やはりおそらく真正ではないという結論に至ったときに取り除かれたのです。

少なくとも、私たちの聖書には、たとえば次のような脚注があるべきです。写本上の手がかりは、34節と35節がパウロに由来しない後の付加である可能性を示しており、したがって省かれるべきである、と。より良いのは、34-35節を斜体にするか脚注に移し、写本間の食い違いの性質から、それらの真正性が疑わしいと推測される、という説明を添えることでしょう。『主のおしえは完全で、たましいを生き返らせる』（詩篇19:7）。私はここで、これを真正性の基準として提案しているのではありません。しかし、もし読者の中に、コリント第一14:34-35から自分のたましいがあまり生き返らされなかったことに罪悪感を覚えてきた人がいるなら、その人は今、これらの節はもしかするとやはり聖書に属していないのかもしれない、ということに納得がいくかもしれません。」

この章を次のように締めくくらせてください。私はこの本を書いたとき、すでにこの見方を知っていましたが、このテキストに疑問を呈する勇気はありませんでした。しかし今や、事実関係は、この二つの節を神の霊感されたことばとして理解することがほとんど不可能であるようになっています。

このことは、はっきりとした違いを生みます。なぜでしょうか。（引用説を除く）すべての説明の試みは、これが絶対的な沈黙の命令であるという点で挫折するからです。どの解釈においても、説明の試みはこの要求の明確さと衝突します。しかしこの要求はパウロに由来するのではなく、世俗的な考え方に対応するものなのです。何と悲劇的なことでしょう！ 女性たちのために尽力する人々は、フェミニズムだ、世に迎合しているのだと非難されるのですから。

敵、すなわち反対者であり、かき乱す者である存在が、聖書の中に何かを密かに持ち込むことに成功し、それがあらゆる世紀にわたって、教会の女性たちと教会全体に致命的な結果をもたらしてきた、ということがありうるのでしょうか。

私たちは、このような悲劇的な状況からどのように抜け出すことができるでしょうか。この誤った想定は、今日に至るまで、どれほど重大なものなのでしょうか。ここで、最終的にはっきりと立場を取り、事実に向き合わなければなりません。

この章の終わりに、34節と35節を除いたコリント人への手紙のテキストを読み、それがどれほど筋の通った、意味の通るものとしてそこに立っているかを確かめてください。

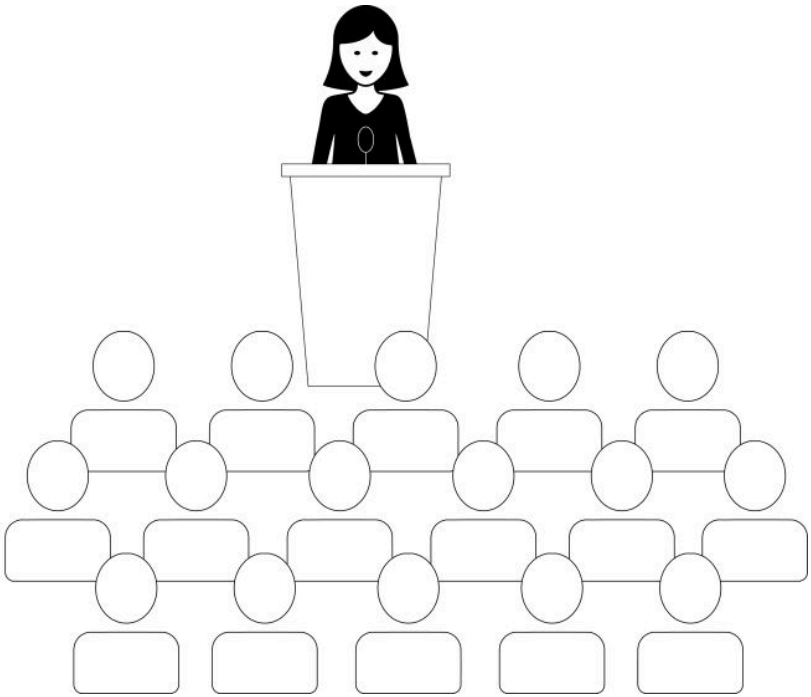
「あなたがたはみな、一人ずつ順番に預言することができるからです。それは、すべての人が学び、すべての人が励まされるためです。そして、預言者たちの霊は預言者たちに服従します。神は無秩序の神ではなく、平和の神だからです。聖徒たちのすべての集会においてそうであるように。もしだれかが、自分は預言者である、あるいは霊の人であると思うなら、私があなたがたに書いていることが主の命令であることを認めなさい。しかし、もしだれかが無知であるなら、その人は無知のままでいなさい。ですから、私の兄弟たち、預言することを熱心に求めなさい。また、異言で語ることを妨げてはいけません。ただ、すべてのことを品位をもって、秩序正しく行いなさい。」 [コリント人への手紙第一 14:31-40、ドイツ語エルバーフェルト訳聖書から翻訳]

イエスの教会の集会において、女性に対する沈黙の命令はかつてもなかったし、今もありません！ ギリシア語の知識がなくても、引用説がなくても、そこにたどり着くことができます。多くの女性たちを同労者として持ち、その名前を挙げ、彼女たちを頼りにし、彼女たちが福音のためにともに戦った、その使徒が、ほかならぬその女性たちの口を封じたなどということが、本当にありうるのでしょうか。

最後に私は問います。姉妹たちが黙っていることに最も大きな関心を持っているのはだれでしょうか。キリストのからだの半分が口を閉ざすことに、だれが関心を持っているのでしょうか。集まりの中で女性たちが男性たちを補わないことに、だれが関心を持っているのでしょうか。それは、あの古い蛇、反対者であり破壊者であり、偽りの父であり、初めから人殺しである者です。女性に対する彼の敵意だけが、このような目くらましの理由でありえます。このことについて、指導と教えの任にある男性たちは、その責任を負うことになるでしょう。

女性を黙らせる教会は、聖霊を黙らせることになるでしょう。 キャサリン・C・ブッシュネル（Katharine C. Bushnell）

私は神のことばの中に、次のことを見ます。男の関与なしに一人の女性から宿られたイエスは、女性たちを黙らせたのではなく、むしろ反対に、語るよう促されました。パウロがガマリエル（Gamaliel）の足もとに座ったように、一人の女性がラビの足もとに座って学ぶことを、イエスはよしとされました。そしてイエスは、一人の女性にご自分に対する重要な祭司的奉仕をさせ、彼女からご自分の葬りのための油注ぎを受けられました。女性たちは十字架のもとに最後までとどまり、墓に最初に来た者たちでした。「十字架上の七つのことば」のうち五つは、女性たちによってのみ証言され、伝えられています（ローマの兵士たちを除いて）。そして救いの歴史の最も重要な要となる出来事は、ただ女性たちによってのみ証言されました。イエスは復活の後、意図して女性たちに出会い、ご自分の兄弟たちに、ご自分がよみがえったことを告げるよう彼女たちに命じられました。贖われた神の教会における女性の完全な平等が、もともとの、そして変わることのない意図であることを、きっぱりと明らかにするために、イエスはこれ以上何をすることができたでしょうか。	
クリスティアン・ベーゼ（Christian Beese）	



6.3 女性は教えてもよいのか

使徒の働きを読み進めると、18章で次の箇所に行き当たります。「この人（アポロ〔Apollos〕）は会堂で大胆に語り始めた。それを聞いた（夫妻の）プリスキラ（Priszilla）とアキラ（Aquila）は、彼を自分たちのところに迎え入れ、神の道をもっと正確に説き明かした」（18:26）。神の道とは、救いの歴史と、その中心であるメシアのことです。「説き明かす」は、「教える」あるいは「教え導く」とも理解できます。

パウロは、キリスト者の集まりに居合わせるすべての人に、こう促しています。「では兄弟たち、どうなのでしょうか。あなたがたが集まるときには、それぞれが詩篇を持ち、教えを持ち、啓示を持ち、異言を持ち、解き明かしを持っています。すべてのことを、建て上げるために行いなさい。」（コリント第一14:26）。これは兄弟たちにも姉妹たちにも当てはまります（ギリシア語には、この意味での「姉妹たち」という語はありませんでした）。

人々（兄弟たちと姉妹たち）は、ほかの人々を教え導くべきです。その人たちがさらにまた、ほかの人々を教え導くことができるためです（テモテ第二2:2）。この意味で、年配の女性たちは「良いことを教える教師」であるべきです（テトス2:3）。この教えの場所や枠組みは、定められてもいなければ、制限されてもいません。

イエスは、男の弟子も女の弟子も教えることを望んでおられます。「ですから、あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子としなさい。父と子と聖霊の名においてバプテスマを授け、わたしがあなたがたに命じておいたすべてのことを守るように教えなさい。」（マタイ28:19-20）

今日では、どの学校にも、キリスト教の学校にも、女性の教師がいます。どの大学にも、どの専門分野にも、神学にも、女性の教授がいます。女性が書いた数えきれない本が、世俗的な教えの内容のものも、キリスト教的な内容のものも、男性たちに読まれています。そして最後に、決して小さくないことですが、一人の女性が16年間、ドイツの連邦首相でした。今日では多くの女性が、ありとあらゆる指導的な立場にいます。多くの人にとってはまだ少なすぎますが、それは別のテーマです。

その理由は、今日の視点から見れば平凡なことです。女性は男性と同じように知的な能力を持っています。あるいは男性をしのぎます。それは驚くことではありませ

ん。女性は同じように教え、教え導くことができます。男性よりよくできることも、まれではありません。

百年前は、まだそうではありませんでした。当時も女性たちは同じように賜物に恵まれ、知性がありました。しかし男性優位の世界の中で、大学で学ぶことから、ましてや教えることから締め出されていました。この歴史的なテーマに取り組むこともできるでしょう。しかし私は教会に、福音派の保守的な教会の世界に目を向けます。

この章も、一つの問いから始めます。聖書を、特に新約聖書を読んだあとで、あなたは、女性は教えてはならないという結論に達するでしょうか。

おそらく達しないでしょう。ただし、一つの短い段落、すなわちテモテへの手紙第一2章11-15節を飛ばさなければなりません。まさにこの一つのテキストだけが、ほかには一つもなく、そのような指示を含んでいます。聖書が私たちの信仰と生活の規範であるなら、それを素通りすることはできません。同じ問いを、私は礼拝で女性が黙っていることを扱ったときにも投げかけました。コリント人への手紙第一14章で私が確認したのは、この短い段落が唯一の手がかりとして、集まりの中でキリストのからだの半分を黙らせることなどありえない、ということでした。

ですから、多くの男性たち、教会の指導者たちや長老たちが女性に教えることを禁じているのは、奇妙なことです。それは礼拝について言えますが、集会の外でも同じです。教えてよいとしても、女性か子どもを教えることだけです。適用の幅は大きく、ここで挙げたのは、私が育った中での一つの形です。

教えることの禁止の根拠とされる唯一の聖書テキストを、私は詳しく見ていきます。前もって申し上げておきます。このテキストは原語において複雑で、決して一義的ではありません。多くの釈義家や原語の専門家がそう指摘しています。このテキストが、キリスト者の女性に、ひいてはキリストのからだに、これほど広範な結果と制限をもたらしうるのでしょうか。

6.3.1 テキスト——テモテ第一2:8-15

そこで私は、男たちがどこででも、聖い手を上げて、怒りや疑いの思いなしに祈ることを望みます。

同じように、女たちも、つつましい身なりで、恥じらいと慎み深さをもって身を飾り、編んだ髪や金や真珠や高価な衣服によってではなく、――神を敬うことを告白する女たちにふさわしく――良い行いによって身を飾ることを望みます。女は静けさのうちに、全き服従をもって学びなさい。しかし私は、女が教えることも、男を支配することも許しません。むしろ静かにしているべきです。なぜなら、アダムが最初に形造られ、その後にエバが形造られたからです。そして、アダムはだまされませんでしたが、女はだまされて違反に陥りました。しかし彼女は、子を産むことにおいて救われるでしょう。もし彼女たちが、信仰と愛と聖さのうちに、慎み深さをもってとどまるならば。 [テモテへの手紙第一 2:8-15、ドイツ語エルバーフェルト訳聖書から翻訳]

テキストを順に見ていく前に、いくつかの一般的な、また歴史的な指摘が役に立ちます。

6.3.2 エペソの歴史的状況

テモテへの手紙第一は、パウロの最も近しい同労者に個人的に宛てられています。テモテはこのときエペソにいて、そこで家の教会に仕えていました。なぜパウロが、私たちの知っているエペソ人への手紙のように、直接教会に宛てて書かなかったのか、私たちにはわかりません。エペソ人への手紙は、より早く書かれただけでなく、まったく性格が違います。テモテに対してパウロは、多くの指摘や警告を語っています。作り話、果てしない系図、律法の教師たち、良心の麻痺した者たち、惑わす霊、悪霊の教え、禁欲主義者たち、やもめとなった女性たち、主イエス・キリストの健全なことばに反対する者たち、そのほか多くのことについて書いています。この手紙で問題になっているのは、エペソで教会にとって深刻な危険となっていた具体的な問題です。それに加えて、上のテキストにあることがありました。男たちは争いから引き離されて祈りへと動機づけられ、女たちは控えめであるよう求められなければならなかったのです。

エペソは、さまざまな宗教、カルト、まじない、魔術のるつぼでした。ルカは使徒の働き19章でそのことを伝えています。その中心にあって、境界をはるかに越えて知られ、崇められていたのが、エペソのアルテミス（Artemis）です。ゼウスの娘で、アポロン（Apollo）の先に生まれた双子の姉である（ギリシアの）女神です。この女神には、大きな熱狂と労力をもって仕えられていました。人々は彼女のために神殿を建てました。それは当時最大の建物として、古代の七不思議の一つでし

た。彼女にいけにえがささげられました。彼女をたたえて祭りや行列が催されました。エペソのアルテミスは、新しいいのちを生み出す力を持つと信じられていました。そして、それを奪う力も。彼女は出産を助け、痛みを和らげることができました。彼女は処女たちの、男性の処女と女性の処女の両方の守護者でした。[99] ローマ人からはディアナ（Diana）とも呼ばれました。

この古代の大都市では、アルテミス崇拝が私的・公的生活のほとんどすべての領域に存在し、今日の私たちにはほとんど想像できないほどの影響を及ぼしていました。

それでもパウロは、そこで三年間働き、ローマの属州アジア全体に宣教することができました。数多くの家の教会が生まれていました。しかしこの環境の中で、それらの教会はこのカルトやほかのカルトにも直面していました。信仰に入った人々は、ボタン一つで過去を振り払うことはできませんでした。 パウロが言及している作り話や神話は、アルテミス崇拝と、それに属する思考世界や教えにも関わっていたのかもしれません。たとえ彼がそれを名指ししてはいないとしても。シンクレティズム、すなわちキリスト教信仰と偶像崇拝やその慣習・教えとの結合と混合は、珍しいことではありませんでした。その現れ方は、はっきり見えることもあれば、それほどでないこともありました。こうして女神アルテミスは、エバとも結びつけられました。エイレナイオス（Irenäus）は、エペソの偽りの教えをグノーシス主義と、少なくともその先駆けと結びつけました。テルトゥリアヌス（Tertullian）は、神話や果てしない系図をこの方向で理解しました。これらはユダヤ的な関連のほかに、グノーシス主義と、その無数のアイオーンとその系列、あるいはその発生とも関係しているのかもしれません。初期の「キリスト教」グノーシス主義は、トーラーやユダヤ教のさまざまな側面を、ギリシアやローマのさまざまなカルトと混ぜ合わせました。それらのカルト自体が、また近東の宗教から養分を得ていました。エイレナイオスによれば、グノーシス主義者たちは創造の物語と堕落をも独自の仕方で解釈し、語り直しました。エバは、アダムの魂にいのちを吹き込んだ女性的な霊的力でした。ほかの創造の異説では、エバがアダムよりも優位にあり、先んじていました。エペソのアルテミス崇拝は、女性たちが主導していました。 エバは特別な地位を持っていました。人がそれによって救われる知識（グノーシス）を、彼女が求めたからです。パウロは手紙の終わりに、「偽って知識（グ

99. これについては、『Paulus an die Epheser, Nacherzählt, Erklärt, für heute』（『パウロのエペソ人への手紙――語り直し、解き明かし、今日のために。』）、Hans-Jörg Ronsdorf を参照。

ノーシス）と呼ばれているもの」への警告を記しています。ある人々はそれを信奉し、信仰から外れてしまったのです（6:20-21）。

エペソについての歴史研究は続いています。私自身が調べてわかったことですが、これは複雑なテーマです。しかし、この再構成を受け入れるかどうかにかかわらず、アルテミスという背景がテモテへの手紙第一2章8-15節の解釈に何の違いももたらさない、と論じるのは困難です。女性に対する一般的な教えることの禁止を主張する多くの階層制の支持者たちは、そう信じさせようとしていますが。いずれにせよ、この箇所を理解するには、この背景に注意を払わなければなりません。

6.3.3 場面設定

聖書翻訳には、「礼拝における正しい振る舞い」のような小見出しがついています。この場合、教えることの禁止は礼拝の中でだけ当てはまり、ほかの機会には当てはまらないのでしょうか。しかしパウロは、まさに礼拝を念頭に置いているのではなく、むしろ一般的に、男性と女性がどこにいても、どこで出会っても、彼らに語りかけているようです。家庭における夫婦の状況も問題になっているようです。「テモテへの手紙第一2章1-8節には、礼拝が公の場ではなく家庭の領域で行われていたことを考慮に入れずに、文脈を『公の礼拝』に狭めるようなものは何もありません。したがって、この章の残りの部分が礼拝の集まりや公の場での振る舞いについての指示を与えていることは明白ではありません。また段落の残りの内容も、とりわけ子どもの誕生への言及は、『公の礼拝』の文脈にはほとんど合いません。」[100]

「パウロは、一人の女性が男性のグループを教えること、あるいは女性たちが男性のグループを教えることについて語ることもできたでしょう。しかし、集会の中で一人の女性が『一人の男性』を教えることについて語るのは普通ではありません。むしろ単数形の使用は、一人の女性と一人の男性との私的なやりとりを示しています。ギリシア・ローマ文化において、女性と男性との私的なやりとりは、家族の間で行われるのが最も一般的でした。そしてこの箇所には、家庭の文脈を指し示すものが多くあります。」

さらに言えば、これは教会に宛てた手紙ではなく、個人的な書簡です。そこには、私たちが100％再構成することのできない知識が前提となっています。この事実

100. Cynthia Westfall, Paul and Gender: Reclaiming the Apostle's Vision for Men and Women in Christ, 2015, 291

は、少なくとも考慮に入れるべきです。

基本的に、ここから十分に導き出せるのは、これが教会の集まりのための指示ではないということです。たとえ倫理的な教訓が、確かにあらゆる機会に当てはまるとしても。

6.3.4 どこででも祈ること、怒り、装身具

> そこで私は、男たちがどこででも、聖い手を上げて、怒りや疑いの思いなしに祈ることを望みます。
>
> 同じように、女たちも、つつましい身なりで、恥じらいと慎み深さをもって身を飾り、編んだ髪や金や真珠や高価な衣服によってではなく、――神を敬うことを告白する女たちにふさわしく――良い行いによって身を飾ることを望みます。

その前のテキスト、1-7節は、これらのことばが正しく見えてくる背景です。パウロは、すべての人のために祈ることを、キリスト者の生活の最も重要な内容の一つとしています。それはキリスト者にとって、世界に対する大切な、間接的で、祝福に満ちた働きかけです。それは神の最大の夢を支え、推し進めます。すべての人が救われることです。

このようにこのテキストは、祈りを焦点に据えています。祈りは、世界を救うという神の宣教の一部です。そのためにパウロは燃えています。そしてエペソの人々が祈ることによって、この火を（再び）燃え立たせたいと願っています。男たちは怒りやためらいを捨て去るべきです。祈りから引き離されないように。パウロはここで男たち（と女たち）に語りかけ、両者に対して、福音を前進させ、妨げない振る舞いを強調しています。男も女も、古い、型にはまった生き方を捨てるべきです。テストステロンに満ちた男たちは、張り合い、議論し、自分が正しくありたいと思います。女たちは着飾り、外見を大いに重んじたいと思います。しかしそれが、もはや彼らの生活を決定してはならないのです。

ここで公の場での祈りについて語られているとすれば、問われるのは、パウロが次のことを望んでいるのかどうかです。

1. 男たちが特定の仕方で祈ること（8節）、そして 2. 女たちが「同じように」（9節）特定の仕方で装うこと。

あるいは、次のことなのか。

1. 男たちが特定の仕方で祈ること、そして 2.「同じように」女たちも祈ること、それも服装に関わる特定の仕方で祈ること。

専門家によれば、どちらの解釈と翻訳も文法的には可能です。それでは、祈りへのパウロの励まし（2:1）は男たちだけに向けられているのでしょうか。いいえ。男たちのほうが聞き届けられやすく祈るわけでも、女たちより多くの信仰を持っているわけでもありません。パウロは単に、教会全体が祈ることを望んでいるのです。男も女も、機会があるところならどこででも祈るべきです。神の永遠の夢が実現するために。男たちは怒りなしに、女たちは品位とふさわしさをもって。

「同じように、女たちも」は等号のようなもので、祈ることに関わっています。それによって、男たちの前で、あるいは男たちのいるところで公に祈ることは許されています。もっと正確に言えば、命じられているのです。

女たちの外見は、エペソの特別な状況と関係しています。アルテミス崇拝の環境では、女たちは、特にそれができる裕福な女たちは、ぜいたくに、人目を引くように着飾っていました。神の家では、もはやそうであってはなりませんでした。ここでは良い行いによって目立つのです。この偶像崇拝から、あらゆる点で一貫して距離を置くことが重要でした。もちろん女性は身を飾ってもかまいません。しかし、何一つこの偶像崇拝を映し出してはならないのです。

装身具と髪型の禁止を、厳格に文字どおり私たちの時代に移すことは、女性に教えることの禁止を前提とする人たちによっても、おそらく実行されていないでしょう。声に出して祈る男たちも、皆が手を上げるわけではありません。期待をもって受け取るように、開いた手を上げることは、神への期待のうちになされるとりなしの、それとわかる姿勢です。しかし、それからも規則を作ることはできません。手を組むことは、私たちのところで広く見られる祈りの姿勢です。それは間違いではなく、私たちのところでも祈りとして受け止められています。

6.3.5 静けさと服従のうちに学ぶこと

> 女は静けさのうちに、全き服従をもって学びなさい。

これは、このテキスト全体の中で命令形になっている唯一の文です。教育を受けていた女性はわずかでした。パウロがここで、いわばすべての女性を学ぶ者として重

んじていることは、まさに革命的です。 教育は大多数の女性には手の届かないものでした。望まれもせず、支えられもしませんでした。それは男の領分でした。このような前提のもとでは、パウロのことばは違った響きを帯びます。それどころか、これこそが、教えることの禁止を正しく理解する鍵なのかもしれません。

パウロがここで、エペソの教会で問題を引き起こしていた特定の一人の女性だけを指している可能性も排除できません。「女」が単数形で書かれているからです。パウロは、問題を起こしている人々の名前を挙げることがあります。名前を挙げないこともあります。具体的な一人の女性が問題になっているのなら、そのような指示は今日も、その女性と同じように振る舞う女性にしか適用できません。

服従はたいてい、創造の秩序によって根拠づけられます。しかし、あとで示すように、それはここでの問題ではありません。ここで問題になっているのは、反抗の反対としての服従の姿勢です。人は受け入れる用意があって初めて学ぶことができます。学ぶ意欲をもって福音の真理を受け入れ、古い考え方や作り話の教えを捨てるときです。 それは落ち着きの中でしか起こりません。問題は黙ること（沈黙）ではなく、学ぶ姿勢です。そこでは質問が許され、助けになります。ただし、抵抗や反駁や反対の試みとしてではありません。それはエペソの具体的な問題でした――女性一般の問題ではありません。まるで女性がみな一様にそういう性質を持っていて、パウロのこの指示に従う必要があるかのように考えてはなりません。はっきり言いましょう。この文脈で問題になっているのは、使徒たちの教えと福音への服従であって、男性への服従ではありません。

6.3.6 教えたり、男を支配したりしないこと

> しかし私は、女が教えることも、男を支配することも許しません。むしろ静かにしているべきです。

この節は焦点であり、ここでキリスト者は二つの陣営に分かれます。一方はここに、女性に対する一般的な教えることの禁止を見ます。もう一方は、エペソの特別な、問題のある状況を前提とします。このことばを、ドイツ語や現代語でそこに書かれているとおりに単純に受け取り、それを守ればよいのでしょうか。

パウロの最も近しい同労者として、テモテは、もし女性に対する一般的な教えることの禁止があったなら、それを知っていたはずです。長年の協力のあとで、ここで

そのことを指摘されたのだとしたら、奇妙なことでしょう。このことはむしろ、エペソの特別な状況を示しています。

続くエバとアダムについてのことばは、教えることの禁止の根拠と見なされています。その場合、理由は創造における階層です。女性が男性を教えるなら、それは彼を支配することを意味するというのです。女性がどれほどへりくだって教えたとしても、たとえ頭にかぶり物をしていたとしても、それは禁じられているでしょう。それは支配することだからです。本当にそういう意味なのでしょうか。

6.3.7 教えることは支配することなのか

私の根本的な問いは、いつもこうでした。なぜ教えることが、支配や権威と結びつけられるのでしょうか。新約聖書のどこかに、この結びつきがあるのをご存じでしょうか。教えることが同時に支配することと呼ばれている出来事をご存じでしょうか。有害な行為として。あるいは肯定的な組み合わせとしてでも。教えることは、学ぶ人々や聞く人々の下に身を置く、他者への奉仕ではないでしょうか。

教えと教えることは、この手紙のテーマです。「教え」と「教える」は15回出てきます。ほかのどの手紙の2倍です。教えることは単に説教することではなく、むしろ強い、より拘束力のある性格を持っているようです。健全な教えを教えることは、防御であり弁護です。教会のいやしであり、建て上げです。しかし、それは支配することでしょうか。あるいは権威を行使することでしょうか。

「パウロはテモテへの手紙第一4章11節で――つまり同じ手紙の中で――『これらのことを命じ、また教えなさい』という言い回しを使っています。『命じる』に当たるギリシア語は parangello で、テモテへの手紙第一5章7節と6章17節にも出てきます。それは『指図する、促す、命令する』という意味です。テモテへの手紙第一4章11節では、それが『教える』と結びついて使われています。この結びつきはテモテへの手紙第一2章12節にもありますが、『支配する』には別の語が使われています。したがってその意味は、テモテへの手紙第一4章11節と必ずしも一致しません。」[101]

101. Wunderli, 37

「教える権威」[102]という概念が、教会の領域にはあります。問題は、誰が、ほかの人々を拘束し、反論することのできない教えの言明をする権威を持っているかです。信仰の問題においては、どうでもよいということはありません。しかし、パウロがここでそれを意味していたということがありうるでしょうか。教えの正しさが、教える人の性別にかかっていることなど決してありません。 男性は、男性であるというだけで、教える権威を持っているのでしょうか。教えにおいて大切なのは内容であり、真理であって、性別の問題ではありません。

アポロは聖書に精通していました（使徒18:24）。明らかに際立った教える賜物を持っていたからです。

拘束力をもって教えることは、支配することを意味しません。それなら別の語が見いだされるはずです。

6.3.8 「支配する」とは何を意味するのか

「支配する」に当たる語は、「権威を行使する」という普通の語ではありません。それはこの箇所にただ一度だけ出てきます。だからこそ私は、この節を女性に教えることを禁じる唯一の根拠として認めることに、いっそう慎重になります。

「『支配する』に当たる語（『authentein』）は、新約聖書ではこの箇所でしか使われていません。[103] それに属する名詞『支配者』は、もともと『殺人者』を意味し[104]、より正確には『自殺者』あるいは『家族殺し』を意味しました[105]。後に日常

102. 教会の教導職 (magisterium ecclesiae) とは、諸教会において、特定の職務者や教会の機関によって行使される教える権威を指します。教会の教導職は、教会史の中で司教職と関連して、とりわけ単独司教制（君主的司教制）の成立と関連して発展しました。この発展の結果が、西方キリスト教における教皇の首位権でした。それは最初はまだ ius appellationis の意味においてであり、後には第一バチカン公会議の不可謬性の教義によって先鋭化しました。教会の教えの基礎とされるのは、聖書と伝承です。これに対してマルティン・ルターは1523年に、「キリスト教の集会あるいは教会は、すべての教えを判断し、教師を招聘し、任命し、罷免する権利と力を持つ」と定式化しました。その際の基準は聖書のみである、と。宗教改革が固まっていく過程で、教えの判断は領邦教会のレベルに引き上げられ、聖書と並んで、信仰告白文書が第二次的な規範として加わりました。（Wikipedia）
103. ハパックス・レゴメノン（hapax legomenon）であるため、この語はキッテルの神学辞典（Kittels Theologisches Wörterbuch）でさえ論じられていません。しかし、ギリシア語を母語とする多くの偉大な古典作家たちの著作に見られます。N. J. Hommes. 「Let Women be Silent in Church」. Calvin Theological Journal 4 (1969) 5-22、特に18頁およびそこに挙げられている文献を参照。Hommes の論文のよい要約が New Testament Abstracts 13 (1969) 365 にあります。
104. C. D. Osburn. 「Authenteo (1Timothy 2: 12)」. Restoration Quarterly 25 (1982) 1-12.
105. N. J. Hommes. 「Let Women be Silent in Church」. 前掲書 18頁。

語において、『主人』『統治者』『専制君主』という意味を得ました[106]。」[107]

ここで言われている支配するあり方は、何ら肯定的で望ましいものではありません。しかし、それを肯定的に見るなら、男たちは教えることによって支配すべきであり、女たちはそうすべきではない、ということになります。それが、男性が女性の上に権威を持つというこの教義から導かれる結論でしょう。男性が教えるとき、その人は女性を、そして聞き学ぶすべての人を支配することになります。

教会における指導者、リーダー、長老たちの奉仕――そこには教えることも含まれます――は、決して「支配する」とは呼ばれていません。

マリリン・スミス（Marilyn Smith）とイングリッド・ケルン（Ingrid Kern）も、同様の判断をしています。「テモテへの手紙のこの段落におけるもう一つの点は、『権威を行使する』と訳されてきた authentein という語の用法です。authentein の意味内容については一致がありません。しかし一つのことは確かです。もしパウロが、この語の通常の意味において、女性があらゆる権威を行使することを禁じるつもりだったのなら、彼はきわめて高い確率で、そのための通常の語 exousia を用いたでしょう。ところがパウロは、新約聖書のほかのどこにも出てこない、まったく別の語を用いています。ここで彼がまったく別の種類の権威を意味していることを示すためです。歴史家ヨセフス（Josephus）は、ヘロデの息子アンティパトロス（Antipater）を描写するのに authentein を用いています。アンティパトロスは、二人の兄弟を殺害し、父の殺害を企てたかどで告発されていました（…）。それによれば、authentein は、人々を滅ぼす意図をもって、彼らを『支配する』あるいは『絶対的な権力を行使する』というほどの意味になります。」[108]

この文脈で問題になっているのは、互いに切り離された二つの事柄ではありません。ここでそれらは一体であり、互いに条件づけ合い、否定的な仕方で積み重なっています。教えることと支配することです。エペソの歴史的・宗教的状況を考えれ

106. 同上。Walter Lock. A Critical and Exegetical Commentary on The Pastoral Epistles (I & II Timothy and Titus). International Critical Commentary. T. & T. Clark: Edinburgh, 1936. 32頁は、通俗ギリシア語における「authentein」の意味として「despotes」（＝「専制君主」）を挙げ、英訳として 「a self-actor」, 「to lord it over」 などを挙げています。Sir Robert Falconer. 「1 Timothy 2 14,15: Interpretative Notes」. Journal of Biblical Literature 60 (1941) 375-379、特に375頁も同様に 「a master, an autocrat」 と訳しています。Joseph H. Thayer. Greek-English Lexicon of the New Testament. Baker Book House: Grand Rapids (MI), 1977. 84頁（Nr. 830）は、「authenteo」の意味として 「one who with his own hand kills either others or himself」, 「one who does a thing himself, the author」, 「one who acts on his own authority, autocratic」 を挙げ、「autokrator」「an absolute master」 と同義としています。
107. Schirrmacher, 122
108. Wunderli による：Smith/Kern 2005, 98; Bauer 1988, 1240

ば、問題は、支配するような仕方で教えることです。否定的で、高圧的な、さらには越権的な仕方で。アルテミスの環境の女性たちに見られたように。厳密に言えば、問題は、豊穣といのちの授与に関わるアルテミス崇拝におけるような状況でさえありえます。性的な領域で男性を支配することです。奇妙に聞こえるかもしれませんが、それが、パウロがテモテへの手紙第一を書き送った環境でした。そうだとすれば、この文は次のようになるでしょう。私は、女性が（誤って）教えることも、男を性的に支配することも許しません。

ですから、男性の前で公に教えることの禁止が問題になっているのではありません。 妻がときに夫を教え諭すことを禁じているのでもありません。当時の女性は、学問や学びからほとんど締め出されていたため、教育において遅れていました。しかし、ある女性がずっと前からイエスの弟子であったなら、彼女より後に信仰に入った夫を、彼女はぜひとも教えたことでしょう。

エペソで問題になっていたのは、おそらく、グノーシス主義の手本にならって独りよがりに、支配的に教えていた女性たちです。彼女たちは教えるための権威を自分のものとして要求し、いわばそれを奪い取りました。さらに悪いことに、彼女たちは偽りの教えを教えていました。そのような女性たちも、その教えも、容認されてはなりませんでした。神の家には、そのような振る舞いや偽りの教えの居場所はありません。男性がそうした場合も、まったく同じです。 しかしエペソで問題だったのは、ある特定の女性、あるいは女性たちのグループでした。すべてのキリスト者の女性を、同じ段階に置く理由はありません！ テアテラで教えていた女イゼベル（黙示録2:20）への言及も、この型に当てはまります。そこでの問題は、彼女が女性として教えたことではなく、偽りを教えたことでした。

支配することは、この文脈では、霊的な「指導」や「権威」として説明することはできません。つまり、教会における指導や牧者の役割として説明することはできません。イエスとパウロは、それを支配することとは理解しなかったでしょう。 キリスト者の支配するあり方とは、仕えることです。そして第一の者ではなく、最後の者になることです（マルコ10:42-45）。それは、指導者として他の人々の先に立って進むときに可能となる姿勢です。ペテロは牧者たちに、支配することは牧者の奉仕と何の共通点もないと指摘しています。

「あなたがたのところにいる神の羊の群れを牧しなさい。強いられてではなく、自発的に監督し、恥ずべき利益のためではなく、心から進んで行いなさい。また、自

分の所有物を支配する者としてではなく、群れの模範となりなさい。」ペテロ第一5:2-3

静かにしているとは、黙らなければならないから口を閉ざすことではありません。ある特定の振る舞い、すなわち「平和のうちにとどまる」「落ち着きのうちにとどまる」あるいは「秩序を保つ」ことを意味します。[109] 学び、互いに耳を傾けるプロセスにおいて、この振る舞いは関係する女性たちに求められていることです。しかし男性たちが同じ問題を引き起こすなら、それは男性たちにもまったく同じように当てはまるでしょう。

イエスの足もとに座ったマリアのように、静かに、注意深く座っていること。それが、教師の中の教師に耳を傾けるための理想的な学びの姿勢です。

6.3.9 エペソにおけるアダムとエバ

> ……なぜなら、アダムが最初に形造られ、その後にエバが形造られたからです。そして、アダムはだまされませんでしたが、女はだまされて違反に陥りました。

これらのことばによってパウロは、なぜ女性が公に教えてはならないのかを根拠づけているように見えます。「教えること」は服従ではなく、支配することだからだ、と。私はそのように何度も聞いてきました。そして自分自身も、いつもそう理解していました。ただし、正直に言えば、頭の片隅にいくらかの疑いを抱きながらです。数時間の差しかない時間的な順序が（24時間の創造の日を信じるなら）、これほどの重大さを持つことがありうるでしょうか。アダムとエバは、短い間をおいて相次いで形造られた双子のようなものです。この短い時間が、すべての女性に対するこのような教えることの禁止を定めるというのでしょうか。そして、エバがだまされたから女性は教えてはならないというのは、神の罰なのでしょうか。エデン以来、そのためにどの女性も教えてはならないのでしょうか。たとえその賜物を与えられていたとしても。

さて、少なくともユダヤ人キリスト者たちは、七十人訳聖書とトーラー、あるいはそのどちらかを持っていました。それが、新約聖書の正典ができる前のキリスト者の聖書でした。パウロはここで、誰でも読んで確かめられることを繰り返していま

109. ExWNT 第2巻、311頁を参照。

す。なぜパウロは、これほどよく知られ、明白なことに言及するのでしょうか。アダムが最初に造られ、エバが誘惑されたということを。

さらに、このテキストをいま述べたように理解するなら、パウロはどこかで自分自身と矛盾することになるでしょう。ローマ人への手紙5章12節以下で、彼はアダムを描いています。アダムは罪を世界にもたらし、そうして最初の者として自分の家族のかしらとなりました。罪のうちに生まれるすべての人間からなる世界共同体のかしらです。アダムに責任があるのです。神の答えと救いは、新しいかしら、私たちをその交わりに「養子として迎え入れる」方、イエス・キリストです。

ここテモテへの手紙第一では、パウロがエバを責任あるかしらにしていると考えることもできるでしょう。彼がここでそのように述べているのには、特別な理由があるはずです。そして上ですでに述べたように、その反対を主張する原グノーシス的な創造の異説が出回っていました。エバが最初に造られ、アダムが最初に誘惑された、というのです。アルテミスの環境では、この影響力のあるカルトの中で、女性は男性より重要でした。それが、一人の女性あるいは何人かの女性が、支配的に教え、キリストの教えに逆らって反抗し、反論する根拠となっていたのかもしれません。

アダムとエバへの言及は、もしかすると肯定的な指摘でもあるのかもしれません。エバの弱さやアダムの優越を指しているのではなく、教育と学び、そして神に服することの必要性を指しているのです。エバがだまされたのは、もしかすると十分に教えられていなかったからかもしれません。それに対してアダムは、神の直接の命令に聞き従わないことによって、意図的に罪を犯しました。「人々を混乱させるような不発弾や地雷を、これ以上放置しておくのはやめましょう。このテキストを、私の考えでは本来意図されていたとおりに、神の教会を、男性も女性も等しく建て上げる一つの可能性として読みましょう。パウロが特定の状況でこれを適用することを心にかけていたように、私たちも、自分自身の文化や偏見や憤りが私たちをどこへ導くのかを、注意深く考え、祈らなければなりません。世が差し出すさまざまな固定観念のどれかに自分を合わせるのではなく、イエスの福音の、いやし、解放し、人を愛するメッセージに合わせるよう、最善を尽くさなければなりません。」[110]

110. Wright, N. T., 27頁, Paul for Everyone: The Pastoral Letters, London, 2003

6.3.10 私は今は許していない

「私は今は許していない」とは、指導し教える女性に対する永続的あるいは普遍的な禁止ではありません（12節）。フィリップ・ペイン（Philip Payne）やほかの人々は、「私は女が教えることを許しません」は、ギリシア語テキストの最良の翻訳ではないと論じてきました。「私は今はそれを許していない」のほうがよい翻訳です。「私は今はそれを許していない」は、エペソにおける特定の、時間的に限られた問題のための、現在の具体的な指示を示しています（女性が教えることに対する永続的あるいは普遍的な禁止ではありません）。さまざまな学者たちが示してきたように、パウロが否定詞 ouk とともに能動態直説法の epitrepo ̄ を用いていること（「私は許していない……」）は、特定の状況のための具体的な指示を強く示しています。新約聖書で epitrepo ̄ が用いられている事例の圧倒的多数において、またギリシア語旧約聖書ではすべての事例において、その指示は「特定の時に、あるいは短い、または限られた期間だけ」関わっています。[111] ですから、その特定の女性あるいは女性たちのグループが教えを理解し、受け入れ、学んだなら、この教えることの禁止は論理的に解除されることになるでしょう。

何度繰り返しても足りません。これは、最初の二人の人間の創造の秩序に基づく、女性に対する普遍的な教えることの禁止ではありません。それはパウロの教えの主旨ではありません。これは、世界のすべての教会にあらゆる時代に向けられた指示ではなく、エペソの特別な状況に宛てられたものです。 これは女性に教えることを禁じるものではなく、姿勢についての命令です。これらの女性は支配的に教えるのではなく、へりくだって学ぶべきなのです。

6.3.11 子を産むことによる救い？

> しかし彼女は、子を産むことにおいて救われるでしょう。もし彼女たちが、信仰と愛と聖さのうちに、慎み深さをもってとどまるならば。

歴史的な背景を知らなければ、奇妙なつながりです。教えることと学ぶことが、出産と何の関係があるのでしょうか。一度ならず私はこう言われました。多くのキリスト者は聖書を読むけれども、こうした古代の背景を知ることなどとうていできな

111. Hill, Graham Joseph, 63-64頁, Holding Up Half the Sky: A Biblical Case for Women Leading and Teaching in the Church

い、と。神は、このテキストがそうした背景知識なしでも理解できるように、備えてくださらなかったのでしょうか。

私たちは照らされた理性を与えられています。聖霊が私たちの教師です。今日私たちには、多くの研究成果を数秒で画面に映し出せる手段があります。これらのテキストについての無数の研究があります。考えうるあらゆる可能性についての原語の研究があります。全体としては、もうまたしても、全体を見渡すことができないほど多すぎるくらいです。教える人は誰でも、こうした問いを追究しなければなりません。

いずれにせよ、聖書を読む人は誰でも、テキストの背景に取り組むべきです。自分が見いだす手段と可能性をもって。学校では、テキストの扱い方や、テキストに投げかける問いを学び、練習します。ですから私は、私たちの時代についてしか語ることができません。私たちが聖書を読むとき、文字どおりの理解を超えて、テキストについてもう少し考えるという務めから、誰一人免除しないのです。そして、明確さと聞き従う力を与えてくださるよう、神に切に願うことからも。それが私たちのせいであってはなりません。私の表面性や、新しい発見への恐れや、怠惰や、テキストについての考えの足りなさのせいであってはならないのです。

エペソでは、妊娠した女性たちは出産のときに女神アルテミスに身をゆだねました。この女神には、出産を成功させる力があるとされていました。しかしそれはまったく間違っていました。エバが最初に造られ、アダムが最初に惑わされたという作り話と同じように。 出産はしばしば命に関わり、痛みを伴います。そのときの唯一の救いを与えることができるのは神です。神だけが私たちの救い主であり、助け手です。ですからパウロはこう言おうとしているのです。こうしたあらゆる作り話や神話や恐ろしい予期をついに振り払い、それらを投げ捨てて、唯一の救い主なる神に、すべてにおいて身をゆだねなさい、と。

この難しい節について、もう一つの可能な説明を引用します。「もう一つの見かけ上の問題は、『子を産むことによる救い』に関して生じます。パウロは、女性は子どもを産むなら救われると教えたのでしょうか！？ そのような教えはとうてい考えられません！ それは彼の教え全体と矛盾するでしょう。ですから、ここでそれが意味されていることなどありえないのです。むしろパウロはここで創世記3章15節に関連づけているのでしょう。すなわち、女の子孫が救いをもたらすということです。パウロがここで戒めている偽りの教えを説く女性たちは、救いは女性を通して直接来ると考えていました。そこでパウロは、救いは確かに女性を通して来るけ

れども、実際には一人の女性から生まれた子孫であるキリストを通して来るのだと明らかにしているのです（一方、グノーシス主義者たちは、身体性を――したがって子を産むことも――原始的で時代遅れのものと見なしていました）。」[112]

6.3.12 今日のテモテ第一

「今日の信者である私たちにとっての問いは、21世紀の男性と女性を、男らしさと女らしさについてのギリシア・ローマの理想にどうやって押し込めるか、ということではありません。私たちにとっての問いは、どうすれば私たちが、聖さの姿勢をもった祈りの人となれるか、ということです。 今日を生きる人間として、私たちはそれをどのように証明すべきでしょうか。私は、怒りと不和を避けることは普遍的なことだと提案します。ですから、まずそこから始めるのがよいかもしれません。もう一つの問いは、『神を敬うことを告白する』者として、私たちがそれを良い行いのうちにどのように示すかということです。今日の私たちの文脈では、それはどのような良い行いでしょうか。

そして、2章の終わりの15節にある『彼女たち』に注目してください。この『彼女たち』は、この段落が語りかけている男性たちと女性たちを指しています。 2章全体は、ヒメナイオ（Hymenäus）とアレクサンドロ（Alexander）の冒瀆的な振る舞い（テモテ第一1:20）と対照をなしています。では、私たちは、イエス・キリストの大いなるあわれみと恵みによる救いのうちに、信仰と愛と聖さにおいて、自制をもって、どのように前進することができるでしょうか。それはどのような姿なのでしょうか。

もう一度繰り返します。私の考えでは、パウロは、女性が男性とあまりにも違うので、教会や家庭における特定の役割から一般的に締め出されている、という結論を引き出してはいません。実際には、その反対が真実です。男性と女性は主の前に等しいのです。パウロは、女性がその性別のゆえに特定の役割に就くことができない、と言おうとしているのではありません。古代において、女性は家の、あるいは家政の長であることがよくありました。アダムとエバは12節の命令の根拠となっているのではなく、してはならないことの例として役立っているのです。 コリント人への手紙第二11章3節でパウロは、蛇によるエバの欺きを、教会全体のための例証として用いています。ここテモテへの手紙第一では、それが女性だけに適用されています。

112. Michael Trenkel, 2017（参考文献一覧を参照）

私個人としては、夫に、ギリシア・ローマの家の長であるかのように振る舞うことを期待してはいません。もし彼がそのように振る舞ったら、奇妙なことでしょう。私たちは21世紀の生活を生きる21世紀の人間です。もし私が彼に、1世紀の夫であるかのように権威を行使することを期待するなら、私は信仰を持たない人々に、キリスト教信仰に対して批判的な態度をとらせることになるでしょう。テモテへの手紙第一5章14節が警告しているように、私たちは敵対する者に、そしる機会を与えてはならないのです。」[113]

6.3.13 結論

エペソの歴史的状況に目を向けると、いくつかのことがより明らかになります。それでもなお、問いは残ります。しかし、テキストの意図は見えてきました。そこで明らかになったのは、これは一般的な、教えることや説教することの禁止ではなく、指導することの禁止でもなく、ある特定の神学、すなわち偽りの神学を教えることの禁止だということです。そして、従順を要求するような支配的な仕方で、あるいは越権的な仕方で教えることの禁止です。 あるいは、教える権威を不当に自分のものとして要求することの禁止です。それはキリスト者の生活にも、神の集会にもふさわしくありません。それはエペソの特有の問題でした。一般的に言えば、それは確かに男性にも当てはまります。今回の件では、男性たちは叱責のきっかけではありませんでした。ですからパウロは、普遍的な教会における女性の役割を定義しているのではなく、むしろエペソでの濫用を正しているのです。

教える賜物を与えられていながら、男性たちが道をふさいでいるために、それを用いることができない女性が、私たちの間にどれほどいるでしょうか。

キリストにある数えきれない賜物豊かな女性たちが、この一つの節によって、男性たちと同じように教えることを不可能にされてきました。その責任は男性たちにあります！ 男性たちがこの不当な状態を終わらせなければなりません。

6.3.14 テモテへの手紙のテキストの説明的な言い換え

以下に続くのは、この箇所の説明的な、パラフレーズ的な言い換えです。もし私がこのテキストを手短に解き明かすとしたら、このように言い表すでしょう。これは

113. Kidson, Persuading Shipwrecked Men: The Rhetorical Strategies of 1 Timothy 1, 2020, Mohr Siebeck Tübingen

私のテキスト、私のことばであって、聖書のテキストではありません。

愛するテモテ。エペソで、何人かの男たちと何人かの女たちとの間の問題に対処するために、次のことがなされるべきです。男たちは祈り始めるべきです。彼らが出会うところでは、どこででも。公の場でも。作り話や偽りの教えについて争う代わりに。怒りと争いは祈りを妨げます。共に祈ることは、穏やかで平和な生活につながります。争いや暴力から清い、上げられた、開かれた、受け取る手をもって、彼らは共に私たちの救い主なる神を礼拝し、すべての人のために神の御座の前でとりなすべきです。

もちろん女たちも祈るべきです。男たちとまったく同じように。その際大切なのは、女たちが――私が特に念頭に置いているのは裕福な女たちです――どこに姿を現し、人目に触れるときにも、つつましくあることです。自分に注意を引きつけ、しかもほかの女たちをしのごうとする彼女たちの装いは、手の込んだ人目を引く髪型や、金や真珠の装身具や、高価で奇抜な衣服であってはなりません。メシアに従う女たちは、そのように自分を見せびらかしたり、そのような仕方で影響力や優位をふるったりする必要はありません。もっと価値があり、すべての人から尊ばれさえする装いと影響力があります。良い行いです。

女は、福音の真理とは何かを学ぶべきです。学ぶ意欲をもち、注意深く、知識を求めて。自分の家で。特にこれらの女たちのうちの一人に、私はこうした偽りの神話や教えをさらに広めることを許しません。彼女は、自分の夫や男たち一般の上に立とうとしてはならず、自分にふさわしくない教える権威を要求してはなりません。彼女は健全な教えを知らず、理解していないからです。健全な教えが説明されるときには、耳を傾けるべきです。彼女にはそれが必要なのです。彼女には知識が欠けていて、この無知が、家々に神話を広めるときに大きな害をもたらすからです。アダムとエバの創造は、この状況にふさわしい例です。アダムが最初に創造され、エバを教えるべきだったのは彼でした。彼はだまされませんでした。しかしエバはだまされ、欺かれました。女たちが進んで学ばないなら、エバのようにだまされ、ほかの人々にとってのわなとなるでしょう。エペソの何人かの女たちが夫から学ばないなら、まったく同じことが起こるでしょう。

そしてこれらの女たちは、子を産むことにおいて守られることを知らなければなりません。エバの惑わしと、出産の大きな痛みにもかかわらず。私たちの救い主である神が救うのであって、人間が造り出した守護女神、エペソのアルテミスが救うのではありません。ですから彼女たちは、信仰と愛と聖さに心を集中すべきです。ア

ダムとエバのように一体である夫婦として、共に。女たちは子どもを持つことを恐れてはなりません。男たちは性的に自制し、妊娠が多すぎると妻にとって危険であることをよく考えるべきです。

6.4 普遍的な命令と時代に縛られた命令

この短いテキストを扱い、ここでも問いが残ったところで、有効性の原則に目を向けたいと思います。

聖書の中で、ある命令が普遍的であり、ほかの命令が文脈的に限定されている、あるいは文化的なものであると、どうしてわかるのでしょうか。

多くの場合、文脈から見分けることができます。たとえば淫行は、いつでも罪です。これは明らかに普遍的です！ しかし、時にはとても難しいことがあります。聖書にはさまざまなジャンル、つまり文学類型、テキストの種類あるいは形式――歴史、物語、指示、勧告など――が含まれていて、それに基づいて実践や倫理がさまざまに導き出されるからです。さらに、具体的に誰に語りかけられているのかという問いがあります。簡単な例を挙げましょう。旧約聖書のイスラエルは、今日の新しい契約の教会には当てはまらない指示を受けました。

パウロの手紙については、それを見分けるための手がかりがあります。

指示は繰り返されているでしょうか。それらはさまざまな文脈の中に見られるでしょうか。明確で共通の言葉づかいがあるでしょうか。 別の言い方をすれば、パウロがまれで珍しい概念や語彙を使っているなら、その状況は特別で、より限定されたものだと考えなければならない、ということです。この本の特別なテーマについて言えば、中心となるテキスト（コリント第一11章、14章、テモテ第一2章）は、きわめて特殊な論証と、きわめて独特な語彙を持っています。ですから、教えることと指導することにおける女性の普遍的な禁止を立証することは、ほとんどできません。

普遍的な命令は聖書の全体的な文脈に組み込まれ、矛盾を生み出しません。

聖書の解釈は、決して中立的な真空の中で行われるのではありません。 私たちは聖書に近づくとき、自分の前提や経験や刻印や価値観を脱ぎ捨てはしません。私たちは自分自身を、テキストの理解と解釈の中に持ち込みます。そのことを考えに入れないなら、不健全な聖書主義に陥る危険があります。

6.4.1 聖書主義と「聖書のみ」

初めに私は「聖書主義」という概念を挙げました。聖書とキリスト者の生活に対する、否定的で不健全な態度としてです。聖書主義とは、普遍的な命令と時代に縛られた命令の区別をおろそかにする態度です。それは、聖書に忠実であることを自分のものとして主張する態度です。ある箇所で聖書を文字どおりに受け取らず、文脈化するほかの人々から、自分を区別するのです。その際、そうした聖書に忠実な人々にとっては、ほかの人々が自分の立場をどれほどよく根拠づけているかは、どうでもよいことです。しばしば、そのような人々には、聖書を自分の願望や世の時代精神に合わせようとする意図がある、と決めつけられます。

聖書主義は、教会における女性の役割を少数の聖書テキストによって説明し、限定します。そして聖書がはっきりと示している大きな全体像を見落とします。その全体像は旧約聖書にもすでに表れています。礼拝の形づくりについても、キリスト者の生活の形づくりについても、あらゆる伝統とやり方に対して、その根拠となる聖書の一節が求められます。確かに聖書は基準であり規範です。しかし、指示がはっきりと明確でないところでは、聖書の全体像に従うことが大切です。個々の節に奴隷的に依拠してはなりません。ある程度の高さから見て初めて、より広い視野を得ることができます。聖書の地形全体を見渡すために。同じように、絵画を見るときにも、細部にとらわれず全体を見るためには、少し後ろに下がらなければなりません。時には、開かれた心と神への信頼をもって、実際的な解決を見いだすことが必要です。

聖書主義とは、聖書を、キリスト教信仰を言い表すための、そして特にキリスト者の生活実践のための唯一の源泉としてのみ認める聖書の読み方であり、聖書への接し方です。それ自体はよい姿勢です。しかし、歴史的背景がおろそかにされたり、不確かで重要でないものとして退けられたりすると、問題になります。聖書主義は、幅広いキリスト教の伝統の知見を見落とします。そして、自分自身の文化的状況や立ち位置を、新約聖書が成立した時代と比較して評価することができません。聖書主義は、正当な問いや論拠に対して免疫になっています。自分たちのグループ、運動、連合、あるいは「部族」の認識が、意識的にせよ無意識的にせよ、最も高い、あるいは最も深いものと評価され、どの世代にも受け渡されていきます。聖書主義とは盲目です。自分自身が一つの解釈の伝統の中に立っていること、独自の

刻印を受け、独自の先導者たちと集団の圧力を持っていることが見えていないのです。

宗教改革の「Sola Scriptura」、すなわち「聖書のみ」は、聖書主義ではありません！ 宗教改革者たち、あるいはその後継者たちが「ソラ」の諸原則を言い表したとき、彼らは裸の聖書、あるいは単なる聖書を意味していたのではありません。伝統、経験、自然と並んで、聖書が優位にあることを意味していたのです。 プロテスタントが聖書の明瞭性を強調したとき、聖書全体が等しく明瞭だという意味ではありませんでした。福音と救いに関しては聖書は明瞭だ、という意味でした。 聖書の完全な十分性を力説したとき、それが聖書の文脈を超えた事柄、たとえば開心手術や双極性障害の治療やマクロ経済学に取り組むのに十分だ、という意味ではありませんでした。聖書はそれらの事柄に寄与する価値観や原則や言明を持っているかもしれません。しかし、それらは、その事柄を全体として扱うには十分ではありません。

プロテスタントが聖書の権威について語ったとき、彼らが意味したのは、聖書の中で語る聖霊の権威でした。信じる者たちを真理に導き入れ、照らしてくださる御霊、教会のために教師たちを育て、与えてくださり、教会の信仰告白と典礼の遺産に命を吹き込んでくださる御霊です。

21世紀のキリスト者として、私たちは先人たちの肩の上に立っています。先人たちもまた、その先人たちの肩の上に立っていたように。聖書への忠実さも聖書理解も、決して「真空の中」で、決して「中立の地盤」の上で起こるのではありません。聖書を読むとき、みことばを学ぶとき、教理を形成し、キリスト者の生活実践を記述するときに、この認識に留意すること。それはすでに、よい前提となります。

硬直した聖書主義は、事態がまさに明確ではないところで、しばしば硬直した教条主義と、律法的な厳しさと狭さに行き着きます。それは、キリスト者が召されている福音の自由と恵みに合致しません。

ここで指摘させていただきたいことがあります。聖書に忠実なキリスト者たちも、聖書のことばをもはや時代に合わないものと見なすことが十分にあるのです。たとえばカリスマ的な賜物（コリント第一12章）に関してです。彼らは、それらの賜物は今日もはや存在しないと信じています。この主張を裏づける聖書テキストはありません。それは推論であり、しばしば純粋な経験神学です。彼ら自身がこうした賜物を経験していないからです。しかも、それらの賜物は世界中の多くの場所に存在

して働いており、たとえば多くのいやしの奇跡が実証されているにもかかわらずです。この神学は、前提と経験によって決められています。言い換えれば、彼らはこれらのテキストを文字どおりには受け取っていないのです。

聖書は、最初のキリスト者の世代の多くの問いを解き明かしています。21世紀の問いは、聖書の精神においてしか解き明かすことができません。それは挑戦であり続けます。そこではさまざまな答えも生まれます。それは今後も残る難しさです。

ライン・パットマン（Rhyne Putman）は、新著『教理が神の民を分裂させるとき』[114]についてインタビューを受け、次のように述べました。「Sola Scriptura（聖書のみ）は、『nuda Scriptura』（裸の聖書）や『solo Scriptura』（聖書だけ）を意味するのではありません。……私は、聖書と、伝統、理性、経験などのほかの源泉との関係について語るとき、suprema Scriptura（聖書の優位）と言うことができると思います。聖書はほかの源泉よりも優位にあります。しかし、これらの源泉は、私たちの神学的・霊的な形成にとって価値があります。それでもなお、聖書だけが霊感を受けた、誤りのない源泉です。聖書だけが、これらほかの源泉の上に立つ、規範を与える規範です。」

6.4.2 文字どおりに受け取ることと字義的意味

聖書を理解し、解釈し、それから生活実践に適用することは、かなり複雑なことです。その際、テキストの字義的意味と、文字どおりに受け取ることは同じではありません。字義的意味は、どの聖書テキストにおいても探究すべきものです。しかし、すべてを文字どおりに受け取ると、議論を呼ぶ、いや滑稽でさえある結果に至るでしょう。

字義的意味は、結果としてまず、それがどのテキストの種類（ジャンル）なのかを確認します。聖書にはそれが多くあります。たとえ話、手紙、教えのテキスト、詩、黙示文学、律法、歴史、説教などです。さらに、それが語られているテキストの種類に応じて、その言明の意図は何かが探究されます。たとえ話はたいてい一つの中心的な言明の意図を持っていて、同時にいくつもの意図を持っているわけではありません。また通常、実際に起こった出来事でもないでしょう。

聖書全体は、常に字義的意味において説明し、解釈すべきものです。そのうちの何を、どのように私たちの生活に文字どおり適用すべきかは、非常によく、正確に吟

114. Putman, Rhyne R., When Doctrine Divides the People of God: An Evangelical Approach to Theological Diversity, Crossway, 2020

味しなければなりません。多くのことは文字どおりには適用できません。それは特に、文化や時代に縛られた慣習に当てはまります。

あなたのみことばの総体は真理です。あなたの義の律法はすべて、とこしえに有効です。

詩篇119:160（チューリッヒ聖書〔Zürcher Bibel、ドイツ語聖書翻訳〕）

7 女性の祭司、女性長老、女性執事

楽園の園では、アダムとエバは、罪のない状態で、治める王であり、神の臨在のうちに生きる祭司です。エデンの楽園の園は、宇宙的な神殿の至聖所の姿です。新しく、よりすぐれたエデン、つまり新しい地は、地球規模の至聖所となるでしょう。地全体が楽園の園となるのです。だからこそ、新しい創造の姿である新しいエルサレムは、巨大な立方体の形をしています。それは、幕屋と神殿の至聖所と同じ形に当たります。新しい地には、女性たちと男性たち、王たちと女王たち、祭司たちと女性の祭司たちが住むことになります。そのとき階層があると思われますか。 ある人々は、そこは新しい創造なのだから、ないと考えます。階層は古い創造にだけ当てはまる、というのです。しかし教会においては、新しい創造はすでに始まっています。教会は初穂です。この世界における神の橋頭堡です。それなのに、なぜ教会においては、いつまでも階層がなければならないのでしょうか。

ここで私は、これまでのすべての認識が具体的かつ実際的にならなければならない地点に来ました。これまでの章のすべての情報、結論、教訓を、私たちは今どうするのでしょうか。真理は今、現実の地面に、教会の日常の現実に触れなければなりません。これまでのすべてから、私は一つの核心を引き出します。

性別の階層はありません！ 教会においてもありません！

7.1 全信徒祭司性

宗教改革は、長く埋もれていたこの真理を再び明るみに出しました。しかし教会の実践には、それは反映されませんでした。誰も、カトリック教会でさえも[115]、全

115. 司祭叙階についてのカトリック教会のカテキズムから：「主イエスは、十二使徒の団体を構成するために男性を選ばれました。使徒たちも、自分たちの務めを継ぐ協力者を選んだとき、同じようにしました。司祭たちが司祭職において結ばれている司教団は、キリストの再臨まで十二使徒の団体を現存させます。教会は、主ご自身がなさったこの選びに拘束されていると自覚しています。それゆえ、女性を叙階することはできません。」この意味で、男性だけがキリストを代理することができるとされます。この立場も今日、圧力にさらされています。女性が司祭になれないのに、マリアは神の母として、カトリックの民衆信心において、ほとんど神に等しいかのように呼び求められ、崇敬されています。これは両義的で、矛盾しているように見えます。カトリック教会は圧力にさらされています。多くのカトリックの女性たちが、叙階された職務を求めているからです。彼女たちの論拠は、すべての信者の全信徒祭司性です。変化は、教会の分裂なしには、あるいは公会議を通してしか可能ではありません。その根底に霊的な動機があるのか、世俗

信徒祭司性を疑ってはいません。問題は、誰もが認めるこの真理が、教会生活にとって実際に何を意味するのかです。

信者の一人ひとりが、女性も男性も祭司であるということは、両方の性が礼拝において同じ役割を持つ十分な理由となるはずです。ところが、まったくそうではありません。全信徒祭司性は、一方では個人的に生きられます。祈りと神との交わりは、個人的な、一人ひとりへの祝福です。

祭司職と、それに結びついたささげ物の奉仕の手本全体は、旧約聖書から来ています。そこでは祭司が公式の礼拝を導き、執り行いました。ですから、全信徒祭司性について、それだけではないにしても、信者たちの集まりのことも考えるのは自然なことです。信者たちは共に、礼拝者として天の聖所に入っていくのです。 そして賛美の霊的ないけにえをささげます。そこに性別による違いがありうるでしょうか、あるいはあってよいのでしょうか。神のことばは、新しい契約においてはそうした違いを設けていません。それなら、私たちも設けるべきではありません。

7.2 長老と女性長老

長老職は、指導的な役割に関わるものです。教会への配慮、監督、保護に関わります。それは教える務めを伴う牧者の奉仕です。先頭に立って進むこと、模範となることを伴います。女性も監督あるいは長老の奉仕を担うことができるでしょうか。

ベン・ウィザリントン（Ben Witherington）は、要点をこう突いています。「テモテへの手紙第一では、長老は一人の妻の夫であり、忠実な者であるべきだと言われており、それは男性だけが長老になるべきことを示している、という議論を時々耳にします。その際まったく忘れられているのは、パウロが宣教者として、エペソであれクレタであれ、強く家父長制的な文化的環境に向かって語っていたということです。彼の原則は、人々がいるところから始めることであって、彼が人々にいてほしいところから始めることではありません。それは、文化の中にある既存の男性の指導構造から始めることを意味します。福音のパン種がその働きを十分に発揮し、物事を内側から変えるまでです。ですから、テモテとテトスがこれらの新しく開拓された教会の指導者としてまず立てるのは、ごく自然に男性だけなのです。それは、永遠にそうでなければならないということを意味しません。 しかし新しく回

的な動機があるのかは、私のテーマではありません。私の焦点はカトリック教会ではなく、自分自身の問題に取り組まなければならない、私の保守的な福音派の環境です。

心した人々は、愛に満ちた説得によって、女性も同じようにそうした役割を果たすのは正しいことなのだと、納得させられなければならなかったでしょう。パウロがすでにその方向へと押し進め始めているのが見て取れます。ローマ人への手紙16章で、彼はフィベ（Phöbe）という名の女性の指導者に言及しているからです。彼女はケンクレアにある教会の女性執事です。そしておそらく、牧会書簡の長老と執事についての議論の中に、女性執事への言及があります。すでに述べたように、パウロが言っていることを評価するだけでなく、それを彼の文化的文脈の中で読まなければなりません。そして、パウロが福音を状況に適用するときに、どのような変化をもたらそうとしているのかを問わなければなりません。」[116]

女性をこの職から締め出すことを、私はパウロのこのことばと比べたいと思います。[エペソ人への手紙 5:29]「だれも、いまだかつて自分の肉を憎んだことはありません。むしろそれを養い、いたわります。キリストも集会に対してそうしておられるように。」私たち男性が女性を長老職から締め出すことは、教会にとって祝福ではありません。それは損失以上のものです。それによってしばしば、間違った男性たちが、自分の力に余る役割に就くことになります（公式に長老に任命されているにせよ、「兄弟たちの会合」の参加者としてにせよ）。「私の考えでは、性別に関する偏見のせいで、私たちは多くの賜物豊かな女性を指導者の働きから締め出してきただけではありません。さらに、指導者としてはそれほど賜物のない多くの男性に、資格を与えてきたのです。」[117]

一部の女性たちは、よい動機からであれ、あまりよくない動機からであれ、夫を通して「裏から」指導の問題に影響を及ぼすでしょう。長老たちの妻が多くの話し合いに同席し、背後のざわめきのすべてが、顔と顔を合わせて率直に語られるほうがよいでしょう。

7.3 彼女は立派な働きを求めている

ジム・ライハー（Jim Reiher）は、テモテへの手紙第一2章と3章にある一つの事実に注意を促しました。「多くの人は、3章1節をまず第一に、長老と執事についての長い議論を含む3章の残りの部分の論理的な始まりと見ています。しかし私は、この節は実は2章の締めくくりに属し、3章への導入である以上にそうなのだ、と論じたいと思います。これは教会における女性にとって重要な意味を持ちます。なぜな

116. Ben Witherington III, Why Arguments against Women in Ministry Aren't Biblical
117. Danny Silk

ら、そうだとすれば1節は、男性にも女性にも長老／監督になるよう励ましていることになるからです。この節が2章を締めくくるものだとすれば、パウロが、信仰において訓練され成熟している限り、両方の性が指導的な役割において神に仕えることを支持していることがわかります。確かに彼は、エペソの教会の女性たちに当面いくつかの制限を課しました。しかし彼は、それが「終着点」と見なされることを望んではいません。むしろ彼は、ごく一般的に、男性も女性も長老になることを目指すのは良いことだ、と付け加えているのです。

パウロはきわめて明確にしています。彼は女性たちがきちんと教育を受けることを望んでいるのです（2:11）。興味深いことに、この節にはこの段落で唯一の命令形が含まれています。「学びなさい」です。つまり、11節はパウロの命令に最も近いものであり、彼は女性たちが教えを受けることを強く求めているのです。 これは彼の思考と著述における一つの頂点です。実のところ、これこそがこの段落を解く鍵です。パウロは、教会のすべての成員が信仰においてきちんと教えを受けることを望んでいます。男性だけでなく、男性も女性もです。彼らがきちんと訓練され、成熟したなら、教える立場や指導する立場は、女性にも男性にも同じように開かれることになるのです。

もしテモテへの手紙第一3章1節がこれらの女性たちに向けられていたとしたら？そこで3章1節に来ます。そこには正確には何と書かれているでしょうか。さて、少なくとも一つのことは書かれていません。「男性だけが長老になることを求めるのは良いことだ」とは書かれていないのです。そうではありません。この節は男性だけを指しているのかもしれません。しかし、女性だけを指しているのかもしれません。あるいは――その可能性が非常に高いのですが――男性と女性の両方を指しているのです。 NIV（New International Version）は、ここをより良く訳しています。テキストはこう言っています。「ここに信頼できることばがあります。『監督になることを志す者は、高貴な務めを望んでいるのです。』」（私の知っているすべてのドイツ語訳でも同様です。そこでは「Wer（だれでも）」が、男性も女性も意味しうるのです。）

3章1節では、「男たち」や「男」を表すギリシア語は用いられていません。「彼」を表す独立した語も用いられていません。しかし、ギリシア語の tis という語は用いられています。この同じ語が、男性にも女性にも用いられます。同様に、「彼または彼女は望む」に当たる語は、「望む」という語の動詞語幹に「彼、彼女、または

それ」を表す語尾がついたものです。この動詞がだれを指しているかは、文脈が決めなければなりません。

テモテへの手紙第一3章1節を2章8-15節の締めくくりとして位置づけるなら、この節は、教会における女性の指導を確認する強力な手がかりとなります。すでに述べたように、用いられている語は男性にも女性にも当てはまりうるので、3章1節は単にこう意味することもできます。「もしある女性が監督になりたいという願いを持つなら、それは彼女が望むにふさわしい良いことです。」これはつまり、パウロが次のようなことを伝えている可能性があるということです。「女性は教えを受けるべきである、あるいは学ぶべきである、そして成熟し有能になるまでは教えたり権威を持ったりすることはできない、と私は強く主張した。それにもかかわらず――女性が長老になりたいと願うなら、それは彼女にとって良いことだ。」

ですから、テモテへの手紙第一2章8節-3章14節について私たちがよく目にする次のような区分ではなく、

教会における女性と男性（2:8-15）。男性の長老（3:1-7）。男性の執事（3:8-10）。女性の執事（または執事の妻たち）（3:11）。再び男性の執事（3:12-14）。

この手紙の思考の流れを、次のように理解すべきではないでしょうか。

教会における女性と男性（2:8-3:1）。現在の状況：現在の指導者たちに、性別に即した仕方で語りかけている（3:2-7）。男性の執事（3:8-10）。女性の執事（3:11）。男性の執事（3:12-14）。」

7.4 女性執事

執事（Diakon）という語には、女性形がありませんでした。執事女会員（Diakonisse）は、数百年後になって初めて現れた語であり、もはや教会の職務や礼拝における奉仕とは何の関係もありませんでした。

長老職と並んで、執事も教会における職務を担っています。その職務は、執事とは何であるか、つまり仕える者であるということによって特徴づけられます。女性もこの職務に就くことができること、あるいはむしろ、この奉仕に身をささげ、女性執事として認められ、重んじられ、確認されうることを、ローマ人への手紙16章1節が示しています。フィベ（Phöbe）は女性執事です。彼女がどのようにしてそうなったのか、私たちは知りません。もしかすると、教会が彼女の家にあったからか

もしれません。いずれにせよ、教会のための奉仕における献身が、彼女を女性執事にしたのです。

テモテへの手紙第一3章11節では、執事の妻たちについて語られているのではなく、女性の執事が意味されている可能性があります。

女性たちも同じように、品位があり、中傷せず、節度を守り、すべてのことに忠実であること。

階層制の明確な支持者（補完主義者）であるジョン・マッカーサー（John MacArthur）でさえ、女性の執事を支持しています。「テモテへの手紙第一3章11節で、パウロは執事の別のグループに言及しています。いくつかの要素が、パウロがここで執事の妻たちではなく、女性執事という独自のグループについて語っていることを示しています。第一に、『同じように』の用法（2:9、3:8、テトス2:3、6参照）は、ここで長老と執事と並ぶ第三のグループを見ることを強く支持します。第二に、これらの女性を執事と結びつける所有代名詞も、明確な冠詞もありません。第三に、パウロは長老の妻たちについては資格を挙げなかったのに、なぜ執事の妻たちについてはそうするのでしょうか。第四に、パウロが『女性執事』という語を用いなかったのは、ギリシア語にそのような語がなかったからです。フィベがローマ人への手紙16章1節で執事と呼ばれているのは、diakonos に女性形がないからです。……『女性たち』（gunaikeios）という語を用いることが、パウロにとって彼女たちを男性の執事と区別する唯一の方法でした。最後に、彼女たちの資格は男性の執事の資格に対応しています。明らかにパウロは、執事のもう一つの区分を導入していたのです。 私は彼女たちを女性の執事と呼ぶほうを好みます。そうすれば新約聖書の用語が保たれるからです。」[118]

ここで第三の職務のグループが導入されているということは、疑ってよいでしょう。「同じように」は、彼女たちを男性の執事と同列に置いているのです！ このことは改めて示しています。男性と女性がこの執事の職を同等の地位で持つことができないとしたら、人がいわばどのような結論を強いられるかを。男性が女性の上に権威を持つという階層の違いがあるとされるからです。

執事の奉仕が何から成り立っているかは、語られていません。執事が指導的な務めを担うこともありうることを、私は排除しません。指導という点での執事の奉仕の問題について、もう一つの考えを挙げます。「テモテへの手紙第一3章の長老と執事

118. MacArthur, J., Different by design, MacArthur Study Series, Victor Books, Wheaton, IL 1996, 153–154.

の資格を互いに比較する場合にも、同様のことが言えます。ヴィルフリート・ハウベック（Wilfrid Haubeck）は、リストが似ていることから、長老と執事が共に教会を指導していたと結論づけています。それはまた、フィベ（ローマ16:1）が教会の指導部の一員であったことを意味しうるでしょう。」[119]

コリント人への手紙には長老についてはまったく語られていませんが、指導の賜物については語られています。それは、女性にも男性にも、どの肢体にも分け与えられうるものです（12:28。ローマ12:8も同様：指導する賜物）。

コリント人への手紙第一12章23節では、ほかより尊くない肢体のことが語られています。「むしろ、からだの中でほかより弱く見える肢体が、かえって必要なのです。また、からだの中でほかより尊くないと私たちが思う肢体を、私たちはいっそう豊かな栄誉で包みます。こうして、私たちの見栄えのよくない肢体は、いっそう豊かな見栄えのよさを持つのです」。パウロはここで、女性や子どもや奴隷のことを考えているということがありうるでしょうか。

7.5 女性の説教者

今日、福音派の教会の礼拝では、たいてい説教が主要な部分になっています。すべてが組織されています。説教のテーマや聖書テキストが前もって知られていることもよくあります。1世紀には違っていました。むしろ、パウロがコリント人への手紙第一11章と14章で描いているような形でした。

> [コリント人への手紙第一 14:26] では兄弟たち、どうなのでしょうか。あなたがたが集まるときには、それぞれが詩篇を持ち、教えを持ち、啓示を持ち、異言を持ち、解き明かしを持っています。すべてのことを、建て上げるために行いなさい。

一人ひとりが何かを持ってきて、皆が建て上げられることに貢献しました。演壇は少なく、分かち合いと交わりが多くありました。互いを待つことが多く、神の御霊が多く働きました。注目すべきことに、この集まりにおいては、説教（ケリュグマ）は言及されていません。あるいは、今日私たちがそれと理解し、そこから作り上げたものも言及されていません。

119. Wunderli, 48

私は閉鎖的なブレザレンの集会の出身なので、私のDNAは、女性は参加せず、ましてや説教などしない、というふうに形づくられていました。いつだったか、私は訪問者として自由福音教会（FEG）の教会にいました。一人の女性が説教しました。それは当時の私にとっては正しくないことで、耐えがたいことでした。それでも私は耳を傾けました。自分の抵抗感にもかかわらず、認めざるをえませんでした。その説教は、私が自分の集会で聞いた多くの説教よりも深く、生き生きしていたのです。

もしかすると、「預言すること」あるいは「預言を語ること」、つまり神の側から語ることが、私たちが説教と理解しているものなのかもしれません。コリント人への手紙第一11章5節によれば、それは女性にも当てはまります。ですから、この説教の奉仕も、教会における女性の務めの範囲に属しているはずです。神は男性と女性を、教会における神の声として持ちたいと望んでおられます。女性の声がなければ、教会には、神が教会のために備えておられるものが欠けてしまいます。

しばらく前、著名な神学者N・T・ライト（N. T. Wright）が、女性の説教者についてどう考えるかを尋ねられました。「古代において女性は抑圧されていて、ごく最近になってフェミニズムが女性を再び上に引き上げた、という通常の考えは、まったく間違っています」とライトは論じます。この神学者は最近、Das Neue Testament in seiner Welt（『その世界における新約聖書』）という題の本を出版しましたが、教会と社会においてある程度の権威を持っていた女性たちは、古代において忌まわしいものではなかった、と言いました。「パウロの世界には多くの自立した女性がいました。そしてそれは、パウロが取り組んでいたことでした。」

ヨハネの福音書20章で、イエスが死者の中からよみがえらされたとき、最初に会った人はマグダラのマリアです。「彼はこう言うのではありません。マリア、とても大切な知らせがある。ペテロを連れて来てほしい。私は彼にそれを告げなければならない。そうすれば彼が行って、ほかのみんなに告げることができるから、と」とライトは説明します。そうではなく、「彼はこう言うのです。マリア、行って私の兄弟たちに――恐れて家に隠れている男たちに――告げなさい。私は私の父、あなたがたの父のもとに行く、と……」。十字架につけられたイエスが死者の中からよみがえらされ、今や世界の主であるという知らせは、「すべてのキリスト教の奉仕の土台」である、とライトは言います。イエスがこの知らせを、男性の弟子の一人ではなくマリアに託したことは、「復活そのものとほとんど同じくらい大きな革命」だというのです。

ライトが、女性が説教してよいかどうかという問いに答えるために拠り所とするもう一つの例は、ローマ人への手紙16章にあります。ライトは、ローマ人への手紙は「おそらくこれまでに書かれた中で最も重要な手紙」だと言います。パウロがこの最も重要な手紙をフィベに託したという事実は、当時の時代と文化の文脈を考えるなら、非常に意義深いことです。フィベは、コリント近郊のケンクレアの教会の女性執事でした。「古代世界では、手紙を届ける人が、それを読み上げる人なのです」。フィベは「おそらく自立した女性実業家」で、商用でローマに旅したのだ、とライトは説明します。さらに、人々が手紙について質問したとき、フィベがパウロの意図するところも説明した可能性が高いのです。実際、「パウロのローマ人への手紙の最初の版が、コリントの東の港から来たキリスト者の女性実業家によって届けられた可能性はきわめて高い」とライトは言いました。「パウロは簡単に男性をそのために選ぶこともできたでしょう」と彼は説明しました。そうではなく、彼は意図的にフィベを選んだのです。

7.6 総括

私は目覚めた良心をもって結びとします。聖書全体の所見を前にして、どうして私は家父長制的な女性像を主張することができたのでしょうか。そして、過去二世紀の世界宣教において神が女性たちを通して動かしてこられたことを前にして。すべてをささげ、説教し、教え、指導し、伝道してきた女性たちを前にして。女性をどのような奉仕からであれ遠ざけるとは、神のご性質をなんと軽んじることでしょうか。

確かな情報によれば、中国に現在ある10万をはるかに超える家の教会のうち、70%以上が女性によって指導されています。イエスを理解した人、パウロを理解した人は、それに驚きません。私はもう二度と、ギリシア哲学の女性蔑視も、ユダヤ主義的な女性差別も、ましてや教会による女性差別も、受け入れたり、自分の責任の範囲内で容認したりはしません。

世俗的に考え、行動しているのは、男性と女性を「平等に扱う人々」ではありません。女性に、黙るよう、教えたり指導したりしないよう、そしていかなる公的な奉仕もしないよう命じる人々こそが、そうなのです。 聖書の所見によれば、公的なものも公的でないものも含め、すべての職務、奉仕、役割は、女性にも男性にも区

別なく開かれています。私たち男性は、女性たちが一歩一歩これらの奉仕へと成長していくのを助けましょう。私たちもそうして助けてもらったのですから！

8 「キリストにあって一人」――ガラテヤ人への手紙3章28節

性の役割が問題になるとき、これほどしばしば引用され、たたえられる聖書のことばはほかにありません。それは「キリスト教（福音派）フェミニズムのマグナ・カルタ（Magna Carta）として歓呼をもって迎えられている」と言われます。[120] ここに、その箇所全体を掲げます。ほかのすべての箇所と同じように、この箇所も前後関係の中で、つまり文脈の中で説明しなければなりません。

> [ガラテヤ人への手紙 3:23-29、ドイツ語エルバーフェルト訳聖書から翻訳] しかし、信仰が来る前、私たちは律法の下に監視され、やがて啓示されることになっていた信仰に向けて閉じ込められていました。こうして律法は、キリストに向けての私たちの養育係となりました。私たちが信仰によって義と認められるためです。しかし信仰が来た以上、私たちはもはや養育係の下にはいません。あなたがたはみな、キリスト・イエスに対する信仰によって神の息子たちだからです。キリストにつくバプテスマを受けたあなたがたはみな、キリストを着たのです。そこにはユダヤ人もギリシア人もなく、奴隷も自由人もなく、男と女もありません。あなたがたはみな、キリスト・イエスにあって一人（einer）だからです。 あなたがたがキリストのものであるなら、あなたがたはアブラハムの子孫であり、約束による相続人なのです。

ガラテヤにおける背景と問題は何だったのでしょうか。 手短にまとめると、次のとおりです。ガラテヤの人々は、パウロが宣べ伝えた福音を喜んで受け入れました。彼らはキリストにつくバプテスマを受け、聖霊のうちに神の臨在を力強く経験していました。そこへユダヤ人の教師たち、ユダヤ主義者（Judaisten）――パウロ自身もかつてはその一人でした――がやって来て、福音に付け加えを持ち込もうとしました。キリストを信じた諸国の民は、みな割礼を受けるべきだというのです。彼らがキリストを信じるユダヤ人になるためです。彼らがそのようにしてアブラハムの息子たちになるためです（アブラハムも割礼を受けており、それを神からの契約のしるしとして受けていました）。割礼によって契約に入り、相続人になるためです。パウロがこれほど激しいことばでこのユダヤ主義者たちとその要求に反対している手紙は、ほかにありません。彼らは福音を曲げていたからです。福音が求めていたのは律法の行いではなく、信仰でした。

120. Strauch, 122

8.1 テキストは何を語っているか

さて、引用した段落は――28節の一節だけではなく――このユダヤ主義者たちへの反論の頂点です。神の心が感じ取れる、まことの神のことばです。神の測り知れない顧みと、キリストにある抑えがたい救いのみこころが感じ取れるのです。信仰による義認は、この手紙の中心的なメッセージに属しています。別のことばで言えば、まるで一度も罪を犯したことがなかったかのように、無罪を宣告されたのです！

律法は限られた期間だけの養育係でした。キリストを求め、キリストを受け入れるように助けるためのものだったのです。信仰によって、すべての人が神の息子たちとなりました！　すべての人です。男性も、そして女性もです。当時の文化では、女性たちは公の役割を果たしていませんでした。彼女たちは表に出ず、相続人ではなく、結婚するまでは父親か長男の後見の下にありました。そして結婚すると夫の所有物になりました。パウロはここで、女性たちを息子の身分（Sohnschaft）へと引き上げているのです！ 問題は男性か女性かではなく、優遇された立場、息子の身分という高い特権です。この立場の手本は、時代に縛られた文化的・社会的な家族関係から導き出されるだけではありません。この息子の身分は、神の御子ご自身の身分を手本としています。すべての人が受け入れられ、息子たちの立場に引き上げられているのです。今日の言葉づかいにおいてだけ、私たちは正当に「娘たちの立場に」とも言うことができます。

それに対して、当時の文化的文脈にいたキリスト者の女性たちにとって、神の娘たちと呼ばれることは何の得にもならなかったでしょう。 「娘たち」としては、彼女たちは当時、教会の中で自分の「兄弟たち」の下に置かれていたことでしょう。しかしパウロは、信じる者すべてを神の息子たちであると宣言することで、女性たちに男性たちと同じ身分を与えているのです。それゆえ彼は首尾一貫して、「あなたがたはみな一人である」と締めくくります（ドイツ語では男性形の einer であって、中性形の eins、すなわち「一つ」ではありません！）。「キリストにあって」は、まさにすべての人が神の息子たちであり、信じる女性たちもそうだからです。当時の状況の下では、女性たちのこの「救いによる性の転換」は女性蔑視ではなく、何か新しいことの始まりなのです。 女性たちも「神の息子たち」であるな

ら、それは教会における彼女たちの役割にとって何らかの結果をもたらすのでしょうか。

神の息子たちと娘たちはみな、水のバプテスマによってキリストを着ました。彼らに、すなわち28節に挙げられている一人ひとりに、今やキリストが見えるのです。区別なしにです。これは例外なく、人種や社会的身分や性別にかかわりなく当てはまります。パウロはさらにほかの、人を隔てる例を挙げることもできたでしょう。どんな理由であれ、まして本人にはどうすることもできない理由によって、だれ一人神の救いのみわざから締め出されてはいないことを明らかにするためです。この大いなる救いは、アブラハムの子孫であるキリストを通して、すべての人をアブラハムの子孫とし、それゆえ相続人とします。霊的な仕方で、新しい創造の中へと生まれたのです。そのことが、血縁と割礼を意味のないものにします。

キリストにあって、すべての人は平等です。等しく息子の身分へと引き上げられ、等しく相続人とされているのです。天から直接届いた、途方もない、すべてをくつがえす、かつて一度も聞かれたことのないメッセージです。契約に入るための割礼さえも、なくなります。割礼という男性の特権は十字架で終わり、永遠に過去のものとなりました。 女性たちは、契約に属していることが自分たちにとってどのように表され、確かなものとされるのかという問いに、もはや心を悩ませる必要はありません。今やバプテスマが、すべての人にとっての新しい救いのしるしなのです。

8.2 テキストが直接には語っていないこと

このパウロのことばは、第一義的には男性と女性の役割理解についてのものではありません（ここで言われているのは「男性と女性」〔männlich und weiblich〕であり、創世記1:27にならった言い方です）。このテキストは、この三つの組み合わせの違いを終わらせるものではありません。それらの違いはこの世に存在し続けます。国籍は残りますし、奴隷はキリストを信じても自由にはなりません。また、両性が中性化されるわけでもありません。男は男のままであり、女は女のままです。一つになり、平等になるということは、キリストにある救いにかかわることです。父との関係と、キリストのからだにおける位置にかかわることです。目に見える被造物や社会の枠組みにかかわることではありません。あるいは創造の秩序にかかわることでもありません。このことは、補完主義、すなわち女性の階層的な服従を支

持する人々によって、とくに、そして絶えず強調されています。ストラウク（Strauch）とジョンソン・ジュニア（Johnson jun.）から「福音派フェミニスト」[121]と呼ばれるであろう私も、このパウロのことばを、同等の地位を擁護する私の論証の主要な論拠とはしていません。この箇所では、それはパウロのテーマではないのです。

8.3 それでもテキストが間接的に語っていること

しかし、それでもこのことばによって、両性に具体的にかかわることが語られています。それは、創世記1章から始まったのと同じ論拠と論証の連なりの中にあります。28節は、すべての人が等しく救いにあずかっているという、比較のための列挙以上のものです。それは、罪の赦しだけを含む救いではなく、堕落した被造物と人類の破滅から、破産と崩壊から、今すでに救い出す救いなのです。三つの組み合わせのすべてにおいて、暗に緊張が、人を隔てる何かがほのめかされています。そうでなければ、パウロはそれらを持ち出さなかったでしょう。パウロの時代と当時の文化と生活様式を背景にして、創造者の目から見てあるべき姿になっていないことが取り上げられているのです。この組み合わせの緊張の中に、その不平等の中に、今や神の恵みが、神の良い御霊によって、いやし、和解させ、回復させる力として働くのです。

当時はこの側面が前面に出ていなかったとしても、今日、そして二千年にわたる教会史と文化史を振り返るとき、それは確かに前面に出てきます。神のことばは時代を超えており、どの世代においても、どの世紀においても、新しいものを生み出すことができるのです。

121. おそらくアメリカでは、この言葉はドイツほど否定的な響きを持っていないのでしょう。私は、女性の服従を主張する人を「キリスト教マスキュリニスト」と呼ぼうとは思いません。フェミニズムは大きな複合体であり、ありとあらゆる極端を含む多層的な運動を表しています。良いことも、あまり良くないことも、そしてほかのどの運動とも同じように悪いこともしてきた運動です。私はこの運動の中に支配の逆転を見ています。それは、一つの極端と誤りから、もう一方の極端と誤りへと逆転することを意味します。私はフェミニズムを擁護しているのではなく、男性と女性についての聖書の全体像を擁護しているのです。この運動に影響されているとか、間接的にそれを支持しているとか、絶えず決めつけられることは、益になりません。

8.3.1 ユダヤ人とギリシア人

この区別は、偶像に仕える諸国の民と、唯一のまことの神の民イスラエルとの隔たりを示しています。それは、小さく、当時は取るに足りなかった一つの民に対する神の恵みを示しています。神はこの民を際立たせました。彼らだけが、すべての民の中から選ばれた神ご自身の民なのです。しかし、それは過ぎ去りました。この隔たりは過去のものです。救いはすべての人に向けられています。すべての人が神の息子たちになるのです。

パウロが意図的にこの区別から始めているのは、ユダヤ主義者たちが、信じた諸国の民に割礼を受けるよう迫り、そうすることでユダヤ人となってアブラハムの契約に入らせようとしていたからです。

諸国の民もユダヤ人と同じように、新しく永遠の神の世界に至るまで、自分の国籍を保ち続けるでしょう。だれも自分の国籍を振り払うことはできません。しかし、キリストにある救いによって、互いに異なり、しばしば敵対し合う民族であることから生じる否定的で罪深い、破壊的な付随現象はすべて取り除かれます。教会と神の国においては、そのことが生きられるべきです。キリストが私たちを受け入れてくださったように、すべての人が互いに受け入れ合うべきなのです。

8.3.2 奴隷と自由人

商品のように主人の所有物であった奴隷たちにとって、これはなんと理解を超えたメッセージだったことでしょう。キリストにあって、彼らは今や兄弟であり、神の御前で同じ価値と同じ尊厳を持っているのです。しかし奴隷制は、堕落した人類の表れです。それは決して神のみこころではありませんでした。それは、神のかたちであることに基づく人間の尊厳にふさわしくないからです。人は決して、強制と暴力の下で、ほかの人の所有物となるべきではありません。

パウロの小さなピレモンへの手紙が新約聖書の正典に含まれているのは、もしかするとそのためかもしれません。ここでは一人の奴隷オネシモ（Onesimus）が、しかも逃亡奴隷が、パウロによって兄弟であり同労者として重んじられているのです。しかしパウロは、この奴隷が帰って来たとき、彼をどう扱うかを、信仰者であるその所有者ピレモン（Philemon）に委ねています。手短に言えば、パウロは奴

隷制と直接には戦っていません。この戦いは、当時なら始まる前に負けていたでしょう。しかし間接的には、奴隷制に対する戦いは始まっていたのです。キリストの教え、すなわち福音によって、奴隷は今や完全な価値を持つ人間であり、そのような者として尊重されるべき存在です。福音は、あらゆる奴隷制に対するとどめの一撃です。福音こそが、奴隷制が廃止された理由なのです。残念ながら、あまりにも遅すぎましたが。

ここでも、福音が自由をもたらすことを見過ごすことはできません。（霊的な奴隷状態からだけではなく）文字どおりの奴隷状態からもです。新しい創造においては、もはや奴隷はいないでしょう。福音の実である教会と神の国において、この新しい創造はすでに始まっています。内面と外面に対する福音の働きは、互いに作用し合っています。それらは絶対に切り離せないものなのです。

教会においては、奴隷と奴隷の所有者は平等です。階層の違いは堕落した世界の一部です。同じことが男性と女性の階層の違いについても言えます。それは教会においては、新しい創造においては、もはや通用しないのです。

8.3.3 奴隷制についての情報

奴隷制廃止運動（アボリショニズム、英語の abolition、ラテン語の abolitio「廃止」「撤廃」に由来）とは、奴隷制の廃止を目指す運動を指します。キリスト教的な確信からも啓蒙主義的な確信からも養分を得て、奴隷制の廃止はますます多くの西洋の国々で実現していきました。1761年のポルトガルに始まり、1888年のブラジルに至るまでです。1808年以降、イギリスは奴隷制との戦いにおいて先駆的な役割を果たしました。ウィリアム・ウィルバーフォース（William Wilberforce、1759-1833）は、奴隷制と奴隷貿易との戦いにおけるイギリスの国会議員であり指導者でした。イギリスで重要だったのは、18世紀と19世紀の敬虔主義と福音主義の宣教の中で、人間を神の子どもとして理解することは奴隷制と両立しない、という見方が広まったことです。アメリカ合衆国の南部諸州では、奴隷たちは引き続き農場や大農園で搾取されていました。北部諸州が国全体での奴隷制の廃止を求めたため、1861年に国内で戦争（南北戦争）が起こりました。最終的に北部諸州が勝利し、こうして1865年12月の憲法修正第13条によって、合衆国全体で奴隷制が廃止されました。

奴隷制を大規模に商業化したのは、ヨーロッパ人、キリスト教のヨーロッパでした。イエスの教えを考えると、キリスト教のヨーロッパでのこのことは衝撃的です。奴隷制を廃止するのにこれほど長い時間がかかり、これほど困難な道のりであったことも同様です。今日でもなお人身売買は存在しています。とりわけ子どもたちと女性たちがその犠牲者です。福音を知り、愛している人は、できるところでそれに立ち向かうべきです。

8.3.4 男と女

さて、三つの例の最後のもの、このテーマにとって最も重要なものに移りましょう。ここでも、先の例と同じことが当てはまります。堕落は、男性と女性の関係の均衡を崩しました。男性は自分を強い者、支配者にしてしまいました。世界中で、アダムに始まって今日に至るまで、男性は不当に女性に対する権威を奪い取り、それを差別的に行使してきました。

福音は、どのようにしてこの関係にいやしをもたらすのでしょうか。新しい心によって、犠牲をいとわない、自分を捨てた愛によってです。聖霊の力による、互いに従うこと、誠実さ、尊敬によってです。男性たちが、自分の妻は向かい合う存在であり、妻なしには自分の人生は神が望まれるようにはうまくいかないと気づくときです。服従を盾に取るのではなく、自分を捨てた愛によって妻のために立ち、戦い、妻を守り、自分の人生を妻と分かち合う男性たちによってです。そして、そのような男性たちに喜んで従い、ついて行く女性たちによってです。そして、その逆もまた同じです。福音は、夫婦の関係を完全に解き放つことができます。それによって男性と女性は、身体的にも、心理的にも、霊的にも、互いに補い合うのです。

このパウロのことばを、魂の救いだけに、また神の家族の一致だけに関係づけるのではなく、さらに先まで考えることが絶対に重要です。壊れて崩れかけた結婚が、二人が福音を信じるとき、なぜ立ち直るのでしょうか。神が「きよい心」だけでなく、「新しい心」も造られるからです。男性と女性についての古い、この世的な、家父長制的な世界観が、奴隷制やユダヤ人の特別な地位と同じように、十字架においてその終わりを迎えるからです。

当時もパウロは、この堕落した家父長制的な役割理解と直接には戦いませんでした。しかし間接的には戦ったのであり、それは長い目で見れば効果的でした。男性

と女性についてのこの像が、キリスト教界においてさえ根強く残ってきたことは恥ずべきことであり、ただ恥じ入るほかありません。

8.3.5 地上的なことと霊的なこと？

カール＝ハインツ・ヴェーバー（Karl-Heinz Weber）は、「創造の秩序」は新しい創造において初めて終わる、と考えています。キリストのうちにあることは、地上における信仰者の地上的な立場と同一視されるべきではない、というのです。それはあらゆる働きの領域に当てはまり、創造の秩序に従って姉妹たちが黙っている集会にも当てはまる、と言います。[122]

まず、なぜ新しい創造において「創造の秩序」が終わるとされるのか、という問いが生じます。まさに新しい創造こそ、祝福に満ちた、乱されることのない、完全な創造の秩序を持つことになるでしょう。すなわち、堕落の前の秩序です。創造の秩序と、キリストにある救いの秩序が互いに矛盾することはありえません。救いの秩序は、もともとの創造の秩序を回復するのです。 そこでは、男性と女性は同等の地位にあります。福音は、人をいやし、社会にも働きかける結果をもたらします。確かに、まず教会において、つまりまず信じる人々の間においてです。それは広範囲に及ぶ、積極的な、すべてをくつがえす変化です。それは救いをもたらす力であり、何千年も続いてきた罪深い構造を解体し、文化全体や国全体を変え、救うことができるのです。

地上の存在と福音を切り離すことは、聖書的ではない二元論です。それは社会的福音ではありません。しかしそれは、神との関係において止めることのできない垂直の方向を持った、力あるメッセージです。しかし同時に、人と人との間に水平の働きも持っています。福音は救いにかかわり、文化にもかかわっているのです。確かに「すでに」と「まだ」の間には緊張があります。しかし「すでに」は、解き放たれ、人を解き放つことができなければなりません。それが、この世におけるその完全な働きを発揮できるようにするためです。

アンスティ（Anstey）も同じように論じています。「この二つのことを区別する二つの表現があります。『キリストにあって』（ガラテヤ3:28）と『集会において』（コリント第一14:34）です。」一方は天において、もう一方は地上において当てはまる、と言うのです。これに対しては、ただこう確認するほかありません。私たちは永遠に、どこにいても「キリストにあって」いるのであり、集会においてもそう

122. Weber, 11-13

です。それ以外のことはすべて、私たちの救いを疑わしいものにし、端的に聖書と矛盾することになるでしょう。

8.3.6 男も女もない

「使徒が、救いによる女性たちのこの男性化を本気で考えていることは、彼がジェンダーに中立的な教会論を一貫して支持していることに表れています。その教会論は、社会的身分、民族的・宗教的出自、性別にかかわりなく、すべての人が原則として教会のあらゆる務めを担うことを許す教会の実践へとつながっています。唯一の基準は能力であり、パウロはそれを聖霊による賜物として理解しています（コリント第一12章）。……興味深いことに、ジェンダーの範疇については、もはや男性も女性もいない、とは言われていません。むしろ『男性』と『女性』という呼び方が用いられています。このことから推測されるのは、……問題は個々人の性別の帰属を取り除くことではなく、教会の務めのジェンダー的側面を解消することであった、ということです。

その結果、実践においては次のようになります。預言することは男性的でも女性的でもありません。教会を指導することは男性的でも女性的でもありません。異言を語ることは男性的でも女性的でもありません。……キリストによって宣べ伝えるために遣わされることは、男性的でも女性的でもありません。説教することは男性的ではなく、仕えることは女性的ではない、などです。それゆえパウロの諸教会には、フィベ（ローマ16:1）のような女性の執事、ユニア（ローマ16:7）のような女性の使徒などがいるのです。

原始キリスト教のノン・ジェンダーの教会論が……限られたものではなかったことは、ローマの教会が示しています。パウロとは無関係に生まれたこの教会では、明らかに女性たちの合議体が際立った役割を果たしていました。パウロは、マリア（ローマ16:6）、ツルパイナ、ツルポサ、ペルシス（ローマ16:12）の名を挙げています。」[123]

マーティン（Martyn）は注解書の中でこう述べています。「あなたがたはみな、キリスト・イエスにあって一つだからです。宗教的、社会的、性的な対立は、平等によってではなく、新たに造られた一体性によって置き換えられます。キリストにあって（パウロがのちに『キリストのからだ』と呼ぶことになるものの中で。コリン

123. Kügler, Joachim; Paulus und die prophetischen Frauen in Korinth, Zur Gender-Politik des Apostels (1Kor 11,2-16; Gal 3,26-28)

ト第一12:13、27)、ユダヤ人であった人々と異邦人であった人々が、一つの新しい一体へと造られたのです。それはキリストご自身ときわめて根本的に同一視されているので、パウロは『一つ』という語の男性形を用いているほどです。教会の肢体は一つの事物ではありません。彼らは、一人の新しい人という体の中に受け入れられた一人の人格なのです。

ほかのパウロの手紙から、私たちは知っています。使徒は、神の新しい創造の橋頭堡である教会においてさえ、性的・社会的な排除のしるしがなおいくつか存在しているという事実を自覚していました（たとえばコリント第一7章、ピレモンへの手紙)。それゆえ彼はのちに、キリストにある真の一体性を肯定することと、古い創造の区別のしるしが憂慮すべき仕方で存続していることとの間の緊張について、真剣に考えなければなりませんでした。」[124]

8.4 要約とまとめ

マイケル・バード（Michael Bird）のことばで、この章をまとめます。「さて、パウロは、キリスト者にとって性別が存在しなくなる、と言おうとしているのではありません。あたかも神が人を首から上だけで見て、そのため男性と女性の身体的な区別を消し去っておられるかのように、ではないのです。新生とは、私たちがいつか性の区別のない状態を目指し、教会で同じ洗面所を使えるようになる、という意味ではありません。またパウロは、この教えが救いや霊的な事柄にだけ当てはまる、と言っているのでもありません。パウロがここで言おうとしているのは、新しい創造とは、過去に人々を互いに隔ててきた区別が取り除かれることを意味する、ということです。

ここでの彼の主要な対話の相手は、フェミニストたちや階層の支持者たちではなく、自分たちの民族的アイデンティティの特権を守ろうとしていたユダヤ人キリスト者たちでした。 パウロにとって、人種によっても、階級によっても、性別によっても、神の御座により近くなるわけではありません。神は一つの家族を造ろうとされたのであり、二つ以上の家族ではありません。そしてアブラハムの家族には、あらゆる国の、富む者も貧しい者も、男性も女性も、子どもたちがいるのです。このことは福音の平等の原則を際立たせます。それによれば、だれも自分が神との直接のつながりを持っていると誇ることはできず、またある人がほかのどの人よりもす

124. Martyn, J. L., Galatians: A New Translation with Introduction and Commentary, 33A, Anchor Yale Bible, New Haven; London 2008, 377.

ぐれているとか役に立つとか決めつけることもできないのです。ガラテヤ人への手紙3章27〜28節の主要な内容は救済論（救い）に集中していますが、それが教会論（教会）と聖霊論（聖霊）にも結びついていることを、私たちは考えなければなりません。ここで問題になっているのは神の前での平等だけではなく、教会の内部での一体性です。それは、バプテスマのきずなによって造られ、聖霊の賜物によって証印を押されたものなのです。」[125]

多くの側面と細部を比較検討した結果、この聖書のことばは、結婚と教会における信仰を持つ女性の同等の役割を支持する、強力な、神からの論拠です。この単純でありながら深い贖いの真理の光のもとで、男性と女性の関係について、結婚における女性の役割について、また教会における女性の役割について語っている他のすべてのテキストが解釈されなければなりません。初めの問いに戻るなら、そうです、このパウロのことばはマグナ・カルタに等しいのです。

125. Bird, 37

9 父なる神、子なる神、聖霊なる神

聖書の中で、神は男性の形で示されています。神は父です。神の御子イエス、世の救い主は男性です。イエスはご自分に従う者として12人の男性を選ばれました。女性は一人もいません。聖書のすべての書は男性によって書かれました。古い契約においては、男性だけが祭司でした。これらを合わせて考えると、男性が女性に対して上位の権威の立場と指導の務めを持っているということを、十分に雄弁に物語っているのではないでしょうか。 これほど多くの男性性が、私たちに何の跡も残さずに通り過ぎることはありません。いずれにしても、神が男性なのかどうかについての無意識の受け止め方は、私たちの考え方、自己像、神像に一定の影響を及ぼしています。おそらく男性の場合と女性の場合とでは違った形で、と私は推測しています。

「聖書と教会におけるこのような男性の人物、男性のイメージと言葉の強調は、ジョン・パイパー（John Piper）によって、キリスト教信仰の『男性的な感覚』と表現されました。ある意味で、これを否定するのは難しいことです。しかし、それが神の望まれた秩序の反映なのか、それとも、一見明らかなこのメッセージの中に別のメッセージが織り込まれているのか、という問いが生じます。聖書における男性中心的[126]で家父長制的な物語の強調は、教会、家庭、社会における家父長制的な構造の明確な是認なのでしょうか。それとも、聖書はこうした家父長制的な構造を打ち破り、男性と女性に関係のもう一つのあり方を差し出している、という結論へと私たちを導く別の手がかりが、テキストの中にあるのでしょうか。」[127]

神はイエスのうちにご自身を啓示されます。イエスは神のかたちです。イエスは神の本質の刻印です。イエスは、その生涯と十字架の死において、神の最後の、完全な、最も深い啓示です。しかしイエスが来られる前にも、私たちはすでに神について多くのことを知ることができました。聖書はすでに、神がどなたであり、どのような方であるかを啓示しています。イエスはこの像を完成へと至らせるのです。

126. 男性中心主義（Androzentrismus）とは、男性を中心、尺度、規範と見なす見方のことです。男性中心主義は、男性あるいは「男性的なもの」への社会的な固着として理解することができます。Wikipedia
127. Peppiatt, Rediscovering Scripture's Vision for Women: Fresh Perspectives on Disputed Texts

神が一世紀に、一人の男性のうちに、一人のユダヤ人、独身の建築職人のうちにご自身を啓示されるとき、私は同時に、永遠なる方、まったく異なる方である神は、イエスのうちに見ることができた以上の方であることを意識しています。神の御子であるイエスご自身でさえ、私たちは完全には理解することができません。私たちの知識は部分的なものです。マクファーランド（McFarland）はこう結論づけています。「それゆえ私たちは、肉において来られたロゴス〔ことば〕が肉に還元されないような仕方でイエスを描くよう、注意しなければなりません。」

神は霊です（ヨハネ4:24）。神は三位一体の神です。神のこの二つの本質が、背後に退いてしまってはなりません。 たとえ旧約聖書の中で神が男性的な仕方で、父、戦士、王として描かれているとしてもです。神は時に人間のように感じ、行動されることもあります。いわゆる「神の擬人的[128]なイメージ」は、神の行動と感情を、人間的な比較やたとえによって示しています。こうしたイメージは、神の現実にどれほど近づいているのでしょうか。三つにして一つであり、霊であり、始まりのない神は、私たちには理解を超えた方です。神が私たちのところに来て、私たちの一人に、一人の男性になられたとしても、それは神が男性であるということではなく、そのようにご自身を啓示されたということです。神は私たちのような体を持っておられません。それゆえ、性別も持っておられないのです。

9.1 神は男性なのか

神はご自身を父として啓示されます。それは神の性別を啓示しているのでしょうか。いいえ。しかし、それははるかに重要なことを啓示しています。神は人格であり、関係と愛情と交わりの神だということです。人間的なイメージで私たちに描かれているこの神は、語り、聞き、警告し、守り、力づけ、行動し、契約を結び、約束をなさいます。そして何よりも、犠牲をいとわない、消えることのない愛をもって愛しておられます。神は不変ですが、深い感情を持っておられます。測り知れない方ではあっても、少なくとも、私たちには分からない程度において、私たちが人間として、女性として、男性として持っているすべての能力を持っておられます。人間的なイメージは、言い表しようのない方を言い表そうとするものです。その多くは男性的な言葉で語られています。しかし、神の女性的な面を際立たせ、たたえ

128. 擬人化（Anthropomorphismus。ギリシア語 ἄ ν θ ρ ω π ο ς anthrōpos「人間」と μ ο ρ φ ή morphē「形、姿」から）とは、動物、神々、自然の力などに人間の性質を帰することを意味します（人間化）。その人間の性質は、姿にも行動にも現れることがあります。Wikipedia

る女性的な神のイメージも数えきれないほどあります。そのいくつかを挙げますが、その際、神は女性でもないということを忘れないようにします。もう一度言います。神には性別がありません。神についての女性的なイメージは、エデンで肉となったものを示しています。男性と女性は神のかたちであり、その存在と性において、性別を持たない神のあり方を映し出しているのです。

男性形の文法で神を描くことは、言語の限界でもありますが、それだけではありません。ドイツ語でも、ほかの多くの言語でも、神を男性形でも女性形でも描かないとしたら、残るのは中性の代名詞「es」（それ）だけでしょう。それは非人格的であり、目的にかないません。同じことが聖書の原語にも当てはまります。たとえば、霊を表すギリシア語 pneuma は中性です。しかしヘブル語の ruach は女性形です。ドイツ語では表現できませんが、神の霊について語るとき、「彼女」（sie）や「彼女に」（ihr）と言うこともできるでしょう（「Geistin」、つまり女性形の「霊」）。しかし、それもまた神の位格に性別を割り当てることはできません。そうすれば私たちは気づき、おそらく戸惑うでしょう。私たちは男性形の人称代名詞にただ慣れていて、ほかのものを知らないからです。神の性別についての問いは、まさに言語によっては解決できないのです。聖書の言語によっても、現代の言語によってもです。

旧約聖書にも新約聖書にも、神の性別についての具体的な手がかりはありません。このことを強調しなければならないのは、古代オリエントと古代世界の神々は意識的に男性と女性に分けられていたからです。生命の循環は性によって保たれていました。豊穣は女神たちの理想でした。性は、祭儀がその周りを回る中心点でした。しかし、イスラエルの神ヤハウェ（Jahwe）の場合はそうではありません。ヤハウェは男性とも女性とも呼ばれていません。ユダヤ教の信仰においても、キリスト教の信仰と同じように、性は永遠の宇宙的なリズムに属するものではありません。性は造られたものです。それには始まりがあり、やがて終わりを迎えるのです。

「それにもかかわらず、神は聖書の中でご自身を『私たちの主イエス・キリストの父である神』（エペソ1:3）として啓示しておられ、『母』としてではありません。また神は、あたかも『男性性』と『女性性』を体現しているかのように、父と母の複合体としてご自身を示しておられるわけでもありません。『男性性』と『女性性』という概念は、両性の性的な違いと切り離すことができないほど結びついています。性とその両性が永遠の霊的原理であるのは、異教の宇宙論においてだけなのです。」[129]

129. R.K. McGregor Wright

神に性別がないのに、それでも父として描かれているのなら、イメージや言葉を単純に変えて「母」を入れることはできません。それは、一つの誤り――つまり神を男性的な存在として理解すること――を別の誤りに置き換えることを意味するでしょう。それが、「性に中立的」に翻訳しているBibel in gerechter Sprache〔『公正な言葉による聖書』、ドイツ語聖書翻訳〕で起こっていることです。[130]

神は女性的なイメージよりも男性的なイメージで描かれることのほうがはるかに多いのですが、そこから性別について結論を引き出すことはできません。全体として男性的なイメージが多く、男性的な言葉が用いられていることは、聖書の文書が成立したのが家父長制の時代であったことと関係しているのかもしれません。聖書もまた、今日に対するその意義と権威を否定することなく、歴史的に読まれなければなりません。

9.2 あなたは自分のために像を造ってはならない

十戒（出エジプト20:4）にあるこの戒めは、神がイエスのうちにご自身を啓示される前から、神の性別についての問いにかかわっています。像の禁止は、神が霊であるという事実と同じように、神に性別があることを排除します。この二つは直接に結びついています。神の有名な自己宣言「わたしは、わたしがなろうとする者になる」（出エジプト3:14）からも、男性であれ女性であれ、性別を導き出すことはできません。後者〔女性の性別を導き出すこと〕は、フェミニスト神学のいくつかの潮流が意図していることです。

「聖書では、神はしばしばエロヒム（Elohim）と呼ばれています。これは絶対複数（Pluraletantum）[131] です。すなわち、まさに男性的でも女性的でもない、神の数多くの属性にふさわしくあろうとする文法的な表現法なのです。 なぜなら、いつの時代にも、どこにおいても、苦難や悲しみの、しかしまた喜びや感謝の無限

130. ヴォルフガング・フーバー（Wolfgang Huber）はこう批判しました。「翻訳には常に解釈も含まれるということが、ここでは逆転されています。解釈が翻訳として出されているのです。これは宗教改革の聖書原理に反しています。正義は聖書の中心的なテーマです。しかし、正義という観点のもとで、たとえば明らかに十二人の男性が意味されている箇所で『女性使徒たちと使徒たち』と書き、読者にあたかもその集まりに女性もいたかのような印象を与えるほど、聖書のテキストをねじ曲げることはできません。」ペーター・ハーネ（Peter Hahne）：「ルター派のジャーナリストとして、自分の復活信仰のためではなく、原理主義的なフェミニズムの精神から生まれた分派的な特製聖書のために、懐疑的な同僚たちから笑われるのは、心が痛みます。」
Wikipedia、Bibel in gerechter Sprache の項
131. 絶対複数（Pluraletantum）、または複数数語とは、もっぱら複数形でのみ用いられる名詞のことです（例：Ferien〔休暇〕、Kosten〔費用〕、Leute〔人々〕）。

に
異なる状況の中で、私たちの心にはさまざまな神のイメージが浮かぶからです。」[132]

9.3 女性的な神のイメージ

ここでは、聖書が神の女性的な面をどのように描いているかの例を挙げます。

子に乳を飲ませ、その世話に責任を持つ母（民数11:12）：「私がこの民全体を身ごもったのでしょうか。それとも私がこの民を産んだのでしょうか。あなたが私に『養い役が乳飲み子を抱くように、彼らをふところに抱いて、あなたが彼らの先祖に誓われた地へ連れて行け』と言われるとは。」

イスラエル人を産んだ母（申命32:18）：「あなたは、あなたを生んだ岩をおろそかにし、あなたを産んだ神を忘れた。」

陣痛の中にある女性。その力強い息づかいは神の力のイメージです（イザヤ42:14）。「わたしは長い間黙っていた。静かにして、自分を抑えてきた。今、子を産む女のように、深く息をつき、あえぎ、息をはずませよう。」

イスラエルを産み、守る母（イザヤ46:3）：「わたしに聞け、ヤコブの家よ、イスラエルの家のすべての残りの者よ。母の胎を出たときから担われ、母の胎内にいたときから運ばれてきた者たちよ。」

乳を飲ませている子を忘れない母（イザヤ49:14-15）：「女が自分の乳飲み子を忘れ、自分の胎の子をあわれまないことがあろうか。たとえ女たちが忘れても、わたしはあなたを忘れない。」

子どもたちを慰める母（イザヤ66:13）：「あなたがたは腕に抱かれて運ばれ、膝の上でかわいがられる。母に慰められる者のように、わたしはあなたがたを慰める。」

子らを呼び、教え、抱き、いやし、養う母（ホセア11:1-4）。

ほかの母のイメージは、詩篇131篇2節、ヨブ記38章8節と29節、箴言8章22〜25節、ペテロの手紙第一2章2〜3節、使徒の働き17章28節にあります。

132. Lapide, Pinchas, Ist die Bibel richtig übersetzt, Gütersloh, 2004, 202

同じように聖書には、女性の文化的・社会的な活動になぞらえて神が描かれている箇所もあります。

イスラエルのために衣服を作る縫い子（ネヘミヤ9:21）。

出産に立ち会う助産婦（詩篇22:9-10、71:6、イザヤ66:9）。

仕える女が見上げる、権威を持った女主人（詩篇123:2）。パン種を練り込んでパンにする女性（ルカ13:20-21）。

聖書はまた、雌の鳥や動物のイメージを用いて神について語っています。神は、ひなを守る母鳥のように（詩篇17:8、36:7、57:1、91:1、4、イザヤ31:5、申命32:11-12）、鷲のように（申命32:11-12、出エジプト19:4、ヨブ39:27-30）、めんどりのように（マタイ23:37、ルカ13:34、ルツ2:12参照）、そして子を持つ母熊のように（ホセア13:8）行動されます。

神の本質に関連して女性的なものを示す最も魅力的な手がかりの一つは、箴言1章20〜33節、8章1節〜9章12節で、知恵が女性として描かれていることです。

9.4 父と子

イエスが来られる前には、神が「三つにして一つ」であることを知ることはできませんでした。また、イエスによって知られるようになった意味で、神が御子の父であることも知ることはできませんでした。ことばが肉となったときに初めて、神は御子のうちに父としてご自身を啓示されたのです。しかし神は、女性とともに御子をもうけた父ではありません。父、子、御霊はみな永遠であり、始まりがありません。この言葉は、神格の第一の位格と第二の位格が互いにどのような関係にあるかを示しています。それは、人間が神とどのような関係にあることを許されているかを示しています。しかしこの現実もまた、永遠の父と永遠の子を男性の性にするものではありません。

このような問いがこのような形で考えられることは、めったにないか、まったくないことを私は承知しています。この本の枠組みの中で、このテーマを取り上げることが必要だと私は考えています。もっとも、すぐに限界に突き当たることを自覚したうえでのことですが。

9.5 永遠の御子の服従？

この本で私は、女性の階層的な服従は常に堕落の結果であり、もともとの、堕落していない創造においては意図されていなかったと論じています。神のことばが女性たちに服従を求めている場合にも、そのことは当てはまります。ただし、それは古代の状況の文脈の中で理解されなければなりません。そのことは詳しく述べてきました。

ここ数十年の間に、アメリカの保守的な福音派の中で、一つの教えが生まれました。もしそれが聖書のテキストに合致しているなら、私の上の論証を論駁しうる教えです。それは三位一体の神にかかわり、父と子と聖霊が互いにどのように関係しているかにかかわるものです。この教えを手短に言えば、神格の三つの位格は本質と栄光において等しい、ということです。その存在（存在論）において、彼らは等しいのです。しかし、互いの関係において、また被造物との関係において、それぞれ異なる役割を担っている、というのです。そのため、御子は「初めから」父に従い、御霊は父と子に従っている、とされます。キリストの受肉において、その自発的なへりくだりにおいて、すでに永遠において存在していた関係が表されている、というのです。

この本のテーマとそれにどんな関係があるのか、と思われるでしょうか。大いに関係があります。というのは、この「永遠の階層」が、男性と女性の役割の手本となるべきだとされているからです。 したがって、それによれば、堕落していない創造においてすでに明確な価値の同等性が見て取れ、それと同じように役割の違いも見て取れる、ということになります。そこでは男性が指導し統治するかしらであり、女性はそれに従うのです。男性と女性は創造の時からそのように造られており、結婚、教会、社会にとっての周知の結果を伴う、とされるのです。

ドイツ語圏のキリスト教の思想や文献の中で、私はこの考えを知りませんでした。しかし、ウェイン・グルーデム（Wayne Grudem）の改革派の浩瀚な教義学によって、この考えはそのすべての帰結とともに、2013年以来ドイツにも到来しました。「ここで結婚においては、三位一体において父が子に対して権威を持っているのと同じように、夫も妻に対して権威を持っています。夫の役割は父なる神の役割と並行しており、妻の役割は子なる神の役割と並行しています。さらに、父と子が神性と重要性と人格において等しいのと同じように、夫と妻もその人間性と重要性

と人格において等しいのです。」[133]

こうしてこの教義学では、いわば「永遠の重み」をもって、つまり神格を引き合いに出して、すべての女性が長老職や説教の務めのような指導的な奉仕から締め出されています。ドイツの比較的新しい改革派の潮流は、この教えのために積極的に、ほとんど宣教的に尽力しています。

この締め出しは、初めからではないにしても、少なくとも1700年の間、残念ながら教会史を形づくってきましたが、この論拠が持ち出されたことは一度もありませんでした。

この比較的新しい教えを、この枠組みの中で論じることはできません。私はいくつかの考えるきっかけを示すだけにとどめ、私の全体的な考察をこの教えの上に据えることはしません。それによって私は、創世記1章と2章という私の出発点にとどまります。その光のもとで、私はこの本の中で新約聖書の関連する聖書テキストを説明してきました。

もし御子のこの永遠の服従が、受肉以後に初めてではなく、存在していたとしても、それによって男性と女性の役割が自動的に決まるわけではありません。それは類比、比較ではあっても、必然ではないでしょう。御子が人として父に服されたことは、だれも疑わないでしょう。しかし、このテーマにとって重要なのは、御子の永遠の服従であれ一時的な服従であれ、男性と女性の関係と役割を、一般的にも結婚においても描くための手本として用いられたことは一度もない、ということです。イエスのへりくだりの模範はもちろんしばしば強調されますが、それは常にすべての弟子たちのためであり、性別をまったく強調していないのです。

キリスト教界において、神についての信仰告白や教えが成立するまでには数世紀かかりました。たいていは誤った教えへの反動としてでした。三位一体の教えを際立った仕方で形づくり、定式化し、擁護したのはアタナシオス（Athanasius、4世紀）でした。今日に至るまで、それは異論のないキリスト教の教義です。

男性と女性の役割をめぐる議論の中で、このような教えが定式化され、それによって女性の従属的な役割が固定されることを、私は不思議に思います。ここでは「しっぽが犬を振っている」のではないか、という疑いが私の中から消えません。言い換えれば、この性の役割の問題のために、どれほど重大な神論が引っ張り出されな

133. GRUDEM, W., Biblische Dogmatik: Eine Einführung in die Systematische Theologie, XXIX, Theologisches Lehr- und Studienmaterial des Martin Bucer Seminars, VKW; arche-medien, Bonn; Hamburg 2013, 284–285.

ければならないのでしょうか。確認しておくべきことは、このことはすべて人間が創造された時点では知られておらず、御子が来られて初めて知ることができた、ということです。「神のかたち」は、エデンにおいてはまだこの知識を含むことができなかったのです。

神格についてこれほど途方もなく踏み込んだ主張をあえて行うこのような確定を、私は憂慮すべきものと考えます。そのような結論を支持する手がかりがあるとしても、この仮定のための明確な証拠が私には見当たりません。反対の立場を支持する手がかりもあるのです。

第4版での追記：この教えは、多方面からの大規模な異議を受けて、その後撤回されました。



9.6 イエスと12人の弟子

イエスは、預言の中で、メシアとして、王として、人の子として見分けることのできる方でした。男性としてです。これらのことばは、ナザレ出身のこの男性において成就しました。パウロは、家父長制的な家族の場合のように、イエスを新しい創造のかしらとしてアダムと比較しています。

アレクサンダー・ストラウク（Alexander Strauch）は、イエスは男性でなければならなかったと強調しています。そのことには同意できるかもしれませんが、彼がしているように、そこから男性の性の優位を導き出すのは、まったく誤解を招くものです。[134] イエスは何よりもまず人間になられたのです――ことばは肉となったのであり、男性になったのではありません！ 彼の論述も、この考え方を代表するすべての人々も、ギリシア哲学が今日に至るまで神の教会に浸透することにいかに成功してきたかを示す一例です。しかも敬虔の衣をまとってです。

男性の人物たちは、神の救いの歴史において象徴的・予型的な機能や役割を果たしています。そこで問題になっているのは男性の性を際立たせることではありません。たとえそのような印象を繰り返し受けるとしてもです。私はイエスの働きを、救済史的な機能と救いの機能とに区別したいと思います。前者は、イエスが男性であることを前提としていました。救いを成し遂げるためには、性別は意味を持ちませんでした。言い換えれば、あえて極端に言うなら、女性であっても十字架の上で救いを成し遂げることができたでしょう。

イエスは12人の弟子を選ばれましたが、みな男性でした。当時の男性支配の文化においては、それが普通でした。しかし、イスラエルの12部族の代表としては、彼らは男性でなければなりませんでした。「イエスが男性の使徒を選ばれたのは、十二人のユダヤ人の使徒を選ばれたのと同じ理由からです。 イエスに従う者たちが新しいイスラエルを代表するのと同じように、イエスの十二使徒は予型的にイスラエルの十二部族を、とりわけイスラエル民族の祖である十二人の族長（ヤコブの息子たち）を代表しています。ウィット（Witt）は、十二人の男性の使徒がイスラエルの歴史に予型的な連続性と成就を与えていることを指摘しています。『十二人は、その予型的な役割の象徴的な機能を果たすために、奴隷や女性や異邦人ではなく、自由なユダヤ人の男性でなければならなかった』。」

134. Strauch, 42–44頁

12人の男性がイエスによって召されました。男性だけでなければならないと主張する人は、ガリラヤ人かユダヤ人の男性だけを考慮に入れなければならないことになります。歴史的、預言的、文化的な、しかし一回限りの状況が、イエスの弟子たちが男性であり、ユダヤ人であることを求めたのです。それゆえ、このことは、あらゆる民から造られるイエス・キリストの世界的な教会にとって、決して指針や規範となることはできません。

十二という数は、12人の生徒がいる学校のクラスを思い起こさせるのではありません。それは、だれも置き去りにせず、まさに女性たちも属していたメシア運動の包括的な性格をも指し示しています。注目すべきことに、十二人は決して「男たち」とは呼ばれていません。イエスに従う中で、すべての人は学ぶ者、弟子でした。イエスの前では、女性たちに対して男らしさを誇示する余地はありませんでした。

男性中心主義、つまり聖書の主として男性的な受け止め方と語り方は、決して女性たちを犠牲にしてなされているのではありません。それによって女性たちが後回しにされているわけではないのです。

男性であるイエスは、並外れた、徹底的な仕方で女性たちを重んじ、尊重されました。イエスは女性たちにその尊厳を取り戻されたのです。リチャード・ボウカム（Richard Bauckham）は、イエスの墓のところにいた女性たちについてこう書いています。女性たちは神によって、啓示を受ける者として、それゆえ男性たちにこの啓示を伝える者として優先されている、と。これは、だれも神の前で誇ることがないように、神が最後の者を最初にし、最初の者を最後にされる、身分の終末論的な逆転の一部ではないでしょうか。

9.7 まとめ

「私たちの結論は、男性性と女性性の観念が、神の存在の本質的な性質についての私たちの理解を支配的に左右することに、聖書的な根拠はない、ということでなければなりません。神が『彼』であるのは、神が人格的であられるからであり、私たちの父であるのは、神が愛する父のように行動されるからです。神は男性でも女性でもなく、その両方の組み合わせでもありません。性別を持つ神という観念は、さ

まざまな異教的観念に特有のものですが、聖書的なキリスト教には欠けているのです。」[135]

男性も女性も同じように、聖書を読むとき、アブラハム、モーセ、ダビデ、エリヤのような男性たちに自分を重ね合わせます。私たち男性も、デボラ、ラハブ、ルツ、マリアのような女性たちに同じように自分を重ね合わせているでしょうか。一度意識して、女性たちの視点から聖書とその物語を読んでみましょう。意識して女性たちの物語を読み、若い人たちに、また私たちの説教の中で伝えていきましょう。

135. 同上。

10 私の罪の告白

私たち男性が女性たちに対して犯してきた過ちの総計は大きなものです。たいていは、神と神のことばに忠実であると自覚しながらのことでした。これは、論争のある一つの神学的立場をはるかに超える問題です。私個人としては、率直で、同時に容赦のない罪の告白へと召されていると感じています。悔い改めは、新しいいのちとリバイバルのための機会です。私の願いは、主にある多くの兄弟たちがこの告白に心を合わせ、それがキリストにある姉妹たちの耳と心に届き、神が喜ばれることです。

神よ、ヤハウェ・エロヒム（Jahwe Elohim）、男と女の創造者よ、私が、女性は同等の地位にあるのではなく、下位に置かれた存在であるかのように考え、要求し、行動してきたことをお赦しください。向かい合う存在ではなく、私より一段下にいる存在であるかのように。

主イエスよ、女性は黙っていなければならず、公の場から身を引いていなければならないと私が考えてきたことをお赦しください。

女性たちがあなたとあなたの真理について公に教えることを、あなたは望んでおられないと私が考えてきたことをお赦しください。

私は、私の妻に、私の母に、私の血を分けた姉妹たちに、主にあるすべての女性の友人たちに、神の国のために働くすべての女性の同労者たちに、数えきれない集会の時間をともに過ごしてきたすべての姉妹たちに告白します。私はあなたがたを、階層的に男性の権威の下にある者と見なしてきました！

私が神から出た聖書的なものだと思っていたこの誤った態度を、どうか赦してください！

私たちが大切な議論や問題を、あなたがた抜きで話し合い、決めてきたことを赦してください。私たちはあなたがたの助言を求めませんでした！　私たちは、自分たちの世界が唯一の、あるいは最も重要な世界であるかのように、その中で生きてきました。

私は告白します。私たち男性は失敗しました。私たちはしばしば、自分でも気づかないうちに、自己中心的で、支配的で、差別的なマッチョであり、知ったかぶりを

する者でした。

自分自身に対して盲目でした。あなたがた女性と、あなたがたの召命と賜物に対して盲目でした。そしてそれゆえに、この事柄において、あなたがたの創造者である神に対しても盲目でした。

本来なら私たちが男として責任を果たし、先頭に立つべきところで、そしてあなたがたが当然それを期待していたところで、私たちが臆病になり、あなたがたを前に押し出し、あなたがたに頼ってきたことを赦してください。

あなたがたにとって何がつらかったのか、何をあなたがたはどうしても理解できなかったのか、それについて私たちが無関心であったことを赦してください。あなたがたがそれをどう感じているのか、私たちは一度も尋ねませんでした。

こうした差別的な態度や教えについてあなたがたがどう感じているかを、私たちが尋ねなかったことを赦してください。

本当に申し訳ありません。私たちは間違っていました。

自由になってください！　喜びをもって主に仕えてください！

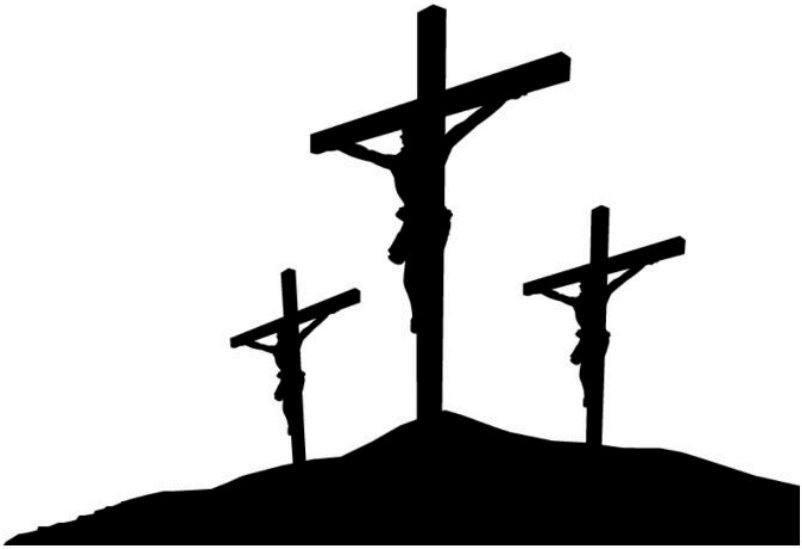
現状に慣れてしまわないでください！　立ち上がってください！

伝統が変わるには時間がかかるとしても、私たちは今始めたいのです。もうこれ以上、時間を延ばすことはしません。

私たちはあなたがたを支えます――あなたがたがいつもそうしてきてくれたように。私たちがしてきたすべてのことにもかかわらず。

どうすれば私たちは償うことができるでしょうか。

イエス・キリストの十字架は、罪人が赦しと解放を経験できる唯一の避けどころです。キリスト者にとっても、そこは自分の赦しを確かめることのできる霊的な場所です。ヤハウェ・エロヒムご自身が、私たちの罪をその身に負って木の上で担われた場所です。そして、罪人たちが出会い、互いに赦しを言い表す場所です。



聖霊が私たちの心と良心を照らし、罪の告白が必要となり、悔い改めがただ一つの次の一歩となるとき、十字架の前こそ、男性と女性が出会う場所です。互いの赦しと和解のために、自由といやしのために。

「家父長制的な考え方から女性に好意的な考え方へと至るのは、たやすい道ではありません。そのためには、私たちの世界とその仕組みについて、私たちの信仰と神との関係について、互いとの関係について、そして私たちの宇宙との関係について、自分が理解していると思っていたすべてのことを、新たに思い描き直さなければなりません。それは、私たちの祖先が地球中心の宇宙理解から太陽中心の宇宙理解へと移行したのと同じくらい困難な転換です。地球が太陽の周りを回っているのであって、その逆ではないと最初に提唱した科学者たちは、それが神の力に対する脅威になると考えられたため、破門されました！　同じように、女性が男性に支配されること、そして制度や組織が男性によって組織され、指導されることが当たり前として受け入れられている家父長制的な世界観から抜け出すことは、非常に難しいのです。同権的で平等主義的な世界観とは、女性と男性を互いの関係の中で見る世界観です。そこでは両者が力を分かち合い、互いの賜物を認め、育て、解き放ちます。そして互いに等しい尊敬と等しい尊厳をもって向き合うのです。」[136]

136. Reid, Barbara E., 7ページ, Wisdom's Feast, 2016

「福音の霊にとらえられた人は、女性を後見の下に置き、神の国のために彼女たちを麻痺させてしまう家父長制的な役割理解が、不正であるだけでなく、神の教会に言いようのない損害をもたらしてきたことに同意するでしょう。たとえそれが決して卑しい動機から、権力争いの精神で、ましてや意図的におとしめるためになされたのではなく、むしろしばしば聖書の悲劇的な誤解に基づいてなされたのだとしても、今こそ、人の尊厳を損なう伝統を勇気をもって問い直し、それから離れる時です。そうして女性たちもその足を『広い所』に置くことができ、イエス・キリストによって獲得された完全な贖いを、ついに感謝をもって経験できるようになるためです。」[137]

「内面の健やかな男性は、自分のそばにいる女性を愛によってその召命の中へと導き入れるために、あらゆることをするでしょう。」 ヴェロニカ・シュミット（Veronika Schmidt）

不治の病のように、太古から深く根を張り、至るところにはびこった雑草のように、キリスト者の男性たちの女性像は、初めから彼らの周りの世界の反響であり、残念ながら彼ら自身の心の反響でもありました。意識的にも無意識的にも、露骨な形で、穏やかな形で、さらには愛情のこもった形で生きられてきたとしても、それでも、聖書的な、それゆえ神からの真理、ただそれだけが人を自由にする真理へと立ち返る以外の選択肢はありません。

137. Krüger, Hartmut, 183ページ, Frauen im Pietismus, Marburg, 2005

11 まとめと展望

私の経験から言えば、つまり限られた主観的な経験からですが、私は次のような結論に達します。「女性問題」（そう呼ぶのはほとんど男性だけです）に対する態度においては、気質、教会の環境、出身が決定的な役割を果たしている、ということです。

女性が黙っており、しかも確信をもってそうしている教会では、この慣習が廃止されることは、人間的に見ればほとんど期待できません。思考の型は何世代にもわたって刻み込まれ、固まっています。それは要塞なのです。そのような習慣や伝統を変えることは、そうした人々の間では「世界の法則を揺るがす」ことのように見えるのです。

もちろん、すべては「聖書への忠実さ」と従順によって根拠づけられます。ただ、人は本当に聖書に忠実なのでしょうか、それとも自分の聖書解釈に忠実なのでしょうか。しかし、問わなければならないのです。自分が間違っているということはありえないのか、と。

同じことが、女性が執事や長老になることを許されていない教会にも当てはまります。女性がすべての、あるいはいくつかの指導的な務めから締め出されているところです。女性が説教することも教えることも許されていないところでもそうです。

男性と女性の平等と同権において、私たちの社会（秩序）と立法のほうが、保守的で聖書に忠実なキリスト者たちの態度よりも聖書的だということがありうるのでしょうか。

もし同権の法と、一方の性を不利に扱うことの禁止が、いつの日かあらゆる領域において――保守的な傾向の福音派の教会や自由教会においても――女性に同じ権利を要求するとしたら、どうでしょうか。もしかすると女性の割当て枠を求めるとしたら？　そのとき、男性と女性についての私たちの家父長制的で、根本において中世的な見方は、私たちがそのために苦しむに値するものなのでしょうか。そのために牢獄に行くに値するものなのでしょうか。もちろん国家には教会の中でそれを決める権利はありません。しかし、もし国家がその権利を勝手に行使し、制裁をちらつかせたとしたら、どうでしょうか。

私たち男性は悔い改めるべきです。神が初めに男性と女性の役割と関係をどのように造られたのかを、私たちがいまだに理解していないことを。多くの場合、この理解はまったく聖書からではなく、文化と社会によって形づくられています。いつになったら私たちは、この深いところにあるつながりに気づくのでしょうか。この世を断罪しながら、同時にこの世的な行動様式を聖書的なものだと宣言することはできません。

いつ御霊の自由と、もともとの創造の秩序が実現するのでしょうか。そこでは、神の国と神の教会における奉仕、任務、召命を決めるのは性別ではありません。そうではなく、賜物、能力、品性と誠実さ、そして人格と教育です。つまり端的に言えば、霊的な資質です。すなわち、仕える心と謙遜、心からの献身、そして命じられたり与えられたりするのではなく、気づかれ、認められ、重んじられる霊的な権威です。それは、霊的で聖書的で神からの形ではなく、この世的な形で女性の役割を定め、切り詰めてきたすべての教会にとって、祝福の突破口となるでしょう。

私はこれによって自分の責任を果たし、聖書からではなく堕落した世界から来ている形から距離を置きます。キリスト者自身によって、私もその一人である男性たちによって、教会の中へと「洗礼を授けられ」、敬虔なものにされてきた見方からです。まさにこれこそ、蛇が、誘惑者が成し遂げたことです。多くの場所で、女性たちの欠くことのできない貢献を抑えつけ、あるいは締め出すことです。 神のかたちを担っていたのは、アダムとエバの二人そろってでした。キリストのからだが機能するのも同じ仕方によってです。そうでなければ、キリストが望まれるようには機能しないのです。

私たち男性は、女性たちに対するふるまいにおいて、イエスの足跡に従いましょう。戻る道はあります。神は赦しと新しい出発を与えてくださいます。 この問題においてもです。

ただし、悔い改めによってだけです。考えを改め、思いを転換することによってのみ、私たちは蛇の毒と戦うことができるでしょう。蛇はその毒によって、何千年もの間、神の民と全世界を欺いてきました。すなわち、男性が女性に対して権威を持っている、という毒です。

心からの思いの転換は、一瞬で起こることもあれば、何年もかかることもあります。私はこの文章を56歳で書いています。このようになるとは予想していませんでした。5年前なら、まだこれを書かなかったでしょう。ですから私はだれも責めません。責めるとすれば、この問題において四十年を失った私自身だけです。パウロ

は、劇的なキリストとの出会いと回心の直後、アラビアで三年を必要としました。女性像に関しても、パリサイ的な思考の重荷とがれきから解き放たれるためです。しかしそれは実現しました。そして今日も実現しうるのです。

牧会的に見れば、このいやしと解放は、ほとんど測り知れない、回復させ、正し、いやす働きを持つことでしょう。それは、神のことばの健全な、それゆえ人を健やかにする教えだからです。結婚が、女性に対する男性の権威という神話から解放されるなら。教会が、ついにその潜在力のすべてを生かすなら。

これらのテーマにおいて、お気に入りの反射的反応や敵のイメージを、いいかげん後にしようではありませんか。私たちの妻や娘たち、私たちの母や血を分けた姉妹たち、そして霊的な姉妹たちは、天の思いから生まれた存在です。彼女たちに手を触れ、彼女たちに沈黙を強いる者は、罪を負うことになります。あの大いなる日に、ヤハウェ・エロヒムが私たちに責任を問われるとき、私たちはどのような答えをすべきでしょうか。

頑張り抜けという掛け声は、そのようなお気に入りの反射的反応の一つです。「みことばにとどまろう！」そして人は、「みことばにとどまる」ことと、「自分のみことば理解にとどまる」ことを混同してしまうのです。私たち男性は降伏し、古い蛇はイエスの名によって打ち負かすことができるのだと認めなければなりません。悔い改めこそ、展望の開ける最良の洞察です！　この世的な、それゆえ罪深い秩序のために神の教会の中で戦うことには、もはや何の意味もありません。

女性たちが解放されるとき、男性たちも解放されるのです。

主なる神、ヤハウェ・エロヒムが、私たちをあわれんでくださいますように！

聖書テキストの文化的背景を視野から外すことは、テキストの文言に忠実であることにはつながりません。そうではなく、聖書の文言が、自分の現代の文化的確信を映し出すスクリーンになってしまうのです。

多くの福音派の人々に永遠の聖書的真理として宣べ伝えられてきたものは、実際には19世紀と20世紀の産物です。だれでもそれを確かめることができます。

何十年にもわたって、確信を主張するのではなく、教義的な信仰告白を押し通すことを練習してきたのであれば、意見が分かれる問題において、異なる立場について真剣に議論することさえ、どうやって学べばよいのでしょうか。

トルステン・ディーツ（Thorsten Dietz）

11.1 注意点と助言

論争を前にして、今日のキリストの教会でこれらの結論を現実のものとするために、私たちは聖書の原則をどのように適用すればよいのでしょうか。

今日の教会における大きな問題の一つは、恵みの本質と聖霊の働きについての深い誤解です。律法主義と伝統がキリストの福音と混同されている限り、変化の後には常に分裂が続くでしょう。それゆえ私たちは、教会の中で良い知らせを宣べ伝えることに熱心に取り組まなければなりません。律法主義の誤りをはっきりと指摘し、神の恵みの真理を明確に語らなければなりません。

多くの人はそのような教えをリベラルだと考えるでしょうが、実際には、それはパウロの働きの繰り返しにすぎません。パウロは生涯の大半を、モーセの律法への回帰を目指すユダヤ主義の教師たちを正すことに費やしました。私たちはパウロに倣い、旧約聖書の神学への回帰を目指す人々を正すべきです（男性だけの祭司、形式や外面の遵守と過大評価、誤りへの恐れ、盲目的な従順など）。しかし、私たちは愛をもって真理を語るべきです。

それでも私たちは、兄弟姉妹たちが新しい考えを受け入れるまでには時間がかかることを理解しなければなりません。心の開かれた人にとってさえ、考え方の根本的な変化は、居心地よく感じられるようになるまでに何年もかかることがあります。新しい眼鏡の処方を受けると、新しい、より良いレンズは、数日かけてみるまでは、古いぼやけたレンズよりも実際に悪く見えるものです。私たちは忍耐強くなければなりません。実践は、教えについての新しい理解に、場合によっては何年も遅れてようやく続くものです。

分裂は避けられないものではありませんが、その危険は非常に大きいのです。教会が律法主義を拒まず、十字架に向き直らないなら、別離と分裂が起こるでしょう。唯一のほかの解決策は、変わらないことです。そしてその上、自分の子どもたちを失うことです。

変化は必要であり、避けられません。信者の半数をはるかに超える人々から、完全な権利を持つキリスト者である権利を奪うことはできません。それは彼女たちの「権利」のためではありません。むしろ、神が働き人を必要としておられるからです。 飢えている人々は養われ、子どもたちは育てられ、人々は救われなければなり

ません。キリストのからだのこれほど多くの肢体に、意思決定や教会の指導に参加する権利を拒むなら、私たちはサタンの軍勢を前にして、一方的に自らの武装を解いているのです。 想像してみてください。あなたが敵の軍隊と向かい合っているのに、振り返って、軍の規則に違反することを恐れるあまり、自分の最良の将校たちの大半の武装を解いてしまうところを。私たちは、どうすればサタンに立ち向かうことができるかについて心を配り、ご自分の指導者、教師、語り手、管理者を選ぶことは神にお任せしなければなりません。

結局のところ、私たちにできることは限られており、残りは神にかかっています。イエスでさえ、大半のパリサイ人の心を変えることはなさいませんでした。しかしイエスは、世界の歴史を書き換えるのに十分な数の心を変えられたのです。私たちにできるのは種を蒔くことだけです。成長させてくださるのは神です。

本当の変化は、人々が自分の考えとエネルギーを新しい仕方で用いることができるようにされ、別の思考の枠組みと別の言葉を用い、新鮮な未来のビジョンを持つようになるときに訪れるのです。

男性と女性として

愛し、導き、教える

ともにいるほうがよい！

いっしょのほうがよい！

支え合うほうがよい！

そして私は広々とした所を歩むでしょう。私はあなたの戒めを求めてきたからです。

詩篇119篇45節

12 違い

マリリン・B・スミス（Marilyn B. Smith）著、イングリッド・ケルン（Ingrid Kern）編の本 Ohne Unterschied; Frauen und Männer im Dienst für Gott（『違いなく――神に仕える女性と男性』、2005年）から、私は二つのまとめと図表をスキャンしました。それらは、男性と女性が補い合うことについての二つの立場――一方は階層あるいは一方的な服従を伴い、もう一方はそれを伴わない立場――がどのように理解され、根拠づけられているかについて、よい概観を与えてくれます。ここではそれらは、階層的モデルと賜物志向のモデルと呼ばれています。

私がこの二つのモデルを示すのは、どちらか一方を選んでもらうためではなく、自分が意識的にであれ無意識的にであれ、どちらを支持しているのかを、各自が自分で確かめるためです。

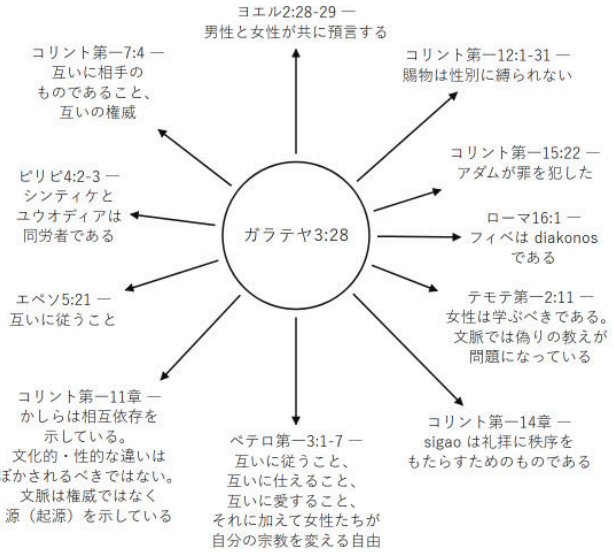
12.1 賜物志向のモデル

救いについてのこの新しい見方では、
次のような意味が前提とされています。

ʿezer kᵉnägdo	対等な助け手は「顔と顔を合わせて、互いにふさわしい」を意味する
kephale	かしら（頭）は「源」を意味する
authentein	めったに使われない語で、支配を示唆するものと受け止められている
sigao	注意深く聞くことができるように、自発的に静かにしていることを意味する
hypotasso	自発的に自分を位置づけること／秩序の中に身を置くことを意味し、互いに従うことという文脈で用いられている

中心的な聖書箇所としてガラテヤ3:28が挙げられます。この箇所は、キリストにあるすべての人の平等を示しており、霊的にも実際的にも理解されるべきものです。キリストにある私たちの新しいアイデンティティを日々生きることは、キリストにある私たちのいのちの永遠の現実から切り離すことができないからです。

賜物志向のモデルを根拠づける信条のまとめ

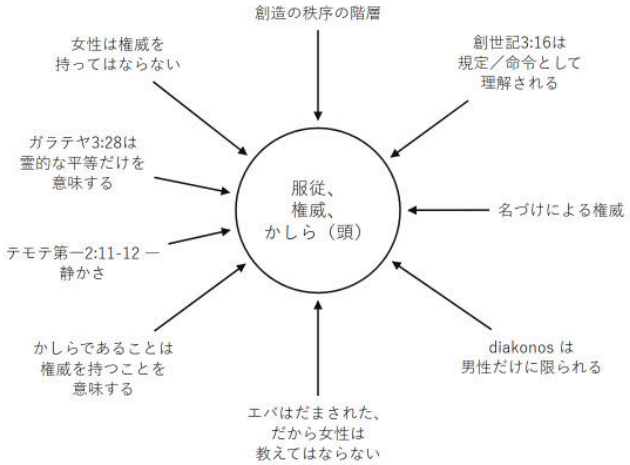


男性と女性は等しく神のかたちに造られています。それは、彼らが交わりの中で生き、この交わりに仕えるためです。しかもそれは、性別に基づいてではなく、聖霊によって分け与えられた賜物に基づいてなされます。この交わりの本質は、互いに従うことと、互いに責任を負うことにあります。すべての人が仕える者であり、その賜物によって互いの徳を高めることに貢献すべきなのです。

12.2 階層的モデル

付録B

階層的志向のモデルを根拠づける信条のまとめ



キリストが父に従うように、女は男に従う。一般に伝統主義者たちは、女性は男性と比べて劣っているわけではないが、霊的には同等の価値を持ちながらも異なる務めを持っている、と言います。つまり、その務めは性別によって決まるということです。その聖書的根拠は、「かしら（頭）」が権威と同じ意味であるということだとされます。そしてキリストが教会のかしら（権威）であり、男が女のかしら（権威）であるのだから、女は従わなければならず、男に対して権威を持ってはならない、とされます。それゆえ女は男に教えてはならず、説教してもならない、というのです。

この伝統主義的な見方では、次のような意味が前提とされています。

ʿezer kᵉnägdo	対等な助け手は「従属的」を意味する
kephale	かしら（頭）は「権威」を意味する
authentein	「権威」と訳される
sigao	「話してはならない」を意味する
hupotasso	「妻の夫への服従」を意味し、 教会によって「女性の男性への服従」という 意味で受け継がれている

中心的な聖書箇所として挙げられるのは：

エペソ5:22（服従）
テモテ第一2:12（私は許しません）
エペソ5:23とコリント第一11:3（かしら）

（ガラテヤ3:28はもっぱら霊的に解釈される――
義認の教えの重要な言明としてではあるが、
実際の生活への具体的な影響はないものとして）

13 さまざまな読者からのあとがき

原稿を批判的に読んだうえで、何人かの友人が個人的なことばを寄せようと腰を上げてくれたことに感謝しています。それは、私に欠けているものを補い、私がただ触れただけのことを深めてくれます。

13.1 自由な視界がふさがれてしまった！

なぜ私たちは、このテーマについての本を書きたいと思い、また書かなければならないのでしょうか。すべてを根底からひっくり返したいからではありません。自分たちのほうがよく知っているからでもありません。

それは、Hans-Jörg が突然こう問われたことから始まりました。「あなたは女性の立場と役割をどう見ているのですか。一般的に、そしてとくにキリスト教会の生活に関して。」

この問いが私たちの人生の中で持ち出されたのは、初めてではありませんでした。長い間、私たちは教会の文脈に結びつけられていました。そしてそこでは、すべてが定められた軌道の上を静かに進んでいるときに、女性たちの従属的な、あるいは沈黙する役割を問い直すことは逆効果なのです。

私個人は、自分の見解や意見をすぐに披露したり押し通したりするような意味での反抗的な人間ではありません。それでも私は過去に、とくにキリスト教会の生活の中で、問い直すことが「許されない」やり方や、とても人間的で表面的な答えしか返ってこないやり方には、なかなか耐えることができませんでした。

Hans-Jörg がそばにいてくれる私には、聖書を探り、学ぶことを何よりも愛している夫がいます。彼が神のことばを理解し、説き明かしてくれることは、大きな豊かさです。理解できないことや疑問があるところは、いつかまた改めて学び直されます。

凝り固まった見解や意見を新たに問い直し、それが自分のこれまでの人生に本当には合っていないと気づくには、勇気が要ります。

私は、女性はキリスト教会の集会で声に出して何かを言わないものだ、というふうに育てられました。子どものころ、なぜそうなのかと一度は尋ねたことがあったはずです。聖書にそう書いてあるからだという答えで、当時の私には十分でしたし、それ以上尋ねる必要もありませんでした。ですから私はそれをそのまま受け継ぎ、そのように生きてきました。――そのため、教会生活の中身への私自身のかかわりは、何十年もの間とても受け身のものになりました。礼拝に寄与することはすべて、完全に男性たちによって担われていたからです。祈るときも、私は声に出さずに祈りました。女性として、私にはそこで何の責任もありませんでした。

今日、私は自問しています。主なる神は、初めにそれをどのように思い描いておられたのだろうか、と。天と地の創造者、すべての男性と女性の、すべての動物の創造者であるその方は、私たち人間が、その方から与えられた賜物を持って、その方のかたちであり、その方の前で平等であることを望んでおられます。賜物のテストをしてみると、だれもが何か特別に得意なことを持っていて、だれもがすべてにおいて長所と短所を持っていることが分かります。

もし、こうだとしたら、どうでしょうか。

- 私を創造的に、独創的に、力強く造ってくださった創造者に、私が礼拝の中で／教会の集会の中で何も語ることがないとしたら
- 人類の救い主であるイエスがこの地上に来られ、ここで生き、女性の人生と役割を本当にひっくり返して変えてくださり――私のために死んでくださったのに、その救いのみわざの大きな部分――女性の部分――つまりその方の創造の半分が、礼拝の中でそのことについて何も賛美し感謝することがないとしたら

そうであるなら、私は受け身の状態から抜け出したいのです。自分が受けてきた刻印を乗り越えたいのです。自分から積極的に成長していきたいのです。男性の皆さん、あなたがたは女性たちを助けることができます！　そのとき、だれがだれの助け手なのでしょうか。

結婚生活について言えば、私たちは夫と妻として、よく油の差された歯車のように協力し合って暮らしています。大切な決定は二人で一緒にします。私の賜物や務めにかかわる決定は、私が一人で決めることも十分にあります。Hans-Jörg も同じです。そのすべてについて、私たちは話し合い、分かち合います。愛と尊敬は互いのものであり、一つの綱を一緒に引き、一つの方向へ向かっています。私たちは共通の目標に向かって歩んでいるのですから。

文化史の本を読み、中世からさまざまな時代を通して、女性にとってどのような役割が当然のこととされていたらしいかを知ると、私は悲しくなります。今日の私にはもうまったく想像できません。女性が公の場にも、教育の場にも、大切な決定の場にもまったく姿を現さないのが一番よいとされていたのですから。時の流れは、ときおり転換と変化をもたらしてきました。しかし、生活のいくつかの領域や刻印においては、役割分担のあり方がいまだにとても深く根を下ろしています。

美しい湖のまわりを散歩しているときに気づいた、一つの光景が思い浮かびます。湖のまわりの道には、ところどころにベンチがあります。ひと息つこうと腰を下ろすと、湖への眺めが茂みや木々ですっかりふさがれていることに気づきます。この文章を書いているとき、こんなたとえが浮かびました。湖とベンチは今もある＝創造と人間の本性は今もある――ただ、眺め、そして創造者がかつて初めに考えておられたことは、茂みや木々によってほとんど見えなくなってしまっている。ベンチがかつてちゃんとした理由をもってそこに置かれた、その眺めを再び開くためには、伸び放題の茂みや木々を取り除かなければなりません。同じように、神が創造者として思い描かれたことについて、私たちが生い茂らせてしまった行き過ぎも、取り除かれなければならないのです。

クリスティーネ・ロンスドルフ（Christine Ronsdorf）、アルゴイ地方ズルツベルク（Sulzberg im Allgäu）

13.2 何が可能だったことか！

「また『女性問題』についての本か……」――それが、Hans-Jörg Ronsdorf から送られてきたプレプリントに対する私の最初の反応でした。しかし、最初にざっと目を通してみると、そのアプローチにすっかり興味を引かれ、読むのをなかなかやめられなくなりました。私のキリスト者としての社会化は、著者のそれと似ています。私は「閉鎖的ブレザレン（geschlossene Brüdergemeinden）」の中で育ちました。そこには若い男性だけに限られた「青年兄弟会」があり、一方、若い女性たちは「編み物の会」で集まっていました。そこでは聖書の短い奨励はありませんでした。女性は教えてはならなかったからです。女性は教えず、神学的な問題について議論に加わらず、教会の中で黙っています。「アーメン」と四部合唱のときを除いては。私は、当時全国的に指導的な立場にあった「閉鎖的ブレザレン」のある兄弟が、私の故郷の教会でした説教のことを今もよく覚えています。その中で彼は

「女性の大会」というテーマについて、こう述べたのです。「女たちが大会に出かけ、男たちが家でベビーカーを押さなければならないとしたら、いったいどうなってしまうのか。」まさにそうです。いったいどうなってしまうのでしょうか。これは、人が――いや私が――もっとずっと前に自分に問うべきだった問いです。洞察から生じたのか、社会全体の圧力によるものなのかはともかく、ここ数十年の間に、（ブレザレンの）教会の保守的な層においてさえ、状況はかなり変わりました。青年会や家庭集会、そのほかの機会があり、そこでは女性たちが、私の若いころとは違ったふうに受け止められ、扱われています。さらに一歩進んで、女性たちに、その賜物と召命に従って、教会の営みのある種の隙間で仕える機会を与えている教会もあります。しかし私個人としては、こう自問するのです。それで十分なのだろうか、と。ブレザレン運動の創始期に、ダービー（Darby）とその同志たちは、すべての信者の全体祭司性という原則を新たに発見しました。論争好きだったダービーは、国家教会の聖職者主義と一線を画して、それを次のように言い表しました。「I believe the ‘Notion of a clergyman’ to be the sin against the Holy Ghost in this dispensation」。つまりおおよそ、「聖職者という階級を設けることは、このディスペンセーション（神の経綸の時代）における聖霊に対する罪である」ということです。ブレザレン運動の神学的中心にあるこの主張は、その実践において、神の教会に御霊の導きと自由の大きな増進をもたらしました。しかし残念なことに、それは「学問を修め、按手を受けた」という基準による教会の奉仕の制限を解いただけで、「男性であること」という基準は残ったのです。もし人々が、Hans-Jörg Ronsdorf が描いたような「大きな全体像（big picture）」が神のエクレシア（Ecclesia）における女性の役割をどのように変えるかを認識していたなら、何が可能だったことでしょうか。 もしブレザレン運動が、「私たちはみな兄弟である」――男性も女性も――ということを断固として主張していたなら、どうなっていたでしょうか。「聖霊による義と平和と喜び」のうちにある神の国は、そのような発見とその実践によって、どれほどこの世界を征服し、浸透することができたでしょうか。世俗的なフェミニズムがそれを、部分的には好ましくない仕方で行った時代よりも、ずっと前に。それゆえ私は、ダービーのことばを意図的に挑発的に、新たに、別の仕方で書き直したいと思います。「女性は黙っていなければならず、男性のように教えたり仕えたりしてはならない、という考えは、私たちの時代における聖霊への反抗であると私は信じる」。聖書ははっきりしています。「多くの証人たちの前で私から聞いたことを、ほかの人たちにも教える力のある、忠実な人たちに委ねなさい！」（テモテ第二2:2）パウロは「人たち」（anthropoi）と書いているので

あって、「男たち」とは書いていません！　それを生きるなら、何が起こるでしょうか。教会員の50%を超える人々の賜物と召命の豊かさが活性化され、以前には想像もできなかった成長が始まります。私は今では、妻と一緒に、さまざまな機会に喜んで、またたびたび奉仕しています。そして、信じてください。彼女は多くのことを私よりもずっと上手に教えることができるのです。そして同じことを、私の教会の文脈にいる多くの女性たちにも見いだしています。ですから私個人にとって、もはや問題は「教会の中の女性」が少し増えることではなく、神が女性たちのために考えておられた場所を彼女たちに与えることなのです。ダラス・ウィラード（Dallas Willard）はそれを見事に言い表しました。「女性が神と隣人に仕える条件を定めるのは、『公式の』奉仕や霊的な職務に就く女性の権利でも、それらの職務における男性との同権でもありません。それを定めるのは彼女たちの責務です――神の恵みの賜物によって力を与えられた、彼女たちの人間としての能力から生じる責務なのです」（「How I Changed My Mind About Women in Leadership」の中で）。この意味で、私はこの本を喜んでいます。そして、男性であれ女性であれ、だれもが開かれた心でこの本を読み、そして喜びをもってこう語り、こう生きることを願っています。「けれども私たちはみな兄弟なのです！」

ロルフ・シュテューヒャー（Rolf Stücher）、ヴェスターヴァルト地方ザルツブルク（Salzburg, Westerwald）

「女性問題」と「兄弟姉妹の愛」

「女性問題」は、すでにこれほど多くの争いと崩壊を神の教会にもたらしてきました。このような論争のために互いに頭をたたき割り合うことが、神のみこころでありうるでしょうか。私たちのだれもが「もちろん、そんなはずはない！」と言うでしょう。それならなぜ、それが悲しい現実なのでしょうか。

私たちはこのあとがきの中で、このような難しいテーマについても、霊的に、愛をもって、建設的に話し合い、意見を交わすことのできる場をつくることを、情熱をもって訴えたいと思います。Hans-Jörg と彼の妻クリスティーネ（Christine）、そして共通の友人たちとの集まりで、私たちはそれを経験しました。「女性問題」については部分的に異なる見方があったにもかかわらず、私たちはこれほど愛すべき兄弟姉妹がいることへの感謝と喜びに満たされて、その話し合いを終えました。次の聖書の箇所がどのように生きられたかを、私たちは経験したのです。

「わたしはあなたがたに新しい戒めを与えます。互いに愛し合いなさい！　わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。互いの間に愛があるなら、それによって、あなたがたがわたしの弟子であることを、すべての人が知るようになります」（ヨハネ13:34-35）

私たちの教会でも、女性の役割についての話し合いがいよいよ迫っています。私たちは小さくて若い群れです――ほとんど全員が20歳から40歳の間です。そのうえ、私たちはまったく異なる教えの刻印を受けてきました。人間的に見れば、これはどれも簡単な前提条件ではありません。加えて、若い人たちはたいてい、年長の、成熟したキリスト者よりも、自分の確信において極端であるものです。ありがたいことに、私たちに不可能なことも、神には可能です！　私たちは聖霊の愛に満ちた導きに頼ることができるのです！　私たちの教会では、イエスと同じ思いを持つべきだということを、繰り返し心に留めています。いつも相手とその必要に目を向け、謙遜であり、自分の正しさを言い張らないこと！

このテーマに建設的な仕方で取り組もうとするなら――私たちはまさにそうしようとしているのですが――二つのことを考えることが欠かせないように思われます。第一に、「女性問題」が「兄弟姉妹の愛」と比べてどのような位置を占めるのかを、繰り返し自覚しなければなりません。互いを具体的に愛しなさいという多くの勧めよりも、私たちが自分の教えの確信を上に置くなら、神は喜ばれないでしょう。私たちは、この愛が、目前に迫った話し合いの中で次のような形で表れるようにしようと決めています。兄弟姉妹の良心を無視して行動せず、その際、より弱い人を基準にする、ということです。第二に、テキストをできるだけ先入観なしに調べ、批判的な問いにも開かれ、自分自身を正直に振り返りたいと思います。もしかすると、私たちがこれまで生きてきた解釈の伝統が本当に修正を必要としている、という共通の認識に至るかもしれません。結局のところ、実りある話し合いは、すべての人が神の導きに開かれ、このテーマに、そして互いに、心を開いて向き合う用意があるときにだけ実現するのだと、私たちは知っています。

しかし、私たちが優先順位リストのいつも一番上に置いておきたいことが一つあります。

互いを具体的に愛するという共通の使命を生きることを、私たちの第一の務めにしましょう！

互いの接し方によって、人々をイエスのために獲得しましょう。私たちはそのためにここにいるのですから！

ヘレン＆マティアス・デュンザー（Helen & Matthias Dünser）、アルゴイ地方ミッセン（Missen i. Allgäu）

13.3 変化

私たちがクリスティーネと Hans-Jörg Ronsdorf を知ったのは2015年12月、二人が「Kirche für Alle」（すべての人のための教会）という宣教のビジョンを私たちに分かち合ってくれたときでした。私たちは肩を並べ、二人と一つのチームとともに、「Kirche für Alle e.V.」というイニシアチブを立ち上げ、それ以来、ケンプテン（Kempten）の公共の場所で、創造的な伝道の催しを数多く行ってきました。この五年間、ともに指導にあたる中で、私たちは夫婦として、また家族として、個人的にも深く知り合うようになりました。

私たちがロンスドルフ夫妻と知り合ったとき、Hans-Jörg はすでに霊的な変化のただ中にいました。神が彼の心に触れ、深く刻み込まれていた考え方や確信を揺さぶっておられたのです。この変化のプロセスを、私たちは間近で目の当たりにすることができました。それはとりわけ興味深いことでした。そのわずか一年前には、彼の神学的確信のゆえに、私たちとの協力など考えられなかったはずだったからです。

この数年の間に、私たちはとくに、Hans-Jörg の聖書への熱意、その背景知識、神への愛、そして神学の根本的な問いに取り組むときの誠実さを、深く重んじるようになりました。彼はほかの人々の意見よりも神に対して責任を感じており、批判的なテーマにもひるみません。彼の受けてきた刻印、彼の教会の歴史、そしてまさにこの真実な姿勢こそが、「聖書における女性の役割」という挑戦的なテーマへの彼の取り組みを、これほど特別で、興味深く、読む価値のあるものにしているのです。

この本は、神学の細かな視点に絡まることなく、ちょうどよい飛行高度から、歴史的、文化的、聖書的なつながりを示しています。それによって、理解の難しい聖書箇所の解釈が新しい光のもとに置かれるのです。『Frauen, vergebt uns!』（『女性たちよ、私たちを赦してください！』）は、自分自身の刻印と神学的な認識を検証するよう促しています――そして女性たちには、そうしてもらう資格があるのです。私たちは、このテーマへの大きな敬意をもって、この本が生まれる過程をともに経

験させていただきました。そして、この勇気ある本に、何よりもそれに先立つ多くの深く良い対話に感謝しています。ありがとう、Hans-Jörg とクリスティーネ。

トビ＆ダニエラ・シュトリッカー（Tobi und Daniela Stricker）、アルゴイ地方ケンプテン近郊ヴィッゲンスバッハ（Wiggensbach bei Kempten im Allgäu）

14 最終弁論――女性の問題はそれほど重要なのか[138]

ある姉妹が私に、この問題は神学（だけ）の問題ではないと指摘してくれました。それは人間の問題です。少女たちと女性たち、そして彼女たちの尊厳と、彼女たちが認められることの問題なのです。私は男性として、このテーマ全体を男性の視点から見ています。それは女性たちの声を直接伝えるものではありませんが、彼女たちのために語るものです。

私は、この階層的・宗教的な構造（補完主義）が、多くの女性の中にある何かを傷つけ、あるいは壊してきたのではないかと危惧しています。私の本に寄せられたわずかな反響も、この見立てを裏づけています。表に出ない数はもっと多いでしょう。特に、男女同権の社会で育ちながら、自分のキリスト教会の環境では古代の男女の役割モデルによって「教えられて」いる若い女性や少女たちのことを思うと、そう思わずにはいられません。この相反する状態に、どう向き合えばよいのでしょうか。

14.1 問題はいくつかの（禁じられた）奉仕ではない

はっきりさせておきましょう。問題は主に、女性が説教したり、教えたり、指導したりしてはならないということではありません。多くの女性はいずれにせよそれに慣れてしまっていて、それがいつか変わるかもしれないという視点を失っています。彼女たちはしばしば、こうした構造や規則を自分にとっての聖書的な真理と見なし、自分でもこうした主張をもはや問い直しません。しかし、問い直すべきなのです。それを私は、真理を認識するための健全な格闘と呼びたいと思います。とりわけ、この認識が初代教会以来、揺るぎなく存在してきたと考えているときにこそです。このことは、聖書の多くのテーマに当てはまります。時には、テーマをもう一度初めから一字一字たどり直さなければならないのです。

表題の問いは、私が自分の本（題名：『女性たちよ、私たちを赦してください！』）や記事で、何度も何度もこうした「フェミニスト的な」問いを提起していることに対する、ほとんどうんざりしたような反応です。私の考えでは、この問いは次のことを言おうとしている、あるいは軽く扱おうとしています。姉妹たちには、教会で

138. この章は新たに加えられたものです。

も神の国でも家庭でも、協力し、自分の賜物を伸ばす務めや機会がこれほどたくさんあるのだから、彼女たちが説教したり、教えたり、指導したりしてはならないとしても、それが差別であるはずがない。だれにでも、すでに創造の秩序が定めているとおりの居場所と役割があるのだ、と。

しかし、全体像を見ようとするなら、問題は、女性には認められていないとされる二つか三つの奉仕のことではありません。問題は、その背後にある女性像全体なのです。それがそんなに重要なのかというこの問いの背後には、女性は（従属的な）助けとしてアダムのために造られ、階層的に彼に付属し、彼の下に置かれ、あるいは彼の後に位置づけられている、という考えがあります。ここに、多くの（すべてではありません）女性たちが苦しんでいる問題の根があるのです。外からはしばしば見えませんが、内面の、深く隠された不安があり、不当さの感覚があります。女性が女性であるというだけで、男性と同じように尊重されないときにです。自由に考えることができず、律法的な枠の中で考え、行動しなければならないとき（何をしてよくて、何をしてはいけないのか）、しかもその枠が敬虔なものとして美化されているときにです。女性の役割についてのこのような見方は、主にある多くの姉妹たちを、苦しい問いと自己不信の中に置き去りにしています。それが神のご計画なのだと叩き込まれている限り、彼女たちは、なぜ神がそれをそのように望まれたのかと自問します。神が善であり完全であるなら、なぜ女性たちは、キリスト者の結婚の中でひどいことを経験し、教会の中で普通の理性では理解できない制限を経験するのでしょうか。神の戒めは常に良いものであり、神は私たちがその意味を理解することを望んでおられます。そしてその意味は（少なくとも新約聖書においては）常に明らかです。ところがこの問題においては、まったく納得のいく理由が見当たらないのです！

14.2 男性が感じること、感じないこと

これは、私たち男性がそのような形では知らない感覚です。男性が弱い立場に立つことはめったにありません。今こそ、それに気づき、それに対して敏感になるべき時です。一部の男性の考えや思考の中では、女性たちのこうした劣等感を理解することは不可能であるように見えます。

このテーマにおいて感情がこれほど高ぶる本当の理由は、もしかすると聖書への忠実さというよりも、むしろ自分の指導的役割、自分がかしらであることが問い直さ

れることに対する、自分自身のプライドなのではないでしょうか。 もしかすると、それは無意識のうちにだけかもしれません。突然、妻が夫と同じ権利と義務を持つことになるというのですから。何十年もの間、別の見方をし、別の生き方をしてきたのであれば、この認識は、もしそれが訪れるなら、地震に等しいものとなります。誤りを認めるだけでなく、別の形の共同生活に切り替えなければならないのです。それには力が必要です。まず洞察が必要です。しかし聖書の道は、いのちへと通じています。いつでもです。

14.3 女性の問題において私たちは聖書をどう読むのか

これほど感情的に高ぶるテーマを、私はほかに知りません。まるで生死にかかわる問題であるかのようです。イエスの人格、その神性、その贖いの御業といったテーマであれば、それも理解できるでしょう。しかし、女性が礼拝で祈り、預言的に語ってよいかどうかという問題では理解できません（よく見て、文脈に注意を払い、まさに聖書の大きな全体像にも目を向けるなら、パウロはそれを当然のこととして前提にしているのです）。

女性の問題に関して、私たちは聖書をどう読んでいるでしょうか。私たちはこのテーマ全体を、テモテへの手紙第一2章とコリント人への手紙第一14章のわずか二つ（！）の節を通して見ているのではないでしょうか。もし私たちが、ほかの重要な教理上の問題においても、このように二つの節に狭められた形で聖書を読み、判断するとしたら、いったいどのようなゆがんだ教えが出てくることでしょうか。そして、聖書の資料全体を健全で納得のいく関係の中に置き、比較検討することをしないとしたら。そうしてこそ、健全な教えが生まれるのではないでしょうか！

そうなれば、私たちは律法学者たちのように読み、聖書の中に永遠のいのちを見いだそうと考えながら、聖書が証ししている方、すなわちキリストに出会い損なってしまいます（ヨハネ5:39）。私たちがこれほど愛している聖書は、女性たちを自由へと、学ぶことへと、告白し、証しし、礼拝することへと導いた方について証ししているのです。

女性についての聖書の全体像を正当に評価し始めましょう。誤解された二つのパウロの言葉によってそれを解釈するのではなく。

14.4 感じ取る力

多くの女性は、聖書を読むとき、イエスが女性たちとどのように接しておられたかを見るとき、何かがおかしいと感じ取ります。指導し、かしらであるべき、あるいはそうありたいと望む男性たちが失敗するのを見るとき、彼女たちにとって事態はさらに難しくなります。女性たちとは違って、まさにその男性たちにこそ、神からこの役割が委ねられているとされているにもかかわらずです。それなのに、どれほどしばしば、妻たちが火中の栗を拾っていることでしょうか。

これが、私の本への反響から私が受け取っている印象です。この本の題名は、とてつもなく大きな空白を埋めているように思われます。私がこの題名に決めたときに考えていたよりも、ずっと大きな空白です。

もちろん私は、この種の階層が愛のうちに生きられている結婚も知っています——身近な人にとってさえ知りうる範囲で、ではありますが。しかし、それは階層が正しく、聖なるものであることの証拠になるのでしょうか。決してそうではありません。何となくうまくいっているからというだけで正しいと思い込んでいる誤ったことを、私たちはどれほど多く考え、行っていることでしょうか。

そうです。「女性の問題」は絶対に重要です。それは、私たちの神観と人間観にかかわることだからです。 この像のあらゆる乱れとゆがみを取り除き、正すことが問題なのです。どうか神が私たちをあわれみ、この務めにおいて助けてくださいますように。誤った像は想像もつかないほど深く根を下ろしており、しかも多くの人にとって神の真理であるかのように見えているのです。実際には、それはこの世的なふるまいです。それは時代精神です。ただし、私たちの住む地域の二十一世紀の時代精神ではなく、過ぎ去った二十世紀と十九世紀の時代精神なのです。

私たち男性が、キリストが教会を愛されたように自分の妻を愛そうとするなら、私たちは愛をもって彼女たちをこの誤った、しばしば差別的な役割から連れ出し、神の創造の秩序の中で彼女たちにふさわしい場所を彼女たちに明け渡し、空けることになるでしょう。

実のところ、女性の問題は、深いところで男性の問題なのです。 私たち男性は、自分自身を問い直さなければなりません！　なぜなら、新約聖書の階層的な、そして時には家父長制的な読み方に責任があるのは、いったいだれでしょうか。男性た

ちは聖書解釈における主導権をわがものとし、それが自分たちの専売特許だと思い込んできました。何という思い上がりでしょうか。 御霊の賜物は性別によって配られるのではありません。このようなふるまいによって、女性たちの数えきれない賜物が忘れられ、抑えつけられ、締め出され、見過ごされ、弱められてきました。御霊を消すことは、本当に些細なことではありません。教会を指導し、進路を決めているのは男性たちです。女性たちにはそこで発言権がありません。あるとしても、夫を通して非公式にだけです。しかしその夫たちは、自分の指導者の集まりの中で、自分が妻の意見に従っているとは決して認めないでしょう。

14.5 私が目指していないこと

問題は、教会の近代化（場所や建物のことではありません）でも、時代の最先端に立つことでもありません。問題はイエスへの忠実さであり、それこそが聖書への忠実さなのです！ 近代化ではなく、女性の問題における宗教改革です。「女性の問題」という、この怪しげな言葉をこれで最後にもう一度だけ使うとすれば、ですが。

問題は、神学論争に勝つことではありません。このテーマはそれには向いていません。人々（とりわけ主にある姉妹たち）が直接かかわっており、それぞれの見方が、教会においても、神の国においても、結婚と家庭においても、生き方を強く形づくるからです。

しかし、まさに論争だけが、異議申し立てだけが、そして預言的な語りかけだけが、このテーマを新たに動かすことができるのです。対話と建設的な議論がなければ、すべてが元のままにとどまるでしょう。

14.6 分裂の理由？

この問題における感情の高まりは、すばやく徹底した行動へと人を駆り立て、それはしばしば別離、分裂、教会分裂に終わります。ある人々にとっては神の定めた境界線が越えられているのに、ほかの人々にとってはそのような境界線は存在しないのです。では、どうすればよいのでしょうか。

緊張に耐えることは、しばらくの間はできるでしょう。しかし、この問題は双方にとって非常に多くのものを含んでいるので、最後には一緒に歩むことはできなくなるでしょう。ある教会でそれぞれ慣習となっていることに耐えられるのであれば、話は別です。そうです、神も多くのことに耐えておられます。私たちが想像できる以上に多くのことにです。悪いことを良しとされることなしにです。

ですから、それぞれが自分で決めなければなりません。私の考えでは、この緊張の中で、互いに責任を持てる範囲で歩み寄る中間の道を取り決めることも難しいでしょう。

このテーマについて解決策を示すことができないことを、お許しください。分裂はたいてい悪いものです。しかし、妥協もまた悪いものになりえます。

14.7 女性たちは立ち上がらなければならない

人生には、自分でしかできないことがあります。だれも私たちに代わってそれをすることはできません。女性たちは立ち上がり、自分の道を見極め、誤って理解された服従から抜け出さなければなりません。大きな教会の中には、目を覚まし、性の問題において何かがひどく間違っていることに気づいた女性たちがいます。こうした運動についてどう考えようと自由ですが、私はホセア書8章7節とともにこう言います。風を蒔く者は、嵐を刈り取る。

Nice girls don’t change the world——真実の言葉です（「お行儀のよい女の子は世界を変えない」）。このテーマはあまりにも凝り固まり、侵すことのできない真理となってしまったので、それに立ち向かうためには拡声器を使うことさえふさわしいのです。救いにかかわると見なされているほかのキリスト教の真理については、大声で叫ばれているではありませんか。

もう一つの選択肢は、すべてを今のままにしておくことです。そして、あの大いなる日に、主の栄光と明るさと真理を前にして、私たちが、両方の性がともに間違っていたことを認めなければならなくなるのです。男性たちはその認識において、女性たちはこの聖書的とされる真理を受け入れたことにおいてです。そのとき、大きな機会は失われ、永遠に過ぎ去ってしまいます。

今、男性も女性も臆病であってはなりません！　真理のために立つことには、いつも代価が伴います。教会の歴史の中で、多くの勇気あるキリスト者の女性たちと男

性たちが繰り返し立ち上がり、流れに逆らって泳いでこなかったなら、私たちは今日どこに立っていたことでしょうか。 そして私たちはそれをよく知っています。キリスト教のあらゆる運動と潮流は——私たちもそのどれかに属しているのですが——勇気ある、祈る女性たちと男性たちによって始まったのです。

14.8 やがて来る時と今

永遠においては、このテーマが私たちにつきまとうことはありません。感情も、非難も、決めつけも、もはやありません。その言明をめぐって争うことになる新約聖書も、もはやありません。男と女は、ただ兄弟と姉妹のようになり、階層と一方的な服従は過去のものとなるでしょう。すべては、堕落した世界と乱された創造の秩序に属する過去のものとなるのです。そもそも性別そのものが、もはや何の役割も果たさなくなるでしょう。キリストにあっては、男性も女性もありません（ガラテヤ3:28）。パウロはそれほど首尾一貫してそれを見ているのです。彼がキリストに倣う者であったように、私たちも彼に倣う者となりましょう！

私たちにできる限り、今すでに、この新しい創造の自由と力に生きようではありませんか。私たちは、復活され高く上げられたメシアのうちに、その新しい創造となったのですから！

15 参考文献

Anstey, Stanley Bruce, 2020, Die Rolle der Schwestern in der Gemeinde, www.soundwords.de

Andreas J. Köstenberger, Southeastern Baptist Theological Seminary, Ascertaining Women's God-Ordained Roles: An Interpretation of 1 Timothy 2:15

Bauer, Wörterbuch zum Neuen Testament

Baum, Armin, Die Bibel und ihre schwierigen Stellen

Beale, Gregory K., 2011, Der Tempel aller Zeiten, Die Wohnung Gottes und der Auftrag der Gemeinde, Oerlinghausen

Bielefeld, Frauke, 2007, Die Sache mit der Rippe, Die himmlische Idee von den Geschlechtern, Asslar

Bird, Michael F., Bourgeois Babes, Bossy Wives, and Bobby Haircuts: A Case for Gender Equality in Ministry (Fresh Perspectives on Women in Ministry) 2012, Grand Rapids, Mi

Carolyn Osiek; Margaret Y. MacDonald; Janet H. Tulloch. A Woman's Place: House Churches in Earliest Christianity

Clouse, Bonnidell と Robert, 1989, Women in Ministry, Downers Grove

Cunningham, Loren; Hamilton, Joel David, 2014, Warum nicht! Frauen in christlich-kirchlichen Führungspositionen, Altensteig

Dale, Felicity, 2014, The Black Swan Effect, A response to gender hierarchy in the church

Dangendorf, Daniel, 2010, Junia, die erste Apostelin? Eine exegetische Studie, MBS Texte

Bode van het heil in Christus 140 (1997) Frage & Antwort: 「Was dürfen Frauen?」

Gooding, David, Symbole und Zeichen von Autorität und Herrlichkeit

Hardmeier, Roland, 2013, Himmelstöchter! Warum die Stärke der Frau in der Bibel gebraucht wird. Und warum das biblisch ist. Basel

Hempelmann, Heinzpeter, 1997, Gottes Ordnungen zum Leben, Lahr

Hohage, Jäger, Pletsch, Ziegeler, 2010, Frau sein, Mann sein in der Gemeinde, Dillenburg

Junker, Reinhard, Genesis 1 und 2: Zwei sich ergänzende Schilderungen vom Anfang, Wort und Wissen Diskussionsbeitrag 1/91

Hausoul, Raymond, Mannen en Vrouwen in Gods schepping

Keener, Craig S., Was Paul For or Against Women in Ministry?

Kiermeier, Gerhild, 1993, Den Frauen aber sage ich, Marburg

Kubsch, Ron, Gottebenbildlichkeit und Sünde

Kuen, Alfred, 1998, Die Frau in der Gemeinde, Wuppertal

Lapide, Pinchas, 2004, Ist die Bibel richtig übersetzt? Gütersloh

Lapide, Pinchas, 1995, War Eva an allem schuld?

Liebi, Roger, Genesis 2: Die Schöpfung des Menschen

Linder, Irmgard, 1995, Ich will aber, dass ihr wisst, Dillenburg

Logos Bibel Programm

Nunn, Philip, 2018, Sollten Schwestern schweigen, Hünfeld

Ortberg, John, 2006, Die Frau schweige, Holzgerlingen

Peppiatt, Lucy, 2020, Rediscovering Scripture's Vision for Women: Fresh Perspectives on Disputed Texts, IVP Academic, Downers Grove, Illinois

Peppiatt, Lucy, 2015, Women and Worship at Corinth: Paul’s Rhetorical Arguments in 1 Corinthians, Eugene, Oregon

Peters, Benedikt, Das Weissagen der Frau

Pierce & Groothuis, 2005, Discovering Biblical Equality, IVP Academic, Downers Grove, Illinois

Piper, John and Wayne Grudem, 1991, Recovering Biblical Manhood and Womanhood, Crossway Books, Wheaton, Illinois；ドイツ語版：Zweimalig einmalig – eine biblische Studie, 2008, Friedberg

Ruthven, Jon Ph.D., Women and Ministry: Does Scripture Contradict Itself?

Schirrmacher, Thomas, 2002年版, Paulus im Kampf gegen den Schleier, Eine alternative Auslegung von 1. Korinther 11,2-16, Nürnberg

Schmalenbach, H., 2007, Frausein zur Ehre Gottes: ... im Kontext verschiedener Kulturen

Schmidt, Veronika, 2019, Endlich gleich, Holzgerlingen

Smith, Kern, 2000, OHNE UNTERSCHIED, Frauen und Männer im Dienst für Gott, Brunnen Verlag, Gießen

Stadelmann, Helge, Die Frau als Pastorin – Ja oder Nein?、および Die Frauenordination – Ein Testfall für Bibeltreue?

Steinmeister, Andreas, 2013, Wann immer ihr zusammenkommt, Daniel, Lychen

Steinmeister, Andreas, 1991, UNBEQUEM, Gottes Plan für Mann und Frau, CSV Hückeswagen

Spencer, Aída Besançon, 1985, Beyond the Curse: Women Called to Ministry,

Späth, Thomas / Beate Wagner（編）, 2006, Frauenwelten in der Antike, Geschlechterordnung und weibliche Lebenspraxis, Stuttgart

Strauch, Alexander, 2001, Die Revolution der Geschlechter, Bielefeld

Trenkel, Michael, 2017, Dürfen Frauen in der Gemeinde lehren? Kurzauslegung zu 1Tim 2,11-15

Ulm, Christoph, Die Rolle von Mann und Frau

Walton, J. H., 2001, Genesis, The NIV Application Commentary, Zondervan, Grand Rapids, MI

Weber, Karl-Heinz, 2007, Mann und Frau nach Gottes Plan, Neustadt

Welt und Umwelt der Bibel, 4/2025, Wer waren die ersten Christinnen

White, Joel R., Ehefrauen in den paulinischen Gemeinden

Wilson, Bunny, 1992, Ich? Mich unterordnen?, Bielefeld

Wunderli, Armin, 2020, 「ihm gegenüber」: Geschlechter-Gleichberechtigung in der Kirche und was die Bibel dazu (nicht) sagt KSH.Digital

Zens, Jon, 2010, What's with Paul and Women? Unlocking the cultural background to 1 Timothy 2, Lincoln, Nebraska

16 著者の本

Und die Toten leben doch（それでも死者は生きている）、1992年

Seitenwechsel, Von Adam zu Christus（陣営の転換――アダムからキリストへ）、2011年

Entrückung, Himmel, Ewigkeit, Ein neuer Blick auf alte Themen（携挙・天国・永遠――古いテーマへの新しいまなざし）、2015年

Gottes Lamm, Golgota und die Ewigkeit（神の小羊、ゴルゴタ、そして永遠）、2015年

Fantastische Himmelwelt, Lehre und Leben der Himmelwelt im Epheserbrief（すばらしき天上の世界――エペソ人への手紙における天上の世界の教えと生き方）、2016年

Gott spricht, Eine erklärende Übertragung der allgemeinen Briefe und der Offenbarung（神は語る――公同書簡と黙示録の解説的翻訳）、2017年

Epheser, nacherzählt, erklärt, für heute（パウロのエペソ人への手紙――語り直し、解き明かし、今日のために）、2018年

Gods good Gospel, Gottes gutes Evangelium（神の良き福音）、2019年

Markus, nacherzählt, erklärt für heute（マルコの福音書――語り直し、解き明かし、今日のために）、2019年

Galater, nacherzählt, erklärt für heute（パウロのガラテヤ人への手紙――語り直し、解き明かし、今日のために）、2020年

Die Briefe des Johannes, nacherzählt, erklärt für heute（ヨハネの手紙――語り直し、解き明かし、今日のために）、2020年

Frauen, vergebt uns! Kurzversion（女性たちよ、私たちを赦してください！――短縮版）、2022年

Ein König voller Pracht – Die gute Botschaft von Jesus, dem Messias（栄光に満ちた王――メシアであるイエスの良い知らせ）、2022年

17 推薦図書



書店で（ドイツ語版）、または発行者クリスティアン・ベーゼ（Christian Beese）から直接入手できます：christian@rvbeese.de

キャサリン・C・ブッシュネル（Katharine C. Bushnell、1855–1946）は、勇気ある、賜物豊かな神のしもべでした。「私を強くしてくださる方によって、私はどんなことでもできるのです」という聖句を、生涯のモットーとしていました。彼女は医師、宣教師、十字架の使者、改革者、著述家、講演者であり、また七つの言語を話し、古代ギリシア語とヘブル語に精通した、優れた独創的な学者でもありました。ブッシュネルは医学の道を離れ、自分がさらに重要だと考えた働き、すなわち

人々の屈辱的な生活条件を変える働きに取り組みました。19世紀の女性運動の中にあった女性キリスト教禁酒同盟（Women's Christian Temperance Union、WCTU）で、指導的な役割を担ったのです。女性の聖書的な立場は、ブッシュネルにとって大きな意味を持っていました。誤訳が、女性が社会的・霊的に服させられていることの原因になっていると結論づけたからです。1896年、彼女はWCTUを離れ、残りの年月を、書くことと、女性の完全な平等という神の本来の、変わることのない意図についての聖書的真理を伝えることにささげました。

キャサリン・ブッシュネルの God's Word to Women は、女性についてのすべての聖書箇所を注意深く調べた画期的な研究です。ジェシー・ペン＝ルイス（Jessie Penn-Lewis）は、この資料が、神から直接与えられた啓示としか言いようのない仕方で聖書を開いてくれた、と語りました。今日、多くの人にとって、これは、神が召してくださった者となる自由、聖霊が心に置いてくださった働きをする自由を与えてくれた本なのです。

中国で宣教医として働いていたとき、ブッシュネルは、女性の奉仕に対する文化的な偏見を強めるように中国語の聖書が誤って翻訳されていることを発見しました。彼女は、同じ男性の偏見が英語の翻訳にも影響を及ぼしているのではないかと考え、ヘブル語とギリシア語の研究を深めました。のちにWCTUのために世界中を旅したときには、列車や船の中で、また滞在した宿で過ごす時間を用いて、聖書の翻訳を原語の文言と注意深く比較しました。

経験と研究を通して、神はキャサリン・ブッシュネルが God's Word to Women を書くための備えをされました。1908年に通信講座として始まったこの本は、最初はブッシュネルの自費出版で刊行されました。初期には好意的な反応があったにもかかわらず、この本はまもなく姿を消してしまいました。そしてブッシュネルは、自分の人生はほとんど影響を残さなかったと思いながら亡くなりました。しかし神は、もっとよくご存じでした！　この本は再発見され、その計り知れない価値を認める人々によって出版され続けています。今日、この本はついに、聖書的な女性の平等の最前線で働く人々のための基礎的な文献として、ふさわしい評価を受けているのです。

ハンナ＝マリア・シュマーレンバッハ（Hanna-Maria Schmalenbach）

Frausein zur Ehre Gottes

In jeder Kultur anders?（文化ごとに違うのか？）



神は人を男と女に創造されました。そのとき神は、男であること、女であることを定義し、両性の関係をあらゆる文化に対して時代を超えて規定する創造の秩序も、彼らに与えられたのでしょうか。人間の罪はどのような役割を果たしているのでしょうか。文化的な影響はどのような役割を果たしているのでしょうか。そして、イエス・キリストにある救いによって、両性の関係にどのような変化を期待することができるのでしょうか。

これらの問い、また似たような問いをめぐって、今日に至るまで格闘が続いています。とりわけ、女性の立場と、教会における女性の活動の余地に関してです。神の栄光のために女性であること（Frausein zur Ehre Gottes）――それは多くの女性の願いです！　しかし、それは具体的に何を意味するのでしょうか。文化ごとに違うことなのでしょうか。

ハンナ＝マリア・シュマーレンバッハは、救いの歴史の連関の中で、また当時の諸文化を背景にして、聖書の女性像をたどっていきます。そこから、驚くべき認識と、私たちの時代の諸文化の中で女性たちがどのようにして神の栄光のために生活を形づくることができるかについての手引きが得られるのです。

「……（それは）私たちの教会にとって、手引きともなりえますが、火種ともなりえます。」

ハイケ・ホイン（Heike Heun）、Idea Spezial 7/2021 Buchjournal にて

「教会における女性の役割について、群を抜いて最良の本です……テーマとの包括的で客観的な取り組み、論理的な構成、文化への配慮、そして実践とのつながりが、この本の強みのいくつかです。この本によって私は初めて、教会における自分の役割に関して本当に平安を見いだしました。重要で今日的なテーマへの、貴重で説得力のある貢献です。私たちの教会の男性も女性も、ぜひ読むべきです！」

マリアンネ・ミュラー（Marianne Müller）、ブログ strickleserl にて

「間違いなく、私がこれまでに知った中で、『女性問題』についての最良の、最も説得力のある著作です！」

ある女性購入者のレビュー

「……『女性問題』についての最も賢明な本の一つであり、女性としての私たちの役割を新たに発見する助けとなりえます。」

モニカ・クシュミールツ（Monika Kuschmierz）、雑誌 Joyce にて

「教会における女性の奉仕についての研究の中で、シュマーレンバッハ博士の研究ほど、医学的、異文化間的、歴史的、聖書的な視点からの知見をうまく結びつけているものはありません。この研究を真剣に受け止める人は、女性の奉仕に対する自分の立場を考え直さなければならなくなるでしょう。この問題にかかわる人はだれも、この論述を素通りすべきではありません。」

ヘルムート・エーゲルクラウト博士（Dr. Helmuth Egelkraut、1938–2018）

Neufeld Verlag 出版社（ドイツ語）

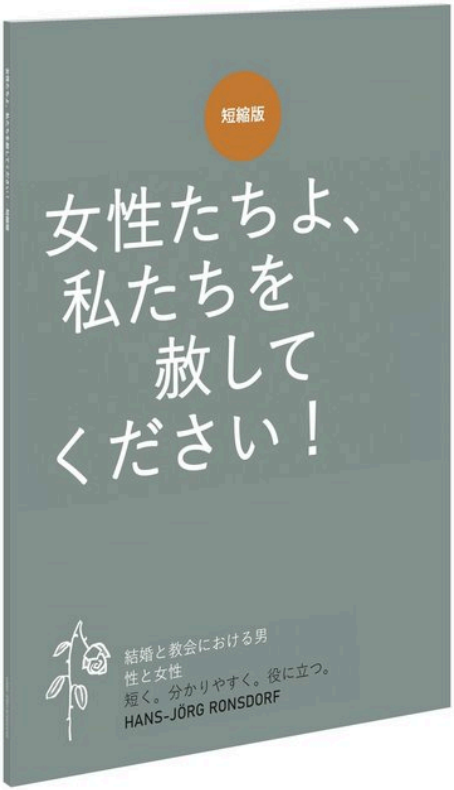
Sauerbruchstraße 16

27478 Cuxhaven

電話：04723 5057260

メール：info@neufeld-verlag.de

本書の短縮版（ドイツ語）は、新しい本文による80ページのもので、著者から3.80ユーロで入手できます（www.hans-joerg-ronsdorf.de）。また、アマゾン（Amazon）のKindle電子書籍としても入手できます。



Die Gleichstellung von Mann und Frau（『男女の平等』）は、神学者であり言語研究者であるフィリップ・B・ペイン（Philip B. Payne）による、短いながら徹底した著作です。ペインは、関連するすべての聖書テキストによって、男性と女性が結婚、教会、社会において平等であることを証明しています。

56ページ、2023年7月。書店で（ドイツ語版）、またはドイツ語訳者から入手できます：hj-ronsdorf@t-online.de。アマゾンのKindle電子書籍としても入手できます。

